
東方 龜兔忍

緑野ボタン4号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 龜兎忍

【NZコード】

N5878Z

【作者名】

緑野ボタン4号

【あらすじ】

メスの亀に転生しました。太古の幻想郷世界からスタートです。
(タグ補足: タートルズの設定をちょっと使っていますが、原作キヤラとかは出ません。ガールズラブの描写はギャグの範囲です)

1話「死後の世界」

人は死ぬと、どうなるのか。

肉体の話ではなく、精神はその後、どうなるのか。

有史以前から存在する疑問だろう。

現代日本に生を受け、冠婚葬祭のときくらいにしか信心を發揮しないなんちゃって仏教を崇拜する俺は、死後の世界なんてものに明確なビジョンなど持ち合わせていなかつた。

しかし、実際に死んでみるとそれは言つていられない。

俺は交通事故に遭つた。乗つていた通学バスが交差点で対向車の大型トラックとぶつかった。何が原因だつたのか、今となつては確かめようがないが、起こつたものをとやかく言つても仕方がない。俺が生きていれば文句の一つも言つただろう。だが、あいにく俺は死んだ。

事故の直後、大きな衝撃で体が吹き飛び、壁に叩きつけられ、それからの記憶があいまいだ。人間、不思議なものでぶつちぎりの恐怖体験に遭遇すると、妙に達観してしまつものなのか。そのときの俺は自分が死ぬことに根拠のない確信を持ち、その考えを冷静に受け止めていた。

そして、現在に至る。

「ぴー、ぴー！」

俺は気がつくと、真っ暗な場所にいた。えらく狭つ苦しい場所だ。その窮屈さに耐えられず、必死に暴れていると、自分を取り囲んでいた壁が壊れた。

外から入つてくる光がまぶしい。目がよくみえない。まぶたが溶接されてしまつたかのようにぴつたりと閉じて開かない。体の様子

も何か変だ。まともに立つことができず、腹ばいになつて前に進むことしかできない。とにかく、まずはここがどこなのか確かめなければならない。

「ぴーー！」

幸い、耳はよく聞こえたが、ぴーぴー泣く声しか聞こえない。動物の鳴き声のような気がする。そのとき、盛大な地鳴りが起きた。何事かと驚いたが、そのおかげで目を開けることができた。光の痛さに耐えながら、ようやく周囲を確認する。

そこには、山があつた。巨大な岩山だ。それだけならまだよかつた。なんと、その山、動くのだ。さつきから響く地鳴りの音、それはこの山の足音だった。

これは何の冗談なのか。振り返ると、俺の後ろにはでっかい卵らしき物が何個もかたまつておいてあつた。ほとんどの卵が割れて、中から人と同じサイズはあるうかという子ガメがわさわさ孵化している。そう、亀だ。あの甲羅を持った爬虫類のアレ。

さつきからぴーぴー鳴いている声はこいつらのものだつた。それにしても馬鹿でかい。なんの怪獣映画だ。いや、でかいのはそれだけじゃない。俺の周囲に生えている植物。木だと思つていたらどうも違う。これは草だ。バナナの木は本当は草だと聞いたことがあるが、そういう種類ではない。どうみてもそこらへんの道に生えているような雑草が、何メートルもの高さまで育つている。あそこに見えるのはタンポポだろうか。黄色い花は小さい物でも座布団くらいのサイズである。

ここまでくればさすがに気づく。これは周囲の物が巨大化したのではない。俺が小さくなつたのだ。信じられないがそう考えるより他はない。どうみてもこれは映画のセットとか、そういう次元に収まるものではなかつた。

そして、なぜ小さくなつたのかと云つと、それについてもだいた

いの推測はついている。いや、気づかないようにしていったと言つべきか。端的に言つと、俺は亀になつてた。子ガメである。俺の周りでピーピー鳴いている奴らと同類である。

「びいいいいいつ！？」

とりあえず叫んでみたが、当然人語は話せそうにない。

落ちついて考えてみよう。これは、仏教で言うところの輪廻転生というものではなかろうか。魂は死後の世界で新たな生を受け、命は巡る。俺はあるの事故で死に、そして次の生を受けてカメになつた。しかし、自分で考えたものの、何とも信じがたい説である。

しかも、俺は前世の記憶をもつたまま転生したことになる。これはどういう仮の思し召しか。ヒトに転生できたならいざ知らず、よもやカメとは。カメに人間の心など不要ではないか。

そんなことを考えていると、地鳴りが止んだ。岩山と思つていた存在が動きを止めたのだ。そいつはカメだった。とんでもなく大きい。俺の体が小さいため、大きく見えると言うこともあるが、隣に生えている草の大きさから目算しても普通のカメの域を超えている。ゾウガメとかそういうレベルじゃない。軽自動車くらいの大きさはある。

そんな存在が現れたなら、普通の人間なら恐怖する。俺もその例にもれなかつた。カメの本能がそうさせるのか、俺は自分の甲羅の中に引っ込んだ。そんなことをしたところでどうにかなるとは思えないが、関係なかつた。とにかく怖い。

しばらくそうしていると、落ちついてきた。俺が何かされる気配はない。恐る恐る顔を外に出す。

巨大ガメが俺をガン見していた。

慌てて甲羅に引っ籠る。

『でーでーーーーー』

「ぴつ！？」

今、声が聞こえた。間延びして聞き取りにくい声だったが、確かに意味をもつた言葉だ。それも、頭の中に直接響いてくるような、不思議な声だった。これは、巨大ガメの言葉だろうか。とすると、カメ語？ そんなものが動物の世界にあつたとは。

『なーんーでーかーくーれーるー？ おーかーあーさーんーだーよー？』

どうやら、この巨大ガメ、俺の母親のようだ。

1話「死後の世界」（後書き）

ウワアアアア！

まだ前の作品を完結させでないのに新作を投稿してしまったあああ！

……まあ、誰も見てないだろうけどね……（泣

2話「あつとこづかに時は過ぎ」

それから俺のカメとして生活が始まった。

はつきり言つて、過酷だった。自然界は厳しい。生まれたての赤ちゃんなど、他の動物にとつてかっこうの獲物である。常に捕食の危険にさらされているのだ。子ガメたちは、親ガメの足の下にずっと隠れていなければならない。

幸いにもうちのビッグマザーは、この付近の生態系の中でも上位にいるらしく、天敵と呼べる生き物はいないようだ。名前があるようで、迂木というそうだ。母ちゃんが腰を据えている内は安全である。その甲羅の下に潜んでいれば敵に襲われる心配はない。

しかし、ずっとその場にとどまっていることはできない。エサを確保する必要がある。カメの生態について詳しくはないが、爬虫類だから授乳はしないのだろうな。どうやら、俺たちは雑食のようだ。大人になると草を食べて生きていくようだが、子どものうちは肉しか食べられないらしい。迂木は子ガメたちのために狩りをする。意外なことに動きの遅い迂木にも狩りはできた。しかし、その方法が常軌を逸している。あるとき、水場に集まっていた野ウサギ目がけて口から光弾を発射したのだ。まさに怪獣である。なんでも、妖力という不思議エナジーを使っているらしい。うちの母親は妖怪だった。前からおかしいと思っていたが、どうもこの世界は俺が昔いた世界とは違うのかもしれない。

ただ、相手も俊敏な野生動物である。そういうた狩りはほとんど失敗に終わった。とにかく、迂木は動きが緩慢なのだ。それに、光弾は発射されれば一直線にターゲットに向かって飛んでいくが、禍々しい妖気の気配があふれ出るので、危険を感じ取った動物たちはたちどころに逃げてしまう。

なので、俺たちが動物の肉を食いつ機会と言えば、運よく漁られて

いない死体を見つけたときくらいのものだ。いつもは虫を捕まえて食べる。地面に埋まっているイモムシなどを食べることが多い。迂木が妖氣をこめて足をふみならすと、びっくりして地表に出てくるのだ。アリの巣なんかも狙い目である。

ただ、こうして今では死体だの虫だと平然と語れるが、最初はやはり相当の抵抗があった。現代日本で暮らしていた俺にとって、そんなゲテモノを食べるなんて無理だと思った。しかし、食わなければ飢えて死ぬ。またもにエサが取れない時期だつてあるのだ。いつも十分にすべての子ガメにエサが行きわたるわけではない。子ガメたちもそれがわかっているから、他の奴らを押しのけてでもエサを独占しようとする。遠慮していたのは最初だけだった。バーゲンに群がる主婦がごとく、俺はエサをむさぼった。

俺はエサを独占するようなことはなく、収穫が少ないとときは最低限自分に必要な分だけを食べたが、他のカメはそうではない。弱い子ガメは衰弱し、力尽きていった。それに、移動中はどうしても他の動物に狙われる危険が高い。迂木は必死に俺たちを守ってくれるのだが、いかんせん動きがトロすぎる。さつと飛び出してきた狐に咥えられていつた子ガメが何匹もいた。一瞬の隙をついて空から飛びかかってきた猛禽類に連れ去られた子ガメも何匹もいた。

『くーそー！　まーでー！』

迂木は子ガメたちに愛情を注ぎ、死んでしまったり食べられたりしたときは怒り、悲しんでくれる。が、それはじく短い間だけだ。

『まー、いーやー』

思うに、迂木はアホなのだ。一応、人間に近い感情らしきものはあるが、基本的に動物の本能に忠実に生きている。俺たちの種は多産型である。子を多く残して、次世代に命をつなぐ。子が多く死に、

わずかな生き残りしか大人になれないことは始めからわかっているのだ。迂木は例外的に長生きだったので妖怪化したようだが、もともとそう強い種というわけではないようだ。俺も長生きできれば妖怪化するのだろうか。いや、こうやって人間の記憶をもつてている時点すでに妖怪のような気もするが。

ところで、俺は雌ガメとして生まれてしまったようだ。ただ、雄とか雌とか以前にカメだしな。確率二分の一の結果だ。いまさらどうしようもないことである。

迂木は一百年くらい生きているらしい。たまに俺らと同種のカメと会うのだが、どのカメよりも巨大だ。長く生きれば生きるほど、体内の妖力が成長して強い妖怪になれるという。他の雌カメは、一度の子育てで最後まで育て上げができる子の数はだいたい1匹か、2匹といったところである。迂木はさすが妖怪、優秀であり、今のところ俺を含めて7匹の子ガメが残っている。

『かーしーこーいーのー』

迂木は俺のことを『かしこいの』と呼ぶ。まだ、名前をつけられてはいない。他の子ガメたちも『ちっこいの』とか『すべすべの』としか呼ばれない。

この迂木の言葉は“念話”という妖術らしい。テレパシーみたいなものだ。実際にしゃべっているわけではない。どういうわけか、俺は念話が使える。普通は妖怪化するくらい長生きしないと使えないそうだ。しかし、たまに生まれつき知能が高い突然変異のような固体がいるらしく、それかもしれないと言われた。迂木とは辛うじてコミュニケーションがとれるが、兄弟子ガメはまったく反応してくれない。

そうそう、能力と言えば、どうも俺には特別な能力があるようなのだ。それは『程度の能力』と呼ばれている。これは、妖怪であるとかそういうことは関係なしに、先天的にもつ裏ワザ的なチカラだ

といひ。実は迂木も『身を守る程度の能力』というものを持つている。そのおかげで長生きできたそうだ。

『程度の能力』を持つ者は、必ずとその効果と使い方を知る。俺の持つ能力は『注目を集める程度の能力』である。まじで使えない。以前俺が生きていた世界でなら使い道があつたかもしけないが、今の俺はただのカメ。いたずらに注意を惹くようなことをすれば肉食動物の餌食になってしまつ。

そんな殺伐とした野生ライフを送っていた俺は、ある日、ついに迂木から名前をもらつた。

『かーしーーーーーのー。おーまーえーのーなーはー……』

葉裏。葉っぱの裏と書いてヨウリと読む。俺の甲羅の色が濃い緑色だったのでそう名付けられた。日の光を浴びる明るい表側の色ではなく、暗くどんよりとした深い緑だったので葉裏である。

他の子ガメたちも立派な名前をもらつた。意味を理解できていないうちだが。カメ社会に名前なんて不要である。迂木は妖怪として知能を持っていたために、自分の子ガメたちに名前を与えるということをしてみたようだ。俺以外の兄弟たちはなんのことかわかつていない様子である。

迂木はアホなりに一生懸命名前を考えてくれたようなので、俺もこの名前を大切にしたいと思つ。

『じゅー、きょーかーらー、ひーとーりーだーちーしーてーねー』

え、なんですか？

3話「沢の巨木」

俺の体長は15センチくらいになつただろつか。ミドリガメくらいの大きさである。どうやら、カメ社会ではこのサイズになると独り立ちする決まりらしい。

マイビッグマザーからの突然の宣告に、茫然とする俺。兄弟たちは歩み去っていく辻木をピーピー鳴きながら追いかけた。向こうもカメだがこちらもカメ。両者ともに足が遅いが、圧倒的な歩幅の違いで辻木は森の奥へと消えていった。

それからの俺たちは死に物狂いだつた。日々、外敵から襲われる恐怖におびえて暮らした。カメ並みの脳みそしかもたない兄弟たちがうらやましい。俺は下手に人間の感性を持つせいか、毎日がハッピーバースデイ気分だよ。

のろまなカメが群れていたのでは敵の目につきすぎてしまう。俺たちは散り散りに別れた。それが、俺たち兄弟の別れだつた。その後どうなつたのかはわからない。

俺は森の中を少しずつ移動していった。いつもハラヘリ状態だつた。改めてマイビッグマザーの偉大さがわかる。この体では虫一匹捕まえることも困難だ。草をたべたべ飢えをしのいだ。

そして、ある日転機は訪れた。

鷹に強襲されたのだ。見つかつたと思ったときにはもう遅い。俺は慌てて甲羅に引っ込む。鷹は俺を捕まると空高く飛び上がった。

(まづい！ 死ぬうつー)

俺の自慢は甲羅のかたさだ。クチバシで突かれたくらいじや壊れない。しかし、鷹もそれをわかっている。辻木に教えてもらつたことがある。上空から捕えたカメをわざと落つことし、地面に叩きつけ

けて甲羅を粉碎するのだと。そんなことされたら死んじゃうつてば。絶体絶命のピンチ。容赦なく鷹は爪を放した。重力の赴くまま自由落下の恐怖を堪能する俺。これまでの人生、いやカメ生が走馬灯のように脳裏をよぎった。俺はまた死ぬのか。願わくは天寿をまつとつしたかった。

俺が次の転生先はどうか人間でありますようにと祈つていると、甲羅に走る衝撃。だが、それはかたい岩場の感触ではなかつた。ごぼごぼと体が沈んでいく。水だ。俺を捕まえた鷹はドジつ娘属性でも有していたのか、うつかり俺を水場に落としてしまつたようである。

(ふう……なんとか助かつた)

それにしてもこここの水はきれいだな。森の奥深く、河川の上流域にまで来てしまつたようだ。澄み切つた美しい沢の中心に、天を突くような巨木が一本、立つていた。

この木はただの木ではないと、直感が告げていた。大きな力を感じる。しかし、それと同時に弱つていることがわかる。木は枯れかけていたのだ。病気だろうか。これほどの大きな木となると、何千年という樹齢があるかもしれない。

『だれ……か……たすけ……』

そのとき、念話が聞こえたような気がした。いや、間違いなく聞こえた。その声はなんと目の前の巨木から聞こえてくる。この木が助けを求めているのだろうか。もしかすると、この木は妖怪なのかな長生きすると妖怪になるのなら、植物にだつて当てはまらないとは言えないだろう。

(どうしたんだー！)

俺は念話で話しかけてみたが、答えがない。こちらに気づいていないようだ。俺が小さすぎて感じ取れないかも知れない。そうだ。こんなときこそ俺の能力『注目を集める程度の能力』を発揮すべきときだ。

俺は能力を使いながら再度呼びかけてみた。

『あな、たは……？』

今度はこちうに気づいたようである。

『ちいさきものよ……わたしは、やまいにおかされた……もうじき、しぬでしょう』

この妖怪は迂木よりも頭がよさそうである。俺の予想通り、病気のようだ。枯れている部分は幹の深くまで浸食しており、もう助かる見込みはないとのこと。

『しかし、いちまんねんをいきづけた、そのあかしをのこした
い……わたしの、ちから、を、あな、た、に……』

そう言つと、木は生氣を失つた。なんとなくだが、わかる。この木は死んだのだ。依然としてその姿は壯觀なものだが、すでに亡骸となつた。そして、遙か高みにある枝から一つの実が落ちてきた。ちょうど俺の前で止まるようにしてころころと転がつてくる。

その実は琥珀色に光つていた。文字通り、輝いているのだ。圧倒的な妖力を感じる。極限まで練り上げられた妖力の渦がクルミほどの大ささの実の中に閉じ込められている。これは、この木の力のすべてが詰まつた物だ。一万年分の成長した妖力が余すところなく凝縮されている。

え、これって、ものすげー、タナボタじゃね？

(木さん、ありがとうー キミの死は無駄にはしない！ パクッ

……うめええええー！)

というわけで、おいしくいただいた。前世も含めて、今まで食べた物すべてを超えるほどのおいしさだった。あつという間に果汁の一滴も残さずに完食した。

その直後だ。俺の体の中にとんでもない量の妖力がみなぎつきた。この力さえあれば、もう何も怖くない。捕食者の存在に怯える必要もなくなる。これで俺も妖怪に……あれ？ なんだか、体の調子がおかしい。手足が動かない。どうなってるんだ。

『あは、あははは、あはははっ！ ばかね、わたしのちからが、ただでにはいるとおもったの？ もう、あのからだは、つかえなくなってしまった。こんどは、あなたをなえどこにして、せいちょうするわ』

(ナニイイイー！?)

ですよね。そんなうまい話、あるわけないか。

どうやら、病気で死にそうになつた巨木さんは、自分の体を捨てて新しい種を俺の体に仕込んだらしい。莫大な妖力の影響によって、種は俺の体の中で急成長を始める。

(いたい、いたい、いたいイイイー！)

体中に激痛が走る。俺の腹の中で異物が大きくなつていく。根が内臓に食い込み、四肢の末端まで浸食される。普通ならとっくに死んでいるだろう。だが、俺は死ぬことも許されず、終わらない激痛

に苦しみ続ける。俺の体内に張り巡らされた根っこは完全に根付き、俺は全身を支配されてしまった。

それが終わると、次は“芽吹き”が始まる。腹の種が膨れ上がる。やばい。今度こそ死ぬ。//シシミシと音を立てて俺の白蟻の甲羅が悲鳴をあげる。

(こきやああ、ああ、あがあああつー)

『あはは、あはははっ！ わたしのえこひになつてね』

ついに俺の甲羅は碎けた。内側から押し上げてきた種の芽が、俺の背中から飛び出す。逆に腹側からは根っこが飛び出し、地面の奥深くへと伸びていく。そして、俺の意識は静かに暗転していった。

4話「睡覚の」

『タスケテ！ タスケテ！』

だれかの声がする。この声はどこかで聞いたことがある。さて、俺はだれだつたつけ。そうそう、葉裏だ。

俺が見た最後の記憶。できれば思い出したくないほどグロテスクな死に様だった。ということは、俺はまた転生したのだろうか。そついえ、この声は何だ？ 脳内に響いてくる。

『タスケテ！』

(だれだよ、あんた。俺は眠いんだ)

(ここは暗い。体も動かない。意識だけが鮮明だ。そして、俺の体の中に熱い何かが流れ込んでくる。そこで気がついた。熱い。体が焼けるように熱い。

(あちひー、あちちちーー、なんだ、なにが起こってるんだ？)

俺の目が覚めたのも、この熱さのせいだ。血管に溶けた鉄を流し込まれているような感覚である。もうこんな拷問はたくさんだ。確かに俺は前世で徳を積むようなことはしなかったが、こんなひどい目に遭わされるような業も積んだ覚えはない。

『ニーナンゲンガクル！ ロロサレル！』

この声、どこかで聞いたことがあると思ったら、俺に寄生しようが

つた巨木妖怪じゃないか。俺はまだ生きているのか？

俺は自分の意識を集中させる。ここは、俺の体だ。体中に木の根が張り巡らされている。なんだか、成長しているような気がするな。俺は寄生されながらも生きていた。いや、巨木に生かされていたのか？

俺の背中からは幹が生えている。意識は俺の体を離れて、そこをずっと上に登っていくことができた。今の俺はヤドリギと一心同体になっているのだろう。現在のヤドリギは、俺が最初に見たときの姿よりもずっと立派に育っていた。あれからどのくらいの年月が経つたんだ？

「よしやくたどり着いた。これが噂に名高いあの『見られずの靈樹・六島苞』か……」

「ああ、周辺の森に張つてあった結界は厄介だったが、なんとかなってよかつたぜ。見ろよ、この大きさ、超一級品だ。こいつは金になるぜ」

ふと、幹の下あたりに意識をやると、人間がいた。久しぶりに会つてみたはいいが、なんか悪人臭がするな。素直に喜べない。どうやら、この木を切り倒すつまりらしい。なるほど、それで巨木妖怪の奴は慌てているのか。

六島苞なんてかつこいい名前で呼ばれているようだけど。結界とか張つて人間対策はしていたようだが、破られたみたいだ。ざまあ、と言つてやる。さっさと切り倒されるがいい。

それで、六島苞の奴はさつきから何をしているんだ？

『コノカラダハ、モウダメダヨ！ タネヲノコサナイト！』

この体はもうダメだ。種を残さないと……って、こいつもしかし

て！？

俺は自分の体に意識をもどした。案の定だ。こいつは、自分の持つすべての妖力を俺の体に集めている。あのときと一緒にだ。樹木という体を捨て、すべてを果実に結集させて逃げようとしているのだ。体が熱かつたのは、妖力を流し込まれていたせいか。

(おい、こらー。人の体に何してんだ！？　俺は芋じゃねえぞ！)

『ジャマシナиде！　ミハ、デキタ。アトハ、タネ　ヨイ
レルダケ……』

実はできた、後は種を入れるだけ、ってどういうことだ？

そのとき、幹の上部に俺の意識が違和感を感じ取った。今度は何だ。意識を向けると、そこにコブのような物ができていた。それが、だんだんと根元に向かって降りてくる。

よく調べてみると、それはなんと六島苞の命の結晶だった。そうち、これが種なんだ。実は果肉と種でできている。果肉には妖力がこめられており、種には六島苞自信の魂が宿っている。果肉の妖力を養分にして六島苞は成長するのだ。実を食べる者は、言つなれば土壤。そこに果肉の養分を振りまき、最上の苗床を作り出す。

前の六島苞と比べて、今は格段に妖力が上がっているのがわかる。そのあまりにも膨大な妖力は、枝に実らせることができないほど強大なため、地下に存在する俺の体を芋代わりにして妖力を蓄えていたらしい。あくどい。

つまり、種である“コブ”が俺の体に到達してしまえば、“実”が完成することになる。それだけはやめさせなければならない。つか、やめろ！

(とまれー！)

『ワッセ！ ワッセ！』

だが、俺は無力だった。俺と六島苞とでは、生命としての格が違うようである。俺の意識と違つて、六島苞の意識は“コブ”という形で実体化している。現に幹の中を移動しているコブを、実体のない意識の集まりでしかない俺が止めることはできない。俺自身の体もいまや六島苞の根っこに絡みとられて支配されてしまっている。抵抗はできない。

残す可能性として、実体のある連中に止めてもうしか他に道はない。つまり、人間たちに木を切り倒してもらうのだ。種は幹の中をゆっくりと下降している。根にたどりつく前に切り離してしまえば俺の勝ちだ。

『人間たちよ！ 俺の声を聞けい！』

「な、なんだこの声は…？」

俺は念話が通じないか試してみた。うまくいったようだ。人間たちは動搖している。

『俺の結界を破つたことは褒めてやろう。だが！ お前たちの思い通りにはならんぞ！』

「もしかして、六島苞がしゃべってるのか？」

「これは妖怪が使う念話といつ術だ。なるほど、こいつにも自我とこうものがあるようだ」

よし、次は俺の能力を使って、注目を集める。俺と六島苞は一共同体。つまりは、俺の能力の適用範囲に六島苞もいることになる。

俺は六島苞の魂が宿る結晶に“注目を集めた”。

「ん？ なあ、何か感じないか？」

「お前もか？ そうだな、存在感、とでも言えぱいいのか……あたりに強い気配を感じる」

「おお！ オレもそう思つてたんだ！」

「私は靈感があまり強くないのだが、それでも感じ取れるほどの大きな存在だ。幹の中に何かいいるのか？ ん？ しかも、幹の中をゆづくじと……下に向かつて移動していいか！？」

「ここまでくれば、後は俺の演技次第だ。頼むから、早く伐採してくれよ！」

『な、何を言つているのだ！ 下等な人間風情が！ 僕は何も隠してなどいないぞ！』

「なんだ、」といつ動搖し始めたな。ははーん、そうか、わかつたぞ

「なにがわかつたんだ？」

「これだけの存在感、おそらくこれは妖怪の“心臓”だ

「なんだそれは？」

「妖怪の核、魂みたいなものだ。こいつ、心臓をとられまいと地下に隠そうとしているのさ」

「なんだと！？　じゃあ、せつぞく切つけまわねえとなー。」

その調子だ！ やれ、ひとおもこにせつてくれ！

たが、問題は時間だな。ゆつくりではあると言つても、確實に口
づは降りてきている。早く切らないと手遅れになつてしまつ。

そこで、人間たちはチエンソーを取り出した。ブオブオとヒンジ
ンをふかせる。よつしゃ！ 文明の利器最高！ これならいける！

『まて！ まつてくれ！ 頼むからそれだけは……』

「いじにも都合があるんでな。悪いが、それはできねえ相談だ
！」

ブイイイイイギュアアアアツ！

とうとう幹に刃が入った。その振動は、俺にも痛みとなつて伝わ
つてくる。まだ、俺と六島苞はつながつたままなのだ。痛みも共有
している。しかし、ここで弱音を吐くことはできない。これも荒療
治だ。我慢我慢！

『ヤメテ！ キラナイデ！ イタイ！ タスケテ！』

……ちゅつと、可哀そつな氣もするけど、お前も俺にとんでもな
いことしてくれたからなあ。自業自得だ。

チエンソーはさして抵抗もなく、ずぶずぶと幹に食い込んでいく。
自分の体の一部を切り離される感覚はぞつとしない。田の前で腕を
ぶつ切りにされているようなものだ。痛みに気絶しそうになる。耐
えろ、俺……！

そして、メキメキとこつきしむ音がしたかと思つて、ビュウ！
と

と木が倒れる音が響いた。俺は自分の体の中に六島苞の存在を感じない。

（勝つた……！）

俺は勝利の味を噛みしめた。

5話「妖怪化」

「うわ、なんか幹から出てきたぞ。つかまえろー。」

「これが六島苞の心臓か。研究所に高く売れるぞー。」

地上では、人間たちの喜ぶ声が聞こえる。俺もおめでとうと一声かけてやりたいが、体がまだ動かないのでもじっとしておこう。しかし、ほどなくして辺りが騒がしくなってきた。

「なんだ、どうした！？」

「妖怪だ！ 森の妖怪たちが出てきやがった！」

「ちうー、妖怪封じのシールドがもたなかつたようだな」

「どうする、まだ六島苞の木材を切り出してないぜ！？」

「……諦めよう。今の装備じゃ、やつあうのはきつい」

「ちくしょう、せつかくここまで来たってのにー。」

「いや、収穫ならあつたさ。六島苞の心臓を手に入れた。これだけでも田ん玉が飛び出るくらいの金になるぜー。」

人間たちは逃げるよつと帰つて行つた。六島苞は研究所といつところに売られるらしい。元氣でな。

その後、何かの気配がぞろぞろと俺の上に集まつてくるのを感じ

た。妖力を感じる。ということは、こいつらが人間がさつき言つて
いた妖怪か。こんなに大勢の妖怪と接するのは初めてのことだ。今
までに会つた妖怪は、迂木と六島苞だけだからな。

「六島苞様が切られてしまつたぞ！」

「なんということだ……これでは、森を守る結界がなくなつてしまふ」

「おのれ、人間どもめ！」

あれ？ もしかして、六島苞つて結構慕われてたのかな。こんな
に多くの妖怪に悔やんでもらえるなんて。そういうえば、結界を張つ
てたのは六島苞だったな。ということは、間接的にこの森の妖怪た
ちを守つていたということになるのだろうか。

あと、この妖怪たち普通に人語が話せるんだな。妖怪つてみんな
念話で話すのかと思つてた。

「……いや、待て！ 何か地中にいるぞ！」

「本當だ！ とてつもない妖力を感じる。これは六島苞の妖力だ
！」

あれあれ？ まずいぞ、俺のことがばれてる。

言わされて気づいたが、俺の体にはとんでもない量の妖力がため込
まれていた。六島苞の芋にされていたせいだ。俺の体に六島苞の全
妖力が結集されていくことになる。

「切り株の下から感じる。六島苞様！ そこにおられるのですか
！？」

どうしよう。返事したほうがいいのかな。それはそれでやっこしくなりそうだし。

「六島苞様が我々に何か残してくださったのかもしれん。掘り起こしてみよう！」

うわあ、結局面倒なことになりそうだな、おい。

* * *

それから大勢の妖怪たちが集まつて、切り株を引っこ抜く作業が始まった。俺の体は相変わらず動かない。念話を使えば土の中からでも呼びかけることができるのだが、何と声をかければいいのかわからず、困り果てていた。そもそも六島苞とこの妖怪たちの関係ってどんなものだったんだ。

掘り起こし作業は難航したようだ。そりゃこれだけデカイ木である。切り株もでかい。根も広大にひろがっている。昼も夜も休みなく、妖怪たちは働いた。

三日目にして切り株の周りの土を取り除いていく作業がよつやく終了し、それから引っ張り上げるため、奮闘しているらしい。話を聞いていると、ここ原理で持ち上げてロープで引きずりだす算段のようである。

「オーエス！ オーエス！」

まるで祭りのような熱気で作業は続けられた。そして、5日目。ついにお披露目である。

「これが六島苞様の根っこか……」

「でっけえ岩がからまつてやがる。だからあんなに重かつたのか」

「さて、この岩から妖力を感じるだ？」

「岩？ 今の俺は岩に見えているのだろうか。

それより、問題なのはこれからどうするかということだ。依然として体はがつちつと何かに拘束されるように固まつていて、ピクリとも動かせない。さすがに俺も焦つてきた。このままずっと固まつたままとか、ないよね。まさか、六島苞の呪いとか？

妖怪たちには、俺の姿はでかい岩に見えるらしい。絡みつく木の根を取り払い、水で洗つてくれいにしてくれたようだ。おざつす。

「さて、取り出してみたはいいものの、これが何なのかさっぱりわからないな」

「翡翠のように綺麗な緑色だな。欲深い人間たちならば、途方もない価値で扱うだろ？ もしかして中に何か入つてゐんじゃないか？」

「……壊してみるか？」

「バカな！ 六島苞様のバチがあたつたらどうするー？」

「もうひつにも握り出したはしたんだし、今さらじやねえか

『いやまたまでー』

『…………』

しまつた！ 妖怪たちが物騒なことを言いだすから、つい念話で話しかけてしまつた。

「これは念話……！ ところどは、六島苞様なのですか！？」

『あー、なんだそのー……俺は六島苞だつ！』

しまつた！ 勢いに任せてつい口から出まかせを言ひちやつた。

「おおー、六島苞様は生きておられたのですね！？」

『い、いや、俺はまあ、六島苞であつて六島苞ではないといつか』

『え？ じまできたら出まかせで全部押し切るしかない！』

『なんとー、そうでありましたか！ タスガは六島苞様です！』

『六島苞と呼ばれた物は、俺の表層にすぎん。俺は強すぎる力を自ら封じ込めるために、あえてあのよつな姿をとつていたのだよ！ 人間たちが表層部分を刈り取つたため、封印が解けてしまつたようだな』

『なんとー、そうでありましたか！ タスガは六島苞様です！』

『半分以上嘘だが、いいや。どうせ、ばれやしないさ。だが、いつまでも六島苞様と呼ばれ続けるのはさすがに嫌だな。』

『その六島苞といづなだが……それはあくまで俺の表層につけられた名前だ。俺の名前は葉裏といづ』

「そつでございましたか。失礼いたしました、葉裏様」

『うむ。それで、俺は長らく眠りについていたので、最近の事情について疎い。といふか、ぶっちゃけあんたら、だれですか?』

「ええ!? 我々のことを覚えてないのですか?」

『お前たちと接していたのは、表層だからな。俺自身は眠っていたのだ。まず、俺がどれだけの時間眠りについていたのか知りたいな』

「さようですか。しかし、そう言われましても、六島苞……葉裏様は我々のような有象無象の妖怪とは一線を画する存在であります。どれだけの悠久の時を生きてこられたか、我々には想像だにできません。少なくとも数千年はくだらないのではないでしょうか?』

「どうも、かなりの時間、俺は冬虫夏草状態だつたよつだ。でも、確かに前に六島苞に会つたときは、一万年生きたつて言つてたな。少なくとも、それだけ分の妖力が俺の中にあるということになる。』

『で、人間がいるよつだな。奴らとはどういつ関係なのだ?』

「はい! 人間は我々妖怪の宿敵です! 傲慢なる人間は我々のすみかを脅かし、無秩序に森を切り開き、河を汚します! 駆逐すべき存在です! あらうことか、葉裏様に手をかけようとするとは、何と不届きな……』

『俺が結界を張つていたはずだろ? それはどうなつた?』

「葉裏様の結界は永らくこの森を守護してくださいました。人間どもも、手出しができないほどの強力なものです。我々は油断していました。人間は力ガクという恐ろしい術を使います。おそらく、葉裏様の結界は人間の力ガクの力によって破られたのではないかと思われます」

妖怪の妖術と人間の科学が対峙する世界なのか。六島苞つてめちや強い妖怪なんだろ？ その力を無効化するとか、人間側強すぎじやね？

『結界を破られた原因はわかつたのか？』

「はい。この森の結界は葉裏様の“小株”によつて形成されています。一か所だけ、小株が枯らされていました。何かの薬を使って小株を攻撃したでしよう。人間の薬は植物に多大なる被害を与えます。普段は小株を見張る妖怪がいるのですが、警備の隙を突かれました。面目次第もありません」

なるほど、六島苞の小株で結界は作られていたのか。なら、あの人間たちは草枯らしでもまいたのだろう。植物系妖怪の弱点を突いたわけだ。

『六島苞……俺の表層は強かつただろ？ 人間たちに対して結界以外の対抗策はなかつたのか？』

「ええ、六島苞様は確かに強大な力をお持ちでしたが、それは守りの力でした。この森は人間の都に最も近い妖怪の拠点です。人間の都から発せられる“力ガクブツシツ”によつて、通常なら枯れ果ててしまうはずの森を、六島苞様が結界の力で浄化させていたのです。我々がここに住めるのも六島苞様の結界のおかげでした」

六島芭の妖術は戦闘向きではなかつたようだ。拠点を作るのには優れているが、一度内部に侵入されると手出しができなかつたのだろつ。

なんかやばい気がしてきた。六島芭、性格は悪いけど、妖怪の社会に貢献してたんだな。どうしよう、あつさり死んじやつたよ。

「そういうわけとして、今、この森には結界がない状態なのです。お田覚えのところ、申し訳ありませんが、なにとぞ新しい結界を葉裏様に作っていただきたいのですが」

『え？ あー、結界？ ハハツ！ 結界ね、結界！ ……ちょっと、無理かなー、なんつて』

「え……」

妖怪たちの顔は見えないのだが、辺りがざわざわと騒がしくなる。それもそうだ。いきなり自分たちの住む森が安全ではなくなると言われたのだから、動搖しないわけがない。

「な、なぜなのです！？ 警備を怠つた我々への罰でしょーか！？」

？

『いや、そうじゃない。あの結界を張つていたのは確かに俺の表層だが、その表層である六島芭が死んだのは事実だ。今の俺には結界を張る術が使えない』

これは正直に話すしかない。使えないものは使えないのだ。嘘をついてもすぐにわかる。妖怪たちは絶望したかのよつた悲鳴を上げ始めた。ど、どうしよう……

「で、では、この森はやつおしまい、なのでしょ？」「うか……？」

۷

「」のまま人間に追い立てられるがまま、」を立ち去るしかないとおっしゃるのでですか！？」

10

「葉裏様！ 我々はこれからどうすればいいのですか！」

「ああ、六島苞様が生きてこられたのなら、こんな思いはしないでもすんだのに。」

۷

「もしかして、葉裏様は六島芭様と同一の存在ではないのですな
いですか？」

『な、なにを「ンキョ」にソソナ!』といつー。』

「そうだ、六島苞様と葉裏様が同じ存在だというのなら、どうして同じ結界の術が使えないんだ！ おかしいじゃないか！」

『だから、それは俺の表層がだな……』

「表層、表層ってオラたちには意味がわからんねえよ！」 もつとわ

かるように説明してくれ！」

「やつだ！」
やんとした説明をしるー。」

「あなたはこの森を守る存在ではなかつたのですか！？」

「俺たちはあんたのことをずっと信じてきたのに」「

ええい、うぬむこ。なんだこつりや。政治家にクレームをつけ
るプロ市民か。

妖怪たちの訴えはだんだんとただの罵声になつていく。いい加減俺も頭に血が上つてきた。好き勝手に言いやがつて。俺に何の責任がある。俺はただ生きようとしただけだ。だいたい、お前たちが文句を言うべき相手は俺じゃないだろ。お前たちの敵は人間じゃないのか。

俺は能力を使つた。それまで怒鳴り声をあげていた妖怪たちは、ぴたりと声を止めた。一斉に俺に視線が集まる。皆が俺に“注目”した。

『ぴーぴー泣きわめくんじゃねえよ、お前らは生まれたての子が
メか！？ いつまでも六島苞様が守ってくれるからこの森は安心だ
あ！？ 甘つたれるんじゃねえ！ お前らはいつまで六島苞のすね
をかじる気だ！？ 妖怪なんだろ！ 強いんだろ！？ だったら、
立ち向かえばいいじゃねえか！ 人間どもをブツ潰してやればそれ
で済む話だろが！』

俺はマイビッグマザーを思い出した。小さな俺たち兄弟を残して

去つて行つた迂木。俺たちや所詮畜生だ。ボンボンおぼっちゃまじやあるまいし、泣きわめけば誰かが助けてくれるなんて考へること自体が間違つてゐる。

「で、でも、俺たちだけじゃ人間には勝てない……この森に妖怪が住めるのは、結界があつたからで……」

『六島苞は俺だつて言つただろ。あいつの力は、今、俺の中にある。あいつは結界術を使えたが、俺が使える力は違うのさ』

「葉裏様は、どんな力が使えるのですか！？ もしや、かつての六島苞様を上回るほどのが……」

『あなた。使つたことないからわからん』

「「「ズコーー..」」」

なんだお前ら、ノリノリじやん。

『だが、俺が強力なチカラを持つていることは確かだ。だつたら、対抗策はいくらでも立つ。そうだ』

妖怪たちは静かに俺の話に耳を傾けていた。俺の説得は無駄ではなかつたようだ。徐々に氣力を取り戻していく様子がわかる。

『人間なんてとるに足りねえ！ 俺ら妖怪の底力を見せつけてやるんだよ！ わかったか、野郎ども！』

「「「ウオーー..」」」

「うして、俺はこの森をまとめる妖怪の親玉になつた。
つて、なんだよ！？」

ちょっと熱くなりすぎたと思ったら、いつの間にか俺は妖怪のリーダーになっていた。

もともとそんな気はこれっぽっちもなかつたのだが、乗りかかつた船に乗らされてしまった感が否めない。まあ、六島苞に対する罪悪感も少しあつたのかもしれない。この力はもともとあいつの力だ。あいつはこの力をこの森を守るために使つていた。それはもちろん打算があつたとは思うが。力は持つだけで責任を生む。俺にはこの森の妖怪たちをあおつた責任もあるのだ。その言質くらいくつちり自分で面倒みたいと思うのだ。

はつきり言つて、六島苞の力を奪つたことを後悔なんとしていい。奪われた方が悪いのだ。もともと自分の力ではないからと見て遠慮する気もない。これは紛れもなく、今の俺の力に他ならないのだから。そして、六島苞の背負つてきた物を俺が引き受けなければならぬ義務感なんてものは微塵も感じていらない。

正直な話、これはただの傲慢なかもしない。俺がちっぽけなカメだつたころ、生きることに必死でそれ以外のことなんて考えている余裕はなかつた。しかし、今はこうして何の因果か有り余るほどの力を手に入れた。その余裕があるから、なんとなく、妖怪のリーダーという重役を引き受けてしまつたのだろうか。

まあ、そんな俺の気持ちの話はさておいて、妖怪の森は人間との決戦に向けた準備に入つていた。元人間として、妖怪と殺し合うことにためらいはあるのかというと……ない。不思議なものだ。人を殺すことに嫌悪を感じない。善良な人間を進んで殺したいとは思わないが、その程度の感情だ。妖怪にとって、人殺しは種族的な禁忌ではない。むしろ、人間は科学が発達する以前まで妖怪の食糧にされていた。俺はやはり、身も心も妖怪になつてしまつたということ

だろうか。

結界がなくなつて森はじわじわと化学物質による汚染を受け始めている。早急に都を襲う作戦を立てなければならない。

だが、その前に……

(いつになつたら、俺は動けるようになるんだ?)

俺が親玉に就任してから三日、いまだに体を動かすことができない状況が続いている。妖怪たちには、封印が解けたばかりで慣れていないだけだと言い訳してきたが、さすがにそれも限界だろう。この三日、俺は自分自身の体を徹底的に調べていた。そして、わかつたことがいくつかある。

まず、俺が動けない理由。それはそう苦労せずに判明した。原因は甲羅の重さだ。なぜか、俺の甲羅がめちゃつくめちゃ巨大化している。全長10メートルくらいである。そのせいで重すぎて動けないのだ。

さらに、甲羅の大きさは巨大化したのに、肝心の俺の体そのものは大きくなつていないのである。いや、正確には大きくなつていなければいけではない。15センチのミドリガメだったころと比べれば格段に成長している。1メートルちょっとくらいにはなつているような気がする。しかし、それでも甲羅の大きさと比較すれば極小と言わざるを得ない。したがつて手足が外に出せない。体がすっぽり甲羅の中に埋もれてしまっている状態なのだ。

なぜ、こんな体になつてしまつたのか。その原因も自分なりに仮説は立つた。

マイビッグマザーは妖怪だった。一百年生き続けて妖怪になつた。もし、俺の妖力成長率が迂木と同程度だとすれば、俺は確実に一百歳を超える年月を生きていると計算できる。それほどまでに俺の妖力は成長していた。迂木の体の大きさは軽自動車くらいあつたが、俺の体はせいぜい1メートル。確かに体長で言えば迂木の方が大き

かつたが、内包する妖力の量では俺がまさる。かつての記憶と照らし合させて見ても、明らかに俺の妖力の方が大きい。

それは、六島芭の妖力を取り込んだのだから当然だと言われそ
うだが、少し待つてくれ。さっきの話は六島芭の妖力を抜きにした話
である。つまり、俺自身が一つの個体として長い年月を生きたため
に得ることができた妖力についてのことだ。

では、六島芭の妖力はどこにいったのかといふと、それが問題で
ある。なんと、すべて俺の甲羅にため込まれていた。すなわち、俺
の肉体は俺自身が得た妖力で成長したが、俺の甲羅は六島芭の妖力
を詰め込まれた結果、ぱんぱんに膨れ上がってしまった、というわ
けである。そのため、肉体と甲羅との間の成長に不均等が生じたの
だ。

この不均等を解決するため方法は一つしか思い浮かばない。甲羅
の妖力を俺の肉体に移し替えるのだ。そうすることで甲羅は縮小し、
ちょうどいいサイズにもどる。

六島芭の妖力を自分の体に取り込むことについては問題なかつた。
長い間くつづいていたせいか、取り込んでも違和感はない。しかし、
大変だったのはその量である。とにかく、甲羅の中の妖力が多い。
どれだけ肉体に移し替えても小さくならない。いくら拒絶反応が出
ないからと言っても、常時輸血状態ではさすがに気持ち悪くなつて
くる。しかも、このエネルギーは熱力学の法則に忠実なようで、エ
ネルギーが高い方から低い方へと移動しやすい性質があつた。その
ため、気を抜くとドンドコもつさり妖力を甲羅から肉体へ送りつけ
られてしまう。妖力の移動は細心の注意を払つて少しづつ行わなけ
ればならなかつた。

「なんだか、葉裏様の体が小さくなつていなか?

「え? た、確かに心なしか縮んだ気がする……葉裏様、いかが
なさいましたか! ?」

『だ、大丈夫だ、気にするな……ゲフツ！』

その後も順調に移し替えは進んだ。確実に甲羅の大きさは小さくなっている。だが、なぜか俺の肉体の方はどれだけ妖力を吸つても肥大化しなかつた。妖力の多さが体長と比例しているわけではないのか。

どんどん小さくなる俺を見て、妖怪たちが心配している。とりあえず、動きやすいように姿を最適化していると言つておいた。そして七日目。俺はついに日の光を拝むことになる。

「う、うう……」

「葉裏様！」

妖力の摑りすぎで頭がくらくらする。俺の周りには妖怪たちが集まっているようだ。

「なんとか、外に出られたみたいだな……あれ？ 俺、人語を話せるぞ？」

カメだったときは当然、人の言葉など話せなかつたが、妖怪化した影響だろうか、ちゃんと言葉を発音できる。まあ、喋れて困ることはない。

「どうだ、これが今まで封印されていた俺の真の姿だ！」

今の俺は、きっとマイビッグマザーのように美しいカメにバージョンアップしているはずだ。妖怪たちもあまりの神々しさに絶句して……

「 「 「 …… 「 「

絶句している。なんだ？ 思っていた反応と違つ。俺の姿はどうなつてゐるんだ？

少しずつ光に慣れてきた田で、自分の姿を確認する。甲羅は暗緑色で宝石のように輝き、手足は真っ白すべすべでふにふにした肌である。

「えつー？ ちょっと待て！」

俺は一足歩行で駆け出し、近くの水辺へと向かう。そして、水面に映る自分をその目で見た。

少女だ。美少女がいる。甲羅と同じ深い緑色の髪に瞳で、整った顔立ち。肌は陶器のように白くなめらか。そして、何より目立つのは甲羅だ。体がすっぽり甲羅の中に収まっており、それぞれの穴から頭と手足が出ている状態、つまり、ガメラの着ぐるみでも着ているかのような格好なのだ。

「なんじやー」つやあああああー！？」

俺の精神はかつてない大ダメージを受けてしまった。

7話「戦いじゃないじゃない」

整理しよう。

聞くところによると、長い年月を生き、妖力が高まつた妖怪は元の姿とは異なる形へと体を変化させることが多いらしい。これは自分の種族の普遍的な形状という範囲に固定されていた肉体と、妖力によって強靭になつた精神の間で乖離が生じ、その違いを中和するために起つる現象のようだ。人型に体が変化する者は割と多い。だから、俺の体が人間っぽくなつたことはそう珍しいことではない。

どうして、美少女に変化したのか気になつたが、そういえば俺は雌ガメだつたし、さらに言えば、実は前世でも子どもの頃はこんな容姿をしていた。小さいころはよく女と間違われたものだ。もうとつもなく昔の記憶なので、すっかり忘れていた。

そこまではいい。納得できる。問題は、俺が完全に人化しなかつたということだ。甲羅が残つている。非常に間抜け。

「だあああ！　ちくしょおおお！」

「葉裏様、落ちついてください！」

想像してほしい。幼い少女がカメの甲羅をすっぽり着用している姿を。かつて悪すぎる。すごくかつて悪い！　俺はどうしても我慢ならなかつた。どうして、100%人間か、100%カメの体になかつたのだ。なぜ混ぜたし。そんなハイブリッドは要らない。そういうえば、前世の世界のアメコミに、忍者で亀のミコータントが登場する作品があつた。あれの中途半端なコスプレ状態である。

さらに、この甲羅、クソ重いのである。ものすっごい肩が凝る。俺がプレスをきめると、地面が陥没する。軽く歩くだけでズシンズ

シンと音がする。少女姿の俺がトコトコ歩くその擬音がズシンズシンだぞ。能力なんて使わなくても視線を一人占めだ。そんな物を背負つて肩が凝るくらいですむのだから、俺も強くなつていいのだろう。しかし、それとこれとは話が別。俺はこの甲羅をなんとかできないか必死に摸索した。

だが、うまくいかなかつた。甲羅は背中側と腹側の一いつのパーツがあり、どうにか分離できないか試してみたが、だめだ。この甲羅も体の一部である。引っ張がすことはできそうにない。甲羅の妖力をもつと吸い取つて小さくできないか試してみたが、一向に変化がない。それに俺の現時点での肉体の容量では、これ以上妖力の移し替えはできそうになかつた。妖力の飽和状態で吐きそうになる。それが已然の問題として、甲羅が小さくなつたところで取り外すことができなければ意味がない。まったくの無駄骨だつた。

しかし、俺は諦めていない。何が何でもこの甲羅をはずしてみせる。それから、俺は人間との戦いなどそつちのけで、甲羅との戦いを繰り広げることになる。

検証その1：高所からの落下

「いくぜっ！　おらああああー！」

俺は高い崖の上から躊躇することなく飛び降りる。一瞬の浮遊感。そして、急速落下。地面に激突する前に、手足と頭を甲羅の中に引っ込める。ちなみに、どういうわけか甲羅の中は質量保存の法則を無視するかのような無限スペースになつている。どう考へても人体では構造上不可能な動きでにゅるんと甲羅の中にもぐりこむことができた。手に物を持ったままで中に入れる。しかも、その物を甲羅の中に入れっぱなししておくことができるのだ。まるで、四次元ポケット。便利である。

そして、崖から飛び降り甲羅の中に避難した俺は、見事崖下に着

地する。すさまじい地響きがおき、隕石でも落下したかのよつなかレーターができる。だが、甲羅は無傷。

検証その2：崖上から岩を落とす。

「「いやっ！ わらわあああ！」

今度は妖怪たちに協力してもらい、崖の上から巨大な岩を転がして落としてもらった。その崖の下に俺がいるという寸法さ。岩は俺の甲羅に直撃した。殻の中に引っ込んでいた俺には、岩が落ちる音は聞こえたが、直撃を受けたというのに何の衝撃も感じない。むしろ、生き埋めになつたことの方がこまつたが、その岩は片手で持ち上げることができたので、無事脱出できた。甲羅に比べれば断然軽い。

検証その3：火あぶり

「やけやつ！ わらわあああ！」

妖怪の中には、妖術によつて火を起こせる奴が何匹かいた。そいつらにあつたけの炎を出してもらい、甲羅を焼く。これがほんとの甲羅干しだ。

甲羅の中には、まったく熱さを感じなかつた。10分くらいこんがり焼かれたが、やはり無傷。先に妖怪たちの妖力の方が尽きた。俺の背中のマイホームは、安心の耐火設計のようである。

他にも様々な苦行を自らに科したが、甲羅の防御力はそのことごとくに耐えきつた。六島苞の妖力が詰め込まれた結果、妖力が結晶化して金属を超える硬度になつてしまつたみたいだ。美しい緑色の光沢は色褪せることがない。

ところで、妖怪たちは俺のマゾ苦行を見て、なぜか士氣があがつ

ている。検証によつて様々な攻撃をことごとく跳ね返した行為は、俺の力を見せつけるパフォーマンスになつたようである。事実、防御面に関しては今のところ不安はない。攻撃面でも以前に増してかなり強化されている。少女の見た目からは想像もつかないほどの怪力を発揮できる。この森には俺より強い妖怪はいないようだつた。

尊敬のまなざしで見られるのは面映ゆいところだが、なんにせよ士気が高まつたのはいいことである。甲羅については、現状では手出しできそうにない。そもそも、人間たちとの戦いに備えて本腰を入れていくか。だが、俺は絶対に諦めない。いつか、この甲羅を脱ぎ捨ててやる！

人化してから、俺は衣服を着ていない。はだかんぼうである。甲羅のせいで着物を着ることができないのだ。まあ、妖怪なんて大半が素っ裸の連中であり、別におかしくはない。甲羅のせいで露出している部分は頭部と四肢だけだし。だが、立ち上ると常にガニ股猫背の姿勢を強要されるのはいただけない。まるで四股を踏む相撲取りの「」ことである。すべて甲羅のせいだ。忌々しい奴め。一足歩行は早く移動できて便利だが、甲羅の重さが尋常でないので長時間立ちっぱなしでいるのはきつい。なので、いつもは寝つ転がっている。

そのうち、寝たまま移動する手段はないものかと考えつき、手足をひっこめた状態で転がりながら走る“甲羅ローリング走法”を編み出した。坂の上から転がると、障害物をなぎ倒しながら進むことができ、爽快である。攻防一体のなかなか使える技だ。

それはさておき、人間との戦について。とりあえず、情報を集めることが先決だ。人間の都がどのような防備を持っているのか知らないと仕掛けることもできない。鳥型の妖怪を編成し、偵察部隊を作つてみた。彼らが集めた情報によると、都は“シールド”と呼ばれるもので守られているらしい。これは結界のようなあやかしの技ではなく、科学的に作られたエネルギー・フィールドであるようだ。科学と妖術の相性は悪い。物理法則によつて徹底的に理論武装された科学技術は、妖術のよつなんなどかわからぬ曖昧な力を強く拒絶する。妖術でこのシールドを破壊することは難しいという結論に至つた。

シールドを破るためにには、物理的な方法で攻撃するしかない。幸いにも、シールドは対妖術に重点を置かれた設計になつてゐるのか、強い衝撃に対してもそこまでの耐久力を持たない。なぜ、シールド

の性質がわかるのかというと、以前、森に入ってきた人間が個人用の簡易シールド形成装置を装備していたことがあつたらしく、そのときの経験から推測できたという。力押しに弱いようだ。

人間側は妖術さえ無効化できれば、妖怪など恐るるに足りないと思つてゐるようだ。まあ、その考え方はずつともである。妖術を封じられれば、あと俺たちに残された手段といえば怪力くらいのものしかない。例外的に、『程度の力』に関しては、シールドの防御効果も薄いという。だが、能力持ちは数が少ない。俺も含めてこの森に、5匹くらいしかいなかつた。それに、必ずしも戦闘に役立つ力ばかりではない。俺みたいにな。

となると、後は兵の数を集めて正面突破するくらいしか方法はないわけだ。人間側もその手は十分に予想できるので、対策もされてゐるに違いない。詰んでないか、これ？

「うぬー、だめだ。うまくいかない」

今、俺は人間に対抗するための兵器が作れないかと模索している。といつても、この森にある資源と言えば木材しかない。さすがに鉱脈が都合よくこの地にあるといふこともなかつたし、砂鉄があるとしてもそこから精製するなんてやり方も俺は知らない。木でなんとかするしかない。

とりあえず、俺は投石機が作れないか試案してみた。だが、俺は投石機の詳しい構造なんて知らない。なんとなく形は思い浮かぶが、それを現物にすることは話が別だ。まずは小さな模型を作つているところだ。それが完成したら、本格的な製作に取り掛かるつもりである。

しかし、うまくいかない。どうやって作ればいいんだ？

「葉裏様、何を作つているのですか？」

「ん？ これは投石機といつてな。大きな岩を遠くに飛ばすための道具だ。これをたくさん作れば、遠くからシールドを破壊することができるかもしないだろ？」

「ほう、そのような道具があるとは知りませんでした」

「いや、俺も詳しく知らないから、今試案中なんだ。といつか、煮詰まっている。手を貸してくれ」

そう言つてみたが、妖怪は難しそうな顔をするばかりだ。

「葉裏様、まことに言いにくいのですが、その投石機というものは人間の作る道具ではありませんか？」

「確かに、そうだな。それがどうした？」

「“道具を作る力”は人間の領分でござります。我々妖怪には、複雑な人間の道具を作ることはできません」

人間と同程度の思考力を持つていれば道具の作成くらいわけないと思つていたが、どうも違うらしい。妖怪は種族的にモノを作るという行為が苦手なのだそうだ。実におかしな感覚だが、言われてみれば確かにと思う節がある。かれこれ数日は投石機の製作に頭を悩ませていたが、一向に良い案が浮かばないのだ。これは妖怪の性分なのか、それとも俺の頭がアホなのか。

妖怪は便利な道具を手に入れようと思つたら、人間から奪うことしか得られない。中には鍛冶が行える妖怪などもいるそうだが、それでも都のような科学技術には到底及ばない文明レベルの品である。この妖怪の不器用さが、人間にすみかを追われる敗因になつたのだろう。

「それだと、本当に正面突破しか他に方法がなくなつたな。援軍動員して量産させることなんて到底できそうにない。投石機は諦めるしかないか。」

「それだと、本当に正面突破しか他に方法がくなつたな。援軍の要請はどうなつた？」

この森にいる妖怪の数はせいぜい、1500匹程度である。それに対して、人間の都にはその規模から見ても1万人くらいはいると思われる。圧倒的に数が足りない。妖怪一匹の強さは容易に人間一人を上回るが、それにしたつて少なすぎる。それに、人間には高度な文明によって生み出された兵器がある。武装した兵士なら、十分に妖怪とも渡り合える。そこで、援軍の要請は急務だった。

求めた先は、妖怪四天王と呼ばれる連中である。なんか、逆に弱そうに聞こえるがそんなことはないらしい。六島芭もその一匹だったとか。後の三匹も強豪揃いのようで、この森のようにそれぞれが拠点を構え、多くの妖怪を従えているそうだ。今回の戦いに協力してくれるかどうか、打診してみた。

「はい、それが……色よい返事をいただけたのは、東の猪々獄様のみでございました」

「まあ、そんなもんか」

妖怪だから人間との一大決戦をやると言えば、血の氣の多い連中が集まるかと思ったのだが、現実は厳しい。一匹集まつただけでもよかつたと言える。はたして、猪々獄とやらがどれほどの軍勢をひきつれて来てくれるのか、期待してまつしかないだろう。

9話「気になるアイツはイカしたブタ面」

さて、それからしばらくした後、援軍がこの森に到着した。その様子は圧巻だった。なんとその数、5000匹である。百鬼夜行どころの騒ぎではない。地を埋め尽くさんばかりの妖怪たちがこの森へとやってきたのだ。正直、ここまで数をそろえてくれるとは思っていなかつた。嬉しい誤算である。

遙か東の地から旅をしてきた彼らを、森で受け入れ、休ませた。妖怪の森はかつないほどにぎわいを見せている。これだけの数が集まつたということは、おそらく人間に知られているだろう。500もの妖怪の行軍を隠すことなんてできない。軍を動かす以上、しかたのないことだ。六島苞が死んだことは人間側も知っているはずなので、拠点を失う危険を感じた妖怪たちが決起することは、向こうも予測していた可能性だろ？ 人間側も、妖怪たちが弔い合戦に来ると踏んで、戦いに備えていると想っていた方がよさそうだ。

俺は森の深部、六島苞の切り株が残る沢にいた。協力者である東の妖怪四天王、猪々獄に挨拶をするためだ。これだけの妖怪を引き連れて来てくれた彼には、感謝しなければならない。到着からほどなくして、猪々獄は現れた。名前からなんとなく予想がついていたが、ブタの妖怪である。

「よく来てくれた、猪々獄よ。俺はこの森をまとめる妖怪、葉裏だ。このたびの戦いに手を貸してくれることを深く感謝する」

「……お前は誰だブヒ？ この森の長は北の妖怪四天王、六島苞ではなかつたのかブヒ？」

猪々獄の見た目は、猪八戒のような感じと言えばわかるだろうか。

人間とブタを掛け合わせたような容姿をしている。背中には5本の大槍を担いでいた。腹周りはだぶついているが、腕の筋肉はモリモリだ。しかも、その体格はかなりのもので、背は5メートル以上ありそうである。見かけ倒しではなく、妖力もすごい。さすがは四天王を名乗るだけのことはあり、六島苞とタメを張るくらいの実力があると一目でわかる。妖力の多さで言えば、俺の方が勝っているようだが、戦闘力で言えばどちらが上かわからない。

でも、語尾にブヒをつけるのはやめてほしい。

「六島苞は俺の異称だ。これからは葉裏と呼んでくれ」

「ふん、クソでかい木の妖怪だと聞いていたが、実際会つてみれば、なんともまあちびっこい亀妖怪だブヒ。こりゃあ、人間にやられるわけだ！」ブヒヒヒヒヒ！

猪々獄の挑発とも取れる軽口に、援軍の妖怪たちが合わせて笑いだす。それを見たこの森の妖怪たちは、自分たちの親玉を馬鹿にされ、怒り心頭といった表情になっている。ここで喧嘩させれば士気にも影響がでる。俺は怒り出す妖怪をなだめた。

「まあ、そういう訳だ。これからともに人間と戦おうと言うのだ。仲良くやっていこうじゃないか」

「人間をぶつ殺すことに関しちゃ、異論はねえブヒ。そのために俺様のかわいい手下どもをあつめてやつたんだからな。だが、戦の前にはつきりさせておきたいことがあるブヒ。それは、俺様とお前、どちらが大将にふさわしいか、ということだ」

なるほど、それはもつともだ。トップが一人いたのでは、指揮系統が混乱する。混合軍を形成する以上、どちらの長の命令が優先さ

れるか決めておかないといけない。

猪々獄は、背中から槍を一本抜きとり、ぶんぶんと振り回してその槍先を俺に向けた。

「俺様と勝負しろブヒー。勝った方がこの軍の指揮をとる。ビツだ？」

俺としては、指揮権を猪々獄に譲つてやつてもいいと思っているが、この戦闘狂にそんな話は通じないだろう。それにここであつさり負けを認めると、それはそれでこの森にもともといた妖怪たちの士気が下がりそうだしな。

「いいだろ？ 受けて立つー。」

「ブッヒッヒー！ そつこなくつちやなあ。おら、お前は武器を構えなくていいのか？」

武器ねえ。正直、この森で調達できる武器なんて石器の斧くらいしかない。こん棒は俺の筋力をフルパワーで使って振ると一瞬で壊れてしまう。石器はそれよりも若干マシといった程度なので、使えるものがない。素手で殴つた方がまだいい。

「俺の武器はこの体一つやー。」

「上等だブヒー！ 俺様は東の妖怪四天王、猪々獄！ いざ、尋常に勝負つー！」

名乗りを終えた猪々獄は剛速の槍を突きだしてきた。はやい！

俺は反応できずにモロに突きを食らってしまった。俺の腹の甲羅装甲がその攻撃を防ぐが、突きの威力はすさまじく、体が後方に吹き

飛ばされる。

「ぐつぐつ！ なんて衝撃だ……！」

槍を食らった腹のあたりがジンジンと痛む。初めて肉体にダメージを通された。相変わらず甲羅に傷はついていないが、衝撃が内部まで届いている。このブタ、やりおる。

「……驚いたブヒ。まさか俺様の槍を無傷で防ぐとは！ それに、その体の重さ、はんぱねえブヒ。俺様の手の方が痺れちまつたブヒ。妖怪四天王の名は伊達じやねえってことか。ブッヒヒヒヒー！ このいつは面白くなってきたブヒー！」

今度は俺の方から仕掛ける。さつきは猪々獄の突きに対応できなかつたが、それは俺の経験不足が原因であつて、やろうと思えば素早く動ける。俺は猪々獄の懷に踏み込み、拳を放つ。

「くらえー！」

「はあー、なんだその攻撃はー、遅すぎるブヒー！」

「なにー？」

脂肪でたぷたぶの巨体のくせに、こいつは俺の拳を難なくかわした。確実に俺より速く動ける。それを認めなければならない。拳を突きだした俺の体勢は隙だらけだ。そこに鋭い槍が連続して襲いかかってくる。

「ちいいいいつー！」

俺は甲羅ガードで猛攻を耐える。ぐおう！ モーレツウ！

甲羅で防いでも自転車とぶつかつたくらいの衝撃は通る。地味に

痛い。

パンチが届かないとなれば、他の手で攻めなくては。俺は妖力弾を放った。迂木が使っていた技と同じものだ。妖力をたんまりもつてている今の俺なら何発でも打ち出すことができる。妖力弾は確かに速い。しかし、威力が弱かつた。猪々獄に当たつても全然ダメージを与えた様子はない。相手も高い妖力を持っているので、当たる直前に相殺されているのだろう。それにほとんど避けられている。

「ふぬっ！ その甲羅は厄介だブヒ。ならば！ 甲羅以外の場所を狙うブヒ！」

今度は甲羅から露出している手足を狙ってきた。ま、当然だよな。こちらもその手は読んでいた。右腕目がけて突きだされた槍。俺は右腕を甲羅に収納する。

「な、なんだブヒ！…？」

「はっはっは！ そう簡単にやられるか！」

猪々獄は予想外の動きをされたことに驚いている。そこにわずかな隙ができた。今だ！

俺は甲羅の中に入れていた木の実を取り出す。これは、散歩中に見つけた物だ。蜜柑のような見た目をしているので、食べられるのかと思って少しかじってみたところ、壮絶な辛さに悶えることになつた。これは何かの武器に使えるかもしれないと思つて甲羅の中に大量に入れておいたのだ。

それを空中に放り、妖力弾で打ち抜いて炸裂させた。

「なんだこれは、うわあああ！　目がしみる／＼…」

果汁が周囲に飛び散り、猪々獄の目に入った。俺は頭を甲羅に引っ込みて回避した。よし、この隙に攻撃だ。

頭を収納しているので前が見えないが、前方に感じる猪々獄の妖力はわかるので位置は特定できる。そこ目がけて渾身の蹴りを入れる。

「ぐふ＼＼…」

やわらかい肉を蹴る感触がした。頭を出すと、腹を押されてよろめく猪々獄がいた。追撃しようとするべくさつと後ろに飛び退つかわされる。そう何度も奇襲は通用しないか。

「はあはあ！　やつてくれたな、子亀妖怪！　もつ容赦はせんブヒー！」

今の一撃は効果があつたようだが、猪々獄を倒すには至らなかつた。タフな奴だ。目潰しのせいで涙目になつて見えない視界もすぐに回復するだろう。

「当たり前だ！　最初から容赦なんかすんじゃねえ！　全力で来い！」

これは長期戦になりそうだな。

10話「バトルの末に」

それから戦いは三日続いた。まじで。

猪々獄は執拗に俺の露出部を狙つてくるので、俺は甲羅に完全避難し、甲羅ローリング走法で戦つた。手足を引っ込めているので、殴る蹴るの暴行ができない。転がつて体当たりしても避けられるのが目に見えているので、ちまちまと妖力弾を撃つて攻撃した。たまたま激辛蜜柑攻撃を織り交ぜたりしたのだが、一度も通用する相手ではなかつた。

その攻防が三日も続いたのである。観戦していた妖怪たちは、最初の一日は固睡をのんで見守つていたが、今ではこの泥仕合の有様に呆れて退屈しているようだ。

戦いは俺が守りで猪々獄が攻めという形で延々と続いた。それにしても、猪々獄のやつ、なんて諦めが悪いんだ。疲労困憊でふうふう息をつきながらも、まったく手を休めることがない。5本あつた槍もすでに4本が苛烈な攻撃の負荷に耐えきれず折れている。俺は甲羅に閉じこもつて妖力弾を撃ち続けられればいいだけなので、楽なのだ。この際なので、甲羅ローリング走法を練習してみた。今では自由自在にブイブイいわせることができる。さすがに猪々獄の動きはそれより速いので、攻撃は当たられてしまうのだが、うまい衝撃の受け流し方がわかつてきたので、今では食らつてもそんなに痛くない。

「なあ、猪々獄。もうそろそろ俺の勝ちってことでいいじゃないか？」

「いいや！ はあ、ふう、まだだブヒ！ まだ終わらんブヒ！」

「ふひー！」

「だつたらお前の勝ちっことで、もういいからさ

「黙れブヒ！ 僕様は負けないブヒ！ 今に見ていろ！ こんな
甲羅、粉々に碎いてやるブヒー！」

パキン！

そのとき、何かが割れる音がした。最後の一本の槍も折れてしま
つたのか。

いや、違う。

「ちよ、ちよっと待つてくれ、猪々獄！」

俺は甲羅口ーリング走法で距離を取り、頭と手足を外に出した。
猪々獄の方を見れば、その手に持つ槍はまだ折れていない。では、
さっきの音は何だったのか、恐る恐る甲羅を確認する。

猪々獄の攻撃に耐え続けた甲羅は、以前と変わらぬ傷一つない美
しさで光っている。だが、背中側と腹側の二つのパーツのつなぎ目
に違和感があった。そこに手を当て、思いっきり引っ張る。

パカア！

「……開いた……」

まるでドアでも開くようにすんなりと動いた。どさりと甲羅が俺
の背中から滑り落ちる。俺は自分の体に目をやる。男だったころい
た相棒はなくなつており、胸はほんのりとふくらんでいる。いや、
そんなことより俺はその少女のおなかを見ることができたことに歓
喜した。それはつまり、俺の苦しみからの解放を意味する。

「とれた――――――！」

天に向かつて手を広げながら嬉しさのあまり絶叫した。全裸で。これで、もうかつこ悪くない。普通の人間と同じ姿だ。普通つて、すばらしい！

「ふ、ブヒヒヒヒー。とつとつ俺様の攻撃がお前の自慢の甲羅を砕いたようだな！ もうお前を守る盾はないぞ！ くらえええ！」

俺が幸せをかみしめていると、猪々獄が槍を突きだしてきた。なんて無粋な奴だ。しかし、今の俺は確かに防御力が落ちている。あんなふつとい槍を食らつたら、さすがにただではすまないだろう。猪々獄が放つ渾身の一撃。俺はなんとかそれをかわそうと横に飛び。

ふ。

「……！ な、なんだ！？」

ぎりぎりで槍をかわし、牽制の拳を繰りだそうと思つていた。だが、自分の思惑とはまったく異なる事態が起きていた。回避のために行つた横つ跳びによつて、十メートルほど移動していたのだ。

(体が軽い……！)

どういうわけか、体が羽のように軽い。そうか、甲羅を脱ぎ捨てたからだ。甲羅分のウエイトがなくなつた今、俺は以前以上のスピードで動くことができる！

俺と猪々獄のスピードは互角になつた。しかも、相手は疲労している。勝機が見えた。妖力弾で猪々獄を足止めし、その隙に素早く後ろへ回り込む。

「これで終わりだ！」

「ぐぼつー、へばぶつー、ぐあああああー！」

俺のラッシュが猪々獄をとらえた。そして、長きにわたる戦いによつやく決着がついたのであった。

こうして、妖怪軍の最高指揮官は俺に決まった。猪々獄は副指揮官である。いかに妖怪四天王の一匹といえども、三日の大闘の疲労は色濃く、戦いの後はダウンして動けなくなっていた。

それから、甲羅について調べてみた。冷静になつて考えると、もしかしてブツ壊れてしまつたのではないかと不安になつたが、そんなことはなかつた。なぜか俺の体と分離しても妖力を失わずにいる。背中側と腹側のパーツが、二つにカバッと開く仕組みは便利なもので、これにより、甲羅は着脱可能になつたのだ。甲羅の中を覗き込んで見たが、光を当てても真つ暗で何も見えない。手を入れると、ずぶずぶとどこまでも沈んでいく。中に何か入つていたので取り出していくと、激辛蜜柑だつた。腐つていた。そつと中にめどした。どうなつてるんだ、この甲羅。

俺は甲羅を抱えて沢の水の中に入つた。やっぱり甲羅がないと動きやすい。肩も凝らない。実に気分爽快である。体を洗つていると、改めて女になつたのだなあと実感した。だが、特に感慨はない。周りには妖怪たちがわんさかいるのだが、その中で全裸で水浴びしても、羞恥心など起こらなかつた。姿形は人間に似ているが、今の俺は似て非なる者なのだ。前世の頃の俺の感覚と、今の俺の感覚ではかなり違ひが出ているのかもしれない。自分では、はっきりとわからないのだが。

全裸森ガールとなつた俺が、仁王立ちで体を乾かしていると、猪

々獄がやつてきた。

「おう、体はもう大丈夫なのか？」

「ブヒヒヒ！ 僕様はそんなにやわじやねえブヒ。それにしても、まさかその甲羅が脱げるとは思わなかつたブヒ。僕様の負けだな。お前、強えじやないか。見なおしたブヒ」

猪々獄にさつきまでのトゲはない。自分が認めた相手には心を開くタイプなのだろう。戦いを乗り越えて友情が深まるといつやつか。

「いや、違うな。惚れなおした、言つた方がいいかもしれんブヒ」

「は？」

「俺の女になれブヒ。俺の子どもを孕めブヒ」

美少女とブタの化け物のカップリングつて、それなんてエロゲ。ドン引きだよ。もちろん、丁重にお断りした。拳を鳴らしながら、丁重に、な。

11話「人妖大戦」

「いよいよ、人間たちとの決戦の日が来た。俺たちは妖怪の大軍を率いて都を目指す。

俺と猪々獄はその先頭に立っていた。俺も妖怪だ。後ろでふんぞり返っている気はない。

「葉裏」

「なんだ?」

「この戦いが終わつたら俺様と結婚してくれブヒ

「嫌だ。あと、そのセリフは死亡フラグっぽいぞ」

猪々獄は、あれからずつと俺に求婚してくる。「うざい。

「それより、昨日話した作戦はうまくいきそうか?」

「ああ、あれか! まったく、葉裏は面白いことを考へるブヒ!」

妖怪軍の作戦は突撃の一択である。それ以外にやりようがない。シールドは360度死角なく都を覆い尽くしている。戦力を分散させてシールドの突破に手間取るより、一ヵ所穴を開けてそこからなだれ込む方がいいだろうと、先日会議で決めた。人間側は1万の数がいるが、そのすべてが兵士というわけではないはずだ。妖怪側は6500。ぎりぎりなんとかなるのではないかという目算だ。

ところで、俺は昨日、猪々獄の能力について話を聞いた。猪々獄

は『槍を遠くまで投げる程度の能力』を持つてているという。その能力を聞いて、少し思いついた作戦があつた。名付けて『槍と一緒につつどびましょう作戦』。猪々獄の大槍に妖怪をくくりつけ、投げてもらう。すると、あつという間に都のシールドを突破して中に侵入できるのではないかという作戦だ。妖怪ミサイルである。

結論からして、それは難しいと言われた。投げた槍はすさまじいスピードで飛ぶので、並みの妖怪では耐えられず、目的に到着と同時にはじけどび、死んでしまうらしい。しかし、例外的に並みの妖怪にとどまらない防御力をもつたタフガールがいる。俺だ。俺ならおそらく着地の衝撃にも耐えられるし、孤立しても自分の力でなんとかやっていけるだろう。そのため、俺の背中にはいつでも投げてもらえるように、すでに槍がくくりつけられている。

森から出て、都を前にする平野で俺たちは一時停止した。都の方から何かが近づいて来る。こちらに向けて無機質な声で何か言つている。

『警告します。妖怪たちは直ちに引き返しなさい。これ以上、都市に接近した場合、武力を行使して対処します』

いくつもの銀色の塊がこちらに向かって走つてくる。とうとう、向こうからも兵が放たれた。躊躇してなどいられない。俺は声を張り上げた。

「全員、突撃いいい！－！」

オタケビをあげて妖怪たちが走りだす。銀色の物体はロボットだった。ロボット兵だ。人間たちはこんな物を作り出していたのか。俺は焦つた。確かにこんなSFチックな科学技術を持っている奴らだ。ロボット兵くらいてもおかしくはなかつた。だが、もはや引き返すことなどできない。戦いは始まつた。

ロボット兵は近づいてきた妖怪たちに向けて銃を撃つ。妖怪はひるまなかつた。ちょっとやそっと腕とか足とかもげても平気な連中である。鉛玉を数発ブチ込まれたくらいじゃ死ない。俺と猪々獄は猛然とロボット兵の只中へと飛び込んでいった。

そこでわかつたが、このロボット兵は銃を撃つしか能がない。接近戦に入れば木偶の坊も同然だった。

「ブシヒヒヒー！ まったく手こたえのない奴らだブヒー！」

俺が妖力弾を乱射し、猪々獄が槍を一振りするだけでゴミのよう口ボット兵は壊されていく。これなら他の妖怪に任せても大丈夫だな。

「猪々獄！ あの作戦、いくぜ！」

「そうか、ここは俺様たちに任せるブヒー！」

猪々獄が俺の背中の槍をつかむ。『槍と一緒にかつてびまじょう作戦』のお披露目だ。

「うぐおおおおお！？ お、おもいい！！」

「しっかりしろ、猪々獄！ それでも妖怪四天王か！」

「ふぬぐぐぐうー！」

なんとか俺を担ぎあげた猪々獄は、ゆっくりと助走を始める。ずんずんと地面にくつきり足跡をつけながら、スピードをあげていく。前に立ちふさがるロボット兵は猪々獄の突進を止めるすべなどなかつた。

「それじゃあ、俺は一足先に行つてくるぜ」

「いっくわおおおおおおー！ はああああー・ ふんぐつー・」

槍が猪々獄の手を離れた。その瞬間、周囲の光景が急速に後ろに飛び去っていく。これは風速で皮膚がはがれそうだ。俺はたまらず甲羅に隠れた。

甲羅の中には「ゴオオオ」という風の音しかしなくなる。そして、何かにブチあつたような衝突音。これがシールドだらうか。音はすぐには止んだ。おそらく、シールドを突破したのだ。槍のスピードはさつきより落ちた気がしたが、それでもまだ速い。そして、さっきのシールドにぶつかったときは比較にならないほどの音が甲羅の中に響き渡った。耳が痛い。

これは無事に着地できたということか。俺は外に顔をだそじした。だが、目の前にある壁が邪魔して頭が出せない。どうやら、頭から地面に激突してめり込んでしまったようである。しかも、俺がめり込んだ先は何だか金属質な構造物のようで、がつちりと穴に甲羅がはまり込み、抜け出すことができない。ど、どうすれば。

「なんだこれは！ ビニから入ってきた！？」

やべ、見つかった。

「妖怪の仕業でしょうか。まさか、シールドを突破して攻撃を与えてくるとは」

「口ケットの打ち上げは間もなく行われる。万が一に備えて警備を強化しろ」

「はつ！」

俺の姿は謎の物体として捉えられたらしく、特に警戒もなく、人間たちは立ち去っていた。攻撃に使用された武器としか思われなかつたようだ。まあ、まさかこんな壁にめり込んだ意味不明の物体を妖怪とは思わないか。

それにしても、ロケットってなんだ？ 人間たちは何をしようとしているのだ？

『全妖怪どもに告げる』

そのとき、大きな声が響き渡った。さっきのロボットのような無機質な声ではなく、肉声を拡声器で大きくしたような響きである。

『我ら人間は、穢れきつた地上を捨て、新天地に人間の文明を築く。これより、我らは月の世界へと旅立つ』

穢れきつた地上？ 月の世界？ 何のことだ。

『わらばだ！ 低俗なる妖怪どもよー』

そして、大地が揺れた。轟音とともに振動は大きく膨れ上がつていぐ。

『わらば、地球よ！ いざ行かん、月の世界へ！』

まさか、いや、そんな馬鹿な。人間は宇宙へ向かおうとしているのか！？

1-2話「宇宙に行つたカメ」

超展開すぎる。なんで宇宙。人間がそんな暴挙に出ることなど、予想できるはずがない。最初から宇宙に逃げることを計画していたのか。だから、あんな足止めにしかならないようなロボット兵しか前線に出さなかつたのだ。結局、戦にすらならないまま妖怪と人間の戦争は終わつた。

そして、俺は今、宇宙にいる。地球は本当に青かつた。もはや茫然とするしかない。

あの大地震はロケットの発射音だつた。思いのほか甲羅がめり込んでしまつた俺は、死に物狂いで脱出を試みた。だが、時すでに遅し。なんとか抜けだしたときはすでに、地上は遥か眼下に小さく遠ざかっていた。俺が槍に乗つて突き刺さつた場所は、都市を丸ごと一つ運び出す超巨大ロケットの一部だつたのだ。

今、自分がロケットのどの部分にいるのか見当がつかないが、外装の狭い隙間にもぐりこんで振り落とされないように必死に耐えている。大気はほとんどなくなつており、息苦しくてしかたがない。このまま宇宙空間に出たら窒息する。内部に行けば空氣があるのだろうが、入口がどこかわからぬ。普通に入口から入つても、壊して中に入つても、人間に見つかることは必至である。さすがにこの逃げ場のない状況で人間に捕まつたら俺でもおしまいだ。

ロケットの飛行速度はとんでもない。考える間もなく宇宙空間に出てしまつた。息ができない。苦しい。もうそろそろ死ぬんじゃないかという苦しさが1分続き、5分続き、10分続き……

(あれ？ 意外と長くもつてるな)

息苦しさはあれど、いつまで経つても死ぬ気配がない。まあ、俺

は妖怪なので生物の範疇を超えているのかもしれない。現に30分くらい経過したあたりから、呼吸の必要性を感じなくなつた。妖怪は息をしなくても死なないらしい。

さて、俺はこれからどうすればいいのだろう。ここでロケットをつかむ手を放せばスペースステブリの仲間入りだ。いや、地球の重力にひっぱられて落下するだろう。摩擦で燃え尽きて死ぬ。甲羅の中に入つていれば持ちこたえるかもしれないが、試す勇気はない。

したがつて、人間と一緒に月まで同行するしかない。というか、月なんて不毛の土地だろう。どうやって開拓する気だ。正気とは思えない。ここの人類はかなりSF色が強めだから、オーバーテクノロジーでなんとかするのかも知れないが、わざわざ地球を捨ててまで月に行くことになんの意味がある。確か、穢れがどうとか言つていたが、意味がわからない。俺たち妖怪からしてみれば、汚染物質を垂れ流す人間の方がよっぽど穢れの元凶じみている。

ロケットは地球の衛星軌道に乗ると、そこでいつたんエンジンを停止させた。確かにこの軌道上を動く運動を利用して燃料の節約をするんだつけ。すると、またもやロケットが大きく振動を始める。今度は何をする気だ。

しばらくしてわかつたが、ロケットの三分の一ほどの部分が本体から切り離されていた。この切り離された部分に俺も乗つていて。二つに分かれたロケットはどんどん離れていく。燃料をバージしたにしては規模が大きすぎる。もしかして、向こうの三分の一残つた方を宇宙ステーションにして、こっちの小さい方を先に月に送るということか。

そして、俺がへばりついロケットは月に到着した。小さい方とは言つても、その大きさは考えるのも馬鹿らしくなるほどだ。月に着くと、ロケットから無人探査ロボットが出てきた。俺はロボットに見つからないようにロケットから離れる。

(さて、いよいよ月に来てしまつたな)

ため息を吐こうとしたが、うまくいかない。そういえば、空気がなかつた。これでは言葉を話すこともできないな。話す相手がいないので困らないか。

人間の精神なら、たつた一人仲間もなく身一つで月に放りだされれば、動搖なんてものじやすまないだろう。しかし、妖怪の俺はなんだか気楽なものだつた。社会という群れの中でしか生きていけない人間との種族的な違いというものだろうか。

とりあえず、俺も月を歩いて調べることにした。月面歩行は楽しい。悪いが人類より先に月の地面に足跡をつけさせてもらう。強く踏み込んでジャンプすると5メートルくらい浮き上がる。ふんよふんよして歩きづらいことこの上ないが。甲羅を脱ぐともつと高く飛べる。甲羅自体もかなり軽くなっていた。それでも手を放すとボトンと落ちるが。

人間だったら宇宙服着てないとここは歩けないよな。紫外線、直に浴びちゃってるけど、妖怪だから大丈夫だよね。甲羅も脱いで脇に抱えているので、全裸状態である。昔、宇宙は空氣がないから内圧と外圧の差で体が爆発するって聞いたことがあるけど、あれは嘘らしい。

昔の人の伝承と言えば、月のウサギを思い出した。夜空に輝く月の模様は餅をつくウサギに見えるとか。地球上には妖怪がいたんだし、月にウサギがいるなんてファンタジーがあつてもいい気がする。よし、月のウサギを探してみよう。

『そこにはいるのはだれですか！？』

だが、探すまでもなく、俺は月のウサギ第一号に遭遇してしまったようだ。

13話「うれしくないウサ耳」

目の前に現れたそいつは、人間の男に近い形をしていた。最初は人間に見つかったのか慌てたが、どうやら人間ではないらしい。妖力を感じた。こいつは妖怪だ。

顔立ちもなんだかヨーロッパの人っぽい彫りの深い感じだ。アングロサクソン系というのか。都にいた人間たちは純日本風の顔立ちだったから新鮮だ。金髪碧眼のイケメンである。ただ、残念なことに頭頂部にウサギの耳らしきものがくっついていた。バニー・ガールの耳を想像していただきたい。あれがもつとリアルになつたみたいなの。ピクピク動いてるし、偽物ではなさそうである。

月のウサギがイケメンウサ耳男とは、非常にがっかりだ。腐女子なら喜ぶのだろうか。

『あなたは何者です！　その、どうして裸なのですか！？』

そういうえば、この月ウサギは服を着ていた。妖怪の森にいた連中はあんまり人型の者がいなかつたし、居ても人外っぽいのばっかりだつたので、服を着るという慣習がなかつた。せいぜい、腰布としてぼろきれを巻く程度である。俺は甲羅を脱ぐと完全な人型の妖怪だが、常にフルヌード生活を送っていた。月ウサギは、なんというか中世ヨーロッパの兵士のような格好である。こいつらには服を着る文化があるのだろう。

確かに見た目年頃の少女がすっぽんぽんのは、健常な感覚からすれば色々とまずいな。だが、顔を赤らめて視線をそらすイケメン月ウサギの様子がなんかむかついた。警戒は解かないが、直視はできず、頬を赤く染めながら初心な少年の甘酸っぱい思春期模様を体現したかのようなその表情。そんなサービスはいらねえんだよ。

『悪い悪い、服着るから』

俺は服、というか甲羅を着る。ナチュラルに念話で会話したが、空気がないのだからそれも当然か。念話は音を媒体にせず、相手の頭の中に直接言葉の概念を伝えることができる妖術なので、月ウサギ語がわからない俺でも意思疎通ができる。

『変わった服装ですね。それに、どうしてあなたには耳がないのですか?』

『俺はウサギの妖怪じゃないからな。もとから耳はない』

『?? 何を言つているのかわかりません。あなたの言葉の概念が理解できません』

『あー、俺は月の妖怪じゃないんだ。信じられないかもしないが、俺は地球から来た』

そう言つて、俺は空に見える地球を指差す。だが、月ウサギは苦笑いをするばかりだ。

『からかって、俺は空に見える地球を指差す。だが、月ウサギは苦て、おとぎ話ではあるまいし』

やはり、簡単には信じてくれないようだ。俺はどう説明しようかと頭を悩ませる。

『それよりも、ここに居ては危険ですよ。昨日、この付近でデスマロッソとの戦闘が行われました。もしかすると、狩り残しがいる

かもしだせん』

『ですふりつぐ？ なんだそれ？』

『はあ……デスフロッギを知らないなんて、どこの箱入りお嬢様ですか？ とにかく、ここは危険なので、村に避難して……』

そのとき、俺はわずかな殺氣を感じ取った。妖怪の殺氣は、妖力が微量にこめられるのでわかりやすい。どこから来ているのかと耳を澄ます。

『どうしました？』

『静かに！ 近くに何かいるぞ！』

月ウサギの方は気づいていないようだ。俺が警戒の声をかけた瞬間、それは現れた。なんと、地面を突き破って。

『な、なに！？ 下から！？』

何か巨大な影が地中から飛び出してきた。まったく、気づかなかつた。そうか、音で接近を探ろうとしていたが、そんなことをしても無駄だ。ここには音がない。

出てきたのは、でっかいガマガエルの妖怪だつた。緑と紫が混じつたマーブル模様の体皮、ぶつぶつと飛び出たイボとギョロ目、人間なんて一口で平らげてしまいそうな大きな口、間違いなく妖怪である。

『ガマアアアツ！』

『デスフロッグ……！』こは僕が注意を引きつけます。その隙にあなたは逃げてください！』

イケメン無理すんな。妖力から見て、実力はあちらの方が上手だ。ただ、月ウサギは両刃の西洋剣を装備していた。見たところ立派な剣である。武器があればなんとか対抗できるかもしない。しかし、それでもこちらに分が悪い闘いになるだろう。

妖怪ガマガエルは『デスフロッグ』という名前らしい。氣持ち悪い動きでぴょんぴょん飛びながらこちらに向かってくる。無音なのがシユールだ。

『来い、デスフロッグ！ 僕が相手だ！ はああっ！』

月ウサギが剣を構えて踏み出す。その動きは予想外に速かつた。一足で敵の側面に移動し、その太い足を切りつける。球状に丸まつた血がぽこぽこと飛び散った。

『ガツ、ガマアアアッ！？』

意外に強いな。動きのキレが違う。苦戦するかと思われた闘いは終始、月ウサギの優勢が続いていた。ただ、見た目通りデスフロッグは体力があるようだ。月ウサギの攻撃は、致命的なダメージを与えるに至らない。

『どうして逃げないのですか！？ 早く逃げて！』

はっ、俺は他人ごとのようにその場に突っ立つたまんまだった。俺も加勢した方がいいよな。せっかく出会った月ウサギに死なれては困る。色々聞きたいことがあるのだ。

『ガマツ！』

そこで、やられっぱなしだったデスフロッグに動きがあった。体表から得体のしれない氣味の悪い色をした粘液を分泌し始めたのだ。見るからに毒ですと主張している色あいだ。これには月ウサギも手が出せないのか、後ろに下がつて距離を取る。

しかし、デスフロッグはその隙を見逃さなかつた。大きな口をかぱりと開くと、そこから勢いよく長い舌が飛び出す。カメレオンのように伸びた舌は月ウサギの足にからみついた。

『しまつた！』

『ガマツ！』

月ウサギがデスフロッグの口の中に引きずり込まれようとしている。これはまずいな。俺はすぐさま伸びきつた舌に向けて妖力弾を撃ち出した。

『ガフアツ！？』

獲物を仕留めた気になつていたデスフロッグは、思わず攻撃を受けて動搖した。焦りで月ウサギをつかんでいた舌を放してしまつ。月ウサギはその一瞬で逃げ出しができたようだ。

しかし、デスフロッグは次に俺を標的に選んだらしい。こちらにビシビシ殺氣を放つてくる。口をかぱりと開いた。これはカメレオノ攻撃がくるな。俺は横に飛んでかわそうとした。

『あ、あれ？ 体がうまく動かせない』

しかし、ここが月だということをすっかり失念していた。体が軽

すげて地面を蹴っても浮遊感が邪魔して思うように移動できない。さつきの円ウサギの戦闘を見ていたせいで感覚がおかしくなつた。どうして月ウサギはあんなにシャープな動きができたんだ？

『やばっーっ！』

『ガマアアアツ！』

避けられなかつた。舌が俺の胴体に巻きつく。そのまま踏ん張ることもできず、デスマッチングの口へと運びこまれる。

『やめろー！』

円ウサギが叫ぶが、デスマッチングが言つことを聞くはずもない。俺はとつさに甲羅の中にもぐりこむ。まあ、これで食われてもなんとかなるだろ。

「ごくくんされた俺はデスマッチングの胃に収まつた。それじゃあ、カエル爆竹花火ごっこを始めるとしてよ。」

『妖力弾、回転掃射！』

俺はデスマッチングの胃の中で甲羅ローリング走法を行う。ついでに妖力弾のおまけつきだ。内側からの攻撃には、さすがに耐えられまい。

『グヒヒヒヒヒエツ！』

おなかがパン！

断末魔の悲鳴とともにデスマッチングは破裂したのであつた。

14話「夢のウサギワンド（棒読み）」

『うわ、べつとべどだなこれ』

俺はデスマッチングの胃袋から生還を果たすことができた。ぐちょぐちょの粘液と飛び散った臓物で甲羅が汚れてしまつたが。

『……』

さて、俺がふと視線をやると、月ウサギが剣を振りかぶった体勢のまま固まつっていた。信じられない物でも見たかのような表情だ。

『おーい、大丈夫かー？』

『はっ！？ それはこちらのセリフです！ あなたは無事なのですか！？』

『見ての通りだ』

デスマッチングの妖力は俺の足元にも及ばない。妖怪の森にいた仲間たちを基準すれば、下の上くらいの強さだ。せいぜい毒が気持ち悪いところくらいしか厄介な点はなかつた。

そんな俺の様子を見て、月ウサギは呆れている。

『本当にあなたが何者なのか気になります』

『俺の名前は葉裏だ。さつきも言ったが地球の妖怪だ』

『月ウサギさん、ですか。僕はロバートと言います。あなたには聞きたいことがたくさんあるのですが……とりあえず、移動しますよ。ついて来てください。村に案内します』

村があるらしい。妖怪の村、というのはなんかひつかかる言い方だ。村とは人間が作るものである。妖怪は群れをつくることはあるが、その住処はせいぜい“巣”といったところだ。まあ、今のところ友好的に受け入れてくれているようなので、おとなしくついて行くことにしよう。

* * *

月ウサギの村は地下にあった。月のクレーターの中にカモフラージュした巣穴の入り口がある。その中に入つて行くと、そこには別世界が広がっていた。

地下の空間はかなりの広さがある。光源は火ではなく、青白く光る石だった。驚いたことに植物が生えている。水もないのにどうやつて生きているのかと思ったが、どうやらこの植物、ただの草ではない。妖力を感じた。これも妖怪の一種なのか。もう何でもありだな。

村には結構な数の月ウサギの姿があった。大人も子どもも男も女も、みんな頭にウサ耳が生えている。これは妖怪っていうか宇宙人って言った方がしつくりくるな。地球の妖怪と違つて、実に人間らしい暮らしをしているのがわかる。ここに生息している植物も、月ウサギたちが管理して育てているのだろう。

村に入ってきた俺を、月ウサギたちは興味深そうに見つめてくる。不思議と警戒はしていない。もつと排他的な雰囲気があると思つたのだが、よそ者である俺のことを拒絶する様子はない。それよりも、好奇心の方がまさつているといった感じだろか。

ロバートは話しかけてくる月ウサギたちをやんわりとあしらいつ

つ、穴の奥へと進んでいく。奥にはいくつもの横穴があつた。その中の一つに入る。

『ロバートです。巡回からもどりました』

『入れ

横穴のさらに奥に進むと、先がすだれのようなもので仕切つてある。ドアの代わりみたいなもんだろう。ロバートに続いて俺も奥へと進む。そこには、数人の月ウサギがいた。年配の男ばかりである。無論、こいつらにもウサ耳がある。誰得。

『どうした、何か異常があつたのか？……その者は誰だ？』

ウサ耳おっちゃんの一人がさつそく俺の方を見て疑問をぶつけてきた。さて、どうやって話をつけようか。

『彼女は口ウリ。巡回中に出会いました。その直後、デスマッチングの襲撃を受けたのですが、彼女の協力でデスマッチングを倒すことができました』

『なんと。そうであつたか。ロバート一人の力では、デスマッチングを倒すことはできなかつただろう。礼を言つ』

『いや、まあ、どういたしまして』

『して、そなたはビニの村の者だ？この村を訪ねてここまで來たのか？』

『……ちょっと、信じられないかもしけないが、俺の話を聞いて

くれ

それから、俺はここに来た経緯を話した。俺は地球にいたこと。そこで人間と戦つたこと。人間は月へ向かうため、ロケットに乗つて宇宙へ出たこと。そして、俺はそのロケットにしがみついて不本意ながらここへ来てしまつたこと。

すべてを話し終えた俺に、月ウサギたちが向けた目は怪訝なものだつた。

『にわかには信じられん話だ。我々にとつてアースは死後の魂が向かう天上の地。仮にそなたがアースからやつて來たとなれば、そなたは天上に住まう存在といつことになる』

『地球はそんなたいしたところじゃねえよ。まあ、こことはだいぶ違うが、俺はあんたらと同じ妖怪だ』

『わからぬ。ヨウカイとはなんだ？ そなたは玉兎なのか、それとも我らとは異なる存在だといつのか』

月ウサギの正式名称は『玉兎』といつらじこ。しかし、なんで妖怪という概念が伝わらないんだ？ 俺もこいつらも肉体に妖力が宿つてゐる。だつたら、同じ妖怪なんぢやないのか。

『妖怪つてのは、俺たちみたいな奴らのことを指す総称だ。お前たちは玉兎つて言つんだろ？ それも妖怪の一種つてわけ。あと、デスフロッグとか言う奴もな』

『……我らとデスフロッグをいつしょくたにされるとは。なんとおかしな物の考え方をする。やはり、我らには理解できん』

なんか話がかみ合わないな。なんで、こんな簡単なことが伝わらない。

いや、そういえば、『妖怪』って言葉はなぜあるんだ。それって、『人間』と対になる意味があるから成立しているんじゃないか。対立する存在があつて、それぞれにそれを表す名前がつけられただけにすぎない。人間がいなければ、そもそも妖怪なんて言葉は生まれなかつたはずだ。

『えっと、ここには玉兎とデスフロッグと、それから他にどんな奴らがいるんだ？ 人間はいるのか？』

『この地には、我々玉兎とその宿敵デスフロッグしかない。二ングンという者も聞いたことがない』

なるほど、月には妖怪ウサギと妖怪力エルしかいないのか。人間が生活できる環境じゃないからな。だったら、玉兎たちが自分を妖怪と定義しない理由にも納得がいく。しかし、一種類の妖怪しかいないなんて、地球と比べるとなんとも多様性がない場所だな。

『すまないが、そなたの話を信じることができん。アースからこの地へ渡る船を作るなど、それこそ神のなせる業だ。そなたは自分がアースから来た存在だと言うが、耳を失った玉兎にしか見えない』

『ウサ耳なんて最初から生えてねーって』

俺は根気強く説明を続けたが、やっぱり信じてもらえなかつた。別に俺は自分がどんな存在と認識されようとかまわないし、玉兎の世界観にけちをつけたる氣もないのだが、一つ気にかかることがあるのだ。それは、人間についてのことである。

人間は貪欲に環境を食いつぶして成長していく種族である。前世

に俺がいた世界では、侵略する側とされる側、その争いの結果が悲惨なものに終わることは歴史が証明している。人間が月の先住民に敬意を払つて接するというのは考えにくいと思つてしまふのが正直な感想だ。同じ妖怪として、玉兎が人間にやられるのを黙止するのは気が引ける。

けど、信じてもらえないのならしかたがない。一応、警告はしたのだ。後は玉兎たちの判断にゆだねよつ。

1-5話「服を着よ!」

必死に地球のことにについて喋りまくったせいだらうか、俺はおっちゃんウサギどもから憐みのこもつた視線を集めていた。人を頭のかわいそうな子ども扱いしやがつて。しかも、身寄りのない孤児と思われ、この村で面倒を見てもらうことになつた。

お世話になるのは、ロバートのウサギさん一家である。最初はさすがに厚かましいと思つたので断つたのだが、ロバートはぜひ家に来てほしいと言つてきた。まあ、力には自信があるので、俺にもやれる仕事はあるだらうし、一方的に養われるつもりはない。手伝えることは手伝おう。たくさんある横穴の一つ一つが各家庭の住まいになつてゐるようで、さつそくお家にお邪魔した。ロバートの家は、父と姉との三人暮らしである。母親は随分前にデスマロッグに食われたらしい。なむ。

『姉さん、ただいま』

『おかえりなさい、ロバート。あら? そっちの女の子はだれ?』

家で迎えてくれたのは、ロバートの姉のモニカといつ玉兎だった。ようやくまともなウサ耳女子に会えた。田の保養とは、まさにこのことだわつ。

『Iの子はヨウコ。わけあって、今日からつちで預かることになつたんだ』

『ええ! ? ほんとこー?』

『エーテル、アツコです。地球の妖怪です』

モニカはやつてこた家事を放りだしてこちらに走ってきていた。なんだか目をキラキラさせてふるふる震えてくる。そして、何を思ったのか俺にいきなり抱きついてきた。

『か、かわいいー！』

すりすりと頬すりしていく。初対面の相手にこの過激なスキンシップ、気持ち悪い奴だ。まあ、美少女なので許す。モニカの胸がぷよぶよ血口主張しているので、とりあえず揉む。

『おっぱいでかいな、モニカ』

『かわいいー！』

『ね、姉さん……』

快く迎え入れてくれたようで何よりだ。互いの血口紹介を終えた後も、モニカは俺に抱きついて放れない。暑苦しい。俺は強引にモニカを引き剥がす。

『やんつ！ もう少しだけハグをー！』

『やかましい。離れる』

『アーヴィー。ところでアツコちゃんのその格好……かわいいんだけど、少し変じやない？』

それについては同意せざるを得ない。この甲羅スタイルは紛れも

なく変だ。だが、そう正面切って直球の言葉をぶつけられると、反論できなくてイラッとする。むかついたので、甲羅を脱ぎ捨ててすっぽんぽんになつてやつた。ロバートが慌てて後ろを向く。

『いーらいー、ミウリちゃん、年頃の女の子が簡単に肌をさらさらや
いけません！ 待つてて、服を持つてくれるから』

モニカは服を用意してくれた。植物の纖維で編まれたワンピースだ。そういうえば、まともな服を着るのはこれが初めてである。ワンピースはごわごわしていて着心地はあまりよくない。しかし、妖怪が服を作るというのは、なかなかに斬新である。妖怪はおしなべて物作りが下手な奴らばかりだと思っていたが、そうでもないらしい。

『私のお下がりだけど、大きさもちょっとビコいみたいね。取つて
おいてよかつたわ』

『スカートよりズボンの方がいいんだけど』

「これだと股部分の布が邪魔で甲羅を装着できない。ズボンなら邪魔にならないのだが。

『そ、うう？ でも、お父さんやロバートのズボンはサイズが合わないだろ？』……後で私が作つてあげるわ』

『よひじべ。あ、動きやすこように短パンにしどこ』

我ながら思つが図々しい。

モニカたちと話していると、家にだれかが入つて來た。渋い、いぶし銀のおじさまウサギだつた。なんかバーボン、つて感じの。ロバートとモニカの父親のようだ。名前はジョージ。俺がこの一家に

世話になるということをロバートが話したが、少しも動じた様子はなかつた。一言二言、言葉を交わしただけで後は何も言わない。別に嫌われているようではないので、単に寡黙な性格なのだろう。こうして、俺は月のウサギこと玉兔のとある一家に同居させてもらうことになつたのであつた。

* * *

それから数日が経ち、俺も玉兔たちの村に慣れてきた。玉兔は人間っぽい暮らしをしているが、やはり妖怪に近い種族である。食事は日に一回、地下の畠で取れた穀物からできるモチのような物を食べる。俺も御馳走になつたが、結構うまかつた。妖力が豊富に含まれており、これ一個で腹がふくれる。

妖怪に必要なエネルギーは妖力である。妖力は自然界に満ちており、黙つても体に取り込むことができる。だが、それだけでは足りない。もっと効率よく大量の力を手に入れる必要がある。そのため、妖怪にも“飢餓感”が存在する。空腹が過ぎれば存在が消滅してしまう。

一番手っ取り早い方法は、力ある他者を捕食することだ。新鮮な生命ならなおよい。俺はそれしか妖力を得る方法を知らなかつたのだが、森の妖怪たちは別の方法で飢えをしのいでいる者もいた。捕食ができない弱い妖怪は、人間をおどかしてそこに生まれた恐怖の感情を食う。妖力は闇の力である。恐れや怒り、憎しみといった負の感情が生まれると、そこに集まりやすい性質があるので。ただ、この方法で集められる妖力は少ない。

そうそう、ところで俺は物を食べなくても死なない体になつていた。六島苞と融合していた影響か、俺は光合成で妖力を生産できるのである。日向ぼっこで甲羅干しすると、お腹が膨れる。俺の甲羅は光妖力合成機能を持っていた。植物の妖怪の特徴なのか、捕食をしなくとも生きていける。

玉兎たちは、道具作りが得意な妖怪だつた。植物の纖維やデスフロッグの皮を用いて衣服や防具を作り、驚くべきことに熱を使わずに金属を加工する妖術を持っていた。どうやって作るのか気になつたが、工房には入れてもらえなかつたので、方法はわからなかつた。ジョージはこの村一番の武具職人らしく、『金属を加工する程度の能力』を持つてるので材料さえあれば、どんな剣でも作り出せるといつ。

『父さんは一流の剣職人だし、剣術の達人でもあるんだ。僕の目標だよ』

『ふーん』

俺とロバートは巣穴の外、月面に来ていた。穴倉の中にずっと引きこもつてゐるとなんだか元気がなくなる。ひなたぼっこは気持ちがいい。六島苞に寄生されていた時代の名残かもしれない。光合成で元気ハツラツ。

俺は村の自警団に臨時入団している。最初は玉兎の大人たちに見た目でみくびられていたが、妖力弾をぶつ放して見せると態度が変わつた。と言つても、デスマロッグの襲撃は最近あつたばかりなので、今はそこまで忙しい時期ではないようだ。半年に一回くらいのペースで襲撃があるらしい。一応、周辺のパトロールの任務を与えられたので、ロバートと一緒に村近辺を歩いて回つている。

『そうだ、ヨウリ。よかつたら、僕と手合わせしてくれないかな？』

ロバートは強くなりたいといつ向上心が人一倍あるようだ。暇を見つけては剣の練習をしているところを見かける。まあ、暇なので少し付き合つてやるか。

16話「裏黙なる職人ダンティズム」

試合の勝負はあっけなくついた。俺の負けだ。俺はロバートへ向けて妖力弾を発射したが、それをことごとくかわされ、接近されてしまった。首に剣を突きつけられ、ジ・エンド。まあ、甲羅に引きこもれば俺の勝ちだつただろうが、そんな大人げないことはしない。

『なあ、前から気になつてたんだが、なんでお前らはそんなに速く動けるんだ?』

ずっと疑問だった。宇宙空間で身動きすることは、水の中を泳ぐに等しいわずらしさがある。俺は甲羅を脱いでウエイトダウンしてもロバートのスピードに追い付けなかつた。重力が少ないと浮力がつく。すると、踏み込み際に地面から離れる時間が長くなる。宙に浮いている間、自分の体を制動することができない。速く動こうとして強く踏み込むと、そのまま進行方向に吹っ飛んでしまうのだ。かと言つて弱い踏み込みでは、コントロールはできても緩慢な動きしかすることができない。

その点、ロバートは違つた。まるで、地上を動いているかのようなスムーズな動きで月面を駆ける。いや、それ以上だ。浮力すら利用して空中を泳ぐように移動することができる。

『これは玉兎に伝わる体術だよ。』『兎跳』、『兎狩』、『白兎』といふ三つの技を使いこなす術さ。ヨウリは『白兎』の技に関しては、すばらしい才能を持っているけど、それ以外があんまり得意じやないみたいだね』

『そんな技を使った覚えはないけど。もしかして、妖力弾のこと

か?』

玉兎は妖力弾のことを『白兎』と呼ぶようだ。玉兎の戦士の中でも、俺ほどの弾幕を張れる奴はない。言っちゃ悪いが、持つている妖力量の桁が違うからな。

『『白兎』は三技の中でも最も使うことが難しい技とされているんだ。強い“フォース”を持つ者しか使うことのできないからね。僕は才能がないからまだ使えないんだ』

あと、玉兎は妖力のことをフォースと呼んでいるようだ。スター ウォーズか。

『僕が速く動ける理由は『兔跳』を使っているからだよ。これは足の裏にフォースで足場を作つて、それを蹴ることによって自在に動けるようになる移動術だ』

『妖力の足場? そんなん不可能だろ』

どれだけ緻密なコントロールが必要になるか、想像もつかない。下手をすれば妖力弾で自分を撃ち抜くことになる。

『僕も修行を始めたころはできっこないと思つたけど、なんとか形だけは使えるようになったよ。まあ、全然未熟だけどね……』

ロバートは自虐的なため息をつく。くそ、そんな技があるなら俺も使えるようになりたい。

『もう一つ、『兎狩』って言つてたけど、どんな技なんだ?』

『『兎狩』は攻撃の技だよ。拳にフォースを集中させて、攻撃が当たる瞬間に爆発させ、その勢いを乗せるようにして直接相手にフォースを叩きこむ技だ。つまくいけば、相手の肉体の奥深くにダメージを貫通させることができる。達人になると、剣に『兎狩』の効果を付与させ、強力な斬撃を常に放つことができるんだ。僕はまだ練習中だけど……』

ロバートはため息をついて顔を手で覆う。なんか、じつは顔を見るとますます自分も玉兎三技を使いたくなってきた。

『ちひ、このまま負けっぱなしなのは續々とさわるからな。俺にもその体術を教えてくれ』

『え？ あ、うん。僕でよかつたら教えてあげるけど……』

なんで、そこで顔を赤くするんだよ。

* * *

それから数日、俺はロバートから玉兎三技の手ほどきを受けた。
『白兎』に関しては教えてもらつ必要がないので、専ら『兔跳』と『兎狩』についてである。全然、できない。まだまだ練習がいるようだ。

今は家族だらんの時間、食事タイムである。ロバート一家と俺は同じ食卓を囲んで、一日一個のウサギモチをはむはむ食べる。

『ハウツカちゃん、前に言つてたズボンが完成したの。さっそく着てみてー。』

モニカお手製の短パンを貰つた。俺の今の服装は、『じね』わした

ベストに、『わごわした短パン、そして蔓で編まれたサンダルだ。見た目はともかく、動きやすくてよい。モニカには感謝した。お礼に抱きつかせるとせがまれたので、おとなしく抱かれておいた。

『……』

相変わらず、一家の大黒柱であるジョージは寡黙だ。俺はまだ一、三回くらいしか話をしたことがない。『ミコカ乙』。

ん？ なんだか、ジョージが俺の甲羅をじっと見てている。今は服を着替えたところだったので、脱ぎっぱなしにして床に転がしていた。

『Iのアーマーは

おお、ジョージの声を久しぶりに聞いたな。俺の甲羅に興味があるようだ。

『見たことのない素材でできている。さわってもいいか？』

『いいよ』

ジョージは甲羅を丁寧に観察し始めた。膝の上において、ぐるぐる回しながら色々な方向から見てくる。

『つ！ 重いな』

気合を入れて持ち上げると自分の手の高さに合わせて観察する。地上だと並みの妖怪では持ち上げられなかつた甲羅だが、月の重力なら玉兎でも抱えられるようだ。だが、それでもきついのか、すぐに地面に下ろして息をついている。

『「」のアーマーはだれが作つた物なんだ?』

『あー……さあな。拾い物だからな』

本当のことと言つても信じてもらえないそつなので、適当に『いまかす。ジョージはそれつきり口を閉ざしたが、視線はチラチラと甲羅の方ばかり見ていて。わかりやすい。』

『俺の甲羅がそんなに気になるか?』

『……職業柄、つい、な。こんな金属は初めて見る』

ジョージは武具職人だつた。『金属を加工する程度の能力』といふ力があれば、まさに天職だらう。自分の知らない素材に興味を持つことはわからないでもない。

あれ、そういえば、さつきジョージはなんて言つた? 「こんな金属は初めて見る」つて言わなかつたか?

『それは、金属なのか?』

『ああ、俺が能力を使えば、金属とそうでない物を見分けることもできる。これは、色々と混ざつているが、金属の性質も持つている』

いつの間に俺の甲羅は金属化したんだ。確かにピカピカ光沢が輝いてるけどさ。だが、そこで俺は重大な事実に気がついた。

『と、いうことは、もしかして「」の甲羅を加工することができる?』

ジョージの能力があれば、この甲羅の形を変えられる。つまり、このかつこ悪いフォルムをどうにかすることができる！　俺はかつこよくなれる！

『……やつてみないと、わからないが』

『本当にですか！？　お願ひします！　この通り！』

俺は恥も外聞もなく土下座した。この甲羅がかっこよくなるのなら、どんなことだってする。悪魔に魂を売つてもいい。俺の態度が急変としたのを見て、この場にいた玉兎ファミリーは唖然としていた。

『しかし、このアーマーの形は確かに無骨だが、防具としての機能性は悪くない。改善する点などない気がするが』

『かつこよくなして貰う！　とにかく、かつこよくな！』

ジョージは俺の要望に驚いていたようだ。しかし、すぐには相好を崩し、ニヒルな笑顔を浮かべた。

『わかった。やつてみよ』

『ありがとハビサモスー。』

ジョージさん、まじданティヤー。惚れたぜ。

17話「戦いの狼煙」

それから俺は毎日、ジョージの工房へ足を運んだ。毎日一回も行つた。衝動を抑えきれず、三回行つた日もあつた。俺の甲羅の加工はとても難しそうだ。ジョージはまるで生き物と接しているようだと言つた。

『このアーマーは生きている。そして、これは自身の形が変わることを望んでいるように思う。もし、このアーマーが俺の能力を拒絶していたなら、加工は不可能だつた』

俺と甲羅は離れていても心は一つ。頑張つて素敵なメタモルフォーゼをとげてくれ。ジョージは職人の遊び心というやつか、製作途中の甲羅を見せてくれなかつた。完成したら見せるといふ。ジョージの野郎、俺の心をもてあそびやがつて。だが、その焦らし、嫌いではない。

『そうだ、アーマーの中を点検していたら、こんな物が出てきたのだが』

しなびた激辛蜜柑だつた。捨てておいてくれと頼んでおいた。

『ほらー、また集中が途切れるよー、もつと体内のフォースを感じてー。』

そして、俺は田中のほとんどの時間を玉兔二技の鍛錬にあてていた。講師はロバートである。ロバートは、俺がジョージの工房のことを気にしているそぶりをみせると、なぜかすぐ怒る。口づるさこ

ガキだ、まったく。

『全然、フォースの循環ができないよ。それじゃ、いつまで経つても技は使えないよ』

玉兎はどうしてあんなに少ない妖力で三技という強力な術が使えるのか、不思議だった。その答えは妖力の運用のしかたにあるらしい。玉兎は少ない妖力を体の中で循環させることができる。その回転を徐々に速くしていくことで、体内にエンジンを作り出すのだ。そして、その回転力を極限まで高めたところで体外にバーストすることによって、爆発的なエネルギーを得ることができた。

理屈はわかった。だが、実践はできない。俺にとって、妖力とは体の中に沈澱して静かにたゆたうモノでしかない。妖力弾はそこからすぐつた水を投げつけるような感覚で行う。妖力を回転させることはなんとかできるようになつたが、ただくるくる回るだけだ。濁つた汚い水槽の中の水をかき回すかの如くである。そこに爆発的なエネルギーが生まれる余地などない。むしろ、体の中を駆けまわる妖力の渦の影響で気分が悪くなるだけだった。

『おえつ！』

『ちよ、ヨウリ、大丈夫！？』

早くも諦めかけている俺。妖力の循環とか、もしかして玉兎の固有技能なんじゃないか？ できる気がしない。

『今日はこのくらいにしておこうか』

ロバートが俺の背中を撫でながら、帰宅を提案した。疲れた。今日は帰つて寝よう。明日から頑張ろう、うん。

『おおーい！　たすけてくれーっ！』

そのとき、どこからか助けを求める声が聞こえた。助けを求める声って、なんだかトラウマなんだよな。見れば、クレーターの丘に向こうから、一匹の玉兔がこちらに走ってきていた。

『なにがあったんだ？』

必死の形相で走って来た男は、衣服はボロボロで体も傷だらけだった。俺とロバートは警戒を強める。

『た、たすけてくれ！　俺たちの村が、村がああ…』

『落ちついてください。どうしたんですか？』

『俺は隣村のセルニエスから来た……はあはあ！　セルニエスがデスマッチングに襲われた！』

『この時期に立て続けに襲撃が起るなんて。それで、被害状況は？』

『全滅だ！　村が全部、デスマッチングにのまれちました！』

『なんですか……！？　そんな馬鹿な！？』

これまでの平穏な日常は音を立てて崩れ去った。事態は急激に転換していく。

* * *

隣村から来たという玉兎の話によれば、現れたデスフロッグの数は100匹以上にのぼるという。この数は異常だった。これまでの半年に一回の襲撃では、多くても20匹程度しか現れていない。100匹もの大群で押し寄せた前例などなかつた。

村の長老たちは集まつて会議を行つてゐる。隣村が制圧されてしまつた。もはやデスフロッグたちがこの村へやつてくることは時間の問題である。玉兎の戦士たちは戦いの準備を始めた。ロバートとジョージは戦士として戦つようだ。

『アウリはモニカと安全な場所にいて。デスフロッグは僕たちが食い止めるから』

『いやいや、それには及ばないわ』

『アウリ?』

俺も一角の妖怪。外で戦があつてゐるといつのこと、穴倉の中でぬくぬくと守られてゐる気はない。

『だめだ! 本当に危険なんだよ! -?』

『お前は俺の強さを知つてるだろ? 僕はデスフロッグなんぞに負けはしない』

『で、でも……! 父さんからも何か言つてよ! -』

ジョージは無言だ。じつと田を閉じてゐる。寝てるのかと思つたら、おもむろに動きだした。家の奥から何かを持つてくる。その緑色の輝きを見て、俺の胸が高鳴る。

『あずかつていた物を返そつ』

それは、俺の甲羅だった。いびつな流線形の形は整えられ、ハーフム型六角形の直角的でメカメカしいデザインに。なんとなく原形は残っているが、甲羅はその姿を一新させていた。

『二、これは……』

俺は高鳴る鼓動を押さえて、甲羅を装着する。従来の甲羅は体を中心には腹側と背中側の甲羅が巻きつくなつの構造になっていた。それが、重心をほとんど背中側に移し、タンクを背負っているような感覚に変わっている。腹側の側面部分は俺のボディラインに沿うようにすつきりと細くなり脚を出す一つの穴も距離が調節され、ガニ股になることもなくなつた。そして、一番変わった点は腹側パーツの構造だ。なんと背中側のパーツのスペースにスライドして収納できるようになつていいのだ。装着するときはパーツを引き出し、さらにそこから観音開きのように蓋が開き、その間に体を收めるようにして着る。これはもはや甲羅ではない。ジョージの言うとおり、^{アーマー}“鎧”だった。

『す、すげえ……』

『いい物を見せてもらつた。感謝している。気に入つてもらえたか?』

『すげええええ!――「おおおおおおおお!――!』

『よ、ヨウリ!――なんで泣いてるの!――落ちついて!』

俺はうれしく泣きした。まさかここまで作品を仕上げてくれるとは。感無量だった。確かにまだなんか変ではある。しかし、それでもこれは進化といつていよい進歩だ。あのダサイ甲羅がギリギリかつこいいと言えるまでの変化をとげた。これは奇跡だ。

『おおおおおー！ これなら負ける気がしねえ！ デスフロッグなんてーーー』

俺のコマツは最高潮に達していた。

1-8話「と、思ったけどダメでした」

『アウリ、村の外から来たお前を、この村の戦いに巻き込んでしまったことは申し訳ないと思つている』

『氣にすんな。一食一飯の恩義つてやつだ』

ジヨージはいつもまじで辛氣臭そうな顔をしている。

『これは餞別だ』

渡された物は短剣だった。ナイフと言うには少し刃渡りが長く、剣と言うには短い。鞘から抜くと、刀身は漆黒色に鈍く光っていた。

『地下深くで採れたルナタイトを使った。手入れをせずとも、錆びず、刃こぼれはない』

剣なんて使つたことがないが、もらえるものはありがたくもらいつておこう。俺は腰のベルトに短剣の鞘を通してさげる。

『あー！ 父さんずるー！ ほ、僕もあとで何か贈るからねー！』

『まあ、ロバートたらヤキモチ焼いやつて』

ロバートとモニカが何か言つてゐる。なにかにつけて、ロバートは父親に対抗意識を燃やしているな。めんどくさい奴だ。

『長老からの通達だ！ 村の者は全員、穴の外に集まれー！』

遠くでだれかが叫んでいた。集会でもやるのだろうか。俺たちも他の玉兎たちの流れに乗つて、穴の外へと出てきた。そして、全員が集まつたことを確認すると、年老いた玉兎が前に出て演説を始めた。

『皆の者、知つての通り、この村に我らが宿敵デスフロッグの群れが来襲しようとしている。これはこの村創始以来の未曾有の危機。そこで長老衆は決断をした。デスフロッグを罠にかける』

話を聞いていた玉兎たちは騒ぎ始める。デスフロッグの群れを押しとどめるよつた罠をいかにして仕掛けるのか。

『テスフロッグが村を襲わんとしたそのとき、『鬼爆石』を起動させるのじや』

ざわめきは急速に大きくなつていった。絶望するかのよつた悲鳴を上げ始める者まで出始める。

『口バート、『鬼爆石』ってなんだ?』

『村の長老が代々封印している石だよ。そこには膨大なフォースが蓄えられており、封印を解いたが最後、地を覆すような爆発を起こすとか』

『それって、村がふつとばね?』

村を犠牲にする覚悟があるといつとか。石は村の地下深くに固定されており、持ち出すことはできない。敵が村に殺到したそのときを狙つて、村ごと爆破し、一網打尽にするという計画のよつだ。

デスフロッグは地下に潜つて移動する。地下の住民をすべて避難させ、からつぽになつた村にデスフロッグを誘導できればかなり有利に戦いを進められる。

しかし、当然反対する者が大勢いた。自分たちが住んでいた村がなくなつてしまふのだ。それに、封印を解くためには長老が『兎爆石』の傍にいないといけないという。つまり、長老の命を犠牲にする作戦なのだ。

『静まれ、皆の者。100体ものデスフロッグの群れに、我らが抗う手段はもうこれしか残つておらん。おそらく、この罠が成功したとしても、すべてのデスフロッグを殺すことはできない。生き残つた奴らは地上に這い出し、我らに牙をむくだらう。戦士たちは戦いに備えよ。必ず、勝つのだ！』

俺が全力を出せば、デスフロッグを100匹倒すことができるだろうか。それは可能だらう。しかし、地下から襲い来る敵から村を守りとおせるかと言えば、それはできそうにない。俺は地下の敵の相手ができるスキルなんて持つていないので。戦士たちを全員守りきることもできないだらう。俺がここで出しゃばつたところで、長老を説得なんてできない。あれは覚悟を決めた顔だつた。彼らにとつて、デスフロッグとはそれだけの存在なのだ。

俺が妖怪だからだらうか、それとも玉兎ではないからだらうか。薄情だと思わぬくもないが、声高に自分の主張を垂れ流す気もない。長老の決断は、最善手だ。

『やれやれ』

俺は肩をすくめた。

* * *

地下の穴倉から最低限必要な物資を外に運び出す。クレーター丘の上に長老を除く玉兔の全員が避難し終わった。いつデスマロッグが来てもおかしくない状況だ。悠長に穴の中で構えていることはできない。

『大変なことになっちゃったね』

『まーな

ロバートは無理に明るい雰囲気を保とうとしているように見えた。いつものひざったさがない。

『はいこれ、マウリにあげる』

ロバートは何か差し出してきた。さつきの約束を律儀に守ったのか、プレゼントのようである。それは帽子だった。ベレー帽に似ている。漫画家がかぶっているというより、軍人の物っぽい。

『なんだこれ?』

『それは戦いで耳を失くした戦士のための帽子なんだ。デスマロッグの毒にやられて切り落とさないといけなくなつた戦士はたくさんいる。そんな戦士は最前線で戦つた勇氣をたたえられて、この帽子を贈られるんだ』

『そんな名譽ある帽子、恐れ多くてかぶれねえよ』

俺に似合いそうにないしな。でも、ロバートは俺にウサ耳がないことを気にかけて、この帽子をくれたのだろうか。変な気、遣いや

がつて。

『ま、気が向いたらそのうちかぶる』

『そひ』

ロバートは苦笑していた。俺は甲羅の中に帽子をしまつ。せつかくの贈り物だ。大事にしないとな。

* * *

その日の夜、大きな地震が起こつた。奴らが来たかと立ち上がつたとき、さつき起こつた地震がちつぽけに思えるほどの揺れが大地に広がつた。そして、玉兔の巣穴があつた場所に天を突くような白い炎が立ち上つた。

暗い空を染め上げる炎、それは妖力で形作られた幻だ。だが、その威力は本物である。『兎爆石』が起動したのだ。それはすなわち、デスマッチングの襲撃を意味する。

丘の上で、出撃の時を待つ玉兔の戦士たち。静まり返った戦場に、デスマッチングが現れた。ぼこぼこと土が盛り上がり、醜悪な力エルが姿を見せる。

『今だ！ かかれーっ！』

突撃の合図とともに、戦士たちが駆け出した。俺も一緒に走りだすが、戦士たちの速いこと速いこと。ほとんどの戦士が『兎跳』を使っているのだ。俺はかなり出遅れてしまった。

『ガ、ガマアア……！』

地上に現れたデスマッチングは手負いだつた。表皮が焼けただれ、苦しそうにうめいている。自慢の毒をまき散らす余裕さえないようだ。自爆作戦は成功していた。犠牲は無駄ではなかつたのだ。

これは俺が手を出すまでもないんじやないか。戦士たちは獅子奮迅のはたらきで次々に敵を屠っていく。と、そこで俺のすぐ横の土が盛り上がりを見せた。

『おつと

顔を出す前に妖力弾を連射する。しばらく苦しそうにうごめいていたが、すぐにおとなしくなつた。悪いね、同じ妖怪として多少は

心が痛むけど、妖怪の世界つて強者が勝者だから。

敵はいないかと周囲を見渡すと、ロバートとジョージの姿が見えた。二人とも近くで戦っている。その傍へと向かった。

『エウリー？ 問題はない！？』

『ないよー』

ロバートの実力でも、さすがに瀕死のデスフロッグには引けを取らなかつた。的確に急所を狙つて仕留めていく。

『……ふんっ！』

その横で、ジョージは無言で剣を振るつていた。剣先がかするよう、デスフロッグの鼻先に当たる。はずしたのかと思いきや、ぱつくりとデスフロッグの頭が真ん中から二等分されていた。何をしたんだ？

『あれが達人の『兎狩』だよ。父さんは剣の扱いも一流だからね』

あれはやばいな。まるで不可視の刃だ。甲羅でなら防げるが、生身の部分に当たつたら俺でも無事で済みそうにない。玉兎と俺との妖力は雲泥の差だつていうのに、ここまでの齋威になるとは。玉兎三技パネエ。

『なんだよ、玉兎も十分強いじゃん。デスフロッグとか余裕じゃね？』

『それでもないよ。デスフロッグの毒は強力だからね、僕らは近接戦闘を主体としているから毒に侵される危険が常に伴う。それに

奴らは地下を移動するから村を狙われないように色々考えないといけないし』

『デスフロッグの毒は俺にとつてさほど怖くない。これは妖力に起因する毒性である。デスフロッグよりも圧倒的に保有妖力が高い俺なら、体内で簡単に中和できる。だが、玉兎はそうはいかないのでろう。ちょっと触るだけでも呪いのように体を蝕んでいく。なるほど、確かに厄介だ。

『でも、今回の戦いは楽勝なんじゃないか？ もう地面から出てくる数も相当減ったみたいだし』

敵の勢いはもうほとんどなかつた。妖力探知で地下を探つてみても、動きのある気配は……あれ？ なんだ、この馬鹿でかい妖力反応は？

そして、もこもこと盛り上がる地面。今までの規模とは比較にならない土が舞い上がり、紫色の巨大な物体が踊りだす。なんとそれは力エルの手だった。ということは、つまり……

『ジーザス』

戦士たちが後ろに下がる。飛び出したのは超ド級のデスフロッグだつた。こんな話は聞いてませんが。

『な、なんでクイーンデスフロッグがここにいるんだ！？』

ロバートの反応を見る限り、こいつはクイーン。つまり、デスフロッグの親玉ということか。まさかこんな隠し玉を持つてくるとは。体は傷だらけだが、どうにもピンピンしていらっしゃる。

クイーンデスフロッグはガパリと口を開いた。その家一軒は丸ご

と飲み込めそうな口からピンクのぶにぶにした何かが飛び出す。それが逃げ遅れた戦士たちに襲いかかつた。ぺろんっとアイスクリームでも舐めるかのように地面を一舐め。それで付近の地表は一掃されていた。粘液にからめとられた戦士たちは声を上げる間もなく女王力エルの口に消えた。おいおい。

『そんじゃ、俺は行つてくるぜ』

『あ、ヨウリ、待つて!』

俺は妖力弾をぶつ放しながら女王力エルに突っ込んでいく。それに気づいた女王力エルがこちらに向けて口を開いた。敵は不用心にも自分の体内に“毒”を取り込むつもりらしい。

『さて、このスペシャルポイズンに、お前は耐えられるかな?』

俺は甲羅に引きこもった。頭と手足を引っ込めて、腹側パーツを収納すれば、綺麗な六角柱のかたちに変形する。いいねえ、イカしてるぜ! その直後、俺は女王力エルの口の中へと導かれる。そして、食道を通って、胃に押し込まれた。

『さあ、ショータイムだ!』

俺は弾幕を盛大にばらまいた。

* * *

クイーンデスマッチはしぶとかつた。10分くらいは俺の内部からの攻撃に耐えたのではなかろうか。ぴょんぴょん飛び回って大変だつたらしい。途中俺を吐きだそうと努力していたが、俺はしぶ

と奴の胃袋に居座り、胃粘膜をズタズタにしてやつた。

ひっくり返つてぴくぴくしているカエルの口から帰還するとロバートが泣き顔で迎えてくれた。俺が食われて死んだと思つたらしい。ジョージは無言だったが、呆れ顔をしていた。

改めて、獲物を見る。その全長は50メートルはあるだろうか。お尻から巨大な卵がにゅるにゅる出てて、ドン引きした。あの寒天ゼリーみたいなやつね。これがデスフロッグの卵かと思うと鳥肌が立つ。そして、俺は今、女王カエルの仰向けになつた白い腹の上を歩いていた。

『なんかおかしいと思つたんだよね』

その腹に突き刺さる鉄の塊を引っ張りだす。それは、特大の大砲の弾だつた。こんな兵器を玉兔が使用したとは考えにくい。ということは、あと残された可能性は一つしかない。

『人間の仕業だ』

20話「重なる不運」

『クイーンデスフロッグを倒したぞーー。』

『もう怯えながら暮らす必要はないー。』

玉兎たちは女王カエルを倒したことで、浮かれ気分になっていた。何人かの戦士たちは女王カエルにやられてしまつたが、むしろ、全滅せずにたつた数名の犠牲だけでこの局面を乗り切つたことになる。俺は敵の親玉を倒した英雄に祭り上げられる始末だ。こいつらは能天氣でいいよな、まったく。

『どうしたの、ミウリ。そんな難しい顔して。みんな、あんなに喜んでるのに』

『ロバート、クイーンデスフロッグは今まで姿を現したことはなかつたんだよな?』

『そうだよ。クイーンがすべてのデスフロッグの母なんだ。奴らの巣穴の最奥にいて、外に出でくることはない。デスフロッグたちが守つていろ。だからこそ、じつして倒せたことが奇跡なんだ』

『じゃあ、そんな大事な女王様がじつして無防備にのこり出できたか、気にならないか?』

『まあ、それは気になるけど……何か巣穴から出なくちゃならぬ事情があつたんじゃない?』

『それだ。つまり、女王カエルは何らかの危機的状況に陥って、危険を冒しても巣穴の外に出ないといけない事情があつた。そして、俺はその事情について、予想がついている』

『え！？ どういふこと？』

『犯人は人間だ』

『ニンゲン？ つて、確かに、前にヨウリが言つてたアースの種族だよね。うーん、信じられないけどなあ』

ロバートはいかにも眉唾といった表情をする。自分の目で見た物でなければ納得できないのだろう。俺がこいつらの立場なら、それもうなずける。いきなり、天国からやつてきた使者が敵の親玉を攻撃しました、と言われても、ハア？としか答えようがない。

『……だが、ヨウリの意見は無視できるものじゃない』

『父さん？』

そこにジョージがやつってきた。手にはクイーンデスフロッギの腹に埋まっていた砲弾の一つを持っている。『金属を加工する程度の能力』を持つジョージに見せれば、これがどういう物か理解してくれるのではないかと思つて渡しておいたのだ。

『この金属の塊は、玉兔ではとうてい持ちえない技術で作られている。複雑すぎて俺にも再現できそうにない。ましてや他の村の仲間がこれを作つたとは考えにくい』

『父さんはニンゲンって奴らがいるって、信じてるの？』

『樂觀視はできないだろ？。それと、ワカツはまんな嘘はつかない』

『ま、僕だつてワカツのことは信じてるやー。なるほど、一инг
ンね……』

今はこの程度の理解でもしかたないか。俺たちはいつか人間と遭遇するときがくるだろ？。そのとき、どうこう行動を取るべきか、あらかじめ計画しておく必要があるな。

『山ワカツせいかーん！』

『ぶ、ぼ、ひー！』

『お姉ちゃん心配したんだからねー！』

モニカが胸で俺を窒息させにかかつってきた。まあ、ここ宇宙空間だけど。真剣に考えよつとするとこれだからな。変な気負いがないことは、いいことなのかもしれないが。

* * *

村を失くした俺たちは、集まって移動を始めた。元の巣穴は木端微塵に吹き飛び、デスフロッグの死体からあふれる毒で使い物にならない。他の村に移住するしか生き延びる手はない。これだけの数の玉兔を、一つの村に全員が収まるキャパシティはないはずだ。だが、それでも行くしかない。

しかし、玉兔たちに暗い感情は少なかつた。クイーンデスフロッグを倒したという事実はそれだけ彼らの希望になつてゐるのだ。俺

たちの一団はくぼんだ灰色の地面が連なる月面をひたすら歩いて進んだ。

そして、『デスフロッギ』の襲撃から五日が経ったその日暮れ、俺たちは目的地へと到着した。

『な、なんだあれは……！』

玉兎たちは一様に目前の光景に見入っている。そこには銀色の塔が経っていた。サーチライトが辺りを照らし、異様な雰囲気に包まれている。その塔が経っている場所は、俺たちが目指してきた玉兔の村の真上だつた。

こんなことができる連中なんて人間だけだ。その要塞のようなものらしい警戒の様子から見ても、とても友好的に話ができるようには思えない。おそらく、地下の玉兎たちはすでに制圧されていると考えた方がいい。これはやばいことになつてきた。

『とにかく行ってみよう！』

待て待て。なんでお前らはそんなに考えなしに首をつつこもうとするんだ。自分たち以外の文明との接触がなかつた影響だろうか。こいつらの警戒心は薄すぎる。俺が制止する間もなく、玉兎たちは銀の塔に向かつて駆け出していく。

『やめろ！ とまれ！』

見つかるのは思いのほか早かつた。結構な距離はとつていたと思ったのだが、サーチライトがこちらに集まつてくる。玉兎たちはその光を見て何を勘違いしたのかはしあげだす有様だ。

そして、塔から何かがやってきた。それは装甲車だつた。どう考えても手加減なしだ。攻撃は唐突なものだつた。塔から光の線のよ

うな物が放たれる。ライトかと思いきや、それに当たった玉兎は肉を焼かれて苦しんだ。ビーム兵器だ。その光の線は容赦なく雨のように浴びせられる。相手が仕掛けてきたことを知ったときにはもう遅い。何人もの玉兎たちがやられていた。

『ちつ！　えげつねえことしゃがる！』

遠距離からの一斉放射にこぢらはなすすべがない。いかに俊足で走る玉兎の戦士たちといえども、光り速さで襲い来るビームの槍には敵わなかつた。俺は甲羅にもぐつてガードし、近くにいたロバート一家の盾になつた。俺の甲羅は三人も隠れられるほど大きくない、というか一人でもいっぱいぱいだが、穴を掘つてなんとかした。これは早急に撤退するしかない。とにかくビームから狙われない位置まで離れないと全滅してしまう。

しかし、玉兎たちは未知の驚異的な攻撃を前に恐慌状態に陥つていた。

『……仲間を助けに行く』

この一方的な銃撃戦に、無謀にもジョージは身を投じようとしていた。ロバートとモニカが必死で止める。

『今、外に出たらハチの巣だぜ？』

『そりだよ、父さん、無茶だ！』

『いくらお父さんでも、あんな攻撃、ビームもできないわ！』

だが、ジョージはそれでも止まらなかつた。後のこととは任せたと一言だけ残し、別れの言葉もなく俺の甲羅の陰から飛び出していく。

俺はこの場から動けないので、加勢に行くこともできないしな。どうすりやいんだ、この状況。ビームさえなんとかできればまだ手はあるんだが。

だが、その悩みは意外にもあっけなく解決した。レーザーの猛攻が突然、止んだのだ。

21話「逆襲」

なんで急に攻撃をやめたのか、不審だつた。レーザー攻撃は長時間連続しての使用ができないのか。それとも別の理由があるのか。俺は敵の様子を探るため、甲羅から頭を出す。

塔との距離は離れていて、ここからでは何か変化が起こっているのか見ることができない。その代わり、月面を走つて来た装甲車には動きがあった。何か、準備をしている。装甲車の屋根に巨大なパラボラアンテナのような物が設置されていた。何をする気だ。まあ、いい。とにかく今逃げなくては。

『おい、やつとかっこから離れ……』

キィィィイン！

その瞬間、脳内に怖気が駆け抜ける。体中の妖力がぐらぐらと熱くなり、暴れ出した。血が沸騰するようだ。全身に激痛が走る。

『あがああっ！』

俺はすぐに甲羅にこもつた。だが、謎の攻撃は依然として俺を苦しめ続ける。体の中で、妖力が振動していた。内側から内臓を針で串刺しにされるような痛みで何も考えられなくなる。なにより、肉体よりも精神への被害が甚大だった。妖怪は生物よりも魂に近い存在だ。精神はより密接に肉体に結び付いている。俺の頭の中で俺の妖力が細切れになつてめちゃくちゃくちゃに飛び回り、俺の精神を傷つけていた。

ヤバイ。俺は生まれてこの方、感じたこともない最大級の危機に

戦慄した。これは何だ。自分が何をされているのかもわからない。だが、とにかく逃げないと死ぬ。精神がボロボロになる。気を抜くと意識が遠くなる。

「…………！」

俺は氣合いで立ち上がった。甲羅から手足だけを出した間抜けな格好だが、そんなことを氣にしている場合ではない。攻撃が来ている方向はわかる。あの人たちが乗っている装甲車からだ。たぶん、さつき見たアンテナを使っているのだ。ということは電波的な何かか。

ロバートとモニカは俺の足元で氣絶していた。俺は一人の体をつかむと、全力でその場を離れた。一人を引きずりながら走つたので、地面にこすれたり石にぶつかつたりしたかもしぬないが、この一刻一秒を争う状況で文句は言わせない。俺だって必死なのだ。

俺はなりふりかまわず、精神攻撃電波が届かなくなるまで走り続けた。

* * *

俺は岩場の陰にへたり込む。額には玉の汗をかいていた。壮絶な嘔吐感を抑えきれない。胃には何も入っていなかつたが、気持ち悪さは一向に治まらなかつた。

これまで、俺は強敵と闘いながらもどこか余裕があつた。俺は強者だ。負けない自信がある。確かに俺はなんでもできるスーパー・マンではないが、最低限、自分の身を守ることができる。この甲羅さえあれば、どんな攻撃だって防げると思っていた。俺は自分の保身に絶対の自信を持っていたからこそ、他人の戦いに手を貸す余裕があつたのだ。

だが、今回はそうじゃなかつた。あの精神電波は妖力を狂わせる。

甲羅ではどうにもできなかつた。俺の自信は粉々に砕かれたといつてもいい。あれは対妖怪戦において恐ろしい威力を持つた兵器となる。地球の妖怪は運がよかつたのだ。あの兵器があれば、人妖大戦は俺たちの大敗、いや、戦いにすらならなかつただろう。

周囲には、俺たちの他に玉兎はいなかつた。確認する暇もなかつたが、おそらく全員氣絶させられたのだろう。もしかしたら、逃げのびた玉兎がいるかもしれないがそれを確かめる方法もない。モニカとロバートはしばらくして意識を取り戻したが、とても元気に動ける様子ではなかつた。錯乱して意味のわからない言葉を口走っている。ようやく落ちついたころにはすっかり深夜になつていた。

『「」め、ん、ヨウリ、僕……』

『いいから休め。人間の追手がいつ来るかわからない。今は体力の回復に専念しろ』

本当なら早くもつと遠くに逃げたいところだが、一人はまだまともに歩けない。本当にやばくなつたら、また引きずつてでも連れて行くが。重力があんまりないから楽に運べるし。

さて、困つたことになつた。人間は俺たちより強い。ビームはなんとかなるとしても精神電波には太刀打ちできない。あの塔の要塞には精神電波装置がしかけてある。正面から挑むのは無謀だ。俺たちは逃げるこことしかできないのか。

『「」ウツラヤん、あれ』

『なんだ、ビうじた?』

『あそこ、に、なにか、いる……』

モニカが丘の上を指差す。まさか、追手がここまで来たのか。俺が目を凝らすと、そこには確かに何かいた。だが、人間ではない。デスフロッグだった。氣味の悪いガマガエルたちがこちらに向かってくる。しかも、一匹や一匹ではない。その数はうじゅうじゅうじゅういた。

『まったく、こんなときにして…』

俺は妖力弾を威嚇射撃する。しかし、デスフロッグは止まらない。すぐさま弾幕を張つて近づけさせないようにする。地面も揺れないので、地下からも進んできているのだろう。そちらにも注意を怠らないようにする。

『ん？ なんだ、何か変だ』

だが奴らは、これまで戦つてきたデスフロッグとは違う態度を取つた。攻撃した俺に見向きもしないのだ。試しに妖力弾を撃つのをやめてみたが、俺たちのことなど眼中にないと言つた様子で横を素通りしていく。他のデスフロッグも全部が一方向に顔を向け、ひたすら前に進んでいくだけである。

『こいつらは何がしたいんだ』

意味がわからず頭が痛くなってきた。だが、そのデスフロッグ達が進んでいる方向に気がつく。そちらは俺たちが今しがた逃げてきた場所だ。つまり、人間たちの要塞がある。もしかして、こいつらは人間を襲おうとしているのか。

無謀な気もするが、やれるのではないかという希望もあった。地下から一斉に攻めればなんとかなるかもしれない。人間が対策を講じている可能性が高いが、何にしてもこれは好機だ。デスフロッグが攻め込む隙に乘じて、要塞の内部に入り込めるのではないだろう

か。仮に精神攻撃電波を食らつたとしても、力づくでアンテナを壊せばいいじゃないか。

反撃の糸口が見えてきた。これは逆襲のチャンスだ。

『なんじゃこりゃ』

俺がロバートとモニカに肩を貸しながら、銀の塔が見える場所まで来た時、そこにはグロテスクな惨状が広がっていた。

地面を埋め尽くすほどのデスフロッグの死体が積み上がり、そちらじゅうに毒の粘膜の池ができている。そして、一番驚いたのは銀の塔に突進するような形で力尽きているクイーンデスフロッグの姿である。そいつは俺が倒したはずの、あの女王カエルだつた。なんとあれだけの攻撃を食らいながら生きていたのだ。信じられない生命力である。どてつぱらに穴が開いていたのに、こんなところまでやつてくるとは、いったい何がこいつをそこまでの執念を抱かせたのか。

戦いはすでに終わっていた。人間側もデスフロッグ側もどちらも動かない。まさか、ここまで軍勢が攻撃してくるとは人間も想定していなかつたのだろう。両者ともに全滅していた。玉兎の生き残りはいかないかしばらく探し回つたが、見つけ出しことはできなかつた。ジョージの姿もない。ロバートとモニカはひどく氣を落としていた。俺は一人を肩に担ぐと、できるだけ毒を踏まないようデスフロッグの死体の上を飛び継ぎながら銀の塔へ近づく。

塔の中も悲惨だった。内部にまでデスフロッグが侵入して、人間ともども死体の山と化していた。分厚い隔壁も突破され、奥深くまで侵入を許している。一応、警戒はしてみたが、本当に生存者は一人もない。人間は確かに強いが、その強さはひどく偏っている。デスフロッグの死体の数に比べて人間の数は圧倒的に少なかつた。せいぜい100人くらいしか、今のところ見当たらぬ。たつたそれだけの数でデスフロッグの大群と渡り合つたのだから、脅威と言

つていい。だが、無敵ではなかつた。

デスフロッグは塔の上階を目指すように折り重なつていた。塔は上に向かつて建てられる物なので、上を目指すのは当然のことと言えるが、それだけの理由にしては必死すぎる氣がした。まるで産卵のため上流を目指して滝を登る鮭のごとくである。

塔の機能はほぼ停止状態で、セキュリティが作動している様子はない。照明の電気は、壊されていない箇所だけ明かりが灯っていた。だが、どこの電灯も、点滅を繰り返していて目がチカチカする。電気系統がイカれてているのだろうか。

最上階近くにやつてくると、眼下に屍累々と積み重なるデスフロッグの毒沼が見える。そこには、いつの間にか黒い霧が発生していた。それはデスフロッグ達の怨念が集結してできあがつた呪いの瘴気だつた。もともと、デスフロッグの毒には呪いに近い特性があった。それがこれだけ大量に集まれば、本物の呪いになつてもおかしくない。俺ならあの中でも平氣だが、玉兎は無事ではすまないだろう。

俺は何か使えそうな武器はないか物色しながら進んだ。さすがは人間様の拠点だけあり、さまざまな兵器らしきものがある。実にSFチックだが、ほとんど俺には使い方がわからないものだらけだつた。とりあえず、銃らしき形をした物を中心に漁つて、それ以外にも手ごろな物を見つけたら甲羅の中にしまつておいた。

そこで発覚したのだが、俺の甲羅は四次元ポケットのように何でも無限に収納できるというわけではなかつた。見た目に反した収納力を持つているが、スペースには限りがなつたのだ。新事実である。甲羅の中がいっぱいになつて、これ以上詰め込めない状態になつた。これでは自分の体も入れることができないので、しかたなく必要なそそつな物を外に出した。腐つてカビが生えた蜜柑とかな。

『「これが二ングンの巣なんだ。すごい……』

『まるで、夢の中いるみたいだわ。このふわふわしたものは何?』

ロバートとモークも人間の科学技術に心底驚いていた。特に、建物内に空気があることに興味を持つていた。塔はいたるところが破損していて、空気漏れは確実なのが、いかなる技術か、まだ空気のほとんどが逃げずに塔の中に残っている。そういうことに関心を持てる程度に、一人はだいぶ体の調子も良くなつて来たようである。塔内に危険はないようなので、個別行動をしてみることになった。

俺が面白そうなメカがないか探していると、ある部屋にデスフロッグが殺到して死んでいた。上階に行けば行くほどデスフロッグの死体の数はどんどん減つて行つたのだが、ここだけ以上に密集している。ここに何かあるのか。俺はデスフロッグを押しのけて、その部屋に入った。

『何かの研究室みたいだな。ん? 妖力の気配を感じる』

そこは様々な機材が置かれた部屋だった。白衣を着た人間がデスフロッグに潰されるようにして、何人も床に転がっている。デスフロッグは研究室の奥へと進もうとしていたようだ。そこには、チューブのような水槽に入れられた紫色の丸い玉が浮かんでいる。妖力はこの玉から感じた。取り出して手に取つて見る。

『うわ、なんかブーピーして気持ち悪い』

どうやら、ナマモノのようである。生きている……ような、そうではないような、なんとも曖昧な気配。これは卵だ。命よりもっと未分化な、力そのものに近い状態である。俺には劣るが、かなり良質で大量の妖力を内包している。この卵が孵れば、生まれながらにして強い妖力を持つ妖怪となることだろう。

よく見たら、これデスフロッグの卵だな。だが、クイーンデスフロッグを倒したときに見た卵とは明らかに質が違った。あれは黒色だったが、こいつの色は毒々しいバイオレッド。おそらく、これは次代のクイーンとなるデスフロッグの卵ではないだろうか。普通のデスフロッグは緑と紫が混ざった体の色をしていたが、クイーンは紫一色だった。

なるほど、だいたいあらすじが読めてきた。人間たちはデスフロッグのクイーンがいる巣穴を襲い、調査した。月に移住する計画をしているのなら、デスフロッグのような妖怪は危険極まりない。排除しようとしたことは容易に想像がつく。そこで、このクイーンの卵を発見し、回収した。そのことに母親力エルが激怒して、卵を取り返しにここまで来たという結末だ。どこの世界でも母は強い。結局、欲の皮を突つ張った人間の自業自得という話じやないか。

『ま、俺の知つたこつちやないが』

俺は卵をチューブに戻そうとして、思いとどまる。デスフロッグは全滅した。少なくとも、この場所には一匹も残っていない。この卵をここに置いて行つたところで、どうせ人間にまた回収されて、いいように実験の材料とされるに違いない。この塔が陥落した情報は人間側もすぐに知ることになる。いや、もう知つていると考えた方がいい。すぐにここはまた人間に占拠される。俺は機能が停止した要塞に立て籠もつて人間と今すぐ徹底抗戦する気はないのだ。むしろ、逃げ場のないこの場所で、包囲されて精神攻撃電波を浴びせられたら目も当てられない。

これが人間の手に渡るのは癪だ。だつたら、俺がここで食つてしまえばいいじゃね？　さすがに六島苞には断然負けているが、これを食べれば結構な量の妖力が手に入る。強くなることはいいことだ。

『でも、これ、まずそつだな』

だが、それはカエルの卵。色合いから、ジャンボターニーの卵のさ
らにジャンボ版と言われても信じられる。俺はグルメを気取るつも
りはないし、チビガメ時代はたいそうな悪食だったが、最近の主食
は植物ばかりだったので、なんか抵抗がある。人型になつたせいで、
人間に近い感性が強まつた気がする。

それに、見るからに毒あるぜ、って色してゐしなあ。味見に、一
舐めしてみる。

『ペろつ！　レ、レいつは……ストロベリー味！』

俺は、黙つて卵を甲羅の中にしまつた。まあ、こいつの処遇につ
いてはあとで考えよう。今は他にやることがたくさんある。断つて
おくが、これはネコババではなく、保護だよ。

23話「月の少女」

『アカツチヤーンー。』

モニカが俺を呼んでいる。クイーンの卵を拉致げふんげふん、保護した俺は研究室から出て、モニカの声がする方に向かつた。

『どうしたんだ？ そんなに慌てて』

『あの、何か聞こえるの。今まで聞いたことのないような不思議な声が……』

声がする、ということは人間の生き残りがいたのか。これはなかなかに危険な状況である。俺はすぐにモニカに案内を頼んで声らしきものがするといつ場所へ向かつた。

そこは塔の最上階に位置する部屋だ。ロバートが近くに待機していた。剣を抜き、油断なく構えている。

『アカリ、あの部屋だよ。何か聞こえる』

ロバートもその声を“おかしな音”と評した。いったい、どんな化け物が待ち構えているのか。妖力探知を仕掛けて見たが、特に反応はない。俺は物影に隠れ、静かに耳を澄ます。

「…………て、おか…………」

『…………』

久しぶりに聞く肉声だ。なるほど、玉兎は念話でしか会話をしないから、この音が何なのかわからなかつたのだ。俺はその声がよく聞こえる位置まで慎重に近づいて行く。

「たすけて……わたしを、おいていかないで……」

やれやれ。またＳＵを求める声だ。経験上、こうこう事態に遭遇すると、ろくなことがない。

俺は危険がないと判断し、警戒を解いた。一応、攻撃されたら応戦できる用意はして部屋のドアをノックする。

「だ、だれ？」

どう返事をしていいかわからないので、何も言わずドアを開けた。中は、ありていに言つて病室だ。ベッドが一つ置かれ、その上に少女が寝ている。長くきれいな黒髪の美しい少女だつた。成長すればたいそうな美人になるだらう。だが、今はまだ幼い。それに、一目見て重病患者だとわかつた。ベッドの周りには用途のわからぬ機械の箱がいくつも置かれ、そこから伸びる点滴の線がいくつも少女の体につながつてゐる。

たぶん、襲撃があつた間、ずっとこの部屋で恐怖に震えていたのだろう。真つ青な顔色で、クマのぬいぐるみを抱きしめている。突然、部屋に入つて來た俺を見て、びくびくと震えて怯えている。よし、ここは一発ギャグでもかまして明るい空氣に変えてやろう。

俺は甲羅の中に頭だけ収納した。

「怪奇！ 首なし人間！」

「あやああ……」

少女は布団をかぶつて亀のよう閉じこもってしまった。和ませるはずが、逆に怖がらせてしまったようである。失敗失敗、てへつ。

『ヨウリ、中はどうなっているんだ?』

そこにロバートとモニカがやつてきた。俺が緊張していないので、一人も危険はないと判断したようだ。俺は、人間の子どもがいることを説明した。

どうやら病氣のようで、ここに一人で隠れていたことを伝えると、モニカはベッドの方へと歩いて行く。布団の上からでもわかるほど、少女の体は恐怖に震えている。その上から、モニカはやさしく手を置き、ゆっくりと撫でた。最初は縮こまっていた少女だったが、こちらに敵意がないことがわかったのか布団から顔を出す。

『怖かつたわね。でも、もう大丈夫よ』

モニカが微笑みかけ、少女の頭を撫でる。ようやく力が抜けたのか、どつと疲れたように少女は相好を崩した。表情もほぐれている。

『姉さん、そいつから離れるんだ』

しかし、もう一人の玉兎は違った。ロバートは剣を抜き、人間の少女にその切つ先を向ける。少女は向けられた殺気に、再び身をこわばらせる。

『やめなさい、ロバート！ 怖がっているわ』

『それは人間だよ、姉さん。ヨウリだつて言つてたぢゃないか、人間は悪い奴らだつて。姉さんも知つてるだろ？ 父さんたちが誰にやられたのか！』

『この子が悪いわけじゃないわ！ そんなことをしたところで、何の解決にもならない！』

モニカは毅然とした態度でロバートから少女をかばうように抱きしめた。

『ロバート、少し落ちつけ。モニカの言うとおりだ』

『……わかったよ』

戦争する側される側、どっちが悪くてどっちが正しいなんて、さして意味のある問題じやない。別に俺はこの場でこの少女が殺されたって気にしないが、どう考へても利口な手じやないことは確かだ。

『まあ、人質にはなるかもしねないからね。……僕は外を見張つてこるよ』

ロバートは剣を収めて、部屋から出でていった。感情的な年頃ですな。

「うう、うぐ……」

静かになつた部屋に、嗚咽が響く。少女はモニカの服を握りしめ、その胸の中で泣いている。モニカは少女が泣きやむまで、ずっと抱きしめ続けていた。

* * *

「お姉ちゃんたちは、だれなの？」

少女はモニカから離れたが、手は握ったまま、ベッドに寝ている。話しかけられたモニカは困った顔をして俺の方を向いた。

『ねえ、私にはこの子の言葉がわからないのだけど、ミウリはわかる?』

『ういえ、少女は日本語を話している。モニカは念話を使えて、少女にテレパシーで意思を伝えることができるが、少女の話す言葉は理解できないので、一方通行の「コミュニケーショントーク」しかとれない。俺が通訳してやろう。』

『俺たちのことが知りたいみたいだ。せっかくだから自己紹介しようぜ』

『それはいいわね。でも、その前にミウリは頭を出しなさい。この子が怖がっているわ』

『失礼』

ウイーン、ガシャン。首あり人間モードへ移行します。

『俺は葉裏だ。そんで、こっちがモニカな』

『葉裏と、モニカ……ねえ、ふたりは妖怪なの?』

『そうだ。妖怪だ』

首が収納されたり、テレパシーが使えるような奴らだ。少女にも俺たちが妖怪であることがわかっているようである。

「わたしは、輝夜っていうの。妖怪を見るのは、はじめてでびっくりしちゃった。葉裏はなんだか変だけど……モニカは頭にウサギさんの耳がついててかわいい」

『妖怪見るのは初めてかー。あと、モニカのウサ耳がかわいいって言つてるぞ』

『あら、褒めてくれてありがと』

「お父さまは、妖怪はとても怖いものだつて言つてたけど、あれはウソだつたのね。モニカはこんなにやさしいもの」

輝夜の表情は笑顔だ。こうして見ると、年相応のあどけない少女である。妖怪に関する知識もない。それに病人だ。どうして、こんな子どもが危険な戦場にいるのか気になつた。

「ねえ、外で何があつたかって？　え、あー、それはなあて建物がゆれたんだよ。お医者さまも、お父さまも、絶対ここから出るなつて言つてた。みんなどうしてるの？」

『外で何があつたかって？　え、あー、それはなあ』

俺は答えに詰まつてモニカに田くばせする。妖怪に襲撃されて人間は全滅しました、なんて正直に言えるわけない。

『大丈夫よ、私たちがいるから、心配いらないわ』

『ほんとに？　輝夜がねむくなるまでずっとといってくれる？』

『ああ、お前が寝るまで一緒にこてやる』

よかつた、と輝夜は安堵する。まさか、この要塞が陥落したとは思っていないのだ。この少女にとって、ここは安全な場所であり、気にするべきは安心して眠りに付けるかということではない。だが、もう一つ、輝夜には気がかりなことがあるようだ。

「…………セツキ、もうひとり妖怪さんがいたよね？」

『ああ、忘れてた。あいつはロバート。モニカの弟だ』

「なんであんなに怒つてたの？　輝夜、なにか悪いことしちゃった？」

『気付くな。あいつはいつも怒つてるんだよ』

「でも……」

『いいから、もう寝ろよ。また首なしお化けがくるんだ』

「やだー！　輝夜、もうとおはなししたい！」

わがままなお嬢様は目が覚めてしまったようだ。なんで今まで来て子どものお守なんかしなきやしないんだと自問していると、突然、部屋の照明が点滅し始めた。やっぱり電気系統が壊れているようだ。

「あやあ、な、なに？」

『ほら、お前が寝ないからお化けが来ちまつたじゃねえか』

「いなにもんつ、お化けなんかいないもんー。」

『三ウニ、怖がりせずよー。まつたくもん』

ベッドから体を起こした輝夜をモニカが抱きしめる。そのとおり、輝夜の腕につけられていた点滴の管が抜け落ちてしまった。

「あひ、これお医者さまが、はずしちゃだめって言つてたの」

そう言われても点滴のつけ方なんて知らないぞ。だいたい、この医療機材らしきものはちゃんと動いているのか。確認してみると、止まっていた。ディスプレイに「ERR R」の文字が表示されたまま、動く様子がない。なんかいつぱいつぱボタンを押してみたが、うんともすんとも言わない。完全に壊れていた。
これって、大丈夫じゃ、ないよな。

『……もうその管、全部はずしちまえよ。邪魔だろ』

「だめだよ。お医者さまがダメって言つてたもん」

『今田ぐるいこいじやん。はずせなこと、モニカにだつこしてもらえないぞ』

「え? ……そ、そうね。今日は輝夜、ちゃんとお薬も飲んだし、怖いのいつぱいガマンしたし、ちよつとぐるいならはずしてもいいかも」

俺とモニカは輝夜の体から点滴の管をはずした。ベッドの上に座ったモニカは、膝の上に輝夜を抱えた。

『もう寝る時間だから、電気、消すぞ』

「うん」

チカチカと点滅する照明の電源を切った。暗くなつた部屋は、窓から入る光に淡く照らされた。窓の外には地球があつた。青い地球が光つていた。

輝夜の元気はどんどんなくなつていった。命の灯が燃え尽きようとしているのがわかる。本当に、一目見たときからわかつていた。その脆弱な命は消えかかっている。もともと、助からない命だったのだ。彼女の病は命を食いつぶし、終わりを迎えるとしていた。

「かぐやね、さみしかったんだ、とうさまも、かあさまも、おじいじがいそがしくて、すぐにどこにいっちゃう」

モニカの腕の中で、輝夜は話しつづけていた。体調が崩れたことに自分で気づいているだらけ。それを悟らせないよう丁寧に話し続ける。バレバレだが。

『やつとき友達が来てくれるから寂しくないって、言つてたじちゃん』

「そう、えーりんが、きてくれるの。えーりんは、かぐやのいちばんの、ともだち。あたまがすつゝへへいいんだよ。けほつ！ けほつ！」

咳きこむ輝夜の背中をモニカがさすった。モニカは笑顔だが、ぎこちない。いつもバレバレだ。

「でも、えーりんは、かぐやのびょうつきをなおす、おくすりをつくるつてこつて、さいきん、あつてくれないの。えーりんは、かぐやのこと、めらこになつちゃたのかな？」

『そんなわけねえだろ。お前はこんなとこに来ずに、えーりん

と一緒にいればよかつたんだよ』

「わう、かも。かぐや、わがままいつて、ここにきたの。ここは
とつねまの、じい」とばだから、つぎにいきたいつて、わが、まみ、
いつて、とつねまと、いつしょにいたかつたから……」

輝夜の父親も娘の死期が近いことを知り、最後の時間を共にする
そうと思っていたのかもしれない。死ぬ前に町の景色を見せてやり
たかったのかもな。

「だから、さみしいのは、いや、なの、いつしょに、いて……」

『安心しる。お前が眠るまで一緒にいてやるつて、約束しただろ』

「そうだ、ね。かぐや、もひ、ねむくなつて、あちやつた。おや
す、み……」

あつけなかつた。すうつと輝夜の体から生命の力が抜けていく。
モニカは気づいていなかつたが、その瞬間、輝夜の体はただのモノ
になつていた。輝夜はモニカの腕の中で、眠るように息をひきとつ
た。

* * *

俺とモニカは、輝夜の体をベッドにもどして部屋の外に出た。泣
きじやくるモニカを慰めるのは大変だ。それにしても、自分の一族
を危機に追い込もうとしている種族にこれだけ愛情を注げるモニカ
は、大物なのか、馬鹿なのか。たぶん両方だ。

モニカの泣き声を聞きつけて飛んできたロバートにも事情を話す。
ロバートは微妙な顔をしていた。

『さて、もうここにこれ以上どじまい続けるのは危険だ。すぐこ
でもここを離れよう』

まだ調べたいことは色々ある。輝夜にも人間に関する情報はあり聞かせなかつた。特に軍事的な情報についてはもっと集めたいところだが、それよりも今は一刻も早くここを出るべきだ。

窓の外を見ると、朝日が地平線の向こうに昇りかけている。随分と長い時間ここにいたことになる。まつたく、やけに感傷的になつてしまつたものだ。

ふと、外の風景の中に、何かうごめく物がいた。まさか敵が来たのかと注視すると、そこにいたのは玉兎だった。クレーターの丘の向こうから、ひょいひょいと数え切れないので玉兎たちがこの塔を手指してやつてくる。

『仲間たちだ！　どうしてここに来たんだ？』

『ここはもともと玉兎の村があつた場所なんだろ？　仲間を引き連れて取り返しに来た、とか？』

考へてもわからぬ。とにかく、外に出て聞いてみよう。ああ、もし人間のことを知つてゐるのだとしたら、耳のない俺は人間と疑われるかもしれないな。そうだ、ロバートにもらつた帽子をかぶろう。これなら玉兎の戦士に……幼い戦士に見えないこともない。人間は野外で活動するときは宇宙服を着なければならぬので、耳が生えているかどうかなんてわからなかつたかも知れないが。

『もしかしたら、あのなかに父さんもいるかも知れない！　おー
い！』

塔から出た俺たちは毒の霧に注意しながら玉兔たちの方へと走る。しかし、妙な格好をした玉兔たちだ。規格化された軍服のような服装を、全員がしている。ロバートたちがいた村の玉兔はもつと原始的な服装の者ばかりだったが、他の村では技術が進んでいるところもあるのだろうか。

『いや、待て、何かおかしい』

あの玉兔、銃を持っているぞ！

気づいた時には手遅れだつた。周囲を銃器を持った玉兔たちに包囲されていた。玉兔に銃を生産できるほどの技術力はないはず。だとすれば、この銃は人間が玉兔たちに与えた物になる。もしや、人間と密約を結び、協力している玉兔たちがいたということか。だが、あの妖怪嫌いの人間たちがそんなことを考えるだろうか。

『降伏セヨ。抵抗スル場合ハ武力ヲモツテ殲滅スル』

いや、もつとおかしなところがある。この玉兔たち、表情がない。どいつもこいつも能面のように無表情だ。そして、一番おかしな点はウサ耳だつた。明らかに作り物じみている。まるで取つてつけたかのような違和感しかない。ぬいぐるみの耳を縫い付けたような印象だ。こいつら、本当に玉兔なのか？

『父さん……父さんがいるー。』

『なに！？ どこだ！？』

ロバートが指差した方向に、見えた。その顔は確かにジョージのものだつた。だが、ジョージではない。俺の知っているジョージは寡黙でしゃべるのが苦手な奴だが、自分の息子に銃を向けるような

男ではない。その頭には、やはり作り物の耳が生えていた。

こうなつたらしかたがない。強行突破だ。俺は妖力弾を放つため、精神を集中させる。

だがそのとき、わずかに俺の頭上から殺氣を感じた気がした。頭上つて、空だぞ。いや、まさか……！

『ちくしょう、そこまでするか』

俺たちの真上に二機の小型宇宙船が飛んでいた。この位置からじや、妖力弾はどどかない。だが、やるしかあるまい。俺は上空に向けて弾を放つべく手を構える。

だが、それをあざ笑うかのように、天から狂氣の電波が放たれた。精神攻撃電波。それも、俺が前に食らったものとは比べものにならないほどの強力な電波だった。俺は体を駆け抜ける激痛に逆らうことができず、膝をつく。脳が痛覚という感覚のみによつて占領されていく。

倒れ伏す俺たちの周囲には、軍服を来た玉兎たちが平然として立っていた。そいつらは俺たちを拘束する。その記憶を最後に、俺の意識はかすんでいった。

ぼんやりと意識が浮上する。「ここはどこだ。俺は確かに人間に捕まつた。俺は死んだのか。いや、まだ死んでいない。俺は俺自身の命を感じる。ゆっくりと目を開けると、万華鏡のように回る視界が焦点を結び始めた。

「あら、お目覚めのようね、妖怪さん。ああ、月の妖怪は言葉が通じないのでつたわね。でも、そんなことは些細な問題だわ。人間に捕まつた気分はどうかしら？」

田の前にいるのは、小さな女の子だった。輝夜と同じくらいの歳だろうか。それにしても小賢しい雰囲気がふんふんしている。その少女は赤と青の二つの色をした変わった服装だった。

「月の妖怪はウサギとカエルだけだと思っていたけど、あなたみたいな新種もいたのね。解剖して調べるのが楽しみだわ。ギリギリ死なない程度で許してあげるから安心してね」

「うるせえ、全部聞こえてんだよ」

俺の体はかたいベッドに固定されていた。それも当然か。これは手術台だ。甲羅は脱がされ、部屋の隅に置かれている。手足は四方に伸ばされ、頑丈な金具で固定されていた。俺が本気を出せばこれくらい壊せないはずはないんだが、どうにも力が入らない。何をしようがつた。

「あら、あなた私たちの言葉がわかるの？ 興味深いわね。あと、

あなたの体に特性の痺れ薬を打つておいたから。5時間は効果が続
くと思うわ

「やこつぱー」。寧江ビーも。だが、そんなこと聞かれたからって、謡のわれるかよシ一。

俺は力の限り手足を踏ん張った。奥歯がつぶれるくらい食いしばつて力を込める。だが、いけるかと思った瞬間、しゃれにならない電流が俺の体を通つて行く。

「あははは、言い忘れてたけど、無理に動こうとするとかから高圧電流が流れようになってるから」

「ごおお…… オーマイガッ！」

なんてこつた、万事休す。」いつは俺をどうする気なんだ。実験のモルモット?「冗談じやない。そんなことをわざわざへりいなうひと思いに殺された方がましだ。

「ねえ、助けてほしい？」

「ほしーですー！まじでー！」

「ハルカ、ダメだ」

このクソガキが。手足が自由なら泣いて謝らせるところだ。だが、それよりも俺はこいつの醸し出す空気が気に入らない。ただならない負の感情が見える。とうてい子ども一人が抱えるには重すぎる闇。

「……お前は何者だ？」

「自己紹介が遅れたわね。私は、そう……八意永琳とでも呼んでちょうだい」

「えーりん？」

その名前には聞きおぼえがあった。輝夜が言っていた友達だ。確か、輝夜の一番の友達の名前だったはず。

「お前がえーりんなのか？ ほんとに？」

「そりや。びっくりしてそんな反応をするのかしら？？」

「はあ、輝夜の友達って聞いてたからどんな人間なのかと思つたら、とんでもねえアバズレ……うぬぐあああーー！」

それ以上言葉は続かなかつた。永琳が手元にあつたコントローラーのスイッチを入れた。そして、俺は電撃を食らう。俺が暴れなくとも、任意に電気で痛めつけることは可能なのか。10秒くらいは電撃が続いたらどうか。体中がガクガク痙攣して歯がカチカチ鳴つた。くそが、これじゃこんがりグリルにされちまう。

「なにすんじゃコラアー！」

「うるさい、黙れ。下賤な妖怪の分際で、そのきたならしい口で輝夜の名前を呼ばないで」

永琳は今までの張り付けたような笑顔を止めていた。血も凍るよ

うな無表情、だが、その奥には激しい憎悪の炎が燃えている。

「今回の作戦でたくさん的人が亡くなつたわ。あなたたちが襲撃したせいでね。その罪は重いわよ」

「勝手に人のせいにすんな。人間がやられたのは、人間の自業自得だ」

「そうね。確かに人間は傲慢だわ。私だってこんな一方的な侵略であなたたちと接することになったことを憂いでいる。正直言つて、上層部のやり方は気にくわないわ。もつと穩便な方法があつたでしょう」

永琳は感情のない瞳で「ヨミでも見るかのように俺を見下している。だつたら俺も同じように見返してやるだけだ。互いのボルテージがだんだんと高まつていぐ。

「でもね、私にも守りたいものがあった。たとえ、あなたたちを滅ぼすことになつても譲れないものが。そのためならどんなことだつてやる覚悟があつた。その私の至高の目的をあなたたちが奪つた」

「輝夜のことか？」

永琳がぎりっと歯をくいしめる。もはや心のうちの憎悪を隠す様子はなかつた。永琳が電撃のスイッチを押す。俺は激痛を気合いで押し込んだ。こんな奴のために悲鳴をあげて喜ばせてやる気はない。

「そうよー、あの襲撃がなければ輝夜は生きられた！ 全部あなたたちのせいでしょ！？」

「ぐうつー、輝夜が死んだのは病氣のせいだつ！　俺のせこじやない！」

「違うわー、あの子の病氣を治す薬を私は研究していた！　もう少し時間があれば、あの子を助けられた！　その時間をあなたが奪つたのよー！」

「適當なこと言つてんじゃねえよ！　あの病氣はもう治せないほど輝夜の魂に食い込んでいた！　だつたら、あと何日あれば薬は完成したんだー？　何時間ー？　何秒ー？　言つてみろよー？　おらあー！」

永琳は答えられない。それが何よりの返答だつた。永琳は悔しさにうめき、涙を流していた。結局、間に合わなかつたということでしかない。それを永琳自信が納得できないのだ。どれだけ頭が良くても、こいつはまだ子どもだ。自分の感情を制御できずにいる。

「黙りなさい！　そもそもなんであなたは輝夜の名前を知つているのよ？　どうして私の名前を？　輝夜から聞き出したの？　どんな方法で？」

「話をした、だけだつ！」

「……嘘よ。嘘に決まつてるわ。輝夜はね、とっても臆病なのよ。人見知りする子なの。あなたみたいな妖怪と普通に話ができるわけないでしょ？　そんな見え透いた嘘をついて私を騙そうとしても無駄なのー。どうせ、身の毛もよだつようなむごらしい拷問をして無理やりしゃべらせたに違いない！　ただでさえ、弱つてる輝夜に、ひどこにして殺したに決まつてるのよー。」

いい加減、俺も頭に来た。こちとらガキの戯言に付き合わされて、無実の罪をでつち上げられ、その上電撃パーティーの真っ最中だぞ。俺は輝夜の最期を見届けてやつた。それも俺に出来る限りの最大級の配慮をした上でだ。そのお礼がこの罵倒か？ 反吐が出る。

「……知りたいか？ 輝夜の最期」

「ツ！！ ああああああ！」

永琳はコントローラーを床に叩きつける。その衝撃で壊れたのか、電撃は止まつた。だが、永琳の憎しみの炎は先ほどに増して熱く燃え上がつてゐる。無表情から怒りをあらわにし、その次は笑顔にもどつていた。怖いくらいの笑顔。

「やれやれ、手加減してくれよ。人間だつたらさつきの電撃で30回は死んでるぞ」

「あははは！ 」のくらいでへこたれてちゃダメよ。あなたにはもつと苦しんでもらわないと。輝夜が受けた分の苦痛をあなたにも味わつてもらうわ。そうじょなきゃ、不公平でしょ？

くそ、今度はどんなびっくりどつきマシーンが飛び出してくるんだよ。俺はいつまでガキのお遊びに付き合えばいいんだ。

「実はもう、あなたをどう痛めつけるか、その方法は最初から決めてたの。あなたの頭の上有るソレよ。ああ、首が動かせないから見えないわよね。今、鏡に映してあげるわ」

永琳はそう言つて手術台の上の大鏡を動かす。俺はそこに移る俺自身の姿を見た。そして、俺の頭の上あたりに置かれた装置の

存在についても。

「な、なんだ？　これはウサ耳か？」

それは、作り物のウサ耳だ。そう、俺が捕えられたとき、俺たちを包囲していた玉兎たちが耳につけていたあれだ。

「これはねえ、『ウサギ型月妖怪用インターフェース』って言うよ。急ぎしらえだからこんなデザインになっちゃったの」

「は？　何の話だよ？」

「あなたも受けたことがあるでしょう、妖怪の妖力を狂わせる電磁波。これはその応用で作ったものよ」

俺が苦しめられたあの電波の正式名称は『妖力過活性化電磁波』というそうだ。妖怪の妖力を特殊な電磁波によって外部から操作できなかいかという研究のもと作りあげられた。もともとは妖力を不活性化し、妖術を封じるための兵器を作る研究だったが、逆に活性化させることしかできなかつた。

だが、その効果は思わぬ結果をもたらす。普通の妖怪ではこの妖力の活性化に順応できず、精神が壊れて発狂するのだ。こうして完成した兵器が『妖力過活性化電磁波』である。そして、人間は月にて玉兎という特殊な妖怪のサンプルを入手した。玉兎は妖力の活性化にある程度順応できるという体质を持っていたのだ。

(なるほど、それが“フォースの循環”か)

それについては心当たりがあった。玉兎三技を使うために必要な妖力の運用法だ。フォースの循環とは、妖力の活性化のことだった

のだ。だから、玉兎は少ない妖力で高い威力の技を使つことができたのである。

「「」のインターフォースをウサギ妖怪の頭に移植する」と云つて、適度に調節された妖力過活性化電磁波を脳内に発信できる。すると、ウサギ妖怪は常に軽度の“発狂状態”を維持できるようになる。そうやって精神が程良く摩耗する状態を作り出し、その隙間にこちらが用意したプログラムを書き込むことで、何でも言つこと聞く操り人形となるのよ」

「おいおい、なに平然とトンボモナイ説明してくれりやつてんの！」

だいたい、それは玉兎だから耐えられるって話だろ。俺の精神が妖力活性化に順応できる保証はない。いや、確實に精神を殺される。あんな痛みに耐えられるはずがない！

「待て！ いくらガキだからって、やつて良いことと悪いことの区別ぐらいつくだろ！ これはぶつちきりに悪いことだ！」

「「」めんなさい、私、まだ子どもだからわからないの」

永琳が手元の機械を操作する。すると、ゆっくりとウサ耳が俺の頭に向かって近づいてくる。あれが頭に植え付けられれば、あの地獄の苦しみをこれからずっと味あわされ続けることになる。俺はこれ以上ないくらいに焦った。

「ふざけるな！ お前は自分が何をしているのかわかつてるとか！？ あの電波はマジでやばいんだよー 今すぐやめろー！」

「うふふ、知ってるわよ。実験に使った妖怪の末路は何度も見てきたから。怖いでしょう？ それにね、このインター・フェースは私が特別に調整したのよ。通常の100倍の強さの電磁波が発生するようだ、ね」

「俺は暴れた。手枷足枷から電流が走るが、そんなことどうでもいい。こいつは俺を殺す気だ。しかも、最も残酷な方法で。

「やめろ、死ぬ！ そんなことされたら死んでしまう！」

「大丈夫、私の計算だと一日くらには持つはずよ。簡単に調べてみたけど、あなたって結構頑丈みたいだから」

「一日…？ 嫌だ！ そんなことするくらいだつたら普通に殺せ！ 今すぐ殺してくれ！」

「あはは、それじゃあ罰にならないでしょ？ あなたには罪を償つてもらわないと」

ウサ耳が俺の頭に迫る。なんだこのアホみたいな状況。そんなかっこ悪いもの頭にくつつけて俺は死ぬのか。笑えない。

「頼む、なんでもする……謝れって言つんならくらでも謝る…！ お前の言つことを聞く！ お願ひだからこれを止めてくれ…！」

「……輝夜もあなたにそんなふうに命乞いしたのかしら？ もしあなたが私の立場だつたら、そんな願い、聞き入れると思つ？」

「俺は輝夜を殺していない！ 輝夜の最期を、あいつが安心できるように見守つてやつた！ お前は勘違いしているんだ！ 俺は何

もしてな、あ……！」

頭頂部にウサ耳がくつついた。その瞬間、脳みその中を何かに蹂躪された。視界が歪む。視覚が変わる。色とりどりの極彩色で展開していく。激痛を通り越した先にあつたのは絶望だった。

【ソウだ、云いワスれてTAワ。セツカクヒサギサンRASIK
ヒナツンデスモノ、尻尾もTYAんとツケテAGENAITO
すぐんとケツに何かが食いつく。その衝撃で俺の目の前は砂嵐になつた。もう何も見えない。聞こえない。深く深く、意識が沈む。どこまでも下に落ちていった。

26話「アナザー・サイド・永琳」

輝夜の訃報を知らされた。私は自分の研究室に閉じこもり、ひとりきりで泣いた。

先日完成したばかりの月に作られた第一調査基地。輝夜はそこで働く父親に連れ添われ、地球周回上に位置する宇宙ステーションから月へと向かつた。昨日のことだ。本当は、病状が悪化の一途をたどる輝夜をステーションの外に出したくはなかつた。新造の基地よりこちらの方が設備もそろつている。輝夜の体のことを何もわかつていらない彼女の父親を恨みもした。だが、彼は政府の長官だ。私が意見できる相手ではない。それに、今回の外出は輝夜自身の意思でもあつた。

万が一のことを考えなかつたわけではない。そのための対策はされていたはずだつた。だが、悲劇は起きた。妖怪の群れに基地は襲撃され、全滅した。原因は不明、生存者なし。襲撃時に基地からステーションへの増援要請はあつたのだ。だが、軍の上層部は基地の防備を過信していた。ことの重大さに気づいたときには、すでに基地は陥落寸前の状況だつた。その惨状にしり込みした上層部はさらに兵の派遣に手間取り、結局、軍が動き出したのは襲撃発生から6時間が経過したことだつた。

私の権限で知り得た情報はここまでである。上層部は他に後ろめたい事情を何か隠しているはずだ。一般市民には、情報統制によつて不幸な事故があつたとしか伝えられていない。悔しさで涙が止まらなかつた。

私は今まで輝夜を救うために頑張つてきた。彼女だけが、損得なしに私のことを友人として受け入れてくれた唯一の理解者だつた。私は自分の異常性を知つてゐる。私の技術者としての才能は異常だつた。年齢にそぐわない頭の良さ。それによつて得られた物は今

地位くらいのものだ。失った物は多すぎる。輝夜は掛け値なしの私の親友であり、希望だった。

私は一番大切な友達を失った。研究室にならぶ、薬の資料。すべてを輝夜のためにささげてきた。全部、無駄になつた。あれだけ燃え盛っていた、研究に対する情熱がなくなつていく。糸が切れた人形のように、私は無気力だった。

基地から帰還した宇宙船は亡くなつた人たちの遺体を回収してきた。聞いた話では、どの遺体も無残なもので原形をとどめているものは、ほとんどないという。私はとても輝夜のところへ行く気にはなれなかつた。ぐちゃぐちゃになつた彼女の死体を見て、正氣を保てる自信がない。

そこで得た情報の中に、戦地で確保したという妖怪がいるというものがあつた。基地を襲撃した妖怪はカエル型月妖怪の群れだということは知つていた。兵が基地内と周辺の確認を行つた際、それらの妖怪はすべて死滅していたという。しかし、その中でウサギ型月妖怪一匹と新種と思われる月妖怪一匹の生存が確認された。軍は戦闘の状況を聞きだすために、その二匹を捕獲していた。

上層部は私にこの妖怪たちの処理を命じた。新種妖怪の調査とその後の処分を任せられた。思えば、あのときから私の心はおかしくなつていた。

妖怪とは人間を工サにする獣である。彼らが人間を襲うことは種族的な本能であり、それは種としての正しい反応だ。だから、人間はそれを真っ向から叩きつぶすことに罪悪感などもたなくてよい。だが、私はその単純で淡泊な関係を超えた感情を抱いてしまつた。憎しみだ。妖怪が基地を襲い、輝夜を殺した。それは紛れもない事実である。私を無気力から引き揚げた原動力は憎悪という感情だつた。

妖怪は別の部門で簡単な検査をされて運びこまれてきた。新種妖怪は危険度最高ランクにあたるレベル5の妖力を保有していた。まずはこの妖怪から尋問することに決める。

「……？」

焦点が定まらない田つきで部屋を見渡す妖怪に声をかける。月妖怪が地上の言語を理解できないことはわかつてゐる。これは話しかけているというよりも、自分を冷静にさせるための無意味な行動だ。なるべく感情を表に出さないよう心がけた。

だが、気がついたときには悪魔のような思考を行つてゐる。それでも私は逡巡した。これは私の個人的で身勝手な感情だ。そのままに暴走することは間違つてゐる。調整済みの三つのインターフェースを使用するつもりはなかつた。この妖怪がある言葉を発するまでは。

「お前がえーりんなのか？ ほんとに？」

本当は違う。私の名前はハ意×××といつ。永琳の名は輝夜がつけてくれたものだ。発音じづらいうと文句を言つた輝夜が私にくれた名前。私の一番の宝物だ。輝夜がいなくなつた今、その想いはいつそう強くなる。だから、この名前を名乗つてしまつたのかも知れないと。だが、なぜこの妖怪がそんな反応をするのか気になつた。そして、その事実は私の心をかき乱す。

「はあ、輝夜の友達って聞いてたからどんな人間なのかと思つたら、とんでもねえアバズレ……うぬぐあああー！」

妖怪が何を言つたのか、理解できなかつた。永琳という名前は私と輝夜の間でしか交わされない言葉だ。それをなんでこの妖怪が知つてゐる。それに輝夜から聞いたと言つた。こいつは輝夜と話したのか。そのとき輝夜は生きていた。こいつは輝夜に何をしたんだ。妖怪は何もしていないと言い張つてゐる。輝夜は病氣のせいで死

んだという。信じられない。何もかも嘘としか思えない。仮に本当に病気が原因で死んだとしても、襲撃は輝夜に負担をかけた。襲撃さえなければ輝夜は生きながらえ、輝夜を救うための薬を私が完成させていたのだ。

「適當なこと言つてんじゃねえよ！あの病気はもう治せないほど輝夜の魂に食い込んでいた！だつたら、あと何日あれば薬は完成したんだ!? 何時間!? 何秒!? 言つてみろよ！？」おらあ！」

言い返せない。悔しい。もう後戻りできないほどに、激情が私を支配していた。インターフェースをこの妖怪に取り付けないと気が済まない。

それまで余裕を残していた妖怪は急に焦り始めた。いいざまだ。輝夜も、こうして苦しめながら殺したに違いない。許せなかつた。生まれてこの方、ここまで感情をあらわにしたことはない。私は、やめてくれと泣きながら懇願する妖怪を見捨てる。装置を止めることはなかつた。

それからは、いつも通り。実験で精神が壊れた他の妖怪と同じだ。物言わぬ人形になつた。しかし、私の心は晴れることがない。

「ははは……」

乾いた笑いがこぼれる。それは自嘲だつた。自分の浅はかさに嫌気がさす。それでもとまらない憎しみ。私はどうすればいいのかわからなかつた。

インターフェースを取り付けた妖怪は、静かに目を閉じて動かない。今頃、終わることのない悪夢を見ているはずだ。しかし、その体はインターフェースから送られるプログラムによつて、こちらの思い通りに動かすことができる。

「あなたが悪いのよ……私だってあの子と最後のお話をしたかったのに……もっと、たくさん一緒にいたかったのに……」

ただのハツ当たりだ。枯れたと思っていた涙がまたあふれ出す。妖怪の少女はほとんど人間と変わらない容姿をしている。深い眠りについたその顔は美しかった。まるで、王子様のキスを待つ眠り姫のように。だが、その双眸は唐突に、ひとりでに開かれた。

「オレハヤツテナイ」

「ひつ……！」

勝手に口を開く妖怪。私は心臓が縮みあがる思いをした。そんなことはありえないのだ。この妖怪の意識は完全に掌握している。だから人形。人形はひとりでにしゃべらない。

「オレハコロシテナイ」

無機質で抑揚のない声。だが、はっきりと喋っている。私は床にぺたんと尻もちをついていた。血の気が引いて行く。氣味が悪いなんてものじやなかつた。

「だ、黙りなさい！ 話していいと命令はしないでしょー！？」

「オレノセイニスルナ」

妖怪の体がボコボコと膨れ上がる。それまで可憐な少女の形をついていたソレは、異形の物体へと変化していた。威圧を実体化させるほどの妖力があふれている。それはまるで樹木のお化けだった。

体のところどころに緑の葉が生えている。

拘束具から発生する電流などものともせず、強引に破壊して脱出された。その物体の膨張はなおも止まらず、あつという間に研究室を覆い尽くすほどの勢いで成長していく。壁には薦が張り巡らされ、肉なのか植物なのかわからない怖氣の走る物質が脈動しながらぶよぶよと膨らんでいく。

『ロロシテヤル』

もはや私にどうにかできる状況ではなかつた。私に向かつて薦が伸びてくる。足に絡みつこうとするそれを必死で振りほどいて研究室の外に出た。半泣きで扉を閉めて緊急警報のスイッチを押した。すぐさま武装した兵士が駆けつけてくる。

事情を説明して後はここを兵士に任せようとしたが、まだ詳細な状況がわからないので、ここにいろいろと言つ。一般的の兵士風情が誰に向かつて命令しているのだ。私はこんなところに1秒でもどどまつていたくなかった。私の慌てぶりを見てただ事ではないと感じたのか、兵士たちも緊張し、余計に私を開放してくれる様子がなくなつた。

研究室は危険な実験を行うことも想定されている。もしものときは隔離できるように、その扉は内部と外部の空間を完全に遮断できる構造になつてゐる。扉を閉めた今はさつきまでの悪夢が嘘のよう静かだ。とにかく扉を開けなければ中がどうなつてゐるかわからぬ。兵士たちは意を決して封印を解いた。

その途端、中からあふれ出すナニカ。半固体状のうごめくナニカが我先にと外に出てこようとする。扉を開けた兵士はあつけなく飲み込まれ、音もなく姿を消した。他の兵士は銃弾を撃ち込むが、めり込むだけで効果がない。レーザー兵器で焼き切つてもすぐに再生する。

幸運だつたのは、最初に飲み込まれた兵士が生きていたことだろ

う。彼は最期の力を振り絞つて扉を再び閉めたのだ。降りてきた扉に引きちぎられ、ナニカはようやく活動を停止した。

私は迷わず制御室へ連絡を入れた。研究室の区画をステーションからページする。言つまでもなく最終手段だ。一応、その権限は有しているが、お咎めはあるだろ。だが、そんなことを言つている場合ではなかつた。なによりも恐怖といつ感情が先行していた。そして、その命令は実行された。

* * *

私は何をしているのだろうか。

後に残つたのは、心を埋め尽くす空虚だけだ。

取り返しのつかないことをしてしまつたと、事が終つてからようやく認識する。私が手を下した哀れな妖怪は、大気圏中で燃え尽きながら地上へ落ちていつたことが確認された。

今、私は遺体安置室に来ている。会議を終えた私の足は自然とそこへ向かっていた。

輝夜に会いたかつた。あの妖怪が言つていたことを確かめたかつたのだ。

「輝夜……」

その体は私の記憶にある輝夜のまま。誰にも蹂躪されたあとなど残つていない。そして、その表情は安らかな笑顔だった。

輝夜が眠るその傍らで、膝をついて泣き崩れた。私は、これまでにない、本当の意味での妖怪に対する罪悪感を抱いていた。

「『めんなさい』……」

27話「ウサギは何を見て跳ねる」

俺は森の中を歩いていた。ドスグロイ森。

たぶん、森。木らしきモノがたくさん生えているからな。それにしても、へたくそな木だ。クレヨンで塗りつぶしたみたいな色をしている。もつと丁寧に色づけしてやれよ。

こんなところにいたら気が滅入る。俺は休むことなくこの森を歩き続けていた。一日も休まない。しかし、ここには太陽の光がとどかないでの、いつが昼でいつが夜かわからないのだが。早く出たい。俺はショーンベンしたいのガマンしてるんだよ。わざと出してくれないか。

『げるげるげる』

『』からともなく笑い声が聞こえてくる。いつものことだ。それより、俺の体はどうなっているんだ。テキトーな色付けしやがつてだから、丁寧にやれって言つただろ。見る、腕のところの肌色がはみ出してる。ちゃんと線に沿つて塗れ。お前は塗り絵も満足にできないのか。

『げるげるげる』

『うるせえなあ』

この笑い声、上から聞こえてくるんだよな。俺は上空を見上げる。その視界の遙か上まで伸びあがる木の幹。遠近法の原理に従つて、天を突くその先端はかすんで点になる。光はどどかない。見あげていると、何かが落ちてきた。わざわざ俺の真上にだ。俺

はぶつかないよつに急いで移動する。

それはさつきまで俺がいた地面に叩きつけられた。赤い汁が飛び散る。なんだこれは。

『げおRづうREO』

それは卵だった。赤い卵。魚卵のやわらかな膜が破れ、中からどうりとヘドロが出てくる。じつと見ていると、大きな目玉が一つあることがわかつた。しつぽがあつて、オタマジヤクシのよつ。孵化の直前だったのだろう。今にも死にそうなシラしてくせに、俺のことを見て笑つてやがる。

『お前がずつと笑つてたのか。ん？ うおつ！？』

また上から卵が降つて来た。べちゃりべちゃりと地面に落ちて、熟れ過ぎた柿のように散乱する。運悪く、その一匹が俺のすぐ近くに落ちてしまつたために、汁がひつかかってしまった。

『汚ねえ、汁飛ばすんじゃねえよ！ クソが！』

俺は潰れた卵を蹴り飛ばす。いけない、足にも汁がくつついてしまつた。

『あーもー、最悪だ……』

べちやり

足元を確認していた俺の頭の上に何かが直撃した。吐き気を催すほど生臭く赤黒い粘液が俺の頭上から垂れてくる。最悪だ。

俺は頭の上からやわらかい肉の塊を引きずり降ろした。そいつは

俺の手の中で元気に「ビチビチ！」めいている。ぎょぎょぎょぎょの田中で俺をせせら笑うオタマジャクシ。不愉快極まりない。

『失せろ』

地面上に落として踏みつけた。腹から細長い内臓がはみ出す。いい氣味だ。もう一回ふんづけてやろうと、足を振り上げる。

べけやり

また、落ちた。俺の頭の上に落ちた。赤い粘液が滴り落ちる。ふざけるな。こいつら俺を狙ってるんだ。自分の命をかけて俺をからかっている。この憎々しい笑顔。うざこいつざこいつざい。

『この両生類が！ 何様のつもりだ！』

近くの木の幹に叩きつけた。俺は、えーっと、爬虫類だぞ！ お前らより偉い。鳥類>爬虫類>>>>>>>>>>両生類なんだよ。

そこでふと気づく。俺の肌が赤く塗れていた。

『ああああああああああああああ！』

クソクソクソ！ 俺の肌になんてことしてくれるんだ！

俺は必死に赤い粘液を拭いとる。でも、ダメだ。俺の肌色と混ざつて変な色になる。肌色にもどらない。俺の肌色になんてことを。お前らの臭くて汚い粘液のせいだ。だいたい肌色って何色だよ。白、黒、黄色？ ほら、もうわからなくなつた！

あと何匹、木の上に隠れていやがる。俺は目を凝らして頭上を見上げる。

『ぱるぱる』

いつぱいいる。無数にいる。木の枝に実つている。新たな生命を実らせる樹。そして、その命を冒涜する。

『落ちてこいー。』

俺は跳ねる。ジャンプジャンプ。
赤くて丸い月見て跳ねる。

でも、どどかない。奴らは俺の遙か高みにいる。俺を見下して笑つている。

『そつか月そつか！なら、俺がお前らのところに行つてヤル！一匹ノコラズもぎ取つてヤル！』

俺は木の幹に手をかける。つかまりどころのない真っ直ぐな木。爪を食いこませてでもしがみついた。そして登る。ひたすら昇る。その俺の顔面に向けて赤い月が落ちてくる。登つている最中だ。避けることはできない。月がぶつかる」と、俺の体が赤く染まる。俺の定義がわからなくなる。

『チクショウ！ フザケヤガツテ！ イマニミトロー。』

どこまで登つても終わりがない。地上はかすんで見えなくなつた。それでも木は上へ上へと続いている。いつたいいつまで登ればいいんだ。このままじゃ、頂上にたどりつくより先に俺が俺でなくなつてしまつ。

そのとき、俺の行く手に何かがぶら下がつていた。今まで一本もなかつた横枝がある。そこに、ウサギの首が吊り下げられていた。

真っ赤に塗れて、輪郭しか残っていない。

【アウル、無理DAYお。キリは地上ノ上もビックタ方ガト】

『ウルセエ！ オレハイク！』

【不可ZOだ。僕たちMITAIなREタイノ？】

お前の言つことは聞き取りづらー。

俺は気にせず登つて行く。しばらくすると、またウサギの首がいた。

【やめたHOIガいいWA。今SIOぐ引き返シテ】

吊り首を引きたれつて捨てた。ウサギの首は見る見る下へ落ちていき、すぐに見えなくなつた。

それから何時間経つたか覚えていない。何日か経つたかもしれない。あるいは、何秒かだったのだろうか。

なんでたどりつけない。もう十分登つたはずだ。頭は赤く染まつていた。もうそこは“俺”じゃない。これは毒だ。俺という存在を殺す毒。早くしないと俺のすべてが毒に染まる。そうすれば、あのウサギみたいに意味のわからないナニカにされてしまう。

俺を突き動かす力の源は憎悪だつた。ひたすらにあの赤い月が憎い。怒りではらわたが煮えくりかえつて口から飛び出そうだ。必ず俺の手でもぎる。

『オチロ』

もぎつくる。

『オチロ』

永琳、俺はお前を。

『オチロー』

俺はあれからどうなったのだろうか。

永い悪夢を見ていた。終わりのない悪夢。だが、俺はそこから抜け出した。

依然として俺の妖力は電波によつてかき乱されている。一瞬でも気を抜けば、あの悪夢に逆戻りだ。それだけはなにがなんでも避けなければならない。一度とあんな夢はみたくなかつた。

俺が目覚めると、そこは花畠だつた。天国にでも来たのかと思つたが、すぐにその考えは否定できた。空に月があつたのだ。ということは、ここは地球である。俺は、どういう経緯かまた地上へもどつてきていた。

ここが月ではないという事実に俺は落胆した。いや、落胆なんてものじゃない。絶望した。永琳は月にいるのだ。地球からどうやってあいつのところへ行けばいいのだ。

俺の姿は一本の大きな木になつていた。まるで六島苞である。体に残る妖力の性質か、無意識にこの形をとつていた。そして、その妖力の量を見て愕然とする。とんでもない増量だつた。それはつまり、俺がとても長い年月を生きた証である。その量は、千年や万年というレベルの増加量ではなかつた。

まったくもつて嬉しくなどない。永琳は人間だ。この億にも届こうかというほどの歳月を今もまだ生きているはずがない。俺は絶望を通り越して発狂しかけた。悪夢と現実との間を何度もさまよつた。俺がこうして正氣を保つていられるのは、ひとえに永琳という存在がいたからである。あいつへの復讐心が俺を悪夢からの解放へ導いたのだ。やり場のない憎しみは、それでも消えず、静かの俺の心の奥底に沈澱していった。

「今日は気分が悪いみたいですね。大丈夫ですよ、私がついていりますから」

そんな俺の心の支えとなつたのは、一匹の妖怪だつた。彼女は俺が悪夢にうなされると、俺の傍にずっと一緒にいてくれた。別に一人が心細かつたわけではないが、彼女はどうやら植物に関する能力をもつているようで、傍にいてくれるだけで俺の精神はいくらか和らぐ。

彼女は珍しい人型の妖怪だつた。緑色の髪で、赤いチェックの柄のベストとスカートを着ている。人の形をとれるということは、それなりに力をもつていると推測できた。俺を中心として円のように作られた花畠も、この妖怪が世話をしているようだ。彼女は植物の世話をすることが好きらしい。

「えへへ、今日も人間さんたちにやられちゃいました……」

だが、彼女は好戦的な性格をしていなかつた。そればかりか、妖怪として致命的なほどにお人好しである。人間をおどかすどころか、薬になる薬草を提供する始末である。提供といつより無理やり強奪していると言つた方がいい。彼女が強気に出ないことにかこつけて、人間は執拗に薬草を寄こせと迫つてきた。渡さなければ退治すると脅してくる。お人好しの彼女は断るということを知らないのか、言われた通りにしていた。

害がないのでお目こぼしされているが、彼女も妖怪であることに違いはない。ときには人間から攻撃を受けて、傷ついて帰つてくるときもあつた。

彼女は人間を襲ふことはしないので、自分で妖力を調達することができない。その代わり、植物たちから微量の妖力を少しずつ分けてもらい、飢えをしのいでいる。なんとも情けない限りだ。だが、世話になっている身なので、俺もケチらず渡している。求められる

分よりも多く妖力を渡していた。

「…」こんなにたくさん……いつも、ありがとうございます…」

億年生きた俺からすれば、髪の毛の先ほどもない微々たる妖力だ。使いどころもないし、いつそのこと全部渡してしまっても構わないのだが、彼女が受け取ろうとしない。

俺は妖力をもつた木の妖怪として彼女に認識されているようだ。妖力の大半は根っここの下にある甲羅に溜まっているので、妖力がダメ漏れというわけではない。しかし、俺の妖力によつて、この辺り一帯の大地は肥沃なものへ変化しているようである。これも六島苞の妖力のなせる業か。いつも感謝されるのだが、俺は何もしていいので困る。

俺は自分から彼女に話しかけることはなかつた。念話を使えば木の姿でも話はできる。だが、最初はそんな余裕はなかつた。狂気に思考がもつて行かれないようにするのに精いっぱい、彼女の話に付き合つていてる暇はなかつた。しだいに安定してくると、鬱陶しくて仕方ないと感じるようになつた。いちいち木に話しかけてくる変な女である。無視し続けていた。

それでも、彼女は俺に話しかけ続けた。最低、一日に一回は声をかけてくれた。それは、悪夢に苦しむ俺を助けようという彼女のやさしさだ。俺はそのうち、彼女の話に耳を傾けるようになつていて。つまらない世間話ばかりで面白みはないが、それでも一人で考え込むよりましだ。復讐という生きる目的をなくした俺は、それ以外の何かに目を向けていなければ、すぐに狂気に取り込まれてしまう。彼女がいたからこそ、これまで俺は自分ではない“ナニカ”になることなく、今もここにいることができるのだ。

「そろそろ季節は冬ですね。見てください、今日はこんなにいっぱいドングリ拾いました！」

俺は彼女の名前を知らない。たぶん、最初に自己紹介したのだろう。そのときの記憶が俺にはない。

俺はそれからしばらくの間、名前も知らない妖怪とともにこなつたりとしたあてどない時間を過ごしていた。

29話「お話をねむ」

「おい、花妖怪！ 言つておいた薬草はむやんと用意したんだ違うな？」

「は、はい！ 今もります！」

ある日、人間たちが俺たちの花畠に来た。小汚い着物を来た山賊のような連中だ。俺の世話を焼いてくれている花の妖怪は、以前に頼まれていたのであるひづ薬草をもつていく。

「なんだこれだけか？ もっとねえのかよ！」

「も、もうあつません……」

季節は冬。木々は葉を落とし、雪化粧をしている。縁など生えているはずもない。彼女がもつていた薬草は、夏のうちに乾燥させて保存していたものだった。

「ちつ！ これだけじゃ全然足りねえ。お前、妖怪なんだろ？ なんとかしろよ」

「そんなの無理です」

「使えん奴だ。あのなあ、お前みたいな弱小妖怪いつでも退治できるんだぞ？ もつと人間様に誠意をもつてだな……」

「アーキー！ じつになんか草っぽいのが生えてますぜー！」

人間の一人が花畠の雪をかき分けて、新芽を探す。春夏とにぎわいを見せたこの花畠も雪が積もり、さびしいものだった。ただ、地中には種が埋められている。春になればまた元気に育ち、美しい花を咲かせるだろ？ その前に摘み取られなければの話だが。

「そ、それは薬草ではありますん！ 採らないでください！」

「まあ、薬草なんて誰も見分けつかないだろ。余計な草で水増しして売りつければ、なんとかなるか。よし、全部採っちゃまえ！」

「やめてください！ ひどい」としないでください！」

「うるせえ！ お前は黙つてろ！」

人間の一昧の親玉らしき者が花の妖怪を蹴りつける。彼女は身を丸めて防御するだけで、反撃しようとはしなかった。そのうちに、手下の人間たちが花畠の芽を摘み取ってしまう。新雪の白い絨毯が敷かれていた畠は、人間に踏み荒らされて見るも無残なものだつた。

「春になつたらまた来るぜ」

人間たちは好き勝手をはたらくと、足早に引き返していった。起き上がつた妖怪は、体についた雪をはらいおとす。そして、自分が丹精込めて育ててきた畠の惨状を見て、目に涙を浮かべた。

「うぐう、ひぐう、なんでこんなことするの……！」

彼女は俺のもとへとやつてくる。その根元でうずくまつて泣き続

けた。人間がここまで来たのは初めてだ。この場所は知られていなかつたはずだが、いつの間にか彼女はあとをつけられていたのかもしれない。

腹が立つた。俺は今まで一度も彼女と口を聞いたことがない。彼女は最初から俺のことを言葉が話せないものと思っているようだ。俺も最初は彼女のことを無視していたから、話しかけるタイミングを逃したということもあって、これまで何も言わなかつた。だが、今日ばかりは腹にすえかねる。

『おい』

「つ！？ だ、だれ？」

『俺は木だよ。木さんとでも呼べ』

「もしかして、あなたなの！？ お話しできるのね！」

彼女はまだ泣きつ面だが、嬉しそうな笑顔になる。そんな顔してる場合じゃないだろう。

『お前は馬鹿か』

「へ？」

『なんで人間にやり返さない』

なによりもイラつくのは、こいつの態度だ。さっききた人間連中に言つことは、特にない。人間が妖怪を敵視することは当然だからだ。あいつらがやつたことは間違つてない。問題はこいつにある。

『妖怪は人間を襲うものだ。人間は妖怪を恐れるもの。それが俺たちの存在意義だろう。なのに、お前は人間を恐れている。ちゃんとやるおかしいぜ』

「で、でも、私、みんなと仲良くしたいんです。最初から理由もなく闘おうとするなんて、おかしいと思いませんか？」

『お前の頭の方がおかしい。俺たちは理由なく人間を襲う。それが妖怪つてもんだろう。前提が間違ってるんだよ』

「確かに、そうかもしません。でも、私、思うんです。お花を見るときせな気持ちになりませんか？生きていける元気をもらえると思いませんか？そんな気持ちにさせてくれる花たちは、すばらしいものだと思うんです。私は花畠を作つて、いろんな人にこの気持ちを伝えたい。だから、人間さんとも仲良くしたいんです」

『ぐだらーん』

一言で切り捨てられた花の妖怪は、しゅんと背中を丸めて見るからに落ち込んだ。花なんてただの花だろう。それを見てどんな気分になるかなんて、見た本人の主觀次第だ。それで、幸せになれるなんてわからない。

「なれますよ！ 幸せになれます！」

『それはお前のエゴだ。そんな押しつけがましい幸せなんて、俺だったら願い下げだね』

泣きやんでいた彼女の目に、また涙が浮かんできた。

「でも、私はつ、お花が好きなんですか！ そんなこと言われたつて、諦めきれませんよお……！」

『だつたら、お前は考えを改めるべきだ。他人のためになにかしようだなんて思つた。お前は、お前のために花畠を作れ』

「え……？」

『妖怪がなんで人様に気を遣つてやらなきやなんねえんだ？ やりたいことがあるんなら、自分のためにやれよ。そんで、それを邪魔する奴は片つ端から排除しろ』

他人のためにやることなんて、あとで「くらでも言い訳がきく。自分のためにやらないことは、いつまで経つても報われない。むしろ、彼女はその“幸せ”を押し付けるべきだ。妖怪は理不尽の象徴。それが妖怪らしきってものだ。

『だが、そのためには力がいる。力がないと何もできない。何も守れない』

「私にそんな力なんてありません……」

『だつたら、一生人間にこき使われる生活を送るだけだ。花畠も諦めろ』

「……」

彼女は黙り込んでしまった。これで何かが変わればいいが。柄にもなく説教垂れてしまった。俺が言える筋じやないのにな。

30話「希望の光」

春になつたら来ると言つていたが、約束通り、また人間がここへ來た。

最近は俺の考えを受け入れ始めたのか、花の妖怪は人間との接触を拒むようになつた。まだこちらからけしかけるほどの度胸はないが、後は本人の成長次第だろう。

冬の間は草木が育たないので人間側との関わりは薄かつたが、春になつて啓蟬がごとく人間も活動を始めたようだ。

「木さん！ 木さん！」

「こいつは何を言つてるんだ？ 奇声の練習か？」

「木さん！ 返事をしてください！」

『ああ、そうか。木さんって俺のことか』

『そういえばちゃんとした名前を教えてなかつた。まあ、別に困らないので今までいいか。俺もこの妖怪の名前知らないし。』

「この森に人間たちが入つてくるのを見ました！ この花畠の方に向かつて来ています。私、どうすればいいのか……」

『普通に追い払えよ』

「それができたら苦労しません！」

元気に断言するな。彼女は人型の姿をとれるだけあって、相応の妖力をもつてているはずなんだが。

ほどなくしてやつて来た人間たちは団体と言つていいくらいの数がいた。警備の兵のような格好の奴らが多い。その中に、冬に一度ここへやつてきた人間もいた。そいつらがこの団体の道案内をしたようだ。

「ここが噂の妖怪が棲む地か」

「へい、そうでございあす」

一人だけ、馬に乗つている人間がいる。そいつだけは着物の質が他とは違つて豪華だつた。この中で一番偉い奴なのだろう。

ただ豪華とは言つてもちょっと色がついた程度の着物だ。花妖怪の話を聞くうちに前から気になつていたのだが、どうもこの時代の人間たちの文明レベルは低すぎる。俺が眠りにつく以前の地上の人間の文化はもつと発展していた。あれからとてつもない年月が経つたのだから、今頃はSF映画のようなスーパー未来都市があふれかえついてもおかしくない。もしかして、それこそSF映画のように地球の文明は一度滅亡して、再び人間の発展が起き始めているということなのか。

「おほん！ 我は藤原不比等様の使者である。お前が都で噂になつてある花の妖怪で相違ないか？」

「は、はいっ！」

「聞けばおぬし、妖怪でありながら人に施しを与えるとか。なにを企んでおるのか知らぬが、ちょうどよい。我が主が求める品、“蓬萊の玉の枝”を差し出せ。さすれば、今日のところは見逃してし

んぜよつ

「ほつりこのたまのえ？ なんですかそれ？」

「隠しだしても無駄であるぞ！ 早く渡すのだ！」

まったく滅茶苦茶なこと言ひやがる。花妖怪は本当にそれが何なのかわからぬこと言つてゐるのだが、偉そうな人間は一向に詳細を説明しようとしてしない。ただ差し出せと迫るばかりだ。

「ここには陰陽師も連れてきておる。嘘をつけばお前など一ひねりだぞ？」

「ほ、本当に知りないんですよ！」

なんか厚ぼつたい服を着た連中が札をかざしながら前に出てくる。札からは嫌な気配がした。妖怪とは相いれない代物だということはすぐにわかる。妖力とは異なる、別の力が宿っている。あれはなんのだろうか。

花妖怪もその札の力に気押されているようだ。泣きべそをかいて知らないと連呼する。その様子を見た人間は、陰陽師たちを下げさせた。

「浅ましき妖怪よ。すでに調べはついておるのだ。そこに生えている木じや、『蓬萊の玉の枝』のなる木であるぞ！」

そう言つて人間が俺を指差す。いや、違うじ。俺はそんなわけのわからん名前はしていない。

「その木を切り倒させてもらひだ」

「ダメです！」「この木さんはこの土地に恵みをもたらす大切な木なんですよ！」

「そのようなこと、陰陽師の占いには出ておらぬ。おとなしく譲渡せば、お前の命は助けてやつてもよいのだぞ？」

花妖怪は怯えていたが、俺の幹にしがみついて一歩も引かなかつた。斧を持った人間たちが近づいてきても、頑として動かない。

「ええい、そこをどけ！　これは藤原不比等様よりたまわつた命であるぞ！　それに逆らつとは、なんと不届きな妖怪よ」

「どうして木さんを切り倒さなくちゃならないんですか…？　納得がいきません！？」

「我が主はかぐや姫様への求婚の約束として、“蓬萊の玉の枝”を差し上げることを誓われたのだ！　期限はもう間もない。なんとしてでも用意せねばならんのだ！」

勝手な言い分だな。しかし、かぐや姫か。月で会つたあいつの名前を思い出す。

俺は永琳のことは憎んでいるが、あいつのことは好きでも嫌いでない。仮にあいつが生きていたとしても、ただの人間とただの妖怪というだけの関係でしかなかつただろう。

かぐや姫への求婚……たしか、高校のとき古典で竹取物語を読んだな。もうほとんど覚えていないが、そんな内容の話があつたはず。五人の貴族がかぐや姫に求婚したが、その課題として伝説上の宝物を持つてこいとパシられる。火ネズミのなんとかとか、仏のあれとか、もう思い出せん。その中に“蓬萊の玉の枝”もあつたはずだ。

当然、貴族たちは本物を用意できずに贋作を持って来て」まかそ
とするが、すべて見抜かれてしまうという話だったと思つ。

と、いうことは、今は前世の世界でいう平安時代に当たるのか？
そもそも竹取物語なんておとぎ話だ。ただ、ここは妖怪が実在す
る世界である。かぐや姫みたいに月からやってきた宇宙人の話が本
当だったとしても、今さら驚かな……

まで、月から来た、だと？

「その木から離れるのだ！　お前も一緒に切り倒されたいか！」

「嫌です！　どっちも嫌ですう！」

「しかたない、陰陽師たちよ、この妖怪を始末……つ！？　な、
なんだこの揺れは！？」

かぐや姫は竹から生まれ、絶世の美女へと成長する。様々な男性
から求婚を受けるが、それをすべて断る。なぜなら、彼女は月の世
界の人間であり、月へ帰らなければならないさだめにあるからだ。
これははたして偶然の一一致か？　確かに俺はあのとき、輝夜が死
ぬところを見た。だつたら、ここで話題に上がっているかぐや姫は
まったくの別人なのか？　そうだとしても、月の世界となんらかの
関係をもつ人物なのかもしけない。そいつとコンタクトがとれれば、
俺に植え付けられた狂気を取り除く方法がわかるかもしれない。

そして、もしもかぐや姫が輝夜本人だつたとすれば、彼女は死ん
でおらず、億もの年月を生きたことになる。つまり、永琳も生きて
いる可能性がある……！

「なんだ、何が起こっているのだ！」

「ひええええっ！」

ああ！ もう考えてもわからねえ！ 自分の目で確かめなければ！

俺は、全身の力を振り絞つて体を起こす。巨木の根の下に封じられた甲羅から手足を伸ばし、思いつきり地面を突き飛ばした。

轟音とともに体が軽くなる。俺の甲羅から生えていた木がへし折れて倒れたのだ。土の中から這い出た俺は、甲羅に絡みつく根っこを引っこ抜く。

久しぶりの外気だ。そこには、あごが外れそうなくらい驚愕した表情の人間たちと、花の妖怪がいた。まあ、気持ちはわかるが、今はそれどころじゃない。かぐや姫のことだ。

「……アア……ウガ……ヒイ！」

くそ、喉が詰まって声が出せん。俺は息を思いつきり吸い込むと、喉の調子を整えるために叫び声をあげる。

「…………ガアアアアアアアアアアアアアツ！」

痰が取れた。よし、これでたぶん普通に喋れる。

だが、人間たちに俺の叫び声は刺激が強すぎたようだ。得体のしない妖怪の絶叫を聞いて恐れをなしたのか、我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げ出してしまった。

残つたのは、俺と花の妖怪と、腰を抜かした偉そうな使者を名乗る人間一人である。一人いれば十分だ。俺は人間の方へ近づいて行

1

「ひーっ！？ だ、だれかおらんのかー
はやくこの妖怪を退治しろー！」
陰陽師はどうした！？

「妖怪としてここまで恐怖してもらえる」とは実に気分がいいの

だが、俺はただ話を聞きたいだけだ。かぐや姫はビートルの？

「な、なんだと！？ なぜそのようなことを聞く…？」

「お前は聞かれたことに答えりやいいんだ。かぐや姫は、ビートルの？」

俺は人間の着物をつかんで、怒鳴りつけながら揺さぶる。人間は目を白黒させて慌てている。あんまりやると氣絶しそうだな。もどかしい。

「み、都だ！」

「詳しい場所は…？」

「口では説明できん！」

めんどくせえ。俺はひょいと人間を肩の上に抱きあげる。

「な、なにをする…？」

「お前は道案内人兼人質だ。かぐや姫がいるところまで案内してもらひや」

「そんな！」

こいつが身分の高い奴なら人質の価値があるのだろうが、使者だからな。どれくらい牽制効果があるかわからない。まあ、そんときは力技で押し通るしかない。

「あ、あの、木さん！」

俺が人間の都まで駆け出そうとする、後ろから声をかけられた。
花の妖怪だ。俺のことを心配そうな表情で見てくる。

「あとで事情を話す。お前は人間に見つからないように隠れてい
ろ」

俺は花妖怪を無視して、背中の人間の絶叫を森に響かせながら韋
馱天の「」とく走りだした。

3-1話「アナザー・サイド・輝夜」

私は屋敷の縁側に座り、月を見上げていた。

今はまだ新月から生まれたばかりの細い三日月だが、じきに満ちる。悠久の時間を生きる私にとって、次の満月が訪れるまでにかかる時間などあつてないようなものだ。

だからこそ、時間は貴重。幾千の金にも代えられぬほどに、この一瞬には価値がある。だが、私は退屈だった。こうして月を見ながらわが身を憂うほどには。

私は月人だ。月の世界の住人。この穢れた地上に生きる者たちとは違う。生にも死にもとらわれず、ただ無為なる存在となることを望むやんごとなき月人のあり方は理解できるが、それは私にとってあまりにも味気ない。だから、私は地上へ来ることを望んだ。煩惱への執着に溺れ、穢れに満ちたこの世界は実に面白い。

永琳に作られた“蓬萊の薬”によって、私は不老不死の体を得た。月人は不老の肉体を持つが、不死ではない。不死となることを求めるは、すなわち生への執着、すなわち穢れ。それは月人の思想に反する。それがゆえに、私はあえて蓬萊の薬をあおった。不死となることなどどうでもよいことだが、私が望んだのはこの身に穢れを宿すことだ。

穢れたこの身に与えられた罰こそ、地上への追放である。要するに、私は地上へ行きたいがために禁忌を犯した。後悔などしていい。おじいさんとおばあさんに育てられたこと、言い寄つてくる男たちをあしらうこと。地上での体験は、どれも私にとって新鮮で好奇心を満たしてくれることばかりだ。

だが、楽しい時間はあつという間に過ぎていく。次の満月がくれば、私の地上への追放期間は終わる。それを思えば、ため息の数も多くなるというものだ。最近は月を見ながら物憂げな顔ばかりして

いる。おじいさんとおばあさんにも心配をかけているようでは忍びない。だが、センチメンタルなお年頃の娘だと思って諦めてほしい。

「止む」

家庭教師の永琳は私のために蓬萊の薬を作ってくれた。つまり、私が地上に残りたがっていることを知っていることになる。永琳はなぜか私に甘いので、私が地上にとどまりたいと言えば手を貸してくれるだろう。切れ者の彼女のことだ。すでにその準備を進めてい るだろう。

しかしそうだとしても、もうこの場所には残れない。月の監視の目を避けながらの逃亡生活を余儀なくされる。退屈していた私に一時のエンターテイメントを提供してくれたこの場所には、それなりに思い入れもある。なんとも、ままならないものだ。

『ハセモジのジヤーナルのどもであるべー』

『妖怪がでたぞ！』 こっちへ向かって来ている！』

『惡靈退散』

なにやら、今夜は騒がしい夜だ。静かに月を見る夜もいいが、都の穢れにまみれた喧騒に耳を傾けながら見る月も、また一興……

そして、唐突に屋敷の塀を突き破つて現れた得体のしれない妖怪と出会うのも、一興というものだろう。

その妖怪は人型だった。全身土まみれでよくわからないが、おそらく少女の形をとっていると思われる。鬼のような形相を浮かべ、

背中に大きな岩のような物を背負い、さらに身なりからして貴人と思わしき人間を抱えている。人間の方はぐつたりしているが死んではいないようだ。妖怪は体中に陰陽道の力が込められたお札が貼りつき、紫電を発している。これだけ派手にやられておきながら、倒れる様子など毛ぼども感じない剛毅さ。かなりの力を持つた妖怪なのだろう。

「おう、輝夜。久しぶりだな。やっぱり、俺の考えは間違ってなかつたぜ」

「？」

妖怪から敵意は感じない。禍々しい気を放っているが、それが彼女の自然体らしく、こちらに殺氣を向けるようなことはなかつた。近頃は私の噂を聞きつけ、さらにくる妖怪も多かつたのだが、彼女はその類ではないようだ。

それに、なんだか私のことを知つているような様子である。こんな妖怪と以前にどこかであつただろうか。いや、記憶にない。

「俺もこんなところに長居はしたくなえ。お前に聞きたいことがあるんだよ」

「私に答えられる」となり

「永琳は生きているのか」

……驚いた。まさか、ここで永琳の名前が出てくることなど、誰が予想できよつ。

月となんらかの関係がある妖怪なのか。それこそありえない。

「あなたは何者？　どこで永琳の名前を聞いたの？」

「一億年前にお前の口から聞いたのさ」

意味がわからない。しかし、嘘をついている様子もない。

一億年前になど、私は生まれてもいないのだ。そのころと言えば、永琳ならぎりぎり生きていたかもしれない。ということは、この妖怪は永琳と同じ年ということになる。頭が痛くなってきた。到底、信じられる話ではない。

「お前のその反応を見て、確信したぜ。永琳はまだ生きているんだな」

妖怪は笑った。だが、その笑顔は邪悪だった。何かにとりつかれたような狂氣の笑み。鳥肌がたつた。これは稀にみる洒落にならない相手だ。今の私は服役中のため、能力が封印されているので、この妖怪とともに戦えそうにない。まあ、不老不死なので死ぬことはないのだが。

「……仮にそうだとして、あなたはそれを知つてどうする気なの？」

「お前とは色々話がしたかったんだが、俺にはあんまり時間がなさい」

屋敷のまわりに人が集まり始めた。それは、これだけの騒ぎを起させば当然だろう。妖怪退治を生業とする陰陽師が、都にはぞろぞろいる。堀に開いた穴から入つて来た陰陽師が、印を結んで結界を作り始めた。

この妖怪もさすがにここにとどまり続けければ身が持たないだろう。

一方的にやつてきて、一方的に質問し、一方的に帰つていこうとしている。まったくもつて理解ができない。が、面白い。

「待ちなさい」

私が一声かけると、妖怪は律儀に立ち止まってこちらに振り返る。もうほとんど結界は完成しているというのに、まるで堪えていないようだ。もつと上位の陰陽師でないと対抗できないだろう。

これほどの妖怪が今ここに現れたということに、私は少なからず喜びを感じている。私の退屈を紛らわしてくれたお礼だ。彼女には、私のさらなる余興になつてもらつ。

「次の満月の夜、ここに来なさい。あなたが探している人と会えるわ」

妖怪はニヤリと笑つた。その口元は今夜の月のよつた三日月の形。ただし、赤い。

底冷えするような妖氣をばらまいて、妖怪は風のように去つて行つた。結界はあつさり破られていく。抱えていた貴人を残して、影も形もなくなつていた。

「さて、これは面白くなつてきたわ。ふふ、あの永琳の驚く顔が見られるかもしないわね」

俺は来た道を引き返し、森の木々に身を隠しながら走る。ここまで追いかけてきた妖怪退治人も、森の中までは追つてこれなかつたようだ。

空気がすがすがしい。晴々とした思いだ。輝夜が生きていた。そして、永琳が生きていたのだ。俺の不安定だった憎悪が再び燃え盛る。これで狂気を抑え込むことができる。憎悪という感情で狂気を塗りつぶせば、一応の正気を維持できる。それは、自分の中に封じこんだバケモノを鎖でつないだ紙一重の状態。狂気という犬を憎悪の鎖につなぐのだ。

表面上は俺の人格が、なんとか性格を形成しているが、一步内面に踏み込めばズタボロの精神が顔を出す。傷は膿み、腐り、いつまで経つても治らない。俺の頭の中の犬が暴れるからだ。だが、こいつを保健所にブチ込む算段がようやくついた。永琳が生きていた。この狂気もようやく終わる。

「はやくしてくれええ！　えーりん！　えーりん！」

俺は輝夜に永琳の生死について聞くつもりだった。俺の思つた通りだ。月に行つた人間のテクノロジーは常軌を逸していた。たぶん、寿命をながーく延ばす技術によつて、永琳はまだ生きているのだ。輝夜は、そうだな……死体を冷凍保存して、あとはオーバーテクノロジーで生き返らせたとか、そんなところだろう。いや、輝夜のことなんてどうでもいい。とにかくえーりん！　さらに輝夜は親切にも永琳が次の満月の夜に地上にやつてくることを教えてくれたのだ。俺は走る。頭頂部にくつついたウサギの耳を両手で引っ張りながら走る。次の満月まであと何日だ。もう一分も待てない。永琳、早く

く来てくれ。よほよほのおばあちゃんになつていてもいい。お前が生きていってくれれば俺は救われるんだ。

本当は殺してやりたい。ハツ裂きにしてハラワタを引きずり出して、痛みに苦しむ様を見ながら少しずつ腸を食うんだ。名付けて内臓ポツキーゲーム。大腸と小腸は長いからならぬ。ちょっと時間がかかるかもしねいが、その待ち時間さえ愛おしい。そして、ついに十一指腸にたどりつき、俺は永琳の血まみれのおなかに顔をうずめながら濃厚なキスをするのだ！

永琳を殺したら俺の狂気は治らない。他の月人間にも治せるかも
しないが、もし永琳にしか治せなかつたらどうするんだ！　だい
たい、このウサ耳をはずす手術を永琳以外のだれに任せられる？
見ず知らずの他人に「ちょっとウサ耳はずしてください」なんて頼
めるか？　手術中に麻酔をかけられている間に変なことされるに決
まつてゐる。

「え、でもさ、永琳だって俺に変なことするかもしれないよ」

「絶対するつて。俺が手術台に寝そべってる間に俺のあたまんな
かもつとグチャグチャにされるぜ」

だめだ。不安になつてきた。

このウサ耳、自分ではさせないかな。案外、ひつぱつたらスponつて取れたりするんじゃね？ やつてみよう。

『コノ行動ハ許可サレテイマセン』

なんか頭の中に声が響いた。この行動は許可されていません、だと？ 腕に力が入らず、それ以上ウサ耳を引っ張ることができない。つまり、俺は自分でウサ耳をはずすような行動をとることができない。

「なんでだあああああああ！？ ちくしょおおおお！ えーりんのやろう絶対許さん！ 絶対許さん！ ゆるさなえ！」

どうすればいいんだ。どんどん不安になってきた。

あの輝夜って俺が知っている輝夜だったのだろうか。もしかしたら、そつくりさんで全くの別人だつたらどうする。そうだ、クローナ人間とか。あれ、クローン輝夜だつたらどうよ。ヤバイ、この仮説はテクノロジー的に達成難易度が低い。月の世界には輝夜MK？とかMK？とかいっぱいいるんじゃないかな？ だつたら、永琳MK？とか永琳MK？もいるはずだ。

「うへへ、えーりんがいっぱい、殺しほうだいだー！ つて、そんなこと言つてる場合違う！」

G E R O G E R O G E R O !

あいつらの声が聞こえてきた。まずいな。ちょっと興奮しそぎた。落ちつかないと、狂気が暴れ出してしまう。なんだこの厨二設定。とにかく、まずは永琳本人に会つてみないと。話はそこからだ。俺なら本物の永琳を見分けられる。そして、永琳に交渉して俺のウサ耳をとつてもらつ。

ソシテ、コトワラレタラ、コロソウ。

* * *

追手を振りきつたので、俺はゆっくりと森を歩く。途中、見つけた小川で体を洗い、土を落とした。春の川の水は冷たい。甲羅は断熱効果があるのか、中身はあつたかいのだが、むき出しの手足が寒い。一応、服は着ていた。モニカに作ってもらったゴワゴワのベストと短パンだ。どちらも袖と裾がないので、やつぱり寒い。それでも、この服、丈夫だな。あれから一億年も経ったのに。もはや俺の体の一部と化しているようだ。

とりあえず、俺は元いた花畠にもどつて来た。そこに花の妖怪もいた。

「あつ！ 木さん！」

俺の背中から生えていた木が倒れている。その上に腰をおろしていた花妖怪がこちらに駆け寄つて來た。さて、こいつには何と説明しようか。念話を使ひようになつてからは、ちよくちよく話をしていたのだが、まだ俺の身の上話については何も教えていない。

「大丈夫でしたか？ 怪我はありませんか？」

「大丈夫だ、問題ない」

馬鹿正直に本当のこと話をしても、信じてもらえないだろう。こちらもあのときは口にしたくない。適当にごまかすか。だが、その前に言っておかないといけないことがある。

「あと、俺は木さんではない

「え？ だつて自分のこと木さんって呼べつて……」

「あれば嘘だ」

「ええええー！？」

「俺の名前は葉裏。カメの妖怪だ」

花の妖怪は、俺のことを本当に木さんだと思っていたようだ。木つて、お前、普通おかしいと思わないか。かなり純粋な奴みたいだ。

「お前の名前も教えてくれないか？」

「あ、はいっ！ 私は風見幽香です。花の妖怪です！」

しかし、俺たちは出会つて数十年目にして、ようやくお互^ひいの自己紹介を済ませたのであった。

33話「幽かりんといひしょ」

「そういうわけで、俺の体は悪のマッドサイエンティスト、ドクター・エーリンの手によつて改造されてしまった。俺は復讐を胸に誓い、復活の時を待つて深い眠りについた。しかし、俺が目覚めた時、すでに途方もない年月が経過し、エーリンの消息もわからなくなつた。俺は絶望し、この地に根を下ろし、ただ死を待つのみの運命をたどるはずだった……しかし！　そこに現れた偉大なる花の精霊ゆうかりんの力によつて、俺は再び目覚めることができたのだつた」

「そ、そつだつたんですか！」

「そして、物語は急展開を迎える。ドクター・エーリンの行方を知る唯一の人物、プリンセス・カグヤ。彼女がこの時代にいることがわかつた。彼女の話によれば、次の満月の夜、エーリンは人間の都に現れるという。はたして、俺は復讐をなしひげることができるのか、エーリンの真の目的とは一体何なのか、カグヤの過去に秘められた衝撃の真実……次回、最終回『放て！　闇を切り裂く拳！　死闘の終焉を越えて』。こう期待！」

「おおおー 続きが気になります！」

幽香は俺の言ひ方とをあつさう信じた。これなら用云々のことを正直に話しても信じてもらえたかもしれん。一応、俺の過去に関する話であることに違いはないので、他言無用だと言つておいた。幽香は誰にも言わないと約束してくれた。

「しかし、ゆうかりんのおかげで俺はいつして正氣でいられる。

本当に感謝してるんだ。ありがとな」

「い、いえ！ 私の力は『花操る程度の能力』です。こんなことでしかお役に立てませんが……」

幽香がこの森で俺を見つけたとき、俺は全身から呪いを噴き出し、枯れる寸前まで病気が進行していたという。彼女の力はあくまで『花操る程度の能力』。樹木である俺にも多少の応用は聞くとは言つても、専門外であることにはかわりない。だというのに、ここに住みこんで俺のために献身的な看護をしてくれたのだ。頭が下がる思いである。

「でも、病気か……呪いが噴き出してたんだよな？」

それについては心当たりがない。俺の負の感情が呪いとして現実化したということなのか？

「今も、うつすらですが、葉裏さんの体から呪いの氣を感じます」

「え？ そうなの？」

そういうえば、なんだか目が覚めてから頭痛がするし、喉が痛いし、鼻が詰まるし、咳が出るし、風邪気味だなあとつっていたのだ。俺は病に冒されているのか？

自分の健康不調の原因がなんなのか、調べてみる。意識を内面に向けて、病巣を探る。妖怪はよっぽどのことがない限り病気になどからないものだ。かかるとすれば、妖怪の命の源たる妖力に原因があるはず。自身の妖力を探れば何かわかると思つ。

そして、その考えは正しかつた。俺の妖力の中に異質なモノが混ざつている。ヘドロのように粘着質の沈殿物が、俺の妖力のプールの底にへばりついていた。これはなんだ。尋常でない呪いの瘴気を放つている。これだけ濃い呪いを体の中から食らつていれば、そりや体調も悪くなるわけだ。だが、この瘴気、なんだか見覚えがあるぞ。

「そうか！ これはデスフロッギングの……！」

月でデスフロッギングの大群が人間の要塞にしかけた戦い。そこで戦死したカエルたちの屍からあふれ出した瘴気と同じものだ。しかも、あのとき見たものより断然濃度が高い。今の俺の状態は、人間にしてみれば液状の硫化水素を丸飲みしたようなものだ。よく風邪の諸症状程度で済んでいるな。

おそらく、この瘴気は肉体よりも精神に影響する性質がある。狂気に長年耐え続けた俺だからこそ、平氣でいられるのだろう。つまり、俺はウサ耳の怪電波とデスフロッギングの呪い瘴気の一重苦を味わわれていることになる。なんというバッドステータス地獄。

さらに原因を探ると、この瘴気の出どころは俺の甲羅の中になつた。要塞の内部で拾つたデスフロッギングの卵である。こいつが腐つてドロドロに溶けだし、瘴気を発していた。激辛蜜柑も腐つてカビが生えだし、同じナマモノの卵もこれだけ放置すれば腐りもするだろう。しかも、最悪なことに甲羅の優秀な密閉性によつて、卵に蓄えられていた妖力を逃さず閉じ込めていたのだ。そのせいで、半ば癒着する形で腐つた卵が俺の体と融合してしまつっていた。

「あー、なんかさあ、妖怪の卵を拾い食いしたんだけど、それが傷んでたみたいで、中つちやつたみたいなんだよね」

「ええ！？ それで呪われたんですか！？」

幽香によると、自分と比べて妖力が高すぎる相手を食つた場合、呪われることがあるらしい。妖怪各々が個人でもつ妖力には、千差万別の性質が宿る。俺の持つ妖力と幽香の持つ妖力も一緒のようでは違ひがあるのだ。妖力は妖怪にとってのエネルギーなわけだが、自分の持つ性質と異なる妖力を体に取り込んで、それを100%自分のものにできるわけではない。それをいつたん消化して、自分の性質と馴染ませた分だけ取り込むことができる。その消化による口済みは大きい。食事によって得られる妖力はそれほど高いわけではない。

そうして、消化しきれなかつた分の妖力はもつたいないが、体外に排出することになる。自分と異なる性質の妖力は異質なモノであり、それをいつまでも体内にとどめておくと害をもたらす。それに、自分よりも巨大な妖力を持つ相手を食うようなとき（普通、そんなことは滅多にないが）、取り込んだ妖力の消化処理が間に合わず、異質な妖力に体を冒されて中毒を起こすのだという。それがここでいう呪いだ。

ちなみに、食われる側が自分から妖力を譲り渡したときは、この拒絶反応はあらわれないようだ。そんなことを進んでする妖怪なんているとは思えないが。

以上、ゆうかりんの妖怪講座でした。へえー。

「どうことは、だ」

それを踏まえて考察するに、次のような仮説を立てた。

俺が最初に他の妖怪から妖力を得た機会は、六島芭との出会いだ。最終的に、あいつは俺の体を乗つ取ろうとして、自分の妖力をすべてそこに集めたが、結局そもそもくろみは失敗する。さらに長年肉体同士を融合し続けた結果、俺と六島芭の妖力は同質性を持ち、拒絶反応を起こさなくなつていたのではないだろうか。そういうわけで、

奇跡的に妖力の譲渡が問題なく成立した。これは極めて稀なケースだろう。

次に、デスフロッギングの卵に含まれていた妖力は膨大だった。しかし、俺がもともと持っていた妖力に比べれば小さい。よって、普通に拾ったときに食べていたなら、こんな中毒を起こす結果にならなかつたはずだ。そのときは、俺が消化しきれなかつた分の妖力は体の外に捨てていただろう。

だが、俺はあのとき甲羅の中に卵を入れ、それを放置した。この点が曲者だ。俺の甲羅の中の空間は、一応、俺の体内と定義づけられるようである。その劣悪な環境（？）の中で、卵は死に、腐敗した。だが、その腐った妖力は甲羅の密閉性により外に漏れ出さず、ずっと甲羅の中とどまつた。その結果、卵だつたモノが甲羅の中で俺の体と癒着。腐敗した妖力を消化処理もせず、丸ごと腹の中に入め込んだ状態になつてしまつた。

生まれてもいない卵に意思があつたのか、定かではないが、こいつは俺のことを拒絶している。徹底的に俺の妖力と馴染もうとした。にもかかわらず、俺と無理やり合体してしまつたために、俺から離れることができないでいる。A型の血液の人間に、B型の血液を輸血してしまつたようなのだ。

俺は立ち上がり、息を深く吸い込む。

「すうひーー……げつほん、げつほん、げつほんほん！」

思いつきり咳をしてみた。喉の奥から黒い霧状の瘴気があふれ出す。瘴気はいくらでも俺の体から湧き出してくるが、その瘴気を生み出している肝心の腐った妖力は、俺の中にへばりついて出てこようとしている。これを取り出すことは今の俺にはできそうにない。血の中に混じつた毒が体を巡つているようなものである。どうやってそれを抽出するというのだ。妖力の人工透析のしかたなんて俺は知らない。

さらに、腐つた妖力は億年もの間、俺と一緒に狂氣の電波を浴び続けた影響か、そこから発する瘴気はすさまじい“ニオイ”をさせていた。歯が溶けそうなくらい甘ったるい匂いだ。意識して嗅ごうとするだけで、頭がクラクラして何も考えられなくなる。もともとデスマクロッグが持っていた妖力の性質である“呪毒”に狂氣が組み合わされたもの、名づけて“狂呪毒”！ 試しに、幽香に息を吹きかけてみた。

「ふうーっ！」

「……ふにゃあー！」

一発で田を回して倒れ込んだ。

これは俺自身、気分が悪くなるので使いたくない技だが、何かの役に立ちそうだ。うえつ、胸やけがひどい。

34話「血傷行為」

「葉裏さんのウサギさんの耳って、かわいいですね」

「ああんー?」

「ひひひー、じ、じめんなさいー。」

いかん、つい殺氣を放ってしまった。このウサ耳のせいでしょうかは毎秒頭の狂う思いをしているのだ。褒められてもうれしくない。あれから俺たちは森の中をうろつりしながら気ままに生活を送っていた。元いた花畠は陰陽師が来て結界を張つてしまつたのだ。別に簡単にぶつ壊せるのだが、この大事な時期に人との間に問題を起こしたくない。わざわざ自分から厄介事の種をまく必要はないだろう。

幽香は自分の花畠がめちゃくちゃにされてしまつたわけだが、意外と気にしていないようだ。また別の場所を作るつもりだと言つ。俺の背中の木が、この地に恵みを与えていたよつで、その木がなくなつた結果、ここは元の廃せた土地にもどりそつだと言つていた。しばらくは、俺と一緒にここにどじまるが、いつかここから離れて畠に向いた土地を探すそつだ。ふらふらと森の中を歩き回る俺の後ろを、いつも雛鳥のようについてくる。

「はつー、そうだ! ゆうかりん、俺のウサ耳をつかんでくれー!」

そういうえば、まだ一つ可能性を残していた。俺はウサ耳インター フェースから直接脳に下されるプログラムによつて、自分でこのウサ耳をはずすような行動を取ることができない。

しかし、他人である幽香になら俺のつづきをばく抜いてくれるかもしれん！

「えっと、これでいいですか？」

「もつと強くこぎつて！」

俺はあれから毎晩、悪夢にうなされながら眠っている。いつのまにか、気がつけばウサ耳を触る癖がついていた。いつもいつもウサ耳を揉みまくっているうちに、耳はよれよれになり、もはやウサ耳なんかなんのかわからない形になっている。

さらに最悪なことに、俺のケツにはウサギの尻尾までついていた。これは、短パンの中に隠している。これもインスターフェースの一部なのだろうか。

「いいか、いちこのさとで、思いつきじ引つ張つてくれ！」

「ええ！？ も、そんなことしたら痛くないですか？」

「痛くてもいいんだ！ 手加減なんかせずに引っ抜け！」

「ほ、ほんとこいいんですね？」

「ああ、やつてくれ。……中途半端に力を入れるのだけはやめてくれよ。ひとおもごとにブチッとやれよーーー！」

「わかりましたっ！」

俺は腰をかがめ頭を突きだし、幽香は俺の耳を両手でつかんでい。緊張の一瞬。なんか、失敗する雰囲気がバリバリ出てるが、俺

はやる。やつてやんよー。

「いや、ここの…… わんー。」

「えいっー。」

その瞬間、俺の脳内がショートする。原色ギトギトの極彩色が視界を埋め尽くし、世界がぐにゃぐにゃと秩序を失くした。

『へでゅあべお〇▽BRYくおWX2ベBbあRばせおしづびいいいいいい！…』

これは、シャンパンボトルのコルクだ。ウサ耳はコルク栓。抜けば、頭蓋ボトルから脳サケがしぶきを上げて噴き出してしまう。受け止めるグラスなんてない。俺の能天気な自我が、外気に触れて劣化してしまう。

【DAいじょブテSUKあ！？ シックCRISIてぐダさー。】

俺は頭を押さえてうずくまる。頭頂部にはウサ耳がある。抜けなかつたようだ。抜けていたら、俺は死んでいただろう。やっぱり、力技でこいつをどうにかするのは無理なようだ。

* * *

月人は強い。

その科学技術は俺の前世とは比べものにならないほど進んでいる。一億年前で、それだけの技術をもっていたのだ。月人も文明が地上と異なる発展を遂げたのなら、今頃月にどんな世界が広がっているのか想像もつかない。

俺はたまに人間のもとへ近づいた。情報収集するためだ。都に近づくと陰陽師に妖力を察知されるので、姿を隠しながら森に面した道の近くに潜み、通りかかる人間の話を盗み聞く。それによると、かぐや姫は次の満月の夜に、月からの迎えが来て、月の世界へ帰ってしまうのだという。それを知った帝が、かぐや姫の月への帰還を阻止すべく、兵を集めているようだ。

このあたりは、俺の知っている昔話と内容が一致する。次の満月、それは永琳が地上へ来る日だ。つまり、永琳は輝夜を月へ連れ戻すためにここへ来るということなのだろう。竹取物語では、人間は月人の力の前に無力化される。それを可能にする技術があるのだ。

その月人に、俺は一匹で立ち向かわなければならぬ。普通に考えれば、無謀である。だが、やらなければならない。なんとしてでも永琳との接触を果たさなければならないのだ。

そのためには、力が要る。月人に対抗するだけの戦闘力が要る。

「ふう、せいっ！」

俺は妖力弾の練習をした。妖力の量は無尽蔵だ。一日中、全開でぶつ放しても妖力切れは起きないだろう。

だが、これだけではだめだ。威力が弱すぎる。何発撃てようが、一発にこめられる威力には限界がある。これでは月人のシールドに阻まれてしまうだろう。

妖力弾はあくまで補助的に使うことになる。やはり、肉弾戦を主体に考えるべきだ。妖力の増加に伴って、筋力も増した。素手で岩を碎くことなど造作もない。当たればいかに月人といえども、致命傷は避けられない。当たれば、の話だが。

そこで、俺が考えついたのは、かつてロバートに教わった月のウサギの武術『玉兔三技』を使えないかという案だった。

「……」

まずは精神を集中し、妖力の動きに意識を向ける。

“フォースの循環”が可能となれば、爆発的な効率をもつたエネルギーの運用ができる。三技のすべてをこの短期間で習得することはできないだろうが、その運用法だけでも使えるようになれば多少は使えるようになるはずだ。

フォースとは、すなわち妖力。それを体内で回転させる。かつての俺は、ロバートに教えられてもこの技を身につけることができなかつた。体の中の妖力は緩やかに対流するばかりで、エネルギーからエネルギーを生み出すことなど不可能だと思っていた。

だが、その考えは誤りだ。“フォースの循環”とは、言いかえれば、妖力の活性化現象。つまり、妖力は通常ではそのエネルギーを完全に使用可能な状態になつていないので。いや、妖怪はあえて活性化を無意識のうちに封じ込めている。そうしなければ、開放された力に精神を壊されてしまうからだ。

「ぐ、おおお……！」

月のウサギは活性化に伴う精神への影響に耐性があった。だから、少ない妖力でもそれを何倍にも増幅させ、使用することができる。

俺が妖力を活性化できない理由は簡単だ。ビビッている。妖力のプールで水遊びする程度の度胸しかないから使えない。本気で活性化しようと望むなら、そのストッパーをはずさなければいけない。

水槽は肉体。水は妖力。回転の力は妖力を回す。水槽の外にこぼれるくらいの勢いで臓物をかき回さなければならない。そうでなければ、体外に自分の妖力を実体化させ、自在に形成させることなどで生きるはずがない。それはつまり、自分という殻を自ら破壊する行為だ。精神の崩壊と循環のエネルギーとの狭間で、己を律することができる者のみが、この力を得ることができる。

妖力弾はただの妖力の排出行為でしかない。おしつこをひつかけ

るのと一緒にだ。膀胱に尿が溜まつていれば、猿でもできる。それと異なり、妖力の活性化は内面から精神を破壊する。その結果、自己意識の破壊によって、自分という存在の定義があいまいになる。そこでうまく利用し、自己の定義を拡大解釈するのだ。それによって、肉体という縛りを超えて、体外に自己の妖力の影響を及ぼすことができる。妖力で肉体が形成されている部分が大きい妖怪という種族だからこそできる、規格外の荒技だ。

こうして改めて原理を考えてみると、どうあがいてもできそうにはない。だが、俺は幸か不幸か、いや、不幸にも妖力過活性化電磁波を思い出すのも億劫になるほどの長期にわたって浴び続けた。そのせいで、活性化が精神に及ぼす影響を、嫌というほど味わっている。あとは、自己意識の破壊に慣れ、存在の拡大解釈ができるようになれば、活性化の力を自分のものにすることができる。

俺はそれから毎日、狂氣と闘いながら瞑想を繰り返した。

34話「血鷹行為」（後書き）

佛印抄のWikipediaを今さら見て愕然とする作者。

月夜見に関しては、後付けですが設定を作りました。機会があるときに記載します。

「うおええええっ！」

「葉裏さんっ！」

吐き気を催した俺のもとへ幽香が走つてくる。俺の額に流れる汗を手ぬぐいで拭いてくれた。幽香は俺が何の特訓をして自分を追い詰めているのかわかつてないが、いつも俺の傍にて見守つてくれた。

自分という存在を壊さなければ力を扱えない。しかし、完全に破壊すれば俺という存在が消滅する。適度にその中間を保たなければならぬ。言うなれば、精神をスカスカのスポンジ状態にしなければならないのだ。そのスポンジに水、つまり妖力を吸わせた状態に保つ。そうすれば、水をスポンジの外ににじみ出させることができる。だが、当然スポンジなので、ちょっとした衝撃で簡単に凹み、水をどばどば吐き出してしまつ。自我が垂れ流される。その工程は筆舌に尽くしがたい。

さらに面倒なことに、俺が妖力を活性化させると、例の腐れ卵が悲鳴をあげるのだ。他人様の妖力なので、そつちは俺の管轄外である。だが、俺と融合しているので俺自身もある。アパートの隣人が深夜に轟音をまき散らしている状態といえようか。

腐れ卵は液状化して、妖力そのものに近い形になつてゐるようだ。普段は俺の妖力と決して混ざることなく、プールの底に沈殿しているのだが、循環回転させることでその性質が表面化する。つまり、大量の瘴気をまき散らす。活性化中の俺は体中から黒いオーラを醸し出すよつになつた。すげえ、悪役設定。

そのせいで俺は活性化を行うと、頭を狂氣で冒されるだけでなく、

全身を駆け巡る瘴気の毒のせいで強烈な体調不良を起すようになってしまった。幽香はこんな俺でも嫌いにならずに付き添ってくれる。「ええ子や。

満月の夜まであと少し日は残っていない。俺はほとんどの時間瞑想に費やしたが、三技を使えるようになるには程遠かった。やはり、付け焼刃ではダメか。

「ちくしょう、これだけやってもダメなのか。自己破壊はきついができるようになったけど、拡大解釈ができない。その自己破壊でさえも、気を抜くとすぐに状態を維持できなくなるし……」

「えっと、葉裏さんが何をしているのかさっぱりわかりませんけど、気を落とさないでください。なんか、そのオーラだけでも私、近づくだけで気絶しそうなくらいですよ。葉裏さんは十分強いです

オーラというのは、瘴気のことか。なるほど、これは“呪毒”だ。それ単体でも周囲に悪影響を及ぼす。その効果の対象は妖怪や人間にとどまらないだろう。息抜きに、ちょっと技を開発してみるか。

俺は軽く妖力を活性化させ、瘴気を発生させる。セットで内臓までぶちまけそうな吐き気もついてくる。それは気力で飲み込むとして、俺は特に拳に集まる妖力を活性化させた。拳から黒い瘴気が噴き出す。えっと、技名は何にしよう。よし、これだ。

「はああああ！ 暗黒殺法・呪闇拳！」

叫ぶと同時に、近くの木を殴りつけた。その衝撃で木はへし折れ、そして俺の拳から感染した呪毒が全体に広がっていく。若々しい青い葉を茂らせていた木は見る見るうちに枯れていき、碎け散った。おいおい。

これはただのパンチであって、玉兔三技は使っていない。俺が受

けた呪いの副作用だ。いまいち、自分では納得いかないが、今はこの技で我慢しよう。殴るだけすでに人間にとつては致命傷なので、そこにさらに呪毒を投与するなんて嫌がらせをすることに意味はない。だが、月人に俺の純粋な筋力による攻撃が通用するかわからぬ今、少しでも手数は増やしておきたい。月人の妖術に対抗する技術は高いので、おそらく防がれてしまうだろうが。

さっき殴りつけた木は極端に呪毒の影響を受けたが、普通の妖怪なら自身が持つ妖力である程度抵抗できるので、ここまで効果は望めないとと思う。人間には効くだろうが、靈力という力をもつた陰陽師なら妖怪と同じ理由で抵抗されるだろうな。そういうえば、つい手ごろだった木に攻撃を当ててしまった。幽香は植物を大切にするので、怒っているかもしれない。

「ゆうかりん、『ごめ……』

幽香は俺から10メートルくらい離れた木の陰に隠れて、涙目で震えていた。マジでごめん。

* * *

俺は甲羅の中の物を整理した。

月で要塞に入ったとき、いろんな物を突っ込んでおいたことを忘れていたのだ。ぱくつた物の中には、月人の兵器もあった。もしかしたら、大幅戦力増強もありえる。なんでこんな大事なことを忘れていたんだ。

とりあえず、甲羅の中に入っている物を全部引っ張り出す。大量のガラクタがどんどん出てきた。力チカチになつた激辛蜜柑も出た。お前はもういいよ！ 確か前に全部捨てたと思ってたのに、なんでまだ入つてんだよ！

「何をやつてるんですか？」

「んー？ ちょっと持ち物の整理をな。くそ、どれもこれも使えねえもんばっかしだ」

兵器はあった。ハイテクなレーザー銃だ。だが、どれも燃料切れ。一億年もメンテナンスしてないので、錆ついて鉄クズ同然だつた。比較的状態がいい物を一つだけ取つておき、後は穴を掘つて埋めた。月人に突きつけられ、コケ脅しには使えるかも知れない。

「ん？ なんだこれ？」

かさばる兵器類はすべて捨てたが、他にも何か入っているみたいだ。取り出してみる。

それは、一本の短剣だつた。刀身を鞘から抜き放つ。そこに錆はなかつた。どこまでも黒い刃が冷ややかに光つてゐる。これをくれたジョージの顔が頭に浮かんだ。ジョージは俺と同じく、頭に偽ウサ耳をブチ込まれ、人形となつた。人間のやり方は気にくわないが、方法としては冴えた手だ。楽に月面での労働力を手に入れることができるのである。俺が人間の立場だつたら、迷うことなくその手を選ぶだらう。ただ、ほんの少しの感傷は俺の心中にもあつた。

そして、もう一つ。くすんで茶色くなつたベレー帽が出てきた。ロバートもいい奴だつた。モニカもだ。ふたりはあの後、どうなつたのだろうか。永琳に改造されてしまつたかもしれない。だが、今となつてはすべてが過去のことだ。遠い記憶の奥に隠れてその片鱗をのぞかせるにすぎない思い出。

俺は短剣を腰に差し、帽子をかぶつた。帽子の中にウサ耳を隠す。ロバートはこの帽子を、戦いで耳を失くした戦士に贈る名誉の証だと言つた。だとしたら、滑稽なものだ。俺はくつつけられた耳を隠すためにこの帽子をかぶるのだから。自嘲の笑いがこぼれた。

「葉裏さんの甲羅つて、いろんなものが入ってるんですね。魔法みたいですね」

「そうか？ むづかりんにもなんかやるつか？」

幽香にはお世話になつたからな。月の珍しごとお土産でもプレゼントしてやる。お、なんかちょっとよそいが……

『月人お酒の友シリーズ？ ヒマワリの種』

「……」

なんで持つてきたし。」丁寧に真空パックされており、未開封の袋を外から見る限りでは、食べられそうな気がしないでもない。だが、無論、食いつもりはない。

「ゆづかりん、これあげる」

「え！？ いいんですか！？ ありがとうございます！」

幽香にあげた。花の種だと思っているようだ。まあ、そりなんだけど、たぶん炒つてあるよね。でも、幽香なら能力でじうにかできるかも。

「ヒマワリって、いふんですか？ どんな花なんでしょう？」

「黄色くて、太陽みたいな花だよ」

「わあ、すいこです！ 絶対、この子たちを育ててみせますね」

「う、うん。頑張つて」

なぜか節分の鬼の話を思い出してしまった。

36話「ガール・ミーツ・ガール」

満月の夜が来た。俺は一昨日から一睡もできなかつた。だが、絶好調だ。空に浮かぶ丸い月。その光を見るだけで、俺の心は高鳴つた。嬉しくて、嬉しくて、思わずジャンプしたくなる。

「ゆうかりん、行つて来る。俺は行くぞ！ 永琳に会うんだ！」

「は、はい……気をつけてくださいね……」

幽香に見送られて俺は森を飛び出した。薦のサンダルを踏みしめて、夜の森を駆け抜ける。甲羅を装着し、腰のベルトには短剣と壊れたレーザー銃をねじ込んだ。そして、頭にはベレー帽。装備は完璧だ。

都の門の前の木陰に隠れる。都はぐるりと堀に囲まれ、出入りのための門が四方に四つある。この固いそのものが結界になつており、妖怪が侵入するとすぐに陰陽師に発見される。うまくかいぐるには、小さな妖力しかもたない妖怪であるか、相当うまく妖力を隠し通せる者でなければならない。俺は妖力を隠すのが苦手だ。甲羅に押し込めば結構ごまかせるが、それでも元の妖力が大きすぎるため、すぐにバレてしまう。

乗り込むタイミングはまだ後だ。今日は都中が月人の襲来に備えて殺氣だつている。そのため、月からの使者が来れば、ここにいてもすぐにわかるだろう。本番の前に余計な体力を使いたくはない。月人はあなどれない相手だ。万全の態勢で挑まなければ。

本当は今すぐ輝夜がいる屋敷に乗り込んで、陣取つてみたい。我慢だ。我慢我慢我慢。我慢しろ。

俺はこれ以上ないくらいに興奮していた。飛び出しそうになる体

を何とか理性で押さえつける。徹夜で血走る赤い目で、瞬きもせず
に月を見つめ続けた。月人はあそこからくる。一瞬たりとも田は離
せない。月がゆっくりと中天にさしかかる。時間の流れが遅すぎる。
早く來い！　早く來い！

そして、そのときは来た。

「來た……！」

月の光の中に点が見えた。その点はだんだんと大きくなる。俺は
笑顔になった。だめだ、もう笑顔にしかなれない。ようやくだ。よ
うやく、永琳に会える。俺の悪夢が終わる！

俺は理性の縛りをかなぐり捨てる。頭で考えるよりも早く、体が
動いていた。都の堀を飛び越えて、家々の屋根の上を走り抜ける。
俺の甲羅の重量はとんでもない。そんな体重の俺が藁でできた家屋
の屋根の上に飛び乗れば、すぐに陥没して落ちてしまう。だが、俺
は踏み出した足が沈み込むよりも速く反対の足を踏み出して先に進
んだ。水面に荒波を立てるかのように屋根を破壊しながら走り抜け
る。

俺は一直線に輝夜の屋敷へ駆けつけた。屋敷の前に降り立つと、
警護の兵士たちが一斉にこちらに振り向く。

「いーっひひひひふへはほあほあほあひやああつはふああー！」

笑い声を抑えきれない。もつと静かに登場する予定だったのに。

「よ、妖怪だ！　妖怪が出たぞー！」

「よりこもよつて、こんなとき！」……！」

「しかも、この妖氣、ただものではないぞー！」

兵士たちが刀を抜いて俺を包囲する。俺は妖力を活性化させて、体から瘴気を噴き出した。その禍々しさに恐れをなしたのか、構えるばかりで斬りかかっては来ない。

そうするうちに、天からの使者の全容が見えた。形式ばったことに、空飛ぶ巨大な牛車での登場だ。その牛車から、瘤に障る力があふれ出た。電磁波だ。その波長に触れた者は、事切れたように眠りに落ちる。警護の兵士たちは全員、一瞬にして無力化されてしまった。

俺も眠くなつた。強烈な催眠電波によつて、思考がシャットアウトされそうになる。発狂電波の次は催眠電波かよ。月の宇宙人は、つくづく毒電波攻撃が好きな連中だ。

俺は妖力をさらに活性化させた。“眠氣”を“狂氣”で押さえつける。さらに、腰から短剣を抜き、自分の腕に根元まで突き刺す。妖怪の体は頑丈だ。このくらいで死にはしない。痛みで眠氣を吹き飛ばした。

すぐさま輝夜の屋敷に乗り込む。縁側には、輝夜とその隣に立つ、え、ええ、え、

「えーりん」

永琳がこちらを見た。きょとんとした表情で、俺の顔を見つめる。そして、その表情は次第に驚愕の色に染まっていく。

俺の顔はそれに合わせて、どんどん笑顔になつた。たぶん、ひきつつてうまく笑えていないと思うけど、笑顔だ。歓喜した。永琳は俺のことを覚えている。億年経つた今でも、俺のことを覚えていてくれた！

この感情をどう表現すればいいのかわからない。俺の全身の細胞が湧きたち、震えている。そう、これは神と対峙した信者のように。永琳は俺を悪夢から解放してくれる神なのだ。

「あ、ああ、えり、た、け」

声がうまく出せない。ほら、早く言わないと。

俺は一步一歩かみしめるように前へ進み出た。永琳はなぜか、それに合わせて後ろに下がる。逃げなくていい。俺はお前と話がしたいだけなんだ。

だが、俺の前に何かが立ち塞がつた。永琳が見えないじゃないか。邪魔だ。消える。

「 - - - - !」

血しづきが舞う。なんか邪魔な物があると思つたら、人間だつた。月人だ。俺があんなに恐れていた月人。それが俺の腕の一握いで肉塊になつた。結局、こんなものなのか。がつかりしたよ。何のために強くなろうとしたのかわからない。でも、いいんだ。永琳に会えたんだから、すべてはどうでもいいことだ。

「えーりん、俺だよ。覚えてるんだろ?」

「いや、来ないで」

永琳の声だ! 永琳は幼かつたあのころと比べて、随分と大人っぽく成長していた。永琳が綺麗に育つてくれて俺もうれしい。

「ほら、見てくれ。お前が俺に植え付けた地獄だ」

俺はベレー帽を取り、ウサ耳を見せる。永琳の顔が青くなつた。永琳はきっと、俺にこんな物を取り付けたことを後悔しているんだ。だから、頼めばきっとはずしてくれるはず。俺の狂氣びょうきをきれいさつ

ぱり治してくれるに違いない。

俺は永琳を怖がらせないよう、エガオを心がけながら、ゆっくりと近づいて行く。

「ひい……来ないでって言つてるでしょ！？」

『命令認識。待機シマス』

俺の頭の中に声が響いた。その途端、俺の足が動かなくなる。あれ？おかしいな。これじゃ、永琳のところに行けない。永琳が何かしたのか？永琳の奴、きっと照れてるんだ。だから、俺にいじわるするんだ。

俺は脳内に直接下される命令を無視して、足を踏み出す。

『“ヒラー”ガ発生シマシタ』

まだ命令は有効なのか、俺の足は棒のように固まつて動かない。でも、無視した。コンクリートで固められたみたいに動かしにくい足を前に踏み出す。一歩あるくだけで、プレス機で脚を粉碎されているような感覚が走る。でも、気にしない。ぎこちなくだが、前に進む。そのうち脚の感覚がなくなってしまった。しかたがないので、四つん這いになつて、前に進む。

「……永琳、これはどうしたことなの？この妖怪は何？なぜ、あなたはそんなに怯えているの？」

「ち、違うの！私は悪くない……！私は輝夜のことと思つて、だからそんなつもりはなかつたの……！」

もう、腕の感覚もなくなつた。匍匐前进もできない。腹ばいの格

好で寝そべったまま、首を動かして何とか前に進めないか試してみたが、ダメだ。口の中に土が入るばかりで、進めやしない。

「えーりん、もういじわるはよしてくれよ。たすけてくれよ。たすけて、えーりん」

「やめて……もうやめて……」

大丈夫、俺は永琳を信じている。永琳ならできる。もう俺は、怒つてないんだ。だから、はやく、はやくはやく、はやくしてくれ。そうしないと、もうおそれきれそうにない。いまのうち、おれがじつとしているうちに……はやく。

「まさか、こんなことになるなんて思つてもいなかつたわ。ちょっとしたサプライズになれば、くらいのつもりだつたんだけど……永琳、しつかりしなさい。まあ、玉兎が地上にいるのはびっくりしたけど、たかが妖怪一匹程度に怖がりすぎよ。それに勝手に自滅してるじゃない」

「……」

「まつたく、しょうがないわね。私たちは、こんなことに時間を取つていられないのよ。わざわざここから逃げないと……永琳？」

「……」

「どうしたんだ？　俺は気になつて首を動かした。永琳の方を見上げる。

永琳は俺に向けて、銃を構えていた。

「うそ、だよね、えーりん、なんで……」「…

「あなたの病は私には治せない」

永琳は泣いていた。泣きながら、銃の引き金に手をかける。おそらく、レーザー銃だ。いくら妖怪といふども、頭部を焼き切られれば死ぬ。

「なにをいっているんだ？　たすけてくれよ、えーりん」

「あなたの悪夢はあなた自身が生み出したもの。その苦しみを癒す方法は、ただ一つ」

嘘だ。俺は永琳を信じている。永琳なりできるはずなんだ。

「『めんなさい』。これはすべて、私の責任。だから、私が決着をつける。その悪夢を終わらせてあげる。私の手であなたを」

……このクソアマ。

「『殺す！』」

引き金が引かれる寸前、俺は四肢と頭部を甲羅の中へ引っ込んだ。
憎い。
殺したい。
もう我慢できない。

狂気を集める。

感情が振り切れるまで。

怒り狂え。

『“エラー”が発生しました』

『GEROGEROGERO...』

「アガアアアアアアアアツ！」

感覚なんてものに頼るからおかしくなるんだ。すべて怒りに任せてしまえ。憎しみを力に変える。愛と正義と友情と裏切りと悪と憎悪だよ。

俺は甲羅から飛び出した。視界を極彩色が埋め尽くす。モザイクだ。世界がモザイクにしか見えない。目の前にある二つの物体。青と赤の色をした棒と、黒色の棒がある。たぶん、永琳は前者だ。俺はすべての殺意をそこへ注いだ。

【×××××××××××】

もう、なんて言つてゐるのかわからねえよ。とにかく殺す。全身全霊、頭の先から足の先まで、すべての力を拳に集める。間違つた。すべての憎しみだ。

思えば、最初から俺はこうしたかったんだ。永琳を見た瞬間から、ずっと殺意を殺していた。この状況はそれを解き放った帰結にすぎない。水が高いところから低いところへ流れるのと同じだ。

ああ、至福のとき。俺は永琳を殺せるんだ。例えるなら、仕事上がりにゆっくり風呂に浸かって、その後冷えたビールを飲み干す感じ。たまらない。このときが来るのをずっと待っていた。俺が殺した初めての人間は……そいつは、さつきの月人だった。俺の童貞

は永琳に捧げられなかつた。残念だが、しかたがない。許してくれ。一瞬だ。一瞬で俺の拳は永琳の体を貫くはず。ちんけなシールドなんか目じやない。さあ、永琳、食らつってくれよ。

そして、俺の拳が、永琳の前で、止まつた。

『コノ対象ハ“マスター”登録サレテイマス。攻撃対象一指定テキマセン』

『GEROGEROGERO...』

は？

俺は目の前の青と赤の物体に向けて拳を振るひ。当たらない。蹴りならびうだ。当たらない。

なんで。どうして。いみがわからない。ふざけるな。あとひゅつとだつただろ。え。まで。おかしい。あんまりだ。

感覚は憎悪でじまかすことによつて、待機命令を無視できた。だが、最初から攻撃対象に指定できないつて、それじやあ打つ手がない。

俺の姿は永琳にじう映つている。殺氣を放つておきながら、手足をぶんぶん振り回しておかしな動きをするだけの哀れな人形だ。なんてマヌケ。ははは、はははははははははははははは！！

「う、そ、だ」

『GEROGEROGERO...』

青と赤の棒と、黒の棒が移動する。すつと滑るよつに俺の前から離れていく。

俺の周りには、いつの間にか、白い棒がたくさん立ち並んでいた。
なんだお前ら、今それどころじゃない。永琳を追いかけないと。白
い棒は俺の行く手を遮つてくる。へし折る。片つ端から棒をへし折
つて行く。細切れにして食づ。食べる。食する。

俺は永琳の後を追つて山に入った。永琳たちは歩いて移動した。ということはまだ月には帰っていない。今なら間に合つ。早く追いかけるんだ。追いぬけ。俺が一等賞だ。お前らになんか渡さん。でも、五等賞も捨てがたい。

知らないうちに俺は血まみれになつていた。体中傷だらけだ。腕には俺の愛剣が突き刺さっている。だれがこんなひどいことしたんだ。俺は剣を抜いて、鞘にしまつた。そして、右の眼空に鞘ごと突き刺す。血と肉が飛び散つた。よし、しつくりきた。でも、穴が小さくて奥まで入らない。これではすぐに外に出てしまう。念入りに深く突き刺しておこう。ぐりぐり。

山の中を進んでいると、何かが俺の前に飛び出してきた。妖怪だ。俺は颯爽と腰に差していたレーザー銃を構える。

「手を上げろ！　お前は完全に包囲されている！」

俺の前に現れた妖怪は、鬼だった。人間の大男のような体格で、頭に角があり、皮膚が赤い。間違いなく鬼だ。それか、セールスマン。

とりあえず、射殺する。

「ばきゅーん　　ばきゅーん　　お前は死んだ」

「なんだお前？　俺に喧嘩売つてるのか？」

鬼が拳をパキパキ鳴らしながら近づいてきた。俺のレーザー銃の光線を受けて死なないとは、この鬼、かなりのテダレだ。俺の編み

物教室レベルでは、もはや通用しないこと言つても過言である。

「はつ、まさかお前は、えーりんの手下なのか！？」

「はあ？」俺は「」の山に住む鬼だ

やはり、永琳の配下の者であるようだ。どうりで強いと思つた。
これは俺も本気を出さなければ。俺はレーザー銃を腰に戻した。空
手のポーズで迎え撃つ。

「鬼さん、暴力はいけません。お互いの見解が食い違つときは、手を上げて自分の主張を発表すべきです」

「「「ちや」」」ちや ウルセ工奴だ！ 鬼に喧嘩を売るってことがどういふことなのか、お前にもわかつてゐるだら？ セツセツと始めよつぜん

鬼は先手必勝とばかりに、じわじわに向かつて来た。それに対し、俺は土下座からの前転キックを繰り出す。鬼は俺の蹴り足をつかんだ。そのまま持ち上げようとする。

「お、重つ！？」

鬼が体勢を崩した。今だ！

俺は鬼の腹にしがみついた。 そのたくましいお腹を、 吐める！
ペロペロペロペロ。

「……なにしてんだ、お前」

ペロペロ、ん、いのお腹……腹筋が六つに割れている、だと!?

腹筋を一個、むしり取つた。鮮やかな赤色をした血のしたたる筋纖維だ。

「ぐああああー!? テメエ、やつてくれたな!」

鬼が俺の頭を殴る。右目の穴から剣が吹つ飛んだ。いや、さすが永琳の配下の者、ブリティッシュショジョークがうまい。座布団三枚はかたいだろう。

「はつはつはー! 傑作でしたね!」

「な、何笑つてんだ、テメエ……」

鬼さんが俺の体を突き飛ばす。そのとき、俺の腰からレーザー銃が滑り落ちた。俺は慌てて拾おうとする。あぶない、あぶない。

「なんだ? 人間の使う道具か?」

俺の手がレーザー銃に届くより先に、鬼がそれを無造作に踏みつけた。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あー!」

俺のレーザー銃が!

俺はすぐに鬼の太い脚を両手でつかむと、二つにへし折り、引きちぎった。

「ぎゃああああああつー!」

「クソクソクソクソー! 俺の銃に何してくれてんだ! 謝れ!」

俺の家族に謝れ！」

倒れた鬼の体を、瘴気を纏つた拳で殴りつける。筋肉をはぎ取る筋繊維をむき出しにする。これで、水中でも呼吸できるようになつた。

「はあ、はあ、はあ……！」

鬼は死んだ。きっと仲の良い友達がドライブスルーまで死体を運んでくれるだろ？

俺は鬼を殺すと、踏みつけられた銃を確認する。幸いにも、銃はやわらかい土の上に落ちていたので、踏まれても壊れていなかつた。

俺は飛んでいつた短剣を回収し、右目に突っ込みなおした。そのうちに、あたりが騒がしくなる。なんと、ぞろぞろと鬼たちがまた現れたのだ。さっきの鬼の悲鳴を聞きつけてきたか。さすが、永琳配下の特殊部隊、勘が鋭い。

「おひおひー……喧嘩か？ 俺たちも混ざる……あ？」

「な!? ひでえ殺し方しやがる! お前がやつたのか!?

俺はすぐにレーザー銃を構えた。鬼たちに向けてレーザー弾幕を放つ。

「聞く耳持たねえか。どこの妖怪か知らねえが、この山にはこの山の淀がある。俺たち鬼の一族に刃向かう奴は、誰であろうと力でねじ伏せる！ 覚悟しろ！」

やはり、レーザー攻撃が効かない。強敵だ。

どうやら、こいつらを倒さない限り、先には進めないようである。
わざと殺して永琳を追いかけよう。

* * *

軽く鬼を全滅させた俺は、山の頂上を目指して走っていた。
月は中天を過ぎ、山の向こうに消えようとしている。急がなければ

ば。
そして、山頂に到着した。木々がなく、開けた場所に出る。永琳
はいない。どこに隠れているんだ？

「なーんか、今日は山が騒がしいと思つてみれば、とんでもない
来客もあつたもんだ」

声が聞こえた。広場の中央に転がる大岩の上に誰かいる。それは
少女だった。ひらひらした服を着て、頭に大きな一本の角があつた。
ひょうたんを手に持ち、それに口をつけてある。中身は酒だろう
か。変な飾りのついた鎖をも体に巻きつけている。

彼女は誰だ。頭に角があるから、鬼？ でも、小さい女の子だし、
もしかして、校長先生かもしれない。だったら、挨拶しないと。

「いんばんわー、校長先生ー」

「ふはー！ 今日も酒がつまー！」

しかし、どうして永琳がいない？ どこへ行つた？ ここには校
長先生しかいないし……

はっ！ もしや、この校長も永琳の手下！？ 永琳め、校長先生

まで配下にもつとは、底が知れない。

「なるほど、ということは、校長はさしづめ中ボス。校長を倒さなければ、永琳は姿を見せないとこうじか」

「お前も酒飲んでくかー？」

校長先生……こいつは強敵だ。ザコの特殊部隊とはわけが違う。なんたって校長だ。おそらく、レーザー光線は効きそうにない。本気を出さなければバイナップルにされてしまへ。

「その手は食わんぞ！　ぱきゅーん　ぱきゅーん　くそう、やつぱりレーザーが効かない！　肉弾戦で決着をつけるしかない！」

「まあ、そうだな。酒盛りの前に、一勝負やるとするか」

校長は岩の上に立ちあがつた。校長先生だからって生意氣だ。俺のこと見下しやがつて。この高給取りが！

「あたしの名前は伊吹萃香。ま、せいぜい楽しく殺りつじやないか」

39話「アナザー・サイド・萃香」

酒呑童子として人間に恐れられ、この山に居座るようになったのはいつのことだったか。仲間の鬼たちを集めて、勝手気ままにやつてきた。酒盛りをしてはしゃぎ、気に入った人間をさらっては勝負を挑む。最近は人間たちが鬼の扱いを心得てきたようで、どうにも面白みがないが。

満月の夜のことだつた。雲もかららない月見酒にうつてつけの良い月だ。この山に客が来た。どこぞの馬の骨とも知れない迷子の妖怪だ。調子に乗つて勝負を挑んだ鬼が殺された。その後に続いてのこのこ出ていつた連中の残らず皆殺しだ。怒りを通り越して笑ってしまう。なんともわかりやすく、すがすがしい奴じやないか。

仲間が殺されたことには腹が立つ。だが、鬼が力比べで負けて殺されたのだ。憤慨以前に興味がわいた。

鬼とは妖怪の上に立つ妖怪だ。その象徴は絶対的な力である。普通の妖怪では真正面からぶつかつても勝つことはできない。妖怪最強の種族だと自負している。その鬼の一族を複数相手にして殺したとなれば、異常も異常、とんでもない大妖怪に違いない。

妖怪は頂上を目指して山を登つてくるようだ。ちょうどいいので、酒でも飲みながら待つことにした。どんな奴がやってくるのか、楽しみである。仲間を殺したおとしまえはきつちりつけるつもりだ。だが、勝負に負けただの勝つただの、きつたりはつたりは手前の勝手。そんな腕つ節のいい妖怪がいるのなら、ぜひともに酒を酌み交わしたい。命までは取らずにおくかと思つていた。

だが、こいつはだめだ。一目見て思つた。やばすぎる。

「「んばんわー、校長先生ー」

そいつは、私と同じくらいの背丈の少女の姿をしていた。粗末な服と帽子を身につけていたが、鎧だけは巨大でもののしい有様。鎧から突きでたむき出しの手足は、関節がおかしな方向に曲がつており、骨折しているのは一目瞭然だ。どうして平然と立つていられるのか不思議である。肌は傷だらけで全身血まみれだつた。そして、右目は潰れ、その穴に剣の鞘を突き刺している。だが、鬼を相手にしたのだから、その程度の負傷で済んだことの方が驚きである。容姿に関しては、多少奇抜だが、妖怪なんてそんな奴ばかりだ。特に気にならない。

問題はそいつの放つ気迫だ。ここまで強烈な殺氣は感じたことがない。妖力もでかい。私より遥かに上だろう。肌を焼くように突き刺さつてくる。厄介な相手だ。だが、それもいい。これは私も手を抜いていられない。本気で命のやりとりをすることになる。

まったく、勝負の後の酒がうまくなりそうだ。

「その手は食わんぞ！　ぱきゅーん　ぱきゅーん　くそ、やつぱりレーザーが効かない！　肉弾戦で決着をつけろしかない！」

相手もどうやらやる気のようである。私は立ちあがつて宣戦布告した。

さあ、楽しい勝負の始まりだ。

* * *

手始めに、私が座つていた大岩を片手で持ち上げ、投げつけてみた。

「なんて怪力だ！　さすが校長先生！　俺も負けてらんねえ！」

すると妖怪は、避けるどころか自分から岩に飛び込んできた。そ

のまま頭からぶつかり、大岩を頭突きで粉碎する。大した石頭だ。

「食らえ必殺！ 暗黒殺法・呪闇拳！」

その勢いのままこちらに突っ込んできた。妖怪の体から黒い霧が噴出する。なんの技だろうか。様子見に、避けずに防御してみる。受け止めた腕に衝撃が走る。みしりと骨がきしむ音がした。

「……！ なるほど、呪いね」

黒い霧は私の体にまとわりつくように浸食してきた。これは生きる者すべてに無差別に害を与える呪いだ。しかも、強力極まりない。むせかえるような甘い匂いをさせ、容赦なくこちらの思考能力を奪おうとしてくる。えげつない神経毒だ。

私は浸食が進む前に、体内から妖力を発して呪いをはねのけた。一発ならどうということはないが、連續で当たられると厄介である。まあ、それなら避ければいい話だ。

「はあああ！ 呪闇連衝拳！」

それは相手もわかつていて、連續で高速の拳を撃つてきた。息を飲むような速度でいくつもの黒い拳が壁のように迫ってくる様は見ていてぞっとしないものがある。私はその一つ一つを落ちついてかわしていく。

「な、なぜ当たらぬ！？ 貴様、エスパーか！？」

妖怪は動搖した。その隙は大きい。連撃の攻撃を見切り、蹴りを胴に差し込む。

「え、なんで？ 何が起きた？」

内臓を潰す氣で蹴ったのだが、まったく効いていないようだ。多少よろけはしたが、平然としている。それよりも、私の攻撃が入ったことに驚いているようだ。鎧は見た目どおり、頑丈か。ならば、手足か頭を狙つた方がいい。

「やるな！ 校長！ さすが中ボスだ！」

「やつきからあたしのことをコーチョーって呼んでるみたいだけだ、あたしの名前は萃香だよ」

「萃香さん！」

「そうそう！」

妖怪は、またもや黒い拳で殴りかかってくる。もう決まり手が見えてきた。私はあぐいをしながらその攻撃をかいくぐる。それにしても、ひじの関節が逆方向に骨折しているのに、よくこんな無茶な正拳突きをぽんぽん撃てるものだ。可哀そだから、関節を元の方に向に戻してやろう。

ぱきっ

「あつ」

私の手刀が妖怪の腕にきまる。おつと、普通ならここで痛みに怯むところだが、こいつはそんなこと気にならないのかもう片方の手で構わず殴りつけてくる。それを受け流して脇に挟み、後ろに回つてひねりあげる。そのまま引っ張つて肩を壊した。

「あれ？ あれれ？ おかしい。なんで？」

「はあ、思つたほどじやなかつたね、あんた。動きがド素人だよ」

確かにこいつの攻撃は速いし、重い。鬼たちがやられた理由も納得できた。だが、動きが読みやす過ぎる。牽制も何もない真っ直ぐの攻撃しかしてこないと、構えを見た時点で予測できる。

こういう始めから力が強い妖怪というのは、すべての闘いを真正面からの力技で片付けようと/or>する。そして、その方法を通用させるだけの実力がある。格下の相手ならそれで問題なく倒せるだろ/う。だが、実力が均衡してくると、途端に泥仕合になってしまつ。相応の技術を身に付けた相手なら、実力の差を覆して勝利をつかみとることも不可能ではない。

鬼がいい例だ。最初から力をつけて生まれたばかりに、いつも決まつた一つ覚えの闘い方しかできないのだ。鬼の私が言えた義理ではないが。この妖怪もたぶんそうだ。実戦不足が如実に攻撃にあらわれている。

はつきり言って拍子抜けだ。こんなんじや、全然物足りない。勇儀とじやれあつていた方がまだ楽しい。やつぱり、考えが変わつた。こいつと酒を飲んでも楽しくなりそうにない。ここで殺してしまおう。

「お、俺は強い！ こんなところで死ぬわけがない！ だつてまだ中ボス戦だよ！？ エーりんもまだ出てきてないのに！」

「ああ、あんたは強いよ。でも、相手が悪かつたのぞ」

一撃で仕留めよう。私は妖力を練り上げ、拳にこめる。一息で相手の懐へもぐりこんだ。このまま顎を撃ち抜いて脳天まで碎く。さ

すがにこの頑丈な妖怪でもただでは済むまい。

「い、いやだ！　えーりん！」

「おおお？」

だが、私の思惑ははずれた。なんと、相手の頭が鎧の中にすっぽりと引っ込んだのだ。目標を失くした拳が空を切る。大きな隙ができてしまった。追撃に備えて空中で体勢を整える。だが、相手からの攻撃はない。妖怪は、カメのように手足もすべて鎧の中に隠れてしまったのだ。なんとも芸の多い奴。

しかし、これでは手が出せない。試しに殴ってみたが、案の定こちらの手が痛くなるほどかたい。持ち上げようとしても、尋常でない重さだった。鬼に言わせるのだから大したものだ。

「おーい、でてこーい」

無反応。つまらない。

私は大きくため息をついた。ここは向こうが顔を出すまで気長に待つか。

何かぶつぶつと小さな咳き声が聞こえてくる。カメ妖怪は甲羅の中で何か独り言をつぶやいているようだ。私は能力で音を『萃めて』聞いてみた。

「なんで俺の攻撃が効かないんだ!?　俺は負けるのか？　ここでゲームオーバー？　そんなの嫌だ！　あいつはおかしい！　強すぎー！　ゲームバランスが狂ってるー！」

なにやら、私に対しても文句を言っているようだが、聞きなれない言葉ばかりで何の事だかわからない。自分が敵わない理由がわから

ないらしい。哀れなものだ。

「たすけて、たすけて、たすけて」

最後は命乞いだ。本格的に興味がなくなつた。こんな言葉を盗み聞きする価値もない。勝負の最中に逃げ出すなど、妖怪の風上にも置けない奴だ。さつさと殺して、終わらせたいところである。ひょうたんの蓋を開け、酒をあおる。早く出てきてくれないものか。

「んあ？」

それは酒を口に含んだほんの少しの隙だった。甲羅に手をやる。気配がない。甲羅はそこにあるのだが、そこから先ほどの感じていた殺氣を読み取れない。

そのとき、ぞくりと背筋に悪寒が走った。背後でいる。いつの間に移動したんだ。甲羅の鎧を脱ぎ捨てたのか。よしよし、少しほは樂しくなりそうじゃないか。

「不意打ちなら、もひとつ殺氣を隠しなよ」

私は後ろへすぐさま振り返る。だが、そこには誰もいなかつた。そんなはずはない。わざわざまで確かに背後で気配が……

「こちあゆておおこ」

その声は、私の後ろから聞こえた。どうやつた。なぜ、やじこお前がいる！？

私は舌打ちしながら振り向き、まことに回し蹴りを入れる。相手の体勢もわからぬまま放つた蹴りは、上体をそらすことで簡単にかわ

された。それはいい。この蹴りは牽制にすぎない。相手の姿を視界に捉えた。もう逃がしはない。

そこで相手は拳を突き出してきた。またもや正拳突きだ。いい加減、こいつには学習能力というものがいるのだろうか。何度もやりうと無駄だ。その攻撃は見切つている。

「USA GO-! USA GO-!」

「な、にいつ！？」

だが、私はその攻撃をかわしきれなかつた。正確には拳には当たらなかつた。しかし、その拳に纏わりついていた呪いの塊がはじけとんだのだ。呪いの飛沫に触れるところくらい、なんでもない。私の身上に起こつたことは、それとは関係なかつた。

気づいたときには、内臓をやられていた。せりあがつてきた血が口から吹き出す。何をされたのか、全然わからなかつた。今までの闘い方とは次元が違う。

「ぐ、お……！」

しかも、ただの打撃じゃない。体の中に異物を埋め込まれた。呪いだ。呪詛が肉体を侵食していく。視界が揺らぎ、頭がうまくはたらかなくなる。

この呪いは、さつきからずつと見せてもらつている黒い霧状のものである。これが体表にとりつく分には、簡単にはらうことができる。しかし、体の中に埋め込まれたとなれば話は別だ。内部の深くにまで打ち込まれた毒は、用意には取り除けない。

油断した。これだけの力があるのなら、なぜ最初から本気を出さなかつたのか。いずれにしても、考えている余裕はない。敵の攻撃の正体がわからない以上、足を止めるのは危険だ。

呪いで鈍くなつた体に鞭を入れ、一時後退する。相手は当然、追いすがつて来た。甲羅を脱ぎ捨てて身軽になつたのか、さつきまでは段違いの速さだ。いや、それだけじゃない。何か他にも術を使つている。この速度は異常だ。

動きはせつときまでと回じだ。予測しやすい、読みやすい軌道で動いている。だが、その速度を認識できても、反応が追いつかない。単純に私より圧倒的に速いのだ。

撃がはじけた。

あつけなく折れる腕の骨。それでも力を殺しきれず、余波が胸を貫通した。肋骨が砕け、心臓と肺が押しつぶされる。そして、痛みよりも先に走る虚脱感。喪失感。悲壯、停滞、憎悪。呪いの毒が体を巡る。

目がかすむ。ここで意識を手放してはまずい。妖怪は、自分の目玉に刺さった刀に手をかけ、刀身を引き抜く。

Help me!

黒く光る短刀が風を切つた。その閃光は瘴気を帶びて軌道上に線を描く。

私の左の肩から先がなくなる。鮮血が舞つた。
ああ、これは死ぬかもなあ。いや、ほんと。

「……やつぱ、ば、撤回する。あんた、最高だ！」

私は能力を行使する。『密と疎を操る程度の能力』だ。あらゆるもののが、『密度』を操る力。それは事物の構成要素の『集合』と『分離』を自在に操ると言い換えてもいい。あいにく、相手の体をバラにするなんてことはできないが、こと自分の体をいじる点においてはかなりの融通がきくのだ。

私は切り離された左腕を『萃めた』。時間を巻き戻したように腕が元通りになる。

「ヤリと口もとをゆがめ、地を踏みしめて『氣合』を入れる。

「うおおおおああああああああああ！」

「A h a - h a - A h a !」

私は突進した。一寸足りとも怯んでやるものか。

妖怪が刀を振り上げる。その筋を読み、腕を差し込んだ。斬り飛ばされる。構わない。そのまま残った方の拳で腹を殴りつける。鳩尾に叩き込んだ拳を振り抜く。妖怪は枯れ葉のように宙を舞つた。軽い。鎧の守りを失くした妖怪の体は脆かつた。

吹き飛ばされて地面を転がる。ふらふらと立ちあがつた妖怪は口から大量の血を吐きだす。これでお相子だ。その顔に苦しみはない。狂つたように笑っていた。そうこなくつちや。私は斬られた腕を元に戻す。

元に戻すと言つても、完全に再生することはできない。外傷はなくなり、一応問題なく機能するが、こんな反則的な技を使い続ければ色々と不具合がでてくる。ここまで精密な能力の行使は久しぶりなので、疲労も半端ではない。痛みも蓄積していく。なにより注意すべきは、あの呪いだ。効果は地味だが、確實にこちらの体力と精神力を奪っていく。

だが、楽しもう、この命のやりとりを。力の限り、な。

なんでこんなに強いんだよ。反則だろ。腕も脚も胴も切り落とした。でも死はない。目の前の鬼の少女は、どれだけ致命傷を与えるとも復活する。

俺の精神はこの闘いの中で、自己破壊の次の段階へと進むことができた。存在の拡大解釈だ。俺という存在の破壊と再生が繰り返される。その不安定な状態こそが“俺”だ。その感覚をつかめば、玉兎三技の使用は簡単にできた。俺の体の周囲に妖力を形成する。つまりそれは、“一瞬先の俺”を作り出すことだ。そのヴィジョンを明確に頭の中に描き、妖力を操れば、そこに現実と理想の齟齬が生まれる。後はその二つが統合されるまで待てばいい。自然な修正力によつて、妖力の形成が現実化する。そのとき生まれるエネルギーは計り知れない。

この力があれば、どんなことだってできる。目の前の敵を容易く排除できる。そのはずだ。なのに、どうして。

手が碎かれて、もう短剣をもつことができない。原形を失くした腕をがむしゃらに振るつて殴りつけるだけだ。一回に一回はかわされる。当たつても倒れない。逆に反撃されてこちらが吹き飛ばされる。相手もだんだんと動きにキレがなくなってきた。傷は回復しているが、ダメージは与えているはず。もう少し耐えれば俺が勝つ。拳を撃ちにいった俺の前で、少女の体が二つに分かれた。またか。分身だ。二人になつた少女は左右から俺に攻撃してくる。いつたいどんな妖術だ。分身つて、単純に戦力一倍だろ。ふざけんな。俺は二方向からの攻撃に、ボコボコ殴られるしかない。めくらめっぽうに腕を振り回す。やめろ。どつかいけ。俺の前から消える。

「はあはあはあ！」

「あーうーうー……」

俺は勝たなくちゃならない。こいつを倒して永琳に会いに行く。こんなところで死ぬわけにはいかない。この中ボスを倒せば、あいつと永琳が……

そういうば、永琳はどうに行つたんだり。

「よそ見い、すんなああつ！」

また殴られる。いや、それどころじゃない。永琳はどうだ。俺は、こんなところでこんな奴と闘つている場合か？ 違うだろ。永琳を探さなくちゃ。早くしないと、月に帰つてしまつ。帰らせてなるものか。永琳は俺のものだ。誰にも渡さない。

「A - レイge n , A - ri n o」ほつ！ - A - rei gubu n A - r
in - A があ！ - ri n - A - ga ri n

「てめえ、はあはあ！ 勝負の最中に、はあ！ どこに行つとしてんだつ！」

鬼の少女は俺に馬乗りになつて顔面に連打を食らわせてくる。俺も殴り返した。互いに防御なんてしない。一発一発に全力をこめた一撃を相手の顔面に叩き込む。鈍い衝撃が頭部を揺らす。一秒ごとに意識が白む。目の前が白く染まっていく。

いや、違う。これは光だ。光が森の闇を取りはらつっていく。朝日が昇つた。

空に、月は、もうない。

「……えーりん……」

ふつりと糸が切れた。腕が上がらない。今までずっと感覚を殺していた。限界を超えた肉体を憎悪で無理やり動かし続けた。燃料切れだ。心が空っぽになつていてる。

鬼の少女は動かなくなつた俺を、なおも殴り続けた。もつ、攻撃を食らつても、痙攣するくらいの反応しかできない。それでも殴られる。

「『まいにち』って、いえ！」

殴られる、殴られる、殴られる。

「まけを……はあ……みぢょめりひー」

そうだ、とうくに永琳はここにはいない。逃げられた。もう追いつけない。あの女、逃げやがった。俺がどれだけお前のことを求めてきたと思つてるんだ。どれだけ焦がれてきたと思つていてる。ちくしょう、逃げられた！　あいつは逃げて、俺はまたひとり。

俺は……

「……ま、け、た……」

もう、永琳を殺せない。

「あたちの、かちだああああつーーー！」

鬼が吠える。俺の体を踏みつぶし、勝利の鬨をあげる。俺の口もとが歪む。への字に歪む。悔しい。涙がとまらない。情けない嗚咽を我慢できない。俺は泣きじやくぬ」としかできなかつた。

* * *

てつきり殺されるかと思つていたのだが、どうこい俺は生かされた。

鬼は俺の肩を持つて、どこかに運ぼうとしているようだ。獲物は巣穴に持ち帰つてゆつくり食らう主義なのか。

「はあ、ふう、まつちえろ、もうすぐ、らから、はあ

だが、不思議と悪いように扱われてはいなかつた。むしろ、彼女は俺の体をいたわつてゐる。ぴくりとも動かない俺を、気遣うように丁寧に運ぶ。だが、彼女の体力も限界のようだ。足はふらつき、がくがくと震えている。甲羅を背負つていない俺の体なんて、ただの人間の少女と変わらないほどしかない。鬼の力があれば羽のように軽々と持ち上げるはずだ。それができないということは、くたばる寸前まで追い込まれてゐるということ。そんな状態になつても、俺のことを見捨てようとはしなかつた。

ついに鬼は、倒れた。ばたりと地面に寝転がる。俺の体も動かない。一人して枯れ葉のにおいのする地面に横たわつた。

「ふひい、らめら、ちょっと、きゅうけい、ひょう……」

「うぐう、ぐすう、ふああ

俺はまだ泣いていた。これじゃ、本当にか弱い人間の女の子みたいだ。だが、どうにも涙がとまらない。

妖怪の体というのは常識外に頑丈である。このまま休んでいれば、体力はすぐに回復するだろう。即死するような致命傷でないかぎり、どんな深い傷も案外すぐに回復するのだ。

だが、ここは鬼がはびこる山。そこらじゅうに妖怪の影がある。

傷つき、動けない俺たちを狙う輩がいるといつとは、当然予想しておるべきだった。

「ケケケ！ 何事かと思えば、お山の大将がこんなところでへばつてゐるぜ！」

「まさか化け物に化け物呼ばわりされる、あの酒呑童子がこの様とは」

「珍しいこともあつたもんだ！ こいつはまさに十載一遇つて奴だ！」

小妖怪たちがわらわらと集まつてくる。極上の妖力を持った大妖怪が一匹もまな板の上の鯉状態なのだ。放つておくわけがない。

「いやんだあ？ おまえら、あたちとやひつてのか！？」

顔面を何十発も殴られ、腫れあがつた青あざだらけの鬼の少女は呂律が回らない。それでも気合いで起き上がり、ファイティングポーズをとる。

「へっふりーー？」

しかし、小妖怪が撃つてきた妖力弾を避けることができず、顔面で受け止める。そのまま、後ろに倒れて動かなくなる。

「やつたぞ！ 鬼の大将を倒した！」

「げへへ、こつや 一生もんのつまい飯だぜ」

「何言つてやがんだ！　あれは俺のもんだ！」

「なんだあ？　一人占めする氣か！？」

「俺が倒したんだから俺のもんだ！」

「じゃあ、そのお前をぶつ殺せば俺のもんだな！」

だが、頭の悪い小妖怪たちは、誰が食べるかで喧嘩になり、俺たちをそっちのけで戦いはじめた。

「す——い——か——！」

そのとき、遠くから聞こえる誰かの声。その声は徐々に大きくなりながらじらじらへ近づいてくる。どかんどかんと轟音のする方を見れば、森の木々が紙切れのよつて伐採されながら宙を飛んでくる。

「や、やべえ！　隣山の星熊童子だ！」

「逃げろおおー！」

一田散に逃げていく小妖怪たち。今度は何が来るつて言つんだ？

4-1話「回収しました」

「萃香ー。」

木を吹き飛ばしながら現れたのは、またしても鬼だつた。背の高い若い女の鬼だ。体操服みたいなデザインの上着とスカートを着ている。額には、一角獣のように立派な角があり、マークがついている。

「萃香ー。どうしたんだ、しつかりしろー。萃香ー。」

「へぶつー。へぶへぶつーー。」

俺と闘つた鬼の少女の名を呼びかけ、気付けには少しばかり強すぎるではないかという威力のビンタを食らわせている。もう鬼の少女の顔面のHPは、やばいことになつていそうなのだが。

鬼の少女は、白目をむいて氣絶した。決定打はさつきのビンタっぽい。

「だれがこんなことを……お前かつー。」

「ふえええん」

横に倒れていた俺の存在に気づいたのか、鬼のよつな形相、いや本物の鬼だが、とにかく怒りをあらわにして睨みつけてくる。俺の髪の毛をつかんで引っ張り上げ、拳を握りしめている。弁解などできない。また殴られるのか。

「やめろ、ゆづき！ そいちゅは、わらひの……ともわらひだつ！」

だが、そこで待ったがかかった。俺を殴りつとしていた鬼は、驚いた顔をして俺をつかんでいた手を放す。どうやら、俺はまた命拾いしたようだ。

* * *

ひとまず、身動きの取れない俺と萃香は、勇儀という鬼に抱えられて巣穴まで運ばれた。山の中腹にある中規模の洞窟だ。中はコウモリなどの動物は棲みついておらず、きれいに整備されていた。妖力を感じる炎が壁の穴で燃えており、中は明るい。鬼火というやつだろうか。

「悪いな、萃香。山向こうの谷の沢に、おいしい山菜があるって聞いて、昨晩はそれを採りに行ってたんだ。明け方に帰つて来て、お前の山に大妖怪の襲撃があつたって仲間たちが言うもんだから慌てて来てみれば……間に合わなかつたみたいだ」

「なあに、いいつていいつて

俺と萃香は、布団に寝かせられているのだが、布団が一つしかなかつたようで、二人で一緒に使うはめになつた。俺はそこらへんの床に放置されていても、いや、そのほうがよかつたのだが、なぜか萃香は俺のことを気に入つてているようで、布団に引きずり込まれた。角が邪魔で居心地は最悪だ。

「それで決着は、ついたんだな？」

「ああ、こいつは強かつたぜえ！」

萃香が俺の肩に手を回してくる。角が邪魔だ。

それにしても、どうしてこの鬼たちは俺を殺さないのだろう。俺はこいつらの仲間の鬼たちを殺してしまったのに。

「ぐうつ、おひつてないのか？」

「怒る？ 仲間を殺したことか？ そのはじめなら、さつきつけたばかりじゃんか。仲間が死んだのは、あいつらが弱かつたってだけのことよ。まあ、弔いくらいはしてやるけどな」

「萃香が許したんなら、アタシが口を挟むことは何もないね」

鬼といつのは、なんとも単純明快な考え方をする奴らのようだ。そこまですっぱり割り切って考えられるのもつらやましい。

「わあ、闘いは終わったんだ。酒を飲むぞー！」

「ちよつと、萃香。あんたまだ動けないんだから……」

「これが飲まずにいられますかっての！ 鬼儀、酒盛りの準備だー！」

勇儀はため息をつきつつも、もう慣れっこだと言わんばかりの苦笑いをする。鬼が酒好きだといつのは本当らしい。

「そりいえば、まだ名前聞いてなかつたな。改めて自己紹介だ。あたしは伊吹萃香。で、こいつは星熊勇儀。見ての通り、鬼だ」

「なんとも簡単な説明だな」

「他に言つ」ともないだろ？ それで、お前の名前はなんて言つんだ？」

「……葉裏」

「よし、葉裏！ 今日は飲むぞ！ 飲み明かすぞ！」

「朝日が昇つたばかりなんだけど……」

元気な奴らだ。俺もちょっとだけ、元気が出た。

* * *

俺の甲羅は山頂に置き放しになつていたので、勇儀に取つてもうつた。

「せえ、まあ、ちよつとこれ重すぎだら……」

「だらしないな、勇儀は」

俺の甲羅は鬼にとつても重かつたようで、一度坂道の途中で落つてしまい、木をなぎ倒しながら麓まで転がつてしまつたようだ。そこから勇儀が担ぎあげてもつてきてくれたようだが、洞窟にもどつて来たときはすっかり息があがつていた。

勇儀は、俺の短剣も見つけてもつてくれた。鞘と剣が闘いの途中でどこかへ飛んで行つてしまつていたのだ。あのときの俺の奇行は今思い出してもぞつとする。自分の目玉に剣をブツ刺すとか狂いすぎだろ。アクセルの加減を間違えた。そのまま突つ走つていたら、もともとれなかたはずだ。そのうち、元の俺がどうだったの

かさえわからなくなる。あんな無茶はもうしないと心に決めた。
でも、永琳を前にしたら自分を抑えられるか不安だが……

「ほら、葉裏も飲め！」

萃香のひょうたんからは、とめどなく酒が出てくる。そういう仕組みらしい。最初は自分で飲もうとしていた萃香だったが、やはりまだ体が動かないようで、ぼたぼたと酒を布団の上にこぼすばかりだつた。しまいにはキレで暴れ出した。狭い洞窟の中で巨大化はやめてほしい。今は勇儀がおちょこを持つて萃香に飲ませている。

俺も当然体が動かないのだ。勇儀に酒を飲ませてもううしかない。なんでこんな介護されるような状況になつているのか、自分でも理解できない。勇儀も断れよ。

場の雰囲気に流されるまま、酒を飲む。飲んでから気づいたが、俺はこの永い妖怪人生のうち酒なんて口にしたことは一度もなかつた。胃が焼けるように痛い。酒って痛い飲み物なのか。それとも、鬼の酒だからだろうか。全然おいしくないのだが、勧められるままに飲んだ。こうなつたらやけ酒だ。

「びええええええん！　ええええりいいいいん！　つわあああああ！　ええりいいいん！　ころしてええええ！」

俺は泣き上戸だつたらしい。酒が入ると感情的になるものだと聞いていたが、俺の場合、真っ先にあらわれた感情は悔しさだった。永琳を取り逃した悔しさが胸一杯にひろがり、切なくて涙が止まらなくなつた。ただ悔しい。死にたいくらい悔しい。

萃香は泣きじゃくる俺の頭をやせしく撫でる。勇儀は、酒とつまみの干し肉を差し出してくれた。

「なあ、萃香。葉裏がなんかやばいくらい負の感情に染まつてるのはわかるけど、アタシには嗚咽でなんて言つてるのか聞きとれなかつたんだが」

「まったく勇儀はしかたないなあ。つまり、これは失恋だよ！」

「失恋？」

「そう、葉裏にはエイリーンつていう恋人がいた。けど、エイリーンは葉裏を捨てて逃げたんだ。だから、葉裏はエイリーンのこと

を憎んで悪鬼羅刹になつたのさ」

「へー、そつだつたのか」

「ちがゆうひつりー　えいりんつええええー　えいりんつよくて、おれかなわねええー　おれはつ、おれづこおおおおー　えい

「ひいひい！ うああ、うああ！」

「マジでー？ 葉裏でも勝てないくらい強いのかー？ どんな妖怪だよそれ、うはー、あたしも闘いてー！ あ、勇儀、あたしにも酒ちょうだい」

「はいはい

永琳はもう元へ行つてしまつただろう。今の俺では元に行くことなんてできない。次はいつになつたら永琳に会えるんだ。あいつに会えない時間を考えるだけで胸が張り裂けそうだ。

「まつたく、葉裏よお、お前はそんなに強いのこ、何ウジウジしてんだ！ そんな浮気性の男なんか乗り込んでブン殴つてやりやいいじやねえか。強くて敵わないうんなら、あたしも一緒について行つてやってもいいぞ？」

「うべおおおー、えーえりん、もうこつたあああー、とおくこいつたあああー、もうあえないいいー！」

「会えないくらい遠くに行つたのか？

「ハイリーンなんて名前の妖怪聞いたことないしなあ。大陸系の妖怪か？」

「ああ、海の向いの。海なんてどうやって渡ればいいのかわかんないな。確かにそれは困ったもんだ。勇儀、酒

「はいはい」

それに俺には永琳を殺せない決定的な楔がある。永琳は自分を“マスター”として、俺のウサ耳インター・フェースに情報を登録している。これはおそらく、命令権者のことだ。永琳はインター・フェースを通して、俺に何でも言うことを聞かせることができるのだ。永琳が『殺すな』と命令すれば、俺は手出しができなくなる。それどころか、そもそもマスターに向けて攻撃行動を取ることすら封じられている。俺は永琳の人形なのだ。天から操り糸を垂らして俺を支配する永琳に、どうやって立ち向かえばいい。俺はどうすればいいんだ。

「ひぐつ、ひぐつ、お、おれはびつすればいい……びつすれば、えいりんにかてるんだ……」

「そんなもん、決まってるじゃん」

萃香はこともなきに言つ。なんだ、もしかして永琳に勝つ妙案でもあるのか。

「強くなれ」

「え……？」

「強い奴に勝つためには、そいつよりもっと強くなるしかない！あたしはあんたと闘つてわかった。あんたはこれからもつと強くなれる。だから、落ち込むな。胸を張つて生き！」

そう言つて萃香は一カツと笑う。そんなこと言われなくたつてわかつてゐる。肝心なのは、どうやって強くなるかってことだらう。何の解決にもなつてないぢやないか。

だが、俺は安心した。体は小さいが、この鬼の心はでかい。俺は

萃香の胸を借りて泣く。

「ふつ、今はたんと泣ぐがいいや。その涙が、お前を強くするの
れ……勇儀、酒」

「もう自分で飲め

* * *

それから俺は酔いつぶれ、泣き疲れて眠ってしまった。
目が覚めたときは夕方だった。結構な時間寝ていたようだ。

「起きたのか？」

萃香は布団から出て、まだ酒を飲んでいる。顔の腫れもほとんど
なくなり、体を動かすのも支障ないようだ。俺はまだ動けない。勇
儀もその隣で一緒に酒を飲んでいた。

「相当、無茶してたみたいだな。まあ、あんだけ暴れりや体にも
ガタが来るだろ。完治するまでここに居てい。なんならここに住
んでもいいぞ？」

「いや、もう出でこくよ。世話になつた

俺は無理やり体を起こし、布団から這い出る。だが、体が重つこと
を聞かない。すぐに倒れてしまう。

「無理すんなつて。別に遠慮しなくていいんだ。あたしはあんた
のこと、恨んでなんかないからな？」

「……そんなんでいいのかよ。お前、鬼の親分なんだろ?」

「それでいいのよ。傷心の乙女を放りだすほど、あたしは鬼じゃねえ、なんつって!」

「傷心って……永琳は俺の恋人じゃないんだが」

さつきは余裕がなかつたので、訂正ができなかつた。鬼たちは永琳が俺の恋人だと勘違いしているようだ。永琳は俺の因縁の宿敵だ。それが想い人と間違われるなど、なんの冗談だ。

そんなこと、あるわけない。

「いやいや、隠さなくていい。あたしだつてこれでも女妖怪のはしぐれ! オトメ『ロロ』といつやつも、ちやあんと心得てますつての」

「乙女心ねえ、男つ気がからつきしのあんたにそんなもんが備わつてんのか、甚だ疑問だけど」

「なんだと勇儀! あたしにだつて恋の一ツや二つ」

「ないだろ」

「よーし、『ロロ』はあたしがオトメ『ロロ』ビレッジとくる恋愛講釈をしてやるつじやないか!」

「『ロロ』まかしたな」

「男つて奴はさあ、勝手な生き物だよなあ。どんなに女が一途に想い続けても、あつちへふらふらそつちへふらふら。まあ、雄なん

て自分の種を残すことしか考えてないんだろうね。苦労するのはやっぱり離なんだよ。でもね、あたしは言いたい。お前らは、一人の女を一途に愛する度胸もないのか！ つてな！」

「わおー、いこ」と言った。でも、あんた恋したことないでしょ？」

「むうー、うるさいな勇儀！ じゃあ、あんたはキャペキャペのパンツを脱ぐわけ！？」

「いや、しないけど……」

はあ、ここいつひどい、まじめに悩んでるのがバカバカしくなつてくれるな。

43話「強きの向の」

それから三日が経つた。傷はもうほとんど完治している。唯一治つていなければ、右田くらいか。目は妖怪でもデリケートな部分のみで、完全につぶれた状態からの回復は時間がかかるようだ。

「葉裏、はい、あーん」

「いひつて、もう一人で食べられるか？」

なぜか萃香は俺の世話を焼きたがり、寝たきりの間、ごはんを食べさせてくれたりした。いたれりつくせりだが、恥ずかしいことこの上ない。

お礼といつては何だが、甲羅の中から酒のつまみになりそうなものをして渡した。そう、『月人酒の友シリーズ』。

「うひょおお！ これって、スルメか！？ 山暮らししてると、こういうもんがなかなか手に入らないんだよねー！」

気に入つてもらえたようだ。他にもチーズ鱈とか燻製タコとか、とりあえずあるだけ渡しておいた。

この三日で俺は色々と考えた。これからどうするかということだ。無論、永琳を追う。今すぐ月に行くことはできないが、どんなに時間がかかっても、俺はいつか必ず月へ行つてみせる。地上の人間の技術だつて1000年待てば宇宙開発まで行きつくなはずだ。永遠に月へ行けないわけじゃない。

そして、俺はそれまでに強くならなければならない。永琳を倒すために。そのためなら、どんな手段だつていとわない。だから、考

えなければ。俺はどうやって強くなるのか。その方法を。

「強くなるための方法?」

萃香は俺の問いかけに首をかしげる。萃香は俺よりも強い。あの反則的な能力は圧巻だった。俺が今までに会った、どの妖怪より強かった。彼女ならにか、いい助言をくれるのではないだろうか。

「つて言つてもなあ。そんな方法があつたら、あたしだって知りたいし」

「萃香は十分、強いじゃないか」

「そりや、鬼だからな。鬼は単純に強い」

種族としての強さか。確かに鬼と言えば、どの伝承でも語り草になるほどの暴力の権化だ。そこらの三流妖怪とはわけが違う。

「それを言つたら、葉裏だってとんでもなく強いぞ。なにせ、その鬼を倒したんだから」

俺はちょっと長生きなだけだ。妖力にものを言わせて戦うしか能がない。その戦い方は、萃香に通用しなかつた。俺はもっと技術的な戦い方というものを学ばなければならない。

「でも、俺はもっと強くなりたいんだ。萃香みたいに戦闘の技術を身につけたい」

「そうか。でも、あたしも人に自慢できるほどの武術を持つてるつもりはないよ。こんなものは見よう見まねさ」

武術についてはこれから練習していく。だが、それだけではダメだ。永琳に勝つためには様々なアプローチから攻撃できる手段を考えなければならない。

この三日で、一つ思いついた方法がある。俺は永琳に直接攻撃することができない。ということは、間接的な攻撃なら加えることができるのではないか。例えば、罠などをしかけて、そこに誘導する方法がある。そういう手段を取るなら、道具が必要だ。俺自身から離れたところで作動でき、ダメージを与えられるような道具を作ればいい。

そこで考えたのが、陰陽術だ。

「陰陽術？ 葉裏は変なことを考えるもんだ。なんでそんなものが必要なんだ？」

「俺は陰陽師たちの妖怪退治を見たことがある。奴らは靈力を札に込めて使う。物に力を宿せるんだ。その札には様々な呪文が組み込まれ、いろんな効果がある。そういう札を何枚もあらかじめ作つておくから、奴らの戦術は格段に広くなる。俺たちも、陰陽術が使えるようになれば、強くなれると思わないか？」

「うーん、言いたいことはわかるけど……無理だと思うよ？ 妖怪は妖術、人間は陰陽術。それがそれぞれの領分じゃないか。妖術が使える人間って、変だろ？」

まあ、確かに。いい案だと思ったんだが。これは保留にしておこう。

「妖力や身体能力以外で、手取り早く強くなりたいってんなら、『程度の能力』を鍛えるって手もあるぞ？」

「ああ、そんなのもあったね。そういうえば、萃香も能力を持つてるのか？」

「ああ、あたしの能力は『密と疎を操る程度の能力』だ」

密と疎。つまり、物事の集合と分離。ちぎれた体を修復したり、巨大化したり、分裂したりできたのは、この能力があつたからだつた。どうりで強いわけだ。

「無敵じゃねえか！ そんなん勝てるわけがねえ！」

「いや、あたしも結構追い詰められてたぞ？ 能力で霧状になるまで分裂しても、葉裏の攻撃は爆発みたいな衝撃に近いから避けようがないし、呪いは地味に回避が難しいからなあ。ほんとは密度を極限まで高めて炎を作り出す技もあるんだけど、使う余裕なかつたし」

「そんな便利な能力があるなんてうらやましいよ。俺なんか『注目を集める程度の能力』だぜ？」

「それは……ふつー！」

「笑うな！」

萃香の能力は物事の集合を操る。だから、注目を集めることもできる。俺の能力の効力も兼ねているわけだ。なんというチート。むごい。

「こんな能力、あっちむいてホイくらいでしか勝負事での使い道

がねえよ

「あつちむいてホイってなんだ？」

「知らないのか？　じつやつて、指を出してだな……ホイ！」

萃香の顔の前に人差し指を突き出し、かけ声と同時に上に指を向ける。俺は能力を使って、指先に『注目を集めた』。萃香は指の動きにつられて上を向く。

「かけ声に合わせて、顔を動かすんだ。この指の向く方向に顔を向けたら負け。それ以外の方向を向いたら勝ちだ」

「はあ、そんな遊びがあつたのか……ん！？　といつ」とは、あたしはさつき負けたのか！？」

「そつなるな」

「納得がいかない！　もう一回勝負だ！」

それから十回くらい、あつちむいてホイをした。結果は俺の完勝。萃香は負けた悔しさに地団駄を踏んだ。鬼は勝負事にやたらこだわる奴らだな。

「ちくしょー！　また負けた！」

「たかが子どもの遊びだろ。俺は能力使ってズルしてるんだし」

「そつか、それだつ！」

萃香が何かひらめいたように手を打つ。何を思いついたんだ。

「その能力、自分以外の物にも使えるのか？」

「自分以外？」

俺は今まで、この能力は俺自身にしか使えないものだと思つていた。前に、前に使つたときは他の物に注目を集めて、敵の注意をそらすようなことはできなかつた。

「能力は成長する。長いこと使い続ければ、その効果も拡大解釈できるようになる。あんたの能力がその文面どおりなら、その程度の拡大解釈は可能なはずだ」

少し、試してみるか。

「そんなこと言われても……あ、勇儀が来たみたいだぞ？」

そう言つて、俺は萃香の後ろを『指差した』。

「ん？　ああ、勇儀ちょうどよかつた。今、葉裏と話をしてて……」

…

萃香が後ろを振り向く。しかし、そこに勇儀はいない。最初からいないのだ。だが、萃香はそこに勇儀がいるものと“錯覚した”。

「今、能力を使ったのか？」

「ああ、どうだつた」

「……驚いたな。本当に勇儀の気配がした。注目を作り出すといふことから、逆算的に私の意識の中にある『勇儀の気配』をくみ出し、捏造したことになる。私も『萃める』ことができる能力をもつてこるけど、『注目』という一点に関してはあんたに勝てないだろう」

俺の能力の意外な利用法が見つかった。これをもつと突き詰めれば、戦闘にも十分活用できるのではないかだろうか。

43話「強さの向の」（後書き）

このときの萃香はまだ人間に討伐される前なので、そこまで嘘や騙されるのが嫌いというわけではない

という設定です！

気にしてたのですが、原作でもそちらへんはキッチリこだわってないみたいですね。

44話「旅立ち」

「よし、決めた。俺、忍者になる。」

「ニンジャ？」

昔、俺がまだ平凡な人間だった頃、好きだったマンガの一つに、カメのミュータントが忍者になるというものがあった。のろまな甲羅を背負ったカメが、忍者として俊敏にかつこよく敵を倒す。そんなコメディだ。

別に俺は忍者のことなんか何も知らない。忍術も有名な奴をつか二つくらいしか覚えていない。でも、この時代にはまだ忍者はいないはず。だったら、俺が先駆者を名乗って、好き放題に自分流の忍術を開発したっていいじゃないか。妖怪忍法だ。文句を言う奴もいまい。

「ニンジャってなに？」

「忍者は影から影へ、闇に潜み、必殺の一撃で敵を暗殺する最強の隠密部隊だ。諜報活動にも優れ、様々な道具を駆使した忍法で敵を攪乱できる。そして、語尾に“ニンニン”とつけてしゃべる！」

「おおー、なんかわからないけど、すいこニンニン」

忍者には流派があつたよな。伊賀とか甲賀とか。俺は何と名乗るうか。伊賀の『イ』からとつて、『呂賀』なんてどうだ？それとも甲賀の『甲』から、『乙賀』とかどうだろ？おお、『乙賀』がいいかもしれない。甲羅を背負った亀が、そこから一步踏み出し外

に出た、だから甲の序の一ツ先、乙賀だ。

「というわけで、俺はこれから『乙賀忍者』を名乗る。乙賀忍者、頭田、乙賀葉裏！ どう、かつこよくね？」

「ああ、まあ、うん、いいんじゃない」

「乙賀忍法、『田そらしの術』！ 食らえ、チー鱈手裏剣！」

「なに？？」

投げつけた手裏剣に、萃香が反応する。猫のような素早さで手裏剣をぱしつとつかんだ。しかし、それはチー鱈ではなく、ただの葉っぱ。普通ならすぐに気づいて無視されるような嘘だが、俺は能力を使って『注田を集めめた』。俺の作る注田はその場に適した“信憑性”を捏造する。最初から嘘だと気づいていれば効果がないが、嘘だと発覚するまで錯覚は続くのだ。萃香は葉っぱを確認するまで、それが本当にチー鱈に見えていたことになる。

これが俺が考えたインチキ忍法、『田そらしの術』だ。乙賀忍法の記念すべき最初の術である。

「まあ、ここまで元気になれば、もつ心配はいらないな」

萃香は葉っぱを捨てながら言ひ。その隣にいるのは、勇儀。萃香と闘った日から一週間が経つた。俺は今日、この山を旅立つ。しばらく、俺は旅に出ようと思つてゐる。修行の旅だ。いつまでの安穩とこの地に居座つてゐるわけにはいかない。俺は強くなる。どんな手段を使ってでも永琳を倒すと誓つた。そのための乙賀忍法だ。これは月人に対抗するための術。永琳を倒すための術。ゆえに、最強の術となる。そうしなければならない。

「旅に出る前で、あたしと一勝負してほしかったんだが」

「もう、鬼と闘つのまじめつだ。」うちの身が持たねえよ」

勇儀にも別れの言葉を告げる。この日の鬼たちと再び会つのは当分先のことになるだらう。もう一度と会わないかもしない。いいさ、妖怪なんてそんなものだ。勝手気ままにやらせてもらひ。

俺は背中に甲羅を背負つた。装着はしない。装着部はスライド収納し、縁の六角形のオブジェとなつた甲羅。当分、こいつも封印することにした。俺は甲羅から出た亀。ぬくぬくと自分の家に引きこもつていては成長などしない。背中に背負つていれば、背後からの攻撃は防げるだろう。その程度の守りで十分だ。

ただ、この甲羅、非常に持ちにくい。とにかく重いので、しつかり持たないとすぐに落つこむ。最初は繩でしばつて（これがほんとの亀甲縛り）持ち上げようとしたが、一瞬でブチ切れた。しかたがないので、鬼の鎖を少しもつた。鬼が手枷や足枷に使う鎖らしい。萃香や勇儀も鎖をつけているし、鬼の流行りなのかもしない。鬼の力にも耐えられる特別製なので、切れることもない。これでぐるぐる巻きにして体にくくりつけた。

服装はいつもの通り、両口両口のベストに短パン。ちゃんと洗濯した。勇儀が。

薦のサンダルを履き、ウサ耳を中に入れて帽子をかぶる。腰には短剣、背中には甲羅。装備は万端だ。

「じゃ、行つてくるぜー」

「おひ、また闘おうなー」

「こつでも遊びに来いよ

俺は鬼たちに見送られて山を降りて行つた。

* * *

と、旅に出る前に、もつひとり、挨拶しておかないといけない奴がいる。

俺は山を降りて都の反対側にある森へ来た。ここは俺が地球上で目覚めた場所。幽香に会いに来たのだ。あいつのことだから、俺のことを心配していると思つ。出かける前に声をかけていいわ。

「ゆーかりーん！」

「ああっー？ 葉裏せーん！」

幽香は元気そうだった。幽香ももつすぐこの森を出て、新しい畑を作る場所を探すという。

「実は葉裏さんがこの森を出た後に、人間の妖怪退治人が森へやつてきたんです。私、襲われそうになつたんですけど、勇気をもつてやつつけました！」

「えうか、ゆうかりんは偉いな」

「いーう、えい！ つて、軽く突き飛ばしたつもりだつたんですけど、思つたより力んじやつて【検閲により削除】しちやつたんですけど、なんというか……意外と嫌いじゃない感覚というか、むしろ、ちょっとキモチイイかも、とか思つちやつて、きやー！ す、すみません、私何言つてるかわからないです！」

「え、あ、そつ

「葉裏さん！ 私、葉裏さんの言葉で妖怪としての自信が持てました！ やつぱり、私たち妖怪と人間さんは相いれないものですね。これからもどんどん、人間さんたちを【検閲により削除】していきたいです」

思つたよりも元氣そうだなによりだ。少々、バイオレンスな風味が出てしまつたようだが、それが彼女のもともとの気質だったのだろ。妖怪としては何も問題ないので、何も言わないことにする。

「そして、自分だけの素敵な花畠を作つてみせます！ だから、私の花畠が完成したら、葉裏さんにも見てほしいんです……」

「ああ、いつかお前の花畠を俺にも見せてくれ

「ほんとですか！？ 約束ですよ。葉裏さんにもらつたお花の種も、ちやんと育ててみせますからー！」

ひつして幽香との別れも済んだ。もつ思い残すことはない。後はひたすら血口研鑽あるのみ。まつてこう、永琳。俺は必ず、お前に追いついて見せる！

あてどない旅だった。強さとは何か、それは武芸の境地だろう。俺にはそれが何かわからない。ただ、外道だろうとなんだろうと、力を得るために努力を惜しまないつもりだ。

と言つても、むやみに殺生などする必要はない。一定レベルの妖怪の相手なら遊び半分にしてやつた。鬼を倒した俺にとつて、ほとんどの妖怪や人間の妖怪退治人の実力は物足りないと言わざるを得ない。妖力は十分以上に蓄えがあるので、人間をとつ捕まえて食う必要もなかつた。日向ぼっこをすれば甲羅が光合成で妖力を生産してくれる。というか、俺はまだ自分の妖力全てを十全に扱えない状態なのだ。はつきり言つて、そんなにいらない。

俺が最初に行つた修行は人間の観察である。なぜかと言えば、『程度の能力』を使いこなすためだ。人間がどのように目を使うのか、つまりは眼球の動かし方、顔の向け方、瞬きのし方から始まり、視界と首・胴・脚そして腕と手の運動、そこから発生する構造上の錯覚の起こし方を学んだ。このすべてが『注目を集める程度の能力』に通ずる。それらを学ぶことで、より自然に効率よく注目を作り出すことができる。

さらに、心理的洞察も行つた。どのような状況で人は動搖するか、疑問を持つか、関心を向けるか、喜怒哀楽の原因と発露、あればきりがないが、感情に伴う様々な反応を事細かに調べ、まとめあげた。

そこから実際に能力の研鑽を行う。まずは、人間の集落に妖怪とバレずに紛れこむことを目標とした。俺は妖力を隠すことが苦手だ。持つている妖力がでかすぎて隠しにくい。甲羅に妖力を詰め込めば、外に漏れないようなので、結構な量をごまかせる。しかし、ありつけ詰め込んで、中妖怪程度の妖力は肉体に残るのだ。少し陰陽

道に精通するものなら、簡単な結界で探知されてしまう。人間の集落には、こういった結界を張る妖怪退治人が一人はいるので、なかなか侵入しづらいのだ。ちなみに、昔は妖力を甲羅に移動させると甲羅の肥大化が起きたが、今は形状が固定化されたのか、大きさが変わることはない。

そこで、俺の能力の出番である。なるべく、俺に注目が集まらないようにするのだ。だが、俺の能力は『注目を集める程度の能力』である。注目をそらすことが本義ではない。必ず俺が指定するものに注目が集まり、その結果として俺が注目されないとということだ。だから、最初のうちはうまくいかなかつた。人々の注目が不自然にどこかに集まってしまう。その結果、俺という存在が浮き彫りになる。それは強烈な違和感として人間の感覚に残る。同じ集落に長くとどまるることはできそうになかった。

その欠点をなくすため、改良に改良を重ねた。常に周囲の人物の動向の一つ一つに気を遣い、どんな細かなしぐさも見逃さない。視界に収まる範囲の環境を掌握し、そこに存在するすべての生命体の意識をムラなく、自然に、違和感なく俺以外のどこかに集中させることを目指した。それが可能になれば、俺は透明人間と化することになる。

無論、それを完璧にこなすことは不可能だ。俺にも限界という物がある。だが、なるべく理想に近づけるべく、鍛錬を惜しまなかつた。すべては強くなるため、永琳を倒すためだ。

そして今、俺は人間の村を渡り歩く行商人になりますとしている。

「安いよ、安いよー！ 珍品、名品大特集！ サあ、見ていいつくれい！」

まるつきり気配を消して目立たなくしようとするのは、逆に注目を集め。適度に胡散臭い方が逆に妖力を隠しやすい。人々の目には、俺の姿は珍品を売りつける少々詐欺師まがいの見世物商人と映

つてゐるだらう。

他にも状況に合わせて数え切れないほどの工夫をしている。注目を集める対象を分散させるという荒業で、一秒の間に操作する視線の回数は百や一百じやおさまらない。俺の頭が狂つてなければ、こんな狂氣の技は誰も使えない。ふつふつふ。どうも狂氣という奴は、正常な思考を鈍らせる代わりに、何か突出した洞察力・観察力を俺にもたらしてくれる。皮肉なものだ。

名づけて乙賀忍法『田そらしの術』あらため、『虚眼遁術』。どうだ、かつこいいだらう。

この術を完成させるまでに100年かかったことは内緒だ。

「やれやれ、今日も売れなかつたなあ。店じまい店じまい」と

売れないのはいつものことだ。別に路銀を稼がなくとも食つに困ることもなし、ただ、商人を装つてゐるにすぎないので何も問題ない。やっぱ、人魚の肉とか鳳凰の爪とかあからさまに嘘とわかるようなものばっかりじゃダメだなあ。河童の手、くらいならなんとかなるか？

「ちよつと、そこの商人」

「はい？」

これはまた珍しい、客だらうか。しかも、見たところ尼僧のようである。この夏のクソ熱い中、真っ黒い法衣と頭巾を頭からかぶつている。大きな頭巾のせいで顔は見えない。背丈と声からして随分小柄で若い尼さん のようだ。

だが、なんか妙だ。俺の洞察力が、こいつは変だと訴えている。

「お客様、今日はもう店じまいなんですよ、へつへつへ」

「少しでいい、見せてくれ」

ここには尼さんの興味を引きそうなものなんてないはずだが。ああ、そういうえば一つだけあつたか。思った通り、尼さんは風呂敷の上に置かれた商品の中から、ある一つを指差す。

「これは何だ？」

「ああ、これね。お客さん、さすが目が高い！　このなんか仏具っぽい奴は、縄文時代のかの名匠、ハ門太郎ぱらもんたろうの遺作ですよ。某平等院鳳凰堂みたいなところから手に入れた、信用のおける逸品！　見てくださいこの美しい形、仏様のなんかこうオーラみたいなものを感じるでしょう？　靈験あらたかありがたーい雰囲気ですよね。いやほんと」

この仏具、実は村の外の道端で拾つたものだ。まったくいい拾い物だった。なんと、神力がこもっているのだ。神力とは文字通り神の力。人間に信仰された神が得る力だ。一度、末神の神域に知らずに入つたときエライ目に受けたことがあるので存在だけは知つていた。靈験あらたかなのは事実である。持つているだけで肌がチクチクして妖怪にはちょっと辛い。正規の値段でも豪邸が買えるほどの値になるに違いない。ちょうど大きなモグラの穴に落ちていて、俺の超洞察力がなければしばらく誰も見つけられなかつただろう。

「……いくらだ？」

「でも、お高いんでしょ？　と思つてゐるあなた！　『安心ください。今回は特別大サービス！　なんとの登竜門を登りきる直前まで進んだという鯉の魚拓をセットでつけまして、えーっと、この

「……」
「……」

ふつかけてみたが、尼さんの反応はない。やつぱり、見た目からして金もってそうにはないしな。この世界には妖怪のようにも神が実在するみたいで、信仰心に熱い者が多い。俺としては信仰よりも科学が発達してほしいので、ちょっととすつこんでもらいたいところだが。でも、神様に恩を売つておくのも悪くない。どうせ元手はタダなんだし、金が欲しいわけでもないし、そんなにほしいのならこの尼さんにくれてやっても……

「！」のバチあたりが！　それはお前が持つていていいようなものではない！　それを手放さなければ、お前に仏罰が下る」ことだらう！

「ええーっ！？」

人々の視線がこちらに集まる。まずい。俺は必死に注目を散らそうとするが、ダメだ。俺の処理能力を超えている。脳内回路が焼き切れそうになる。

こういう予想だにしないハプニングにこの忍術は弱いのだ。まさか尼さんが、商品の値段が高すぎて買えないからといって逆ギレするとは思わなかつた。

「ぐおおお！ む、無理ッス！」

目ん玉が左右でぐちゃぐちゃに回転しそうになる。無理だ。術が解ける。一度注目が集まると、なし崩し的に俺の存在全体が注目される。俺の能力は注目を集めることに特化しており、散らすことは苦手なのだ。ここは集落の中、つまり結界内だ。すぐに妖怪がいるとバレてしまつ。

俺は甲羅ごと風呂敷をたたんで抱ぎあげ、結界の外に向かつて駆け出す。

「な、お前は妖怪なのか！？」

あーあ、バレちゃつた。もう、しばらくほこの村には立ち寄れないな。

走り出した俺の後を、尼さんがついてきた。本気で走れば引き離せるとと思うが、ちょっとむかついたのでからかつてやつ。俺の商売を邪魔したお返しだ。

適度な距離を保つようにスピードを合わせて、近くの林へ入り込む。この奥なら人目につけづらいところでくる

りと体を反転させ、一回一回と地面を蹴つて着地する。

「まで、この泥棒妖怪！『主人の宝塔を返せ！』

「泥棒とは人聞きが悪い。まったく商売あがつたりだ。この埋め合わせはしてくれるんだろうな？」

「そもそも妖怪が人里で商いをすることが間違つていいのだ。まあ、おとなしく宝塔を渡すのだ」

宝塔といつのはあの仏具のことか。これが何なのか知つていて取り戻そうとしている。様子を見るに、相当大事な物のようだ。ますますタダで返すのが惜しくなつてくる。人間相手にだれが親切にしてやるものか。

「ちつ、しかたない。力づくでも取り返させてもらひうぞー！」

尼さんは闘う気満々のようだ。実はさつきから気になつていた。この尼さんの靈力はなんか変だ。一見しただけではわからないが、“百見”すればすぐにわかる。この靈力、どこか歪んでいる。おお、なんかこれかっこいい気がしてきた。

「よし、この技、乙賀忍法『百見心眼』と名づけよう

「何言つてるんだ、君は」

まあ、ただの洞察力なんだけど。とにかく、靈力が変という話。何度も陰陽道に通じる妖怪退治人と闘つたことがあるが、それとは違う。何かを隠しているような気がする。

「相手が妖怪なら、姿を隠す必要もない。どうひー。」

尼さんが法衣を脱ぎ捨てた。お色氣戦法か？

中から出てきたものを見て驚く。少女の形をした姿、そして頭に生えた耳、お尻の尻尾。なんと妖怪だ。妖力も感じる。黒いスカートとケープを身につけたネズミっ娘だった。

「なんだ、妖怪かよ」

「なんだとはなんだ！」

拍子抜けした。もつとえげつない何かが出でくると思つたよ。実はおっさんだつたとか。

俺は風呂敷の中から宝塔を取り出す。

「そうだ、妖怪！ それを渡せー！」

「はい」

「あ、どうもありがとう……って、なんであつさつ渡したー!?」

いちいち反応が面白い奴だ。渡せと言われたから渡したのに。

「人間だつたら悪戯してやううと思つたけど、妖怪なら話は別だ。そもそも、村で叫ばなければ素直に渡してたのに」

「えー、私が悪いのか？」

ネズミ妖怪は恐る恐ると言った様子で宝塔を受け取る。罷でもしかけてあるのではないかと思っているのだろう。

「それより、なんでそんなもの探してたんだ？　あと、どうやって人間に化けてた？」

「これは私のご主人がなくした大切な物だ……はあ、まったくいつも気をつけるとあれほど言っているのに……人間に化けていたのは、法力のチカラだ」

「法力？」

陰陽道ではないのか。最近は仏教が広まってきたからその影響か。しかし、いざれにしろ妖怪とは無縁の術だらう。俺はこれまでに、何度も陰陽道を習得しようと挑戦してきた。しかし、結果は惨敗。妖力を陰陽術に利用することはできなかつた。

それをこのちんまい子ネズミ妖怪はなしたといふのか。解せん。

「興味が出た。俺の名前は乙賀葉裏。お前はなんて言うんだ？」

「ナズーリンだが、何をする氣だ？　言つておくが、金はないぞ」

「おお、そうだった。それは俺の商品だつた。ということは、お前は俺に代金を払わないといけないな」

「これはもともとご主人のものだつたのだ！」

「拾つたのは俺だ。その時点からそれは俺の物。それをどう処分しようが、俺の勝手だろ」

「ちつ、なんて意地汚い妖怪だ。悪いが今払えるお金は私のお小遣いくらいしか……」

ナズーリン涙目。別に俺は金なんかほしくない。

「金はいらん。その代わり、お前が知ってるその『法力』つて奴を教える」

「はあ?」

ナズーリンは盛大に首をかしげていた。

47話「チャレンジ命蓮寺」

ナズーリンの案内で連れてこられた場所は、寺だった。

切り立った崖に沿うようにして伸びる道を進むと、崖の上に建つ寺が一つ。この妖怪はどこに連れていく気なのだ。まさか、本当にこの寺に来たのか。この辺りには他にめぼしいところなどない。妖怪が住み着く廃寺かと思ったが、ちゃんと聖域の結界が敷かれている。

「おい、もうそろそろ聖域に入るぞ。やばいだろ」

「大丈夫だよ。いいから黙つてついてきて」

寺とか神社とか、妖怪にとつては鬼門なのだ。聖域に入るだけで退治されても文句は言えない。俺は逃げられる自信があるが、このちびっこネズミはひどいことになること請け合いだ。

寺についた。尼のようなそうでないような服装の少女が門前の掃除をしている。さつそく人間に見つかたつて……

「あるえー？　あの人、妖怪だあ？」

妖力を感じる。なんで妖怪が寺にいるんだよ。

「ナズーリン、急に出かけたそうだが、何かあつたのか？」

「い、いや、何でもないよ。それより、お客を連れてきた」

「どもー」

「参拝に来られた方かな」

尼さん風妖怪は俺に会釈する。何がどうなつてるんだ。なんで俺が神様仏様を拝まなきゃならない。

「いや、どうも本格的に仏門に入りたいらしくてな

「はあ！？ どゆことそれ！？」

「なんで勝手に仏教徒にされてんだ。そんなことを頼んだ覚えはない。

「だつて、法力が使えるようになりたいって言つたじゃないか

「え、それってなんか仏教的な修行しないとダメなの？」

「当然だ。まあ、修行しても妖怪だから法力なんて使えないと思うが

「あいいい！」

話が違うじゃん。やっぱり、妖怪に法力なんて使えないのか。あれ、でもナズーリンは法力で人間の姿に化けてたんだよな。なんで妖怪のナズーリンは法力が使えるんだ？

「あればこの法衣に法力でまじないがかけてあったからだよ

そんな仕掛けだったのね。がっかりだよ。

「まあいいや。それで、なんで妖怪のあんたらがこんなところにいるんだよ。この寺の住職はどうした？　あ、わかつた！　乗つ取つたんだな！　寺を丸ごと乗つ取る妖怪一味なんて、大それたことするもんだ。なんてあくどい。でも、そんなお前たちが好き」

「なんだこの無礼極まりない妖怪は？」

「私たちのこと、何も知らないみたいだから許してあげて」

なんだ、やつきから会話がかみ合わないな。他にどう解釈すればいいって言つんだ。

「ここのは命蓮寺。人と妖怪を平等に救う寺だ」

「は？　人と妖怪を平等に？　なんの冗談？」

「冗談ではない！　私たちがこいつしてここののが、何よりの証拠だ！」

ということは、こいつらは仏教徒なわけ？　いやいや、ありえないから。妖怪が仏様を信仰してどうするのよ。妖怪は妖力を食らう。妖力は負の感情に集まる。負の感情は主に人間が作り出すものだ。ゆえに、負の感情あるところに妖怪あり。これが妖怪が人の恐怖から生まれるという所以。そんな妖怪が仏にすがるとは何事か。

「頭パープリンなのか？」

「破ッ！」

尼さん風妖怪に竹箒で頭に一撃をくらつた。痛い。

「どうでも胡散臭え。そんな話、にわかには信じられない。そんなトンチンカンな考え方をする住職を見てみたいぜ」

「……いいだらう。姐さんにお会いすればお前の考えも変わるはずだ。ついでここ」

尼さん風妖怪に導かれて、本堂にお邪魔する。だが、その敷居をまたいで板の間に上がろうとしたときに事件は起つた。

「ぱきっ！」

「あ、『』『』めなれーー」

自分の体重を考えてなかつた。甲羅は表におひじりよつ。うわ、尼さん風妖怪の顔す『』な。目からビームでそつなく『』つち睨みつけてくるよ。おー、『』わ。

そんなちやめつけたっぷりのハプニングもありつつ、案内された本堂の中にその人はいた。

紫の髪は毛先に向けて金色に染まつたロングウーブ。そして、ゴスロリ風のドレスを着た若い女性だった。もう時代を超えてるよ。いや、そのあたりのツツコミ今さらなんだけど。

しかし、こいつは変も変、超変だ。俺の『百見心眼』が告げている。まず、人間ではない。だが、妖怪かと言われるとそれも違うような気がする。なんだこの力は。ある意味、おぞましい。

「あらあら、そんなにこわい顔をなさつて、どうされたのですか？」

その声は、感じ取れた力とは随分違い、ひどくやわらか。やさし

く心をつつみ、「むよくなあたたかさがある。なんだろ?」このギャップ。

「はじめまして、俺は乙賀葉裏。あなたは?」

「私は聖白蓮と申します。この寺をとりまとめておりますが、大した者では」「やせこません。どうぞ、おへつりきになつてください」

「そんじゃま、遠慮なく」

俺は白蓮の前にあぐらをかいて座る。側にいる尼さん風妖怪が噛みついてきそうな勢いだが、気にしないでおこう。

「しかし、本当にこの寺は滅茶苦茶だな。人間と妖怪を平等に救うなんて、本気で言つてるのか?」

「はい。人も妖怪も神も仏もすべて同じです」

「はあ、そりやあ大それたことを言つもんだ。その精神はスンバラシイと思つけど。実際問題、無理なんじゃないの? だいたい、信心ある妖怪なんていふのか?」

「ええ、この寺には人間に迫害され、肩身の狭い思いをしてる妖怪の方たちがたくさん来てくださいます。皆さん、とても信心深い方ばかりです」

「俺はその弱つちい妖怪たちの方に驚きだよ。人間にやられたからつて、仏様に泣きつくなんて、妖怪としての矜持はないのかと言いたいね」

「それは強者の理論です。人も妖怪も等しく弱き者です。あなたの強さも相対的なものでしかありません。死や苦しみを恐れる心をどうして否定できましょつか」

「まあ、そうかもしないけど……俺たちは妖怪だぜ？ 仏様や神様が救ってくれると思うのか？」

「仏道は、仏の信心のみによつてなるものではありません。煩惱を捨て心を清めることがあらゆる苦しみからの解放へ通じます。実践的な精神の調和を実現する一つの答えです」

そんなことを言われてもよくわからん。といふか、俺はこんな問題をしに来たんじやない。

「なるほど、つまり法力を学びにこの寺へ来たのですね」

「そういうことだ。妖怪でも法力は使えるのか？」

「不可能ではありませんが、とても難しいですよ？」

そもそも法力とはなんぞや。陰陽道と何か違いがあるのか。そこんところからして俺にはよくわかつていらない。

「法力とは、靈力を持つ人間が厳しい修行の末にたどりつく、功德の力です。悪しき者を祓い、病を癒すことができます」

「……それって、全然妖怪向きじゃない気がするけど」

「はい、法力は靈力によつてなすもの。妖力しか持たない妖怪には使えません。法力は靈力の使い方の一つです。その点で言えば、陰陽道も同じですね」

「じゃあ、妖怪が靈力を持てるようになる方法もあるのか？」

「それもできません。妖力と靈力は相反するものです。この二つを同時に持つ術は、残念ながら私も知りません。結論から言つてしまえば、神力を用いて靈力の代替とするのです」

「神力う？ それこそ妖怪にはふさわしくない力だらう。まだ妖力を靈力の代わりにしたつて言うほうが信じられるぜ」

「いいえ、神力とは信仰の力。人々から信仰を集めれば、どなたでも神力を得ます。私も恐縮ながら神力をいただいていますし、この寺にはあと一人、神力を持つ妖怪がいますよ」

「おいおい、妖怪つてのは人間をおどかして襲うものだろ？ それがなんで人に祟められるんだ？」

白蓮の話によれば、妖怪でも神になれるということになる。神力というものは他の力の種類と比べて質が高いらしく、色々な応用ができるそうだ。使い勝手のいい力で、手早く強くなれる。人間と仲良くなつてでも力を得たいと考える妖怪なら、神力を集めて神格を得ることもまた一つの手だ。お稲荷様とともにと化け狐だし、妖怪が人間に祀られるようになるって話も、そう考えるとおかしくはない。

だが、俺は気にくわない。俺は永琳を倒すためにどんな汚い手段を使つてでも力を手に入れると誓つたが、それでも神力は欲しいと思わない。俺の目的は永琳の打倒。そのためには人間に仁徳を説いて信仰力を集めるのか？ 恨み殺しという最低の私利私欲の実現のために人間を守り、神と祟められることで得た力を使うのか？ 俺は狂つたが、そこまで妖怪やめてない。

「俺は妖怪だ。人を殺したことだつてある。今さら中途半端に改心するつもりなんかない。俺はわかりやすい悪役でありたいぜ。人間の善意を利用して力を得ようなんてクソみたいな真似できるか。そこを曲げたら俺は俺じやなくなる。あ、それが俺の妖・怪・道！」

ててん！

俺は歌舞伎役者のように大見栄を切る。白蓮はそんな俺を見て、ほがらかに笑つた。

「あらまあ、あなたはとても妖怪らしい妖怪のようですね。しかし、それでは法力を習得することはできませんね……」

「俺はいそいそと座りなおす。そりなんだよ。そこが困ったところなんだよ。

「そもそも、どうして法力を学びたいと思ったのですか？　あなたのおっしゃる通り、妖怪とは縁のない力だと思つのですが」

「そりやあ、強くなりたいからわ」

「それでしたら、法力でなくとも他に方法はあるよつて思っていますよ」

「まあな。ちょっと俺の忍術に使えないかと思つたんだ」

「二ンジユツ？　とは、一体なんですか？」

忍術は様々な道具と溢れる知恵を駆使してどんな状況にも対応できる忍びの技。さらに、俺の場合は妖怪忍者。怪しげな妖術で作りあげたビックリアイテムで敵をあつと驚かせたいところだ。

「それでしたら、普通に妖術を習得すればいいのではないかですか？」

「妖術って習うようなものか？　ほとんど生まれつきその妖怪が持つてる術になるだろ？　だから俺は陰陽術や法力を学びたいんだ。人間はそういう体系をもつた力の使い方を確立している。靈力という力そのものと、その使い方をばらして考えられるところは評価

できる。俺が知りたいのはそういう術だ」

「なるほど、そういうとしたら力になれるかもしません」

「ほんとか！？」

「法力や陰陽術はあなたに合わないようですね。ですが、私の知る妖術ならあなたにも使えるかもしません」

よつし、これは予想外の収穫だ。習つて覚えられる妖術。これが使えるようになれば、俺の忍法のレパートリーもぐつと広がるだろう。

「姐さん、こんな不得体のしれない妖怪に協力していいんですか？」

尼さん風妖怪が愚痴るように白蓮に言ひ。余計なことを。

「救いを求める者であれば、命蓮寺は拒むことなく受け入れます」

「そういう訳で… それじゃ、しばらくこの寺の厄介になる

「

「団々しい奴だな。まさか、住みつく気か？」

「まあまあ、いいじゃありませんか。人手不足で困っていたところですしお葉裏には妖術を教える授業料の代わりとして、この寺のお手伝いをしてもらいましょう」

白蓮、いい人そうな顔して実はちやっかりしているのかも。でも、それくらいならお安い御用だ。今までずっと似非行商人の旅暮らし

をしてきたから、一つの所に住みつくるのは久しぶりだ。頑張って妖術を身につけるとするか。

49話「命蓮寺のなかまたち」

命蓮寺に居つぐことになつた俺は、まずこの寺に住む坊主たちと顔合わせすることになった。と思つたら、この寺、妖怪しか住んでいないらしい。考えてみれば、人間と妖怪をともに受け入れるなんて思想に同調する人間なんていると思えない。なら、必然的に寺の運営は妖怪側がしていかなければならず、人間の坊主なんているはずがないというわけだ。

「みなさん、集まりましたね。今日はこの寺に来た新しいお友達を紹介します。では、葉裏さん、入ってください」

部屋の外で待たされていた俺は障子を開けて中に入る。俺は転校生か。まあ、いいや。そういうノリも嫌いじゃないぜ。

寺の一室に集まつたのは、俺を除いて四人だ。結構規模の大きい寺なのに、これだけしか住み込みで働くものがいないとは。しかも、全員女の妖怪である。尼さんとはまた違つみたいだし、つくづくヘンテコな寺だ。

「では、葉裏さん、自己紹介を」

「俺の名は、乙賀忍者、頭目、乙賀葉裏！ 最強の忍者を目指して修行の旅をしている！ 好きな食べ物はポテトサラダ！ 趣味はフランダンス！ よろしくな！」

ダブルピース！

俺の素敵すぐる自己紹介に、一同啞然。一人だけ、なんか頭に花が咲いた奴がぱちぱちと拍手してくれた。照れるぜ。

「そ、それじゃあ、みなさんも一人ずつ皿口紹介していきましょ
う！ では、まず私から。前にも名乗りましたが、聖白蓮です。葉
裏さんが妖術をちゃんと覚えられるまで面倒を見ます。よろしくお
願いしますね」

「はー、先生… よろしく…」

俺は白蓮と握手して、手をぶんぶん振る。

「あ、あの私は寅丸星です！ 聖の推薦で毘沙門天様の代理を仰
せつかつている虎の妖怪です」

次に名前を教えてくれたのは、さつき拍手してくれた奴だった。
虎の妖怪らしく、ショートカットの髪は黒と黄色の阪神カラーだっ
た。頭の上に花が咲いている。気になる。
その右手には大事そうに宝塔を持っていた。

「あ、その宝塔、確かナズーリンが失くしたって言つてた……」

「あーあーあー！ それは言つちゃダメです！」

「……またですか、星。あとでお説教です」

「ひいい！」

「ジッ娘のようだ。すいむ白蓮を見て、寅丸はすぐガクブルし
ている。

「私も前に名乗つたが……ナズーリンだ。まあ、この寺の先輩妖

怪として色々と指導してあげよつ、新入り君

「子ネズミ妖怪が生意氣に上から目線で告げる。あー、あのミキ
ーみたいなネズ耳をくにくにしてやりたい。

「雲居」輪だ。言つておくが、この寺に住まい以上、規則は守つ
てもうう。自分勝手な行動は許さないぞ」

「はいはい、いいんぢょさん。寺の前を掃除していた尼さん風妖怪
である。もう二二、寺じやなくて寺子屋にした方がいいんぢゃない
？ 十分キャラがそろつてるよ。」

「そして、あともう一人……来い！ 雲山！」

一輪が手に持つ金色の輪を掲げた。すると、その輪が光り、部屋
に突風が吹き荒れた。ズバンッと障子の戸が開き、外に集まる白い
塊。雲だ。雲が庭先に集まっている。その雲はもくもくと大きくな
り、人の顔の形になる。いかめしい面をしたオヤジ顔が現れた。

「……」

「……」

「なんかしゃべれよ。

「入道の雲山だ」

代わりに一輪が説明する。雲の入道ね。入道雲ね。
これで命蓮寺の住人は全部らしい。こんな個性的な奴ばかりだと、
俺のキャラが薄れそうだぜ。ヒヤッハー！

「それでは、葉裏さんに質問したいことがある人はいますか？」

「はい、一ソンジャって何のことですか？」

寅丸は忍者がどういうもののか知らない様子。他の面々もあまりよくわかつていなじょうだ。よからう、この自称最強の忍者、乙賀葉裏が解説してやるつ。

「説明しよう…。忍者とは…。文字通り、口を殺し、忍ぶ者。すなわち、枯れ葉に紛れる蝶のように、花に扮する蠍螂のように、夜の闇にとどまらず、市井の中に、城の天井裏に、電柱の陰べツドの下テレビの中、とにかくありとあらゆるところに身を隠す最強の紳士！ そして、語尾に“一ソン一ソン”とつける。それが忍者…。」

「変態か」

一輪が一言でまとめてくれた。そいつとも言つ。

「たぶん、人間たちの間で草とか乱破とか言われている者たちのことだと思うよ。普段は農耕に従事し、有事の際は諜報活動などを主体とする集団みたいだけど」

ナズーリンが補足する。そうだったのか。俺、忍者なのに知らなかつたよ。

「まあ、俺のスーパー忍術が役に立つ機会があれば、いつでも言ってくれ。修行がてら、大抵のことは協力してやるぜ」

「それは頼もしいですね。みなさん、葉裏さんと仲良くしてください

さいね」「

「まてい！ 聖、ワシは納得がいかんぞ！」

だが、そこに和を乱す一聲がかかる。それは庭先に召喚された雲山のものだった。

「聖よ！ このような身元もはつきりせぬ得体のしれない妖怪をこの寺にホイホイ迎え入れてよいのか…」

「ここは人も妖怪も平等なんだろ」

「はあああああつ…」

聞けよ。

雲山は氣合いの声とともに、妖力を発する。その体がみるみる小さくなり、人型の形をとった。筋肉ムツキムキのボディビルダーのような大男の姿だった。髭もじやだが、ハゲ散らかした頭は無駄に照り輝き、阿修羅のように厳しい顔つきで、肌の色は異様に白い。未着色のフィギュアみたいに。たぶん、雲だからだろう。

そして、全裸だった。チコミせんな。まるで見せつけるような仁王立ち。俺と一輪以外の女性陣はさつと目をそらす。

「ほざけ、小娘。貴様、自分のことを忍者と言つたな」

「ああ、そうだが

「ふ、片腹痛いわ。そのような出で立ちで忍者だと？」

「なに…？」

聞き捨てならんな。俺は正真正銘の忍者。その本物の忍者を前にして、忍者であることを笑うとは。出で立つと言つたな。俺の格好のどじが問題なんだ。

「女の忍者、すなわちクノイチであれば、それ相応の服装というものがあるだろ？一 例えば、」このようになー！」

バツと雲山がどこからか、衣装を出す。それは、コスプレショップで売つていそうな露出度の高い服だった。ピンク色の上着は胸元が大きく開き、鎖帷子を思わせるアミアミがかかつてゐる。スカートはパンツがモロ見えになりそつなくらい短い。肘上まで覆う手袋と、二ーン並みの長さの靴下も、綱タイツっぽいデザインになつている。

「雲山、もう帰つて良いぞ」

一輪はそれだけ告げると、ぴしゃりと障子を閉めた。こつして、俺の顔合わせはつづがなく終了した。

50話「基礎から始める妖術テクニック入門編」

さつそく、俺は白蓮に妖術を教えてもらひことになった。白蓮の書斎のような部屋に連れて行かれる。巻物がたくさんある。

「妖術とは妖力を使つてなすあやかしの技です。キツネやタヌキの“化かし”などの幻術や、鬼火、怪力なども妖術のくくりに入ります」

「俺は怪力と妖力弾くらいしか使えないな」

「妖力弾は最も原始的な妖術ですね。これはある一定の妖力を持つ妖怪や妖精ならば、だれでも使うことができます。単純ながら奥が深い術です。これを極めるだけでもなかなかの戦力になると思いますよ？」

「まあ、それは平行してやつていこう。俺が知りたいのは、俺に使えない妖術だ」

キツネが葉っぱを使って人を化かす術は見たことがあるが、同じ妖怪で妖力を持つている俺には使えない。キツネをとつちめて無理やり聞きだしても使えるとは思えない。結局、妖術ってものは、その妖怪の種族が生まれつき使えるものに使用が限定されるのではないか。

「その考え方をおおむね正しいです。その種族にしか使えない術というものがほとんどですから。私も妖術を身につけようと思ったときは、苦労しました」

「ん？ あんたも俺みたいに自分には使えない妖術を求めたのか？」

「はい。実は私も葉裏さんのように、始めは法力や陰陽術を妖力で転用して使えないかと考えていました。結果的には無理でしたが、成果はありましたよ。それが『妖術符』です」

白蓮によれば、陰陽道の式をヒントに作り出した符だという。この方法なら、符にこめた術式に合わせて妖術の効果を発動することができる。つまり、符の術式をいじれば自由に妖術の効果を変更できるのだ。

「でも、陰陽術って神道だろ。仏僧のお前がなんでそんなこと知つてんだよ」

「神も仏もみな平等です。関係ありませんよ」

「そういえば、こいつはそういう奴だった。気にしないでおこう。俺は強くなれねばそれでいい」

「ですが、妖術というものは、物体に宿すという性質に欠けるのです。妖力を符に込める工程が一番大変でした。複雑な術式を理解し、大量の妖力が必要になります。そう簡単に覚えられるような生易しいものではありませんよ」

「うう……頑張ります！」

俺は自分が頭のいい奴だと思ったことはない。はっきり言ってバカだ。一度、俺を退治しようとした陰陽師からお札をぶんどつて解

析しようとしたことがある。陰陽術の術式ですら、俺には理解不能だった。妖術符はそれよりもさらに難しいというのだ。不安はある。だが、これも永琳のため！ 俺は自分の限界を超えてやる！

「よろしい。では、授業を始めましょう」

* * *

「お、お……おおおお……」

「『主人、見てみる。葉裏の頭から湯気が出ているぞ』

「よ、葉裏さん大丈夫ですか！？」

俺の頭は知恵熱で沸騰しそうだつた。もう、勉強はしたくない。これでも俺は真剣に取り組んだのだ。居眠りなんてもつてのほか。白蓮の言う複雑難解な術式に関するこつを一字一句聞きもらすまいと必死だつた。だが、集中してその言葉を聞けば聞こうとするほど、その文字列を狂氣がかき乱すのだ。いや、いいわけとかではなく、本当に発狂しそうになる。

思うに、俺は右脳型の考えに特化するようになつてしまつたのではないだろうか。ヴィジュアルで物事を直感的に理解することには恐ろしい適正がある。それが忍法『百見心眼』だ。だが、その代償として理論的な思考能力を失つた。昔の俺はどちらかと言えば、左脳型だつたはずだ。狂氣の影響か、考え方が反転して性能がぶつ飛んでいる。

口からエクトプラズムを出そうとしている俺の両隣りには、ナズーリンと寅丸がいた。寅丸は蒸気をあげる俺の頭をぱたぱたあいでくれている。今は夕飯の時間のようで、命蓮寺の皆が集まり、一つのちゃぶ台を囲つているのだ。

雲山もいる。安心しろ、服は着ていた。作務衣のよつなものを着ている。団体がでかいので、無駄に場所をとる。圧倒的な存在感だ。てか、こいつも飯を食つのかよ。霞でも食つてや。

白蓮が「ほんをよそう。最初についだのは、雲山の茶碗だ。

「白蓮って、一番偉いんだろ？　なんで奥さんポジションなの？　あと雲山が無駄に偉そつなんだけど」

「ふんっ！」

「あがーっ！」

雲山の手がゴムのよつに伸びて、俺の顔面にめり込むほどパンチを食らわせる。なんで突然殴ったんだ、こいつ。

「家長こ一番に飯をつぐ！　それが伝統的な日本の食卓だあ！」

「だからオメーヨリ白蓮の方が偉いだらうが！」

「まあまあ、ふたりとも喧嘩はやめましょっ。はこ、『ほんの準備もできましたよ。それじゃあ、手を合わせてください』

「　　「　　『ただきます』　　」

今夜の夕飯のメニューは、雑穀粥、おしいもの、山菜のおひたし、きゅうりの酢の物、以上。質素だなあ。すいものなんて、『ごみくず』みたいな具しか入つてなくて白湯の『ごとき薄味だ。なんか御馳走になるのが申し訳ない。俺は光合成ができるので、食べ物は食べなくてもお腹が空かないのだ。

「いらっしゃだからって、もう少しマシなもん食えないのか？」「

「うちの寺には借金に苦しむ信者が多くてな。姐さんは考えなしにやういう奴らの肩代わりをするんだ。寅丸の能力でどうとかやっているが、それでも家計は火の車。文句があるなら食わなくていいぞ」

一輪がぴしゃりと言い放つ。借金の肩代わりまでするなんていい人すぎるというか、ただのバカだ。絶対、利用されてるだけだって。

ぐう～…

「ハグツー！」

隣からかわいいお腹の鳴る音が聞こえた。ナズーリンの方だ。

「モー、ナズーリンはかわいいなあ。なでなで」

「ひとのおなかを気安く撫でまわさないでくれるかな。同情するなら食糧をくれたまえ」

「しょうがない。はい、ナズーリン、あーん」

「やうこそこのらない。普通にけよつだい」

があ～…

い、いま、すげえ音が聞こえたぞ。音のした方向には寅丸がいた。顔を赤くしてうつむいている。まさか腹の音なのか。

そりゃあ、こんな少ない飯で育ち盛りの妖怪たちの腹が満たせるわけがないよな。人間を丸飲みしたいお年頃だらう。」

「白蓮の」はんだけ量が少くないか?」

「ええ、私は物を食べなくても問題ありません。本当はみなさんにおの分も食べてほしいのですが、遠慮されてしまつので」

なんて心温まる貧乏一家。涙が出そつ。そこで、雲山が自分の茶碗を白蓮に差しだす。またか、自分の分を白蓮に、

「聖、おかわり」

「てめえはもつと遠慮しろー。」

俺は箸を雲山に投げつけた。一本ずつ右田と左田に突き刺さる。

「あんざやあああーーー。」

「ハリハリ、葉裏さん、行儀が悪いですよ」

田に箸が刺さつたことは注意しないのか。まあ、雲だし、大丈夫だろ。

のたうちまわる雲山を放置し、質素だが心温まる夕飯を楽しんだ。

50話「基礎から始める妖術テクニック入門編」（後書き）

ストックが尽きましたので、これにて連投祭りは終了です（泣

5-1話「仲良く喧嘩しな

飯も食つたことだし、今日は寝るとするか。妖術符の勉強は、明日から頑張ればいいや。

俺の寝る部屋は、ナズーリンと一緒にになった。

「えー、おかあさん、他に部屋は余つてないの?」

「いいじゃありませんか。ナズーリンはずつと一人で寝ていたので、葉裏さんがいれば寂しくないでしょ?」

「私は一人で寝られないほど小さな子ビモではないのだが

なんでも、白蓮は寅丸と、一輪は雲山と一緒に部屋で一人ずつ寝ているらしく、ナズーリンはこれまでずっと一人部屋だつたらしく。つてか、一輪は雲山と寝てるのかよ!？ そっちの方が驚きだよ!？

「なんなの、あんたら。夫婦なの?」

一輪が俺の胸ぐらをつかみ上げる。身長の低い俺の体は宙に浮いた。陰に隠れたその顔は、目だけが異様に赤く光っている。

「口のきき方に気をつけろ、雌妖怪イイイ……！」

「す、すみません……もう絶対言こません

どうやら、そういう関係ではなにようだ。

そもそも部屋に移動しようかとこうとき、「寅丸が話しかけてき

た。

「あの葉裏さん、気をつけてくださいね」

「え？ 何を？」

「ナズーリンと一緒に寝ると、そのアレが大変なんです……」

アレ？ なんだよアレって。寝相がひどいとか、いびきがうるさいとか。はつ、もしかしてちょっとHツチな展開へのフラグですか！？

『葉裏い……一人で寝るのこわいの……そっちの布団に行つてもいいい？』

ふむ、アリだな。

「何を話しているんだ、ご主人？」

「い、いや、何でもないです！ それじゃあ、おやすみなさい！」

「？ まあ、いいか。葉裏、寝る部屋はこっちだ。ついてきてくれ

* * *

ナズーリンの案内で寝室に到着、押入れから布団を出して敷く。

「なんか布団の距離が近くないか

「まあまあ」

明かりを消して布団に寝る。ふひひ、今夜はナズーリンをだっこしながらスイートなナイトをハブアナイスディーするとしますか。まだかまだかと期待して目を閉じる俺。星の光しかない薄暗がりの部屋には、外から聞こえる虫の声しかしない。

だが、そのとき俺の顔のすぐ横に近づく気配。え、い、いきなり！？

くそ、ちょっとドキドキしちまつたじゃないか！ ナズーリン、普段はクールなキャラできめてるのに、一人きりになると甘甘のか……！ そのギャップにはからずも萌えてしまう。

「チューちゅー」

ちゅう！？ はじめてーの一ー、ちゅう！？
だ、大胆すぎるぞナズーリン！ いかん、顔がニヤけてしまう。
冷静になれ、俺！ ビークール、ビークール……よし、準備は整つた。いつでもこい！

そして、俺の耳に走る甘美な痺れ。み、耳だと……！ うぐおつ！ や、やばい、体がビクンビクンなる！ そんなことされたら、俺ツ……！ ぬおおお、ビーストモード発動ツ！

「チューちゅー」

ガジガジ

「ああ、もうナズーリンつたら、そんなに俺の耳がじつちゃダメだつて……え、ガジガジ？」

俺は目を開けて横を見る。俺の顔の横には、でかいネズミがいた。

ナズーリンではなく、あの哺乳類の奴。そいつが俺の耳に噛みついている。

「いってええええええ！」

ばびょーんと布団から起き上がり、垂直に吹っ飛び俺。そして、天井の板を頭が突き破る。天井に頭だけ刺さった首吊り状態。だが、天井の板が俺の体重に耐えきれず、壊れる。俺の体は落下。落下した衝撃で畳が持ちあがる。てこの原理で畳が俺の体を、今度は横に吹き飛ばした。

どかーんと吹っ飛んで障子を突き破り、外に飛び出した俺は、地面をじろじろと転がりながら進んでいく。そして庭の一本の木にぶち当たった。ようやく止まつたかと安心した俺。しかし、なんとその木から鳥の巣が落ちてきた。俺の頭上に乗つかる巣。そして巣から落ちた二つの卵が俺の両目にズボンとはまる。これでは前が見えない。ぴったりとはまり込んだ鳥の卵をぎゅーんとひっぱり、ポンつという音とともにやつとのことで取り外した。

「ひて、トムとジェリーかよ！？」

なんだこのドタバタコメディ。一部、物理法則を無視した動きがあつたぞ。騒ぎを聞きつけて目を覚ましたのか、ナズーリンがさつき俺に噛みついたネズミを抱えてこちらに来た。

「そうそう、いい忘れていたが、私の部下のネズミたちは食欲旺盛で凶暴な肉食性だ。気をつけた方がいい」

「そういうことは、もつと早く言つてね！」

結局その日は、軒先に干された自分の甲羅にじもつて寝た。やつ

ばつじは落ちつべ。

52話「白熱の雑巾がけレース」

寺の朝は早い。日も昇らぬ早朝に起っこされた俺は、寝ぼけまなこで掃除をさせられている。

「ほなつとするな。ちやかちやか働け」

「へへへ」

妖怪の体になつてから、寝ないと思えば結構何日でも徹夜できるのだが、一度寝てしまつとその感覚に引きずられるのか、眠気が残る。実際、何時間何日でも寝られてしまうのだ。俺は生まれてからほとどどの時間を眠つた状態で過ごしてきただからな。

「ほら、次は廊下の雑巾がけだ」

「ひつとひの一輪はやる氣に満ちあふれている。さすがいいんちよだ。」

命蓮寺の廊下は長い。これを全部拭きする頃にはお昼近くになつてゐる。といそく意欲がなくなってきた。やつました感だけ見せて、適当に終わらせよう。

「ほら、そこ拭き残しがあるぞー。ちやんとされ」

「へへへー。」

「ほせえなあ。なんでそんな細かいところまで見てるんだ。そんなにしつかり掃除しなくても十分きれいな廊下だよ。」

俺はクラウチングスタートの体勢から高速で廊下を駆け抜ける忍法を開発した。名付けて、忍法『高速雑巾走法』。これはかつて悪いな。二軍落ち。

「待て！ もうひと手にやれと言つていいだら？！」

一輪が後ろから雑巾がけをしながら追いかけてくる。俺の高速雑巾走法に追いつくとは、やるな。

「だが、甘い！」このコーナーリングについてこれるか！

廊下の角をドリフトしながら曲がる。雑巾から煙が出そつなほど の摩擦熱。外に向かつて吹き飛ばされそうなほどのGが体を襲う。だが、ここで体勢を崩すわけにはいかない。一步でも足を踏み外せばクラッシュは確定。きりもみしながら機体はバラバラになる。そのスリルがたまらない。

「待たんかーっ！」

しかし、俺の後ろに一輪はぴたりつけてきた。それも俺と同じく雑巾がけをしながらだ。あのコーナーをこのスピードでクリアしだと……！ ふつ、俺はどうやら認識を改めなければならぬらしい。この勝負の行く末、俺にもわからなくなってきたぜ！

猛スピードで背景が後方へ流れしていく。もはやドンドンドンドンとう俺と一輪の足音しか聞こえない。俺たちはひたすらにスピードを求めた。廊下を駆け抜ける風になる！

「うおっ、な、何事だ！？」

と、そこにナズーリン登場。プオンとドップラー効果で走行音を

なびかせながら、その横を通り過ぎた。その突風によつてナズーリンのスカートがめぐりあがる。見えたッ！ 中はドロワーズ！

「ひくしょおおおおおおーー！」

だが、ドロチラも、それはそれでいいものだ。

一輪が猛烈な追い上げを見せてきた。俺は前に出られないよつて、右へ左へと巧みに体をずらし、妨害する。しかし、そのせいで前方の注意がおろそかになつていた。

「ふあー、今日もいい天氣にゃああああああー！？」

今、何か撥ね飛ばしたな。廊下を横切るひつとした黄色い物体が庭へ吹っ飛んでいく。

思わぬ障害物のため、俺のスピードががくつと落ちた。その隙に一輪が追い上がる。ついに俺たちは横に並んだ。

「「「ひくしょおおおおおーー！」」

踊る四肢の脈動。一進一退のせめぎ合ひ。俺たちの目標は廊下の終焉、すなわちゴールを目指すといただ一點に集約されていた。それは雑巾がけという単なる掃除の概念を超えた、魂の飢えを満たさんとするあくなき挑戦。本能のままに駆ける野生の叫び。さあ、パトスを燃やせ！ 雌雄を決するときがきた！ ここにて、雑巾がけ最速王者の栄光が輝く！

「そりはせせるかああー！」

俺たちの前に立ちはだかる最後の壁、雲山。

雲山が廊下を遮るように手を広げて待ちかまえる。

俺たちはそれでもスピードを落とさなかつた。いや、むしろ上げた。音速の壁を越えた（ような気がした）俺たちは、ソニックブーム（あふれ出る妖力）を纏いながら雲山へ迫る。

俺たちは宙へ飛んだ。雑巾をかけるといつことは、すなわち地面に這いつぶばつて進まなければならないという制約。だが、もはや俺たちにそのような次元の楔など不要。制約から解放された俺たちは、そのステージを空中へと移し、さらなる次元の高みへと続くロードを駆け抜ける。

俺は足を前に突き出し、ドロップキックの体勢をとる。一輪は腕を横に伸ばした。その腕は、吸い込まれるように雲山の首へ向かう。ラリアットだ。俺たちの攻撃は同時に雲山へ直撃した。

時間の流れが遅くなる。ゆつたりとした時の流れに乗つて、俺たちの攻撃は完全に雲山をとらえていた。そして、時は動き出す。

ディスコーン！

雲山の体は後方へ飛んだ。俺たちは慣性に従い、その場にとどまる。雲山が廊下の上を滑るように吹き飛ばされていく。その行先は、廊下の終焉。確か、その場所には廁があつたはず。その扉に向かつて一直線に突撃する。

「ふう、スッキリしました……」

しかし！ なんといつゝだらう。その廁のドアがゆづくりと開いていく。そこから出てこようとしているのは、あらう」とか命蓮寺の主、聖白蓮！ 僕と一輪の目は驚愕に見開かれた。このままで大惨事が起きる。だが、雲山の速度は落ちることなく廁へと向か

つて いる。

何も知らない白蓮。そこへ猛烈な体当たりをしかけようとしている雲山。そして、その原因を作った俺と一輪。絡み合ひ運命は、どのような結末を生み出すというのか。

次回決着！

53話「瀆物事件」

前回のあらすじ。雑巾がけレースを敢行した俺と一輪は調子に乗つて廊下を爆走した。数々の障害物を避け、ゴールを目指す俺たちだつたが、最後にあらわれたお邪魔キヤラ雲山の妨害に遭う。しかし、俺たちの協力技によつて見事、雲山を撃破することに成功した。**吹き飛ぶ雲山**。だが、その行先には今、まさにトイレから出てこようとしてドアを開ける白蓮の姿があつた。

「ふう、スッキリしまし……」

雲山の巨体が白蓮に迫る。もはや衝突は避けられないのか。白蓮は！ 廁のドアを！ 勢いよく！ 開け放つた！

「たアツ！」

パチコーン！

ドアと壁の間でサンドイッチにされた雲山。それでは、判定映像でもう一度、「覗くぞ」と。

「たアツ！」

パチコーン！

カメラワーク・正面（廊下側から）

「たアツ！」

パチコーン！

カメラワーク：右（庭側から）

「たアツ！」

パチコーン！

カメラワーク：左（建物の壁側、挟みこまれる雲山のドアップ）

「たアツ！」

パチコーン！

カメラワーク：上（頭上から）
以上、判定映像でした。いやー、見事なフィニッシュ。これは高得点だあ。

「あら、葉裏さん、一輪、おはようございます」

白蓮は何事もなかつたかのように廁の扉を閉めた。壁にめり込んだ雲山に気づいていないのか、一瞥もしない。呆然と立ち尽くす俺たちの間を、いつもの笑顔で白蓮が通り過ぎていった。

こうして、俺たちの青春を駆けた熱いレースは、終わつた。

「はつ！ しまつた！ つい場の雰囲気に流されて、私は何と言つことを……！」

一輪が我に返る。その動揺を氣遣うよつて、俺は一輪の肩に手を置いた。

「いや、一輪。俺たちは何も悔いることはない。俺たちはただ掃除をしただけのことさ。特大の粗大ゴミの掃除を、な？」

「葉裏……ふふつ、そつだな」

俺は手を差し出した。勝負の後につまらないわだかまりなどない。一輪が俺の握手を受けいれる。すがすがしい朝日の光がまぶしい。その温かな阳光に包まれ、俺たちは笑い合った。こうして、俺と一輪との友情が、またひとつ深まったのであった。

* * *

「葉裏、ちよつと手伝ってくれ

ある日のこと、俺が妖術符の勉強で脳内CPUをオーバーヒートさせていると、一輪が声をかけてきた。せっかくの休憩中になんだといつのだ。

「実はな、漬物を作ろうと思つたのだが、いつも使つてる漬物石がないんだよ」

「漬物だあ？」

一輪が連れてきた場所は台所の裏手だった。大きな木の桶の中に、青々としたみずみずしい夏野菜たちが並んでいる。漬物を作りうとしているらしいが、桶の上に乗せる重となる漬物石がないといつ。

「石なんてそこいらへんに転がってる奴を使えばいいじゃないか」

「あの石がちょうどいい仕上がりになるんだ。絶妙な重さ加減でな。いつもここに置いているんだが、今日はなぜかなくなってるんだ。あんな重いもの、自然には動かないはずだから、だれか持つていつたと思つんだが。盗む価値のあるものではないんだけど……」

「それで、俺になにを手伝つてほしこんだよ?」

「漬物石を探してきてくれ」

「はあ? なんで俺が。そういうのはナズーリンの仕事だろ?」

「ナズーリンも星も姉さんの説法に付き合つて忙しいんだよ。私はお毎(まへん)の支度しないといけないし、雪山は呼んでも来ないし

「俺は今、休憩中……」

「頼んだぞー」

「おー! ちょっと待て!」

一輪はそれだけ言つと金所にもどつてしまつた。しかたない。探してやるといしますか。

* * *

「つつてもよお、俺、漬物石がどんな形でどんな大きさなのか知らんぞ」

とりあえず、寺の敷地を歩き回つてみたが、それらしきものはない。いかに俺が優れた忍者といえども、何の手がかりもなしに探し物を見つける才能はない。

「はあつー、ふんつー。」

「おお、雲山。いろんなところを回してんだよ。」

「おお、葉裏ではないか。見てわからんか、鍛錬じや。」

漬物石を探してゐる途中で雲山に会つた。雲山は奇声を発しながら、何かやつてこむ。鍛錬じや。

「ふうーー、このワシのハーー。鍛え上げられた肉体をつーーはあつーー。それが磨き上げるべくつーー、こいつしてつーー日々鍛錬をつーーしておるのじやつーーせこつーー。」

雲山は足元に置いた大きめの口に向かつて、ひたすら拳を突きつけている。その気合いのこめられたパンチを受け続けた石は、ミシミシと音を立ててヒビが入り、ついには粉々に碎けてしまった。

「へえ、やるじやん、雲山」

「見たか聞いたか、ワシの鍛え上げられた筋肉の調べをーーふんんーー！」

まあ、俺なら「パンチで粉碎できるけどな。そうだ、ちゅうどいい。雲山なら漬物石のことを知つてゐるかもしないし、このままでこつに丸投げしよ。」

「なあ、雲山。一輪が漬物石を探してゐるみたいなんだ。お前も探
してられ

「ん？ 漬物石とな？ はつまつまー そのよつな」と造作もな
い。この雲山に任せとおけ！」

おお、なんとも頼もし。はじめてこいつが役に立つた気がする
ぜ。どうせ俺が探したところで見つかられるわけないし、俺は昼食
までゆっくり休んでいるとしますか。

54話「発想の勝利」

漬物石探しを雲山に一任した俺は、甲羅磨きに精を出していた。たまには俺のナイスなこの相棒をいたわって、きれいに磨き上げてやるものいいだろ。

と、そこへ一輪がやつてくる。お皿^いはんができたのだろうか。いや、なんか肩をいからせながら凶暴なオーラを発しているな。何事だ。

「葉裏、ちょっと来い！」

一輪は俺の首根っこをつかみ上げると、俺を引きずりながらどこかへ連れて行く。なんだ、頼まれ^いことをサボったことを怒るにしても少し度が過ぎないか。そりや、雲山にまかせっきりにした俺も少しほど悪いとは思うが、ここまで怒らなくてもいいじゃないか。

一輪が連れてきた先には、雲山がいた。なんだか、さつきまでの威勢はなく、しょんぼりしている。どうしたんだ一体。

「これを見ろ！？」

一輪が指差したのは、さっき雲山が鍛錬とか言って木端微塵にした石だ。これがなんだというんだ。

「まったくお前は漬物石をこんなにして！ これじゃあ、もう使えないだろ！」

「えええええ！？」

それが漬物石だったの？ あと、なんで俺が怒られるんだよ。それを碎いたのは雲山だろ。

「まあ、それは不幸な事故だったな。でも、雲山がやつたことだから俺は関係ない」

「隠そりとしても無駄だ。すべて雲山から話は聞いた」

「は？ 話つてなんだよ。雲山の方に顔を向けると、田をやられただ。

「お前が面白半分に漬物石を碎いたんだろう？ 雲山がそれを田撃してたんだ」

「ちよ、ちよっとまってえええい！ ふざけんじゃねえ！？ それを壊したの雲山だ！」

「あんなあ、葉裏。雲山は最初からこれが漬物石だったって知つてたんだぞ？ いくら雲山でも、そんなことするわけないだろ？」

……この口ハゲオヤジ、俺をはじめがつたな！ 雲山はブツブツつぶやくつに何か言つている。

「ほ、ボク見ました。葉裏が『筋肉の修行だ』とか言つて、この石を碎きました」

「ほりみり、やっぱお前の仕業じゃないか

「狂氣開放！ 忍法『黒兔核狩』！」

黒き呪いを纏いし右手が閃光のごとく瞬いた。次の瞬間、雲山の腹に風穴が開き、全身が呪いに包まれて黒い炎が燃え上がる。

「ぐあああああああーー！」

「雲山！？」

「あ、ごめん。つい、条件反射で」

「まつたく、漬物石を壊したことは知らなかつたのだらうし、もう別にいいが、そのことを隠そつとするとは何事だ。きちんと反省しているのか?」

雲山を半殺しにした」とせやつぱりノータッチなんだな。

「だから！ 俺じゃなくて雲山がやつたんだよ！」

「……にあ キシ い て た。 たの 仕事 の 演出 を 手 に て き

カツチーン。」「いつ、俺の言う」と全然信じてないな。そうかい、そつちがそういう態度とるんだつたら、「うちにも考えがあるよ!

「はいはい、漬物石ね。お安いじ用ですよ。それならもう準備していますから、ええ、ええ」

「そうだったか。じゃあ、早く持つて来てくれ」

* * *

台所前に移動した俺と一輪。今回、俺が用意した品はこじらひ。土に埋もれて一億年、大地の恵みを受けて育つた深緑色の輝き。とあるカメ妖怪が愛用したと言われる由緒正しい伝説の甲羅です。肌に優しい植物性。

俺はそのナイスな漬物石をそつと、やさしく漬物桶の上に置く。

「そいッ！」

メゴシシャアア！

桶は脆くも崩れ去った。はじけとんだ野菜と糠が地面に散らばる。その光景を無表情で見つめる一輪。

「H A H A H A ! いやー、ちょっと桶の耐久度が足りなかつたみたいだ。いやー、失敗失敗……」

ふつ、俺を怒らせた代償にしちゃあ、安いもんだが、今日はこのくらいで許してやううじやないか。さて、一輪の奴どんな反応をとるか楽しみだ。

だが、俺の予想に反して、一輪は無反応だった。俺の方を向きもせず、台所へ戻ろうとする。

「片づけておけ。お前の昼飯は抜きだ

それだけ言うと、一輪は中に入つて行つた。

「……」

気まずい。いつもの一輪なら、烈火の「」とく怒鳴り声を上げて、髪の毛を逆立てながら俺に往復ビンタ！「つかはばつぐんだ！」ってな具合に、わかりやすい反応を見せるの。

「……別に昼飯とか食べなくてもおなか減らないし……」

俺は地面上に飛び散った野菜を拾う。糠臭い。

一輪、マジでキレてたな。でも、俺は悪くない。すべての元凶は雲山だろ。なんで俺が怒られなくちゃならないんだ。あー、イライラする。ただが漬物くらいで田くじら立てなくとも……

泥で汚れた野菜は、桶が真っ先に壊れた影響か、横に飛び出したため潰されずに済んだものが多い。だが、一部は甲羅の下敷きになり、もう食べられないほど原形を失くしたペースト状になっている。

「食べ物を粗末にしたといひは、俺が悪かったな」

俺は野菜を拾つて甲羅の中へ入れた。それを台所へ届けず、岩山の方へ走りだした。

* * *

「はあああ！　あたたたたた！　あたアツ！」

レッスン1：頑丈で手ごろな大きさの岩を見つけます。レッスン2：素手で中をくりぬきます。レッスン3：石の桶が完成です。

「よーし、こんなもんか」

桶と言つよりは皿に近い形になつたが、野菜の量もそつ多くない

ので、これでいいだろ？俺は石桶の中に野菜を入れ、その上に厚い板を乗せ、さらにその上に甲羅を乗せた。

俺の甲羅はスペシャルである。どんな攻撃にも耐え、どんな金属よりも重く、どんな宝石よりも美しい。であれば、漬物石程度の利⽤法ができないわけがあるか。いや、ない！俺のスペシャルな甲羅で漬された漬物なら、きっとスペシャルな出来上がりになるはず。さつきは桶が脆かつたために失敗したが、今度は頑丈そうな石を使つたので、強度は問題ないはずだ。

「うおおおお、俺の甲羅に秘められし、漬物工ネルギーよー。この漬物に、祝福を与えたまえ！」

俺の甲羅は肌に優しい植物性。そして、漬物の原材料である野菜も植物。相性は最高にいい。甲羅の植物性妖力が、じっくりじんわりと野菜へ染み出し、究極の漬物へと変貌を遂げるはず。

「漬物神へ捧げる舞を踊りうーー！」

妖怪である俺が、神に祈るとは焼きが回ったか。しかし、すべてはおいしい漬物を作るため。そのためならば、恥を忍んで神へ祈ろう。なるほど、命蓮寺の妖怪たちが仏門に入つた理由はこういうことか。よしやく俺にもわかつてきたぜ！

「つ～け～も～の～や～。い～と～お～か～し～、つ～け～も～の～や～」

俺は漬物への熱い想いを舞に託す。額に汗を流し、踊りながら石桶の周囲を何度も回つた。俺の体内に神聖な気が満ちていくようだ。これが、解脱か。

【おいしい漬物を、ツクルノデス！】

俺は唯一神ツツケモノの啓示を受けた。

55話「漬物神の思し召し」

気がつけば、日が暮れる時間。どうやら俺は、時が経つのも忘れて舞い続けていたようだ。俺の漬物神への祈りが通じたなら、今頃この漬物はとんでもないウマさを凝縮した至高の漬物になっているはず。俺は甲羅をどかし、板を取り除く。

「ジ！？ な、なんだこの光は！？」

その瞬間、石桶からあふれんばかりの黄金の光が漏れだした。気がした！

俺は手の震えを抑えられない。恐る恐る漬物へと手を伸ばす。そして、それを食べた。

「……う、うめえ……」

これが、唯一神ツッケモーノの力。全身から生への喜びが湧きあがってくる。満足がいくどころの話じゃない。これぞ、ザ・キング・オブ・キングス・オブ・ツッケモノ。

「うめえええええ！」

まずい、理性を抑えきれない。あまりのうますぎに発狂しそうだ。もちつけ、俺！

一瞬でも気を抜けば、今しがた出来上がったばかりの漬物をすべてたいらげてしまいそうだ。早くみんなのところへ持つて行つて見せびらかそう。

俺は命蓮寺へ急いだ。

ちよつビタ飯時だつたようだ、いつものちやぶ台にみんな集まつてゐる。ふふふ、驚かしてやう。俺は忍法『虚眼遁術』を使って、部屋の中へ入つた。

「一輪、葉裏さんと雲山はまじつしたのですか？」

「雲山は体調が悪じようで、休んでる。葉裏は……」

「一輪が口じもる。なんだか元氣がない。あれ、もしかして俺に怒つたことを気に病んでくれてたりするのかな。」シンデレメー！

「食事の時間に遅れるとは、新入りのくせに態度がなつていない。私たちは先に食べていよう」

「ダメですよ、ナズーリン。みんなが集まるまで待つべきで……」

「あー……

先に食事をとらうとしたナズーリンをたしなめる寅丸。だが、そのおなかが盛大に鳴つた。

みんないに具合におなかを空かせていくようだ。俺は食卓の上に漬物を乗せたお皿を置いて、自分の席に座る。

「……すまん、ちよつと葉裏を探してくる。先に食べていてくれ

そこで一輪が立ち上がつた。俺はそのタイミングで『虚眼遁術』を解除する。

「だれを探しに行くのかな？」

「だれって、だから葉裏を……つて、えええええーー？」

突然、現れた（よう見えた）俺に、一同が仰天する。隣に座っている寅丸なんてすっ転びそうになつていて。

「い、いつからそこにいたんだ？ 全然気づかなかつたぞ」

「俺が忍者とこつ設定を忘れていいかな？ この程度の気配遮断は朝・飯・前！」

「いつもアホなことばかりしているから、すっかり忘れていたよ

辛辣なナズーリンの言葉。俺はアホじやねえ、狂つてるのさ

「あら、おかずが一品、増えていいかしら？ これは漬物ね。確か、漬物は今日漬けたばかりのはずだけれど……」

「まあまあ、マダモアジホール、一口お口にになつてじりじりなさい

い

「では、お言葉に甘えて……ぱく

ちやぶ台に並ぶ漬物に気づいた白蓮に、それを勧める。箸をつけた白蓮は、漬物を口にし、動きが止まつた。

「ひじ、り……？」

食卓に緊張が走る。いつも菩薩様のよつこやせじい笑顔の白蓮。そのにこやかに細められた目が、くわっと開眼する。

「ハマー！」

「テーラッ テレー！」

「口に入れた瞬間、香る絶妙な糠の風味。ほのかに広がる酸味と塩味。新鮮さと熟成という一見して矛盾する二つの概念が混在し、そして互いの主張を妨げることなく見事に調和しているわ。何も高級感などない、それでいて、素材の味を余すところなく引き出し、凝縮されたうまみ。まさに、これこそおふくろの味！ 母の無限の愛を、ただ漬けるという単純な行為の中で最大限に表現している！ 白らの味を舌に押し付ける奢りなどなく、ただすべてを優しく包み込むあたたかな愛を感じぬ……ああー、やつ止まらないわ！」

いつもは遠慮してほとんど食事をとらない白蓮が、皿に山盛りにされた漬物にすさまじいスピードで箸をつける。他の連中はその白蓮の様子に睡然としていた。

「そんなにおいしいのかね？」

「た、食べてみましょ！」

「「ぱく！」」

白蓮の勢いにつられたナズーリンと寅丸が続いて漬物を食べた。口に入れた瞬間、二人の表情が危機迫る物へと変わっていく。

「た、確かにうまい……いや、なんだ、このつまみは。思わず自制してしまうほど危険な香りがする。だが、食つー！」

「おいひいいいー！ れなら、じはん何杯でもいけちゃいます

「うひー。」

やはり漬物神の力はすごかった。みんな俺の漬物をモリモリ食べている。これではすぐになくなってしまうだろう。

だが、そんな中、一人だけ漬物に手をつけない者がいた。一輪だ。

「どうした、一輪。早く食べないと俺のスペシャル漬物が売り切れるとぞ」

「……葉裏、私が食べても、いいのか？」

「何言つてんだ、俺はお前のためにこの漬物を作ったんだよ」

「葉裏……」

いい雰囲気になってきた。一輪はためらいがちに漬物を食べる。

「ははっ、これはうまいな。葉裏は漬物を作る才能があるぞ」

「ああ、俺は漬物神よりおいしい漬物を作るべく啓示を受けた漬物マイスターだからな」

「またお前はわけのわからないことを……葉裏、昼間はすまなかつた。漬物石くらいのことでもきになつて、しかも、お前を頭ごなしに悪いものだと決めつけてしまつた。実はあの後、雲山の介抱をしていたら、寝言で自分が犯人だと白状したんだ。疑つて悪かつた、すまない」

そう言つて、一輪が頭を下げる。俺は一輪の肩に手をのせ、首を横に振つた。

「いいんだ、一輪。俺は、ただ漬物をつけてやっただけさ。ところで、これから特大の粗大ゴミを一夜漬けしてやる」と思つんだが、手伝ってくれないか?」

「葉裏……ふふつ、そうだな。私にも手伝わせてくれ

俺は手を差し出した。仲直りの後につまらないわだかまりなどない。一輪が俺の手をとつて頭を上げる。漬物をとりあう食卓の風景がまぶしい。そのにぎやかな喧騒に包まれ、俺たちは笑い合つた。こうして、俺と一輪との友情が、またひとつ深まったのであった。

56話「トムジョーリー回戦」

さて、今日も妖術符の勉強を頑張った。こんがらがつた頭の疲れを癒すのには、風呂に浸かってゆっくり休むのが一番だ。そんなわけで、俺は風呂に入りに来た。

最近の俺のマイブームは、他の女性陣が入っている最中に風呂へ突撃し、一緒に入浴することである。背中を流してやると言つて、さりげなくおっぱいを探むことを一日の終わりの楽しみとしている。風呂場の明かりはついている。だれか入浴しているようだ。さつそく突撃しよう。

今日はだれが入っているのだろうか。白蓮と寅丸の二人ならアタリだ。あいつらの乳はデカイ。白蓮の場合いきなり入つてきた俺をおねえさんのように大人っぽく悪戯をたしなめつつ、最後はなんだかんだで一緒に風呂に入ることを許してくれる。寅丸はそういうことを何も気にしないので、普通に堂々と入る。スキンシップも多少過剰に行つても平氣だ。

ナズーリンと一輪の場合は少し手間がかかる。ナズーリンはその幼児体型から見てわかる通り、貧乳だ。だが、俺は貧乳も好きだ。その俺の舐めまわすような視線に下心を鋭く感じ取るナズーリンは、ガードが固い。一輪にいたつては、顔を真っ赤にして出でていけと叫ぶ。女同士なのに。ちょっとくらいいいではないかと思う。頭巾をとつて、青い髪を下ろした一輪は一見の価値ありである。しうがないので、そのときは『虚眼遁術』を用いる。この術、便利だ。

「さて、今日のオペーイは、だれつかなー」

帽子はかぶつたまま、服を脱ぎ去り、風呂場の戸を開ける。そこには、白肌筋肉オヤジこと雲山がいた。キヤーウンザーン！

「おお、葉裏。どうしたのだ、まだ風呂は開いていないぞ。それとも何か、ワシと一緒にに入る気か？ はっはっは！ 葉裏はしかたのない奴だ。ワシの筋肉に包まれた、筋肉入浴を存分に楽しむがよ」

「ドシュウウバババババスドドドオプアンプアンレベHHHウニヤンウニヤンファラファラモンモンモオオモルウウウン… ピチユウウン…！」

俺は風呂から出た。廊下を歩いていると、ナズーリンに会った。

「おい、葉裏。君ね、いくらこの寺が女性妖怪ばかりだと語つても、風呂上がりに全裸で外を出歩くのはどうかと思うよ。雲山だっているんだから。ん？ 何か風呂場の煙突から、ものすごい煙が出てないか？」

「気にするな」

白蓮の着替えを覗きに行こう。

* * *

ふうへへ……ん

パシツ！

「ちい！ 逃がしたか！」

今は、就寝時間。俺とナズーリンは、寝室で夏に訪れるあの大敵との壮絶なる死闘を繰り広げていた。

「もうー、この羽音を聞いただけでもずかなくなるよー。」

「蚊取り線香はないのか!? ノーマットはー!?」

暗い部屋の中で、俺たちは神経を研ぎ澄まして蚊の羽音に耳を傾けている。横になつてなどいられない。奴らは凶悪な吸血鬼。気を抜けば、知らぬうちに血を吸い取られ、後に残るのは忌々しいかゆみだけ。なんとしてもここで仕留めておかなければ、俺たちに安眠の地はない。

「いじんなときこそ、俺の忍術を有効活用すべきとき! はあ、忍法『百見心眼』ー。」

俺の能力は『注目』に対して敏感だ。相手の注目を集めるということは、注目そのものを把握するということ。俺は対象が何に注目しているかを知ることができる。存在する注目から逆に相手の位置を探りだすことなど造作もない。俺は室内の蚊の『注目』を探った。

「いた! ターゲットの数は3!」

パシッ! パシッ!

「1、2、後一匹は……ナズーリン、お前の腕に今、止まつうとしている!」

「なんだって!?

パシッ!

ナズーリンが自分の腕を呑ぐ。俺たちは呼吸を止めて、耳を澄ました。

シーン……

もうあの神経を逆なでする羽音は聞こえない。俺たちは安息の地を勝ち取つたのだ。

「「「いえーーー！」」

ナズーリンとハイタッチする。

「こやはや、君の忍法といつものが、はじめて役に立つた気がするよ。礼を言ひ」

「こここことよ。明日も早くこし、今日までもう寝よ！」

「ああ、そうだね

これで安心して心おきなく眠れるとこつむのだ。俺たちはそれぞれの布団に寝そべる。ああ、安眠できる」との幸せ。なんと気持ちの良いことか。

チューーチュー

ひつして耳を澄ませば、間近にネズミの声も聞こえ、ゆつたりと布団の上に横たえた体の耳元でガジガジと心地よいサウンドが俺をさらなる深い眠りへとござな……

「わねえよー！」

俺は素早く耳元に食いつくネズミの首根っこを捕まえた。あぶねえ、蚊に気を取られてすっかり忘れていた。この部屋には蚊どころじゃない安眠妨害因子がいたよ。ナズーリンの部下の肉食ネズミだ。こいつら、俺がすやすや寝ようものなら、真っ先に耳にかじりついてくる。油断も隙もない。ナズーリンにはなんとかしてくれと言っているのだが、彼女もこのネズミたちの食欲には手がつけられないらしく困っているのだと。飼い主の責任！

寝る部屋を移ることも考えたのだ。白蓮と寅丸の寝室について、一人のおっぱいもとい、肉布団に挟まれながら寝るというささやかな希望もあった。だが、ここで諦めたら負けかなと思つた。ナズーリンを一人残して、俺だけ桃源郷に行くことなんてできない！

「よくもまあ、いつもいつも俺の耳にたかってくれたよな？
そんなに俺の耳はおいしかったでちゅかあ？」

ぢゅつ、ぢゅー！

慌てて逃げようとするネズミのしつぽをつかんでぶら下げる。自然界は弱肉強食。食うか食われるかの世界。そっちが食う氣で向かつてきたのなら、俺もその気概に応えるまで。逆にこちらから食うてくれるわ！

しつぽをつかんだままネズミを高く掲げ、その下に俺が口を開けて構える。このまましつぽを放せば、ネズミは俺の口の中にはとりと落ちてきて、後はムシャムシャ食べるだけだ。実に単純なシステムでしょう。ネズミはつぶらな瞳でやめてくれと懇願しているが、知つたこっちゃない。ナズーリンも青ざめた顔色でこちらを見ているが、知つたこっちゃない。

「あーーーん？」

あれ？ ナズーリンがこちらを見ているだと！？ やばい！

俺は慌ててネズミのしつぽを放した。ネズミは畳の上に降りると、ナズーリンの腕の中に飛び込んだ。

「あ、いや、まつて、ナズーリンこれには深いわけがあつて、いや、そこまで特別深くもないんだけど……」

ナズーリンはネズミを懐に大事そうに抱えると、布団をずりすりと部屋の端の方に引っ張つて移動させる。そして、俺に背を向けるようにして寝た。

「君がそんなことをする妖怪だったとは思わなかつたよ

「ナズーリーン！」

その日、俺は安眠を得ると同時に、何か大切なものを失つた。

57話「なんでもお悩み相談室」

どうやら、俺謹製漬物は巷で大好評らしい。

命蓮寺を財政難から救おうプロジェクト発足にともない、第一弾として俺の漬物が人里で販売されることになった。それまでにも寺に来た訪問客に無料で配布していたのだが、もらつたりピーターの噂が噂を呼び、命蓮寺の漬物は絶品だと話題になつた。買い付けに来る貴族がいるほどの反響だつたのだ。

そこで、甲羅を脱げば完全な人型体系であり、能力を使って人目をごまかしながら行商をしていた経験のある俺は、妖怪だと悟られることもなく人里に下りて漬物を売りさばいた。半日漬けただけで超絶うまい漬物が出来上がるのだからボロイ商売だ。漬物神より祝福を受けし俺の甲羅は石桶の上で常時フル稼働中である。

こうして俺は命蓮寺の運営に一役買い、漬物マイスターとしての確固たる地位を築き上げたわけだが、少し待つていただきたい。俺はこの寺に妖術を学びにきたのであって、漬物製造販売をしにきたわけではないのだ。俺の貴重な勉強時間が漬物事業で圧迫されるのはいかがなものか。

「で、今度は俺に何をさせる気だ？」

「そう構えるな。少し訪問客の話を聞いてもらうだけの簡単な仕事だ」

ここは人も妖怪も区別せずに受け入れるという風変わりな寺。特に、人間から迫害を受けて助けを求めるにくる妖怪が多い。様々な悩みを抱えた妖怪たちがくるのだ。無論、この寺の方針上、その妖怪たちに加勢して人間をやつつけると言つた暴力的な解決策はとれな

い。せいぜい、逃げてきた妖怪たちを一時的に匿つて、相談を聞く程度のことしかできないのだ。

だが、心の内を吐露して悩みを打ち明けるだけでも気が休まると思つのは、人間だけではない。そんな悩み多き妖怪たちがこの寺に集まつてくるのだ。

「はあ……なんで俺がそんな貧弱妖怪どもの相談を聞いてやらいやならんのだ」

「お前も姐さんに世話をなつて居る身だらう。言つてしまえば、お前もその貧弱妖怪たちと同じくこの寺を頼つてここへ来たわけだ。だったら、この命蓮寺のために一肌脱ぐと思わないのか？」

こつもは白蓮が相談役なのだが、今日は人里に下りて布教イベントをするようで寺に居ない。ナズーリンと寅丸と一緒に同行するようだ。ということは、今日は俺と雲山で寺の留守番をすることになる。

「相談役とかめんどくせえ。雲山に頼めよ」

「正氣か」

正氣を疑われちまつたよ。まあ、俺は狂つてるんだけどさ。

結局俺が今日一日、命蓮寺なんでもお悩み相談室を引き受けることになつてしまつた。

* * *

悩める妖怪その1：封獸ぬえ

相談室に入ってきたのは、黒いワンピースに黒一ーソをはいた少女だった。背中にヘンテコな羽が生えているので、思いつきり妖怪だとわかる。でも、一見して何の妖怪かさっぱりわからない。謎妖怪とでも呼んでおこう。

「やあやあ！ なんかここで妖怪の悩みをなんでも聞いてもらえるって聞いたから来てみたんだけど」

「はいはい、妖怪なんでも相談所はここですよ。まあ、悩める子羊よ。今こそ懺悔の時です」

いやに明るい。まるで観光客のような気楽さ。じつほんとに悩みがあるのか。遊びに来たんじゃないだろうな。しばくぞ、じり。

「あのさ、私って人間をからかうのが好きなんだけど、いつも加減ができなくて、ついやりすぎちゃうんだよね。だから何だか都で私を封印する計画が持ち上がってるみたい。いやー、まいったねこりや」

「そうですか。なら、もう都に近づかなければいいのでは？」

「えー、だつて妖怪なんて人間襲つてなんぼでしょ？ それじゃつまんないじゃん」

まあ、こいつの言い分は妖怪としてもつともである。だが、都は陰陽師たちのホームだ。あらかじめ準備をされて待ちかまえられていては、大妖怪といえども太刀打ちできないだらつ。

「なるほど、それは困りましたが、そんなことよりこの命蓮寺特製漬物を一度ご賞味あれ」

「あ、これって都でも噂になってるんだよねー。一度食べてみたかつたんだ！　ぱくつ……おいひー」

「つまりでしょ？　つまり、そういうことですか？」

「？」

謎妖怪は漬物をつまみながら、頭の上にハテナを浮かべたような表情をする。しかたない、説明してやろう。

「この漬物を見てください。神の祝福を受けたこのすばらしい出来を。かつては大地に根を張り、その枝や根に実らせたみずみずしい野菜たち。それらはもぎ取られ、糠に突っ込まれ、狭い桶の中に入り込められ、漬物石で押しつぶされるのです。ですが、その苦行を乗り越えるからこそ、おいしい漬物ができるがる」

「だから？」

「つまり、これは封印と同じなんです。漬物は封印されるからこそ、うまさが凝縮されおいしくなる。妖怪も同じです。力の強い妖怪は永い年月の間、封印されることによってその封印が解けた後のストーリーのおいしさが増すのです。なんかすごい封印されてた大妖怪が再び蘇り、地上に恐怖をまき散らす悪の権化と化すとか、燃える展開でしょ？？」

「なるほどね！　確かに胸熱の展開だね！　じゃあ、私もここはあえて都の陰陽師たちに封印されてみようかな……って、そんあわけあるかい！　もう、まじめに相談した私が馬鹿だつたよ。帰つて、また人間をいじめよーっと

「また、さつき食つた漬物の代金を置いていけ」

俺の顔面に漬物がぶつけられた。

58話「続・なんでもお悩み相談室」

悩める妖怪その2・多々良小傘

今度の相談客は、水色の髪をした少女だ。オッドアイとは珍しい。ミニースカートで、足元は下駄。そして何より目立つのは、手に持つから傘お化けである。傘に一つ目と口があり、大きなベロを出している。どこからどう見ても妖怪です。ほんとうにありがとうございました。

俺は顔に付いた漬物の汁を拭き取りながら対応する。

「はい、こちらなんでも妖怪相談室です」

「あ、よ、よろしくお願ひします」

おずおずと傘妖怪は座布団に座る。今度はちゃんとした悩みを持つていいそうな妖怪が来たな。俺のパーフェクトなカウンセリングテクニックを見せるときが来たか。

「あちきは妖怪ですから、人間を驚かせるのが仕事なんです。あるとき、あちきがいつものように物陰に隠れて人間が通りかかるのを待っていました。そして、人影を見たあちきは勢いよく飛び出しました」

「ほつほつ、それで？」

「普通なら、これでびっくりしてくれるはずなんですが、その人間はとても変わっていました……あちきの姿を見るなり、そんな古

典的な方法ではいまどき誰も驚かないダメ出ししてきました。シヨックでした……」

傘妖怪はがっくりとうなだれる。相当ショックだったようだ。驚かせるはずだつた人間に、逆に驚かし方を指摘されたのでは妖怪としての面目丸つぶれだらう。

「そして、その人間はあちきにいました。『君のような妖怪でも簡単に人を驚かせられるいいものがある』と。そして、大きな風呂敷包みから、この壺を取り出したのです」

そう言つて、傘妖怪はリサイクルショップで捨値で売つていそうな古めかしい壺を取り出す。あれ、この壺、どこかで見たことがあるような気が……

「その人間の話によると、この壺は縄文時代の名のある陶芸家、ばちゃんのすけハ門之介の遺作だそうです。製作者の強い念がこもつたこの壺の所持者は、持つているだけでとてもない妖力が自然に集まつてきて、最強の妖怪になってしまいますのだとか」

嘘くせえ。どう考へても詐欺だろ。それは引っ掛かる方が悪い。

「あちきはもっと人間をびっくりさせられる強い妖怪になりたかつた……だから、買いました。そのとき、90回払いの“ろーん”とかいう契約をさせられて、お金は今は払わなくていいからと言わされました。お金も払わずに品物をくれるなんて、なんていい人間なんだとそのときは思つたのです」

「それは借金ですね」

「そうなんです！　後になつて気づきました！　私、お金なんて少ししかないのに借金までしてこんな壺買つてしまつて……しかも、この壺、持つても全然妖力とか集まらないし……もうどうすればいいのかわからなくて、夜も眠れません！」

なるほど、金銭がらみのトラブルは怖いねえ。妖怪も怖がるくらいいだから相当だよ。」こは一つ、俺がこれまで培つてきた技能をいかした解決法で安心させいやろ。

「……実はですね。そんなあなたにぴったりの、いいものがあるんですよ~」

「え！？　なんですか、教えてください~！」

俺は脇に置いていた甲羅の中から、あるものを取り出す。

「これは貴重なものですから、本当はこう形で紹介するなんてことは滅多にないんですが……これを見ていただけますか？」

「これは……つ、壺ですか？」

「ええ、壺です。ですが、ただの壺じゃあ、ありません。縄文時代！　言わざと知れたかの有名な陶芸家、八門左衛門の遺作です！　どうです、この芸術的なフォルム。いいでしょう~」

「はへー」

傘妖怪は田を輝かせながら壺を見ている。

「しかも、これは長年この命蓮寺に祀られていた神聖な壺です。

法力が宿つておつまじて、持ち主のあらゆる災厄を退ける効果があります」

「本当ですか！？ ジャア、私の借金ももしかしたら……」

「ええ、この法力パワーで金運招来。あつといつまに億万長者ですよ。とても靈験あたたかな壺です」

「あたたたですか！？」

「あたたたです」

「買います！」

「どうやら氣に入ってくれたようだ。さっそく契約につくる。どうみても金をもつていなさそうなので、一回りの回払いのローン返済契約に……」

「つて！ これ、私が騙されたときと同じ手口じゃないですか！ うわーん！ また騙されたー！」

俺の顔面に壺がぶつけられた。傘妖怪は逃げるよつに帰つて行つた。

* * *

悩める妖怪その3：「シガマハゾウ

次に来たのは化けタヌキだった。少女の姿をしているが、タヌキの耳と大きなしつぽが見てとれる。丸眼鏡をかけていた。ノースリ

ーブにスカートという服装だ。妖力を見るに、まだ年若いタヌキのようである。

「入つてもいいか?」

「どうぞー、適当に座つててね」

俺は畳に散らばる壺の破片を片付けながら対応する。しかし、相談所は大盛況だなあ。次から次に客がくるぜ。休む暇もない。

「それで、お悩みは?」

「うむ、それなんじゃが……その……」

狸妖怪は、「うむいひよ」と言ごともる。顔を赤くしてもじもじする姿はかわいいのだが、肝心の悩み」と打ち明けてくれないと、こちらも相談のしようがない。

「ああ、恥ずかしがらずに、オープンになりな!」

「だから……そ、その……まが、あれで……」

「もっと心を開いて! 肋骨を外に向かって開放してみよう! ガパアツ!」

「……せ、きん……が、ないから……」

「三分間待つてやるー。時間だ! 答えを聞こへー!」

「だ、だから、キンマがほしーのじゃつー!」

空気が、死んだ。

なにこれ？ 痴女なの？ なんのカミングアウト？ そういうフレイ？

「あの、そういうことはここで相談せずに、」

「お、おぬしが想像しているようなことでは、断じてないのじゃつ！」

お前は何を想像したんだ。というか、俺はどうすればいいわけ。さすがに法力パワーでキ タマが生える壺とか、俺も取り扱ってないぞ。

「『ほん！ ……『狸の金玉ハ置敷き』 といふ言葉を知つてあるか？」

「あー、確か化け狸のキンタ はハ置もの大きさに広がるつて話だろ？」

「そう。狸にとって ンタマの大きさは一種の地位を表すモノ。大きければ大きいほど強い力を持つ狸とされる。しかし！ それはあくまでも目安にすぎん！ しかも、雄同士でしか比べられぬモノだろう！ 儂は他の狸よりも強い妖力をもつてているというのに、キン マがないというだけで！ ……ぐぬう！」

狸妖怪はメラメラと怒りの炎を瞳に宿して歯噛みしている。妖怪にも色々な種類と文化があるのでなあ。18歳未満閲覧禁止な展開にならなくてよかつたよ。

「そういうことでしたら、私どもでも協力することが可能ですよ」

「なにかー? い、いったこどもがおとこの人のじやー?」

「『狸の金玉ハ置敷き』……その考え方には、今や古い！　女性妖
怪の地位向上のために新たなスローガンを掲げましょう！　これか
らの時代は『狸のオツパイハ置敷き』です！」

「はあ！？」

俺は身を乗り出し、狸妖怪のふくよかな胸のふくらみを指でつつく。ふにふに。

「な、なにをする！？」

「あなたのこの豊満なオペーイなら、八畳なんて軽い軽い。しかし
もう一つもついているんだから一倍の十六畳敷きですよ」

正直、そんな光景は見たくもないが。

「そんなあなたに本田紹介する商品はいかが？　どん！　『豊胸
サポートーサラシ』！」このサラシを胸に巻いているだけでアラ不
思議！　どんどん胸が大きくなっちゃう！　さらに美乳効果に付け
加え、骨盤の歪みを修正し、新陳代謝を高めてダイエット効果も！
そして、一千万ガウスの磁気パワーが筋肉に作用し、コリをほぐ
します！　今なら、同じものを一枚？　いえいえ、なんと三枚セッ
トで、この特別価格！　お掃除に便利な専用ブラシと専用携帯ケー
スもついてきます！　どうです、買いませんか？」

۷

あ、あれ？ なんだかものすごいヤバイ雰囲気。怒気がオーラのように噴出して、蜃氣楼が見えやがってるよ。

「ふひ、やひ、けひ、ぬひ、なひ……」

俺は顔面にゲンコツを五発も食らった。額が切れて血が止まらないくなつたので、手元にあつたサラシを包帯代わりに巻いた。狸妖怪は肩を怒らせながら帰つて行く。

そんな調子で俺のお悩み相談室は快調にみんなの悩みを消化していく。そして、その日の夜、俺は一輪にしこたま殴られた。

59話「邪神召喚の儀式」

「あー、やつぱり胸回りが広すぎるなあ」

俺は雲山にもらつたクノイチコスプレ衣装を試着していた。だが、サイズがあわない。巨乳仕様の衣装は俺のちつぱいにサイズがフィットしなかつた。

「つて、お前はなんてハレンチな格好をしているんだ！」

一輪が顔を赤くして怒鳴りつけてくる。サイズが合わないせいで、服がずり下がつて色々と禁あはーんなところが見えてるからな。もともとのこの服の露出度も高い。

「雲山、サイズを調整してくれ

「うむ」

「あと、パンクは立ちはだかるからもひとつ難な色に」

「万事任せておけ」

雲山は巻き尺を手に、猛スピードで俺の体のサイズを測り終えると、裁縫道具をとりだしてせつせと縫物をし始める。筋肉野郎のくせにこいつどうと云うだけ器用だ。一輪は何も言わずに部屋から出ていった。

* * *

唐突だが、俺は今、フラダンスの練習をしている。

なぜかといふと、思い出していただきたい。命蓮寺の妖怪連中に自己紹介したとき、俺は自分の趣味をフラダンスだと言った。ぶつちやけ、フラダンスの経験などない。あれはその場のノリで口走ったにすぎない言葉。しかし、俺は自分の言質に責任をもつ妖怪だ。ところが、その言葉を眞実にすべく奮闘している。

「あ～ろは～おえ～」

体をリラックスさせ、力を抜く。体の関節をやわらぐさせ、手を横に構えた。そして、リズムに乗って、右へ左へゆーらゆーら。

「あ、葉裏。何をやっているんですか？」

そこに現れたのは、寅丸星ちゃん。寅丸は勤勉でいつも白蓮の手伝いをしてるので、勉強が終わると遊びに飛び出し、いつも泥だらけになつて帰つてくる俺は、他のメンツと比べてあんまり話をしたことがなかつた。ちょうどいい機会である。寅丸とレッツ・フランダンス！

「い～れは～、フラ～ダンス～、とい～、おどり～で～す」

「へー、そなんですか。私は盆踊りくらいしか踊つたことがないです。なんとなくゆつたりした動きが似ている気がしますね」

「どう～ある～も～、やつて～み～るので～す」

「面白やうですね。では、一緒に踊りましょ～」

寅丸も俺の動きを真似して踊りだした。俺たちは寺の庭を、クラゲのようにコラコラとあてもなくたむたり。

「わ～と～、から～だ～を～、やわ～らか～～

「は～い～、こ～で～すか～」

「な～い～く～の～、と～ぴかる～な、かんじ～ど～

「と～ぴかる～」

一人でフランダンスを踊りながら移動した。そこで、外へ出かけようとしているナズーリンを見かけた。俺たちはナズーリンに踊りながら挨拶する。

「「あ～りは～おえ～」」

「……君たちは、何をしているんだい？」

「な～い～りん～、これ～は～、ふら～だんす～とい～、ね～い～
で～す　いつしょ～く～、おぞ～りま～せん～か～」

「謹んでお断りさせていただくよ。そんな馬鹿みたいな踊りをやらされたのは～めんだ」

てめえ、フランダンスといつ高尚な文化を描してバカみたいな踊りだと？　ハワイアンに謝れ！

「おま～えを～、と～ぴかるに～、してや～りつか～」

「悪いけど、私は君たちに付き合つてこむほどではないのでね。

失礼させてもらつよ」

とつづく島もない。ナズーリンは俺たちに見向きもせずにビンから
へ行つてしまつた。薄情な奴め。

せかせかとネズミのように忙しない奴だ。ゆつたりと時の流れに
身を任せ、自然の移ろいゆく世間をのんびりと感じる。あいつには
その趣がわからないのだ。風流を解しない無粋者は、まあせいぜい
キリキリ働いているがよい。

ナズーリンなど無視して、俺たちはフランスを続ける。すると、
今度は庭先を掃除している一輪に出会つた。また、ハワイアン流挨
拶をする。

「あ～るは～おえ～」「

「また、葉裏は意味のわからな～ことを……それに、星まで一緒
じゃないか」

「い～れは～、ふら～だんす～、ですよ～

「なんかの呪術の儀式か?」

俺は帽子を地面上に叩きつけた。許せねえ。お前らはほどいつもい
つも。

「よ、よつ～つ～、おひひちや～ダメ～ですよ～　ほ～ら～、
あ～るは～おえ～」

「何をそんなに怒つてるんだ? どうせ葉裏のことだから、また
くだらないことでも始めたんだろう。星もそんなわけのわからない

遊びに付き合つてやらなくていいぞ。まったく、遊んでいる暇があつたらお前も少しは寺の仕事の手伝いをだな……」

「ぐだらないつて何だよ……俺は、俺はなあ……ぐすつ……」

「よ、葉裏？　なんで泣いてるんだー！？」

「俺が嘔泣きすると、一輪が途端に慌てだす。ふつ、このまま俺の巧みな話術の餌食となるがいい！」

「俺は、寅丸と一緒に楽しく踊りたかった……ただ、それだけだつたのに……それを、ぐだらないつて、何だよ……何なんだよ！　ぐすつ、えぐつ！」

「一輪、純粋な葉裏の心を踏みにじつて泣かせるなんて、ひどいです！　むむむ、これは正義に反します！　たとえお天道様が許しても、この私が許しません！」

「え、いや、そんなことを言われても、私はどうすれば……」

「……つてよ……」

「え？」

「……一輪も一緒にフラダンス踊つてよー」

「ええええー！？」

「そうです！　一輪も私たちとフラダンスを踊るべきです！　それが葉裏に対する償いとなるでしょう」

「待て！ どうして私がそんなバカバカしい踊りに付き合わなければ……」

「バカって言つたああああ！ びええええん！」

「一輪ー、ええい、これ以上の問答は無用です！ ほやく踊りなさいー ももなればこの宝塔があなたの罪を裁くことになりますよー。」

「落ちつけ星ー、泣くな葉裏ー、あああ、私はビツすればいいんだー？」

一輪はおもむろに走るばかりだ。もう観念してお前もフワダンス道に墜ちるのだ。この俺が直々に指南してやる。ふはははー。

「……わかった。私も踊る！」

寅丸が宝塔をファイヤーしゃつになつたので、一輪はよひよく覚悟を決めたようだ。まあ、一輪もレッツ・フラダンス！

「「あ～ひは～おえ～」」

「あ、ああ、ひは、おえ……」

「い～ちづ～ん、ぎこち～ない～ もつと～、りづ～づくら～すしな～」

「あ～、ひは、おおお、おえ～……」

「もひとへ、ヒヒ～ぴかん～ヒ～、なぬ～ので～す」

「あ～ろ、は～、おえ～」

一輪は恥ずかしがりながらも、律儀に踊る。たすがいにんぢょ、義理がたい。噴飯ものだな。俺は必死に笑いをこらえる。

「い～ちじ～ん～、その～ちょ～うし～」

「い～い～、と～ひかる～です～ね～」

「あ～ろは～おえ～ ボソッ（なんで私がこんなことを……確かにやつてみるとなかなかに味わい深い踊りだが……でも、こんなところを姐さんここで見られたら……）」

「あら、みなさん何をしているのですか？」

セレーニタイングよく曰蓮登場！——一輪の表情が固まる。

「ね、姐さん！？ いや、これはその……」

「なにかの呪術の儀式ですか？」

ジャクレンのヒツジきー、ヒツカハボツぐんだ！ イチリンヒー
〇〇のダメージ！ イチリンヒーになつた！

「ぶーーっ！？ あつひやつひやつひや！ 呪術キタコレー 腹
いでーっ！」

「い、ウワアアアアアー！」

真っ白になつて小刻みに震えていた一輪は、だんだんと顔が赤くなつていき、最後はこの場に居るのもいたたまれず、寺の外に向かつて走り去つて行つた。

「えつと、私、なにか気に障ることでもしてしまつたのでしょうか？」

「ひゞじゞり～、あな～た～もいつしょ～に～、ふら～だんす～を～おどり～ま～しょ～」

「あつふあああ～　げらげらげら～」

それから俺たちは、白蓮も加わつて三人でフラダンスを踊つた。楽しかつた。

そして、その日の夜、俺は一輪にしたま殴られた。

60話「ナズーリンの涙」

昨晩の回想。

一輪「うおおおおおー、お前がつ、泣くまでつ、殴るのをつ、やめなこつー！」

葉裏「すんませんー、もうゆるしてくださいー。」

一輪「泣きわぬけ。話はそれからだ」

* * *

ある日のこと。

俺が懲りずにまたイタズラに精を出し、一輪に絞られてトボトボと寺の敷地を歩いていると、ナズーリンに会った。ナズーリンは変な長い棒を持っていた。何をしているのだろう。

「おーい、ナズーリン。なにしてんだ？」

「なんだ、君かね。これから食糧調達にいくんだよ」

漬物販売で多少は潤つたとはいえ、寺は質素儉約を第一とする。贅沢をすることはない。そのため、山に行つて食べられそうな物の收拾をするのはよくあることだ。

「その棒はなんだよ」

「これは“だうじんぐるう”だ

「H! ダウジング! お前はエスパーだったのか」

「ほう、君は“だうじんべ”を知っているようだね」

原理は知らないが、いろんなものを探知する方法だつたよ。ナズーリンはもともと『探し物を探し当てる程度の能力』を持つている。ナズーリンの手にかかるばどんな探し物でも見つけられるだろ。ナズーリンが自分探しの旅とかしたらどうなるんだ?

「本当の俺つて、どこにいると思つ?」

「田の前にいるだろ?」

なるほど、なかなかテツガク的じゃないか。ナズーリンは呆れた様子でジト目の視線をこちらに向けてくる。

「そんなことより、暇なら手伝ってくれないか。食糧集めは苦手なんだ。子分のネズミたちが探し当てたそばから食べつくしてしまうからね」

「教育しなおせ。早急に」

その子分たちのせいでの、周りがどれだけ被害を受けていると思つているんだ。

「俺は漬物製作という大事な使命がある。悪いが手伝えないな

「漬物なんてただ漬けるだけじゃないか。暇なもんだろ?」

「漬物を馬鹿にするなー！」

ただ漬けるだけでおいしい漬物が出来上がると思つてゐるのか。なんともおめでたい頭をしている。唯一神ツツケモーノへのたゆまぬ祈りが、漬物を眞のおいしさへと導くのだ。

「はあ……もうここのよ。勝手にしたまえ。君に頼み」とをしたといひで、ひくな結果になりそうにないからね」

「ひどこ言われよ!」

ナズーリンはダウジング棒を構えて歩き出した。棒がくいつと傾く方向へ進んでいく。自分の手で動かしているわけでもないのに、勝手に動いて勝手に探し物がある場所を指し示すなんて、やっぱり不思議だ。

「ん？」

ナズーリンの棒が大きな反応を示す。だが、ここはまだ寺の敷地の中。食糧なんて落ちてゐるはずがない。失敗か？ やっぱりダウジングなんて当てにならないな。

ナズーリンはその反応が示す方向を見る。俺と目があつた。ナズーリンがこちらに向かつてくる。一体どうしたんだ。

「おい、君」

「なんだよ、食糧を探しに行くんじゃなかつたのか？」

「この“だうじんぐらッヂ”を見たまえ。君に對して過剰な反応

を示してくる。これは相当な“れあ度”だ

俺に対しても反応がある？ え、まさか俺を食糧にする気か！？
この妖怪ネズミ、子分に負けず劣らず肉食系なのか。俺のよつた草
食系妖怪を、幾度もその毒牙にかけてきたに違いない。

俺はすぐさま飛びのき、ナズーリンに相対する。

「てめえ、とうとう化けの皮をばがしやがったな……だが、そ
はいくか！ 飛んで火に居る夏のネズミとは貴様のことよ。俺の乙
賀忍術の真髓を味あわせてやろつー！」

「何を勘違いしているのかね。私が言いたいのは、君が食糧を隠
し持つているのではないか、といつことだよ」

なに、そういうことか。俺は構えを解いた。
しかし、食糧なんて隠してないぞ。だいたい、俺のどこにそんな
ものを隠し持つスペースが……あ。

「そうか。あれのことかもしれん」

「やつぱり隠していたんじゃないか。寺の者に黙つて自分だけ食
べ物を一人占めするなんて許されざる所業だぞ。ほら、さつさと渡
すのだ」

俺とナズーリンは台所に移動した。漬物桶の上に乗つてゐる俺の
甲羅を開けて、中を物色する。

「前から気になつてゐたのだが、その物体はなんだい？ 私の“
だうじんぐ”によれば、かなり貴重な“れあめたる”であると判定
が出たんだが」

「マイホーム」

やつぱり、甲羅の中にまだ食べ物が残っていた。『月人酒の友シリーズ』と、激辛みか……もうそのネタはそろそろ鮮度切れを通り越して、文字通り一億年の時を経た化石となっているはずだと思うが。どうだらう。

ところで、『月人酒の友シリーズ』は様々なおつまみの種類を網羅している。何を差し出すのがいいだろうか。ナズーリンはネズミなので、チーズが好きかもしれない。チー鱈をあげよう。

「はい、ナズーリン」

「これは何だね？　くんくん……独特のにおいをしているが……」

受け取ったチー鱈を、ぱくっとほおばるナズーリン。もむもむと噛む。そして、動きが止まる。

「ほわあああ……」

なんという至福の表情。なんだこのかわいい生物。さつきまでの小憎たらしいクールなキャラの影はなく、幸福があふれ出すような満面の笑みである。心なしか、キラキラと虹色のオーラまで輝いている気がする。

そうだ！　これは滅多にないチャンス。ナズーリンのネズ耳を触りまくる！

いつもは警戒して、絶対に触らせてくれないナズーリンのネズ耳。俺は慎重に丁寧にやさしく耳に触れる。そして、撫でまくる！

「ほわあああ、あ、ふあっ……って、君は何をしてこらのかね」

ぱしりと手をはたき落とされる。もつ氣がついたか。残念。

くしくしと自分の耳の位置を整えるナズーリン。さつきまでの放心状態などなかつたかのようだ、コホンと一つ咳払いをして佇まいをただす。

「それで、その美味なる食べ物は一体なんなのだ？」

「これ？ チー鰐だけど、気に入つた？」

「い、いや、まあちょっと珍しかつたから、気になつただけだよ。それよりも、今までそんな食べ物を隠し持ち、一人占めしていたとはいひ度胸じやないか。こんなことをして許されると思つてはいるのかい？」

「ダメなの？」

「いけないね、君はいけない妖怪だよ。ああ、まったくなげかわしい。こんなことが他の者たちに知られたら、断罪されていたところだよ。とくに『主人は食べ物に関しては容赦しない性格をしているからね。今『』の宝塔の餃と消えていたはずさ』

「そつかー」

「でもまあ、君は運がよかつた。私は君のことを直ちにどうこうしようとは考へていらない。無論、君は恥すべき行為をした者として処断されなければならないのだが、しかし、こんなおいしいものを取つておきたいと考へる君の気持も理解できる。温情の余地はあるだろう。そこで、だ。どうだらう、私がそのチー鰐をいつたん預かり、皆に事の次第を話す。もちろん、君に言われもない非難が集ま

「うなじみひん最善を御へんが。さうだよ、悪口話ではないだらうへ」

「つまり、共犯になれっこですね

ナズーリンは皿をそらす。すつと俺の持つチー鱈に手を伸ばしてきた。俺はナズーリンの手をかわす。

「共犯とは人聞きが悪いな。君はこの寺にやつてきたばかりの新入り。先輩妖怪に対してそれなりの敬意を払った態度を取らうとは思わないかね」

「つまり、賄賂とこいつですわね

ナズーリンがしつこくチー鱈を狙って手を伸ばしてくる。もう遠慮がなくなってきた。俺は素早い身のこなしでかわしていく。

「君のよつな、はつ、不審な妖怪の持つ食べ物など、ひつ、どんな毒が入っているかわからない！ 皆が食べる前に、私が毒見をしようといつのだ！」

「それなら、さつき食べたじさん

「あれだけでは不十分だ！ もっとよしむのだ！」

いつの間にか集まっている子供のネズミたち。俺の足元に群がってくる。そこまでして食べたいのか。本当は食べさせてあげてもいいのだが、躍起になるナズーリンがかわいいのであげたくない。

「あ、葉裏にナズーリン。どうしたんですか？ 嘘噺はダメです

よー」

「ちひ、 いんなときに……」

そこに寅丸が通りかかった。ナズーリンはあからさまな舌打ちをする。お前の『主人なんだる、 』といつ。

「寅丸、 こっちに来いよ。 おいしいものをあげよう」

「ホントですか！？ やつたー！」

「なに？？」

近づいてきた寅丸にチー鱈を食わせる。ナズーリンはその横で物欲しそう、かつ恨めしそうな顔で『あら』を見てくる。

「わー、 これ何ですか？ いただきまーす！ もぐもぐ……」

「よーしよしよしよしー！」

「がおー 『ルルルル……』

チー鱈を食べる寅丸の頭と喉を、ムツゴロウさんが『』とく撫でます。寅丸は俺よりも身長が高いので、幼女に撫でまわされるお姉さんといった構図になっている。

「『主人ばっかりずる』！ 私にもー！」

「よーしよしよしよしー！」

「ほわあああ……」

ナズーリンにもチー鱈を渡し、じやくせこまがれて頭を撫でる。チー鱈を食べている間は食事に集中しているので、無防備だ。気分は動物園の飼育員。

「ワシも、ワシもー。ワシにもけよーだーいー！」

「よーしょしょ……ふんつー！」

「ぐぼはあつー！」

ナチュラルに混ざってきた雪山には俺の拳を食わせてやった。
悪気はなかった。

6-1話「タイガープレゼント」

ある日の夜。

俺は今日こそ奴を仕留めるべく、準備に余念がなかつた。そう、トムジエリ3回戦の幕開けである。

「ふへつ、ふへへへ……」こいつがあれば、あの肉食ネズミもイチ口だぜ

俺は我が頭脳の英知の限りを尽くし、ネズミ捕りを開発したのだ！

?ネズミ捕りにエサを置きます。

?ネズミが出そうなところに仕掛けます。

?ネズミが罠にかかります。

?おいしくいただきます。

完璧な作戦である。

「よし、ナズーリンはよく寝ている。やるなら今だ！」

このネズミ捕りは設置したエサにネズミが触れた振動で作動し、強力なバネの力で獲物を挟みこむタイプの罠だ。ネズミ一匹など、これにかかるばひとたまりもあるまい。

エサはネズミが大好きなチーズである。今回はチー鱈で代用する。俺は枕元にネズミ捕りをしかけた。俺の耳よりチー鱈の方がうまいはず。必ずネズミは罠にかかる！

「クククツ！ 奴の泣き叫ぶ様が日に浮かぶぜ……おつと、寝る前にトイレに行つておくか」

尿意を催した俺は、とりあえず糞を仕掛けて部屋を出る。今日をもつて、俺の真夜中の死闘は終わりを迎えるわけだ。ようやく安眠を手に入れられる。

用を足した俺は寝室にもどる。そのとき、部屋の中からバチン！と、大きな物音が聞こえた。

「かかった！」

俺は勢いよく障子を開け、糞を確認する。

そこには、ネズ耳を糞に挟まれ、痛みに悶えるナズーリンがいた。チー鱈を口にくわえている。

ナズーリンは何も言わない。ただ、無言で痛みに耐えていた。しばらくして、むつくりと起き上がり、布団をすりすり部屋の端の方に引っ張つて移動させる。そして、俺に背を向けるようにして寝た。

「私は、君のことが嫌いだ」

「ナズーリーン！」

その日、俺はかけがえのない何かを失った。枕を涙で濡らし、耳を肉食ネズミにかじられながら眠りについた。

* * *

俺もこの寺に来て、結構な時間が経つた。しかし、一向に妖術符の知識は頭に入らない。ままならないものだ。

「あー、どうすれば覚えられるのかなあ……」

縁側に座り込み、ため息をつく。俺の横に座っていた寅丸も一緒にため息をつく。明るい性格のこいつが悩んでいるところなんてあまり見たことがない。どうしたのだろうか。

「はあ、私もどうすればいいのか」

「寅丸は何を悩んでいるんだ?」

「実は……」

話によれば、もつすぐある記念日があるらしい。それは、寅丸が白蓮に拾われた日だ。もともとこの山の妖怪だった寅丸は、人間に退治されそうになり、命からがら逃げ出したところを白蓮にかくまわれたのだという。それ以来、白蓮の思想を信奉し、毘沙門天という神様の弟子になるまでにいたった。俺は白蓮がこの寺のトップだと思っていたのだが、対外的にはそうでもない。人間から見れば、この寺の神は寅丸が代理を務める毘沙門天であり、そのため寅丸が信仰の対象となっている。白蓮はこの寺の高僧と認識されている。だが、それは表向きの事情であり、この寺の主はやはり白蓮なのだ。寅丸は毎年その日がくると、白蓮にプレゼントをあげているという。そのプレゼントに何を贈るのがいいか、ということで悩んでいるようである。

「贈り物ね。いつもは何をあげているんだ?」

「その、あまり贅沢はできないので、手作りの品を作りうとするのですが、私、不器用なので今一つの出来にしかならないんです」

寅丸はもじもじと小さな声で恥ずかしそうに言つ。仕事はバリバリこなしているみたいだが、どうもおっちょこちょこなところがあ

り、よく落とし物をしてナズーリンにこつそり探してももうどうドジをする。こつそりと言つても俺にさえすぐバレるほど機密性が低いので、すぐに白蓮にも知れ渡つて説教されているが。

「確かに、お前は『財宝が集まる程度の能力』があつたよな？ それで簡単にゴージャスなプレゼントが見つかるんじゃないかな？」

「この能力は、欲しい物が手に入るというものではないんです。ただ高価なだけの物は贈つてもすぐに藏にしまわれてしまうと思います。もつと、思い出に残る品を贈りたいんですよ」

思い出か。俺はプレゼントで真剣に悩んだことなんて一度もない。そう気をもんでも考へることだらうか。

「別に難しく考えなくても、白蓮が欲しそうな物を贈ればいいじゃん」

「欲しそうな物ですか…… そつ思つんですが、聖は何を欲しがつているのか全然わかりません」

それは、確かに。物欲とか捨ててそうちだからな。

しかし、あいつも生きていることに変わりはない。どんなに徳の高い層だらうと、生きている以上、欲は生まれるはずだ。何か欲しい物が必ずあるはず。人間も妖怪も皆平等なんてご高説をブツ垂れ流す高僧様が、腹の下にどんな欲望をため込んでいるのか興味が湧いてきた。

「白蓮の欲しがる物か、気になるな。よし、こひは俺に任せら

「え、ど、どうするんですか？」

「ふつふつふ、俺は忍者だぜ？ 謀報活動なりお手の物よ。まあ、見てな。俺が白蓮の欲しい物を探つて来てやるよ」

「本当ですか！？ ありがとうございますー。」

「あて、俺もたまには忍者っぽいことをしてみますか。

「それでは、今日の授業はここまでです」

「おつかれしたー」

今日の白蓮の妖術講座が終わった。いつもなら手伝いを頼まれない限り、ここから自由行動が許される。俺は真っ先に遊びに……もとい、忍術の修行をしにいくのだが、今日は寅丸から大事なミッションを与えられている。白蓮の欲しい物を探るのだ。プライバシー？ 犬に食わせた。

潜入捜査開始。まずは、今日の日のために作りあげた秘密兵器のお披露目だ。俺は自分の寝室の押し入れからあるものを取り出す。それは、木箱である。森の木を材料に日曜大工で作りあげた。俺は木箱を頭からかぶる。そして、体をかがめ、外から見えないようにする。

「ふつ、完璧な作戦だ」

できればダンボールにしたかったのだが、そんな技術はこの時代にはない。木箱に開けたのぞき穴から外の様子を確認しながらチヨゴチヨゴとしゃがみ歩きで進む。俺は何の変哲もない木箱になりすまし、白蓮の書斎を目指した。

(「ちら、スネク、潜入に成功）

忍法『虚眼遁術』を使用した俺に死角はない。もし、見つかっても俺はただの木箱。怪しまれることはないだろう。

白蓮は書斎で仕事をしていた。巻物をひろげて何か筆を走らせて
いる。捜査は忍耐。奴がしつぽを見せるまでのまま待機だ。

* * *

腰が痛くなつてきた。もうやめたい。
だいたい、なんで俺がこんなことしなくちゃならないんだよ。全
然、面白うこと起きないし。白蓮はあれからずつと巻物に向かひつ
ている。屁の一つくらいぶつこしてくくれないかな。

「ふう……できた。今日ほこのへりこにておきまじゅう

お、よしやく終わったか。巻物を棚にしまつて、白蓮は立ち上がる。
しかし、この部屋にある大量の巻物には何が書いてあるのだろうか。
もしかして、俺がまだ教えてもらつていらない妖術の秘奥義とか、
法力の極意みたいなものが書いてあるのかも。忍者と言えば、
巻物を口にくわえてニンニン言つてるイメージがある。ここは巻物
と縁が深い忍者として、検証せねば。

白蓮が書斎から出ていった後、俺は木箱から外に出て、さつき白
蓮がなにか書いていた巻物を手に取つた。

「ふひひ、ヤーハ、どんなすごい妖術の奥義が記されているのや
」

しゅるしゅるしゅる……

『みょうれーん！ みょうれんみょうれんみょうれんみょうれん
みょれんみょみょみょみょみょみょれーん！ ハアハア！ 命蓮かわ
いいよ命蓮ー どうしてお姉ちゃんを残して死んじゃつたのー！
ペろペろー 命蓮ペろペろペろペろー！ 命蓮がかわいすぎるて生きる

のが辛い……』

うん、見るのはやめよつ。人には誰にでも知られたくない過去がある。

俺はそつと巻物を元の場所に戻した。

* * *

白蓮は本堂へ移動していた。俺も木箱に入つて、さりげなく後を追う。

「おお、白蓮様！」

「ありがたや、ありがたや」

命蓮寺の高僧として名高い白蓮は、人里の人間たちからの信頼も厚い。白蓮の説法を聞きに集まつてくる人間が多い。

白蓮は読経を始めたようだ。美しい声が本堂に響き渡り、莊厳な雰囲気を作り出す。後ろに控えている人間の信者たちも白蓮にならつて経を読み始めた。

つまらない。俺にとつては仏教の語る真理など、どうでもいい話である。このままここに居続けても、白蓮の秘密なんてわかりそうにない。読経が終わるまで捜査は中断しようかな。

だが、それにも僧というのは、こんなつまらないことをし続けて、よく眠たくないものだ。俺なら5分で睡魔に負ける自信がある。その睡魔をたち払つことも、また修行というわけか。木魚なんて、読経中に眠らないように気を紛らわす道具らしいし。さすが白蓮といったところか、木魚などという小細工等使わずとも、眠る様子はまったくない。その顔は菩薩様のように穏やかで、薄く閉じられた目はにこやかな微笑を……

「…?」

は、鼻ちゅうちん……だと……!?

読経の声は朗々と響きわたっているが、白蓮の鼻にはきれいなちよつけんがふつくりふつくり膨れている。

え、もしかして寝ているのか。まだ、開始して一分も経っていないぞ。というか、お経よみながら寝るつてどうじうこと。後ろの人間たちは、手を合わせてこうべを垂れ、一心に念佛を唱えている。だれも白蓮の様子に気づく者はいない。

(いや、まさかあの白蓮がそんな不徳なことをするなんて思えない……きっと、鼻ちゅうちんは出でているけど、眠ってはいないんだ。あまりにも読経に集中しているから、思わず出でてしまった鼻ちゅうちんのことを気にかける余裕もないということ)

その証拠に、あんなによどみなく読経を続けているじゃないか。修行の末に法力まで身につけた信心深い白蓮。見なさい、あの首をがっくりがっくり上下に振りまくるといつ前衛的な読経スタイル……

(つて、舟こいでるしつー!?)

後ろの人間たちはまだ気づかないのか。まあ、妖怪がはびこる寺に気づかず入信している時点で、ここつらの日は節穴だろうが。

それにも白蓮は。もはや俺には擁護不能。化けの皮をはがしてやるつもりが、逆に俺の方が翻弄されている始末ではないか。こいつ、フリーダムすぎる。

63話「八苦を滅した……？」

睡眠式読経を終えた白蓮は再び書斎へもどった。半分以上寝ていた俺は、慌てて白蓮の後を追つて書斎へ入った。

「はあ……最近、食べてばかりで全然運動してませんねえ……おなか周りがちょっと心配です。葉裏さんがおいしいお漬物を作るので、ついつこじほんがすすんでしまって……」

そんな心配してたのか。といつか、俺のせいなのか。白蓮は衣服をめくつて脂肪チェックを始める。別に太っているようには見えないのだが。

「室内でもできる、何かいい運動はないでしょうか……」

白蓮は小食、といつか、修行の末に食べ物を食べずに生きていける方法を見つけたらしい。なので、何も食べなくとも生きていけるのだとか。だから、ちょっとでもカロリーを取ると太ってしまう体质なのだろうか。

「……あ～るは～おえ～」

踊りだす白蓮。この前、俺が教えたフラダンスだ。気に入つてもらえて何よりである。

「よしー、それじゃあ、おやつの時間にしますか」

おい、ちゅうと待て。

「こ」れは頑張った自分へのご褒美ですから、食べても大丈夫ですよね。うんうん

白蓮は戸棚の奥に手を突っ込んで何か出そうとしている。明らかに太った原因はそれだろ。ダメだこいつ、早くなんとかしないと。

「確かこの奥におせんべいが……あれ？ あーっ！？ ね、ネズミに食べられますう！」

戸棚から出てきたのはボロボロのせんべいカスだった。無残。おそらく、ナズーリンの部下のネズミの仕業と思われる。この件に関してはグッジョブだったと言つておこう。

「えーん！ ひどいーっ！ 私のおせんべいがーっ！」

たかがせんべい一枚に泣く高僧。もづ、見てるこっちが悲しくなってきた。こんな白蓮の姿は見たくなかった。いつまでも高潔な彼女でいてほしかったよ。

「ぐすり……ナズーリンにはちゃんとネズミたちをしつけるように言つておきましょ。……あ、そういうば、去年もこの時期にこんなことがありました。確かに、星が私のためにお団子を作ってくれて、それをネズミたちに食べられてしまったのでした」

白蓮は懐かしむように笑う。去年の記念日、寅丸がプレゼントしたもののは団子だったのか。そのチョイスはベストだった。今年も団子を作つてやれば、それでいい気がする。

「ふふ、星はまだあの日のことを覚えていてくれているのです

ね。毎年、贈り物を何にするか悩んでいるようですが、私は星の気持ちがこもったものなら、なんでもうれしいのですが……」

「あーあ、結局一番おもしろくない答えが出てしまった。そういうハナシはいらないんだよ。

「どうわけで、葉裏さん。星にまつわるおもしろい答えでもうれますか？」

（え、さあ、気づかれていた！？）

いつの間にか白蓮の注目が俺に集まっている。さっきまで確かに白蓮は俺の存在に気づいていなかつたはず。気づいていたなら注目が集まつたはずだ。そして、その注目に俺が気づかないはずがない。

『虚眼遁術』を見破られたといふことか。ittたい、どうやつて。

「い、こいつから気づいていたんだ？　俺に注目せずに、どうやって俺の存在を察知した？」

「ふふふ、それは秘密です。ですが、何度かその術は見せてもらつていますから、対策立てることは不可能ではありませんよ。特にここは聖域内ですからね。私にとって、有利な空間なのです」

「やっぱ、白蓮はすごい奴だった。これも法力のなせる業か。といつことは、今までの白蓮の行動は俺に観察されていくことを見越した演技、なのか？」

「おのれ、白蓮。この江賀忍法『虚眼遁術』を看破するとは。このはおぬしの生着替えを覗いていかぬことには気が済まぬ……」

「覗きはいけませんよ。今なら一割増量でお説教してさしあげてもいいのですが」

「おぼえておけ！ 次こそは貴様の素肌をこの皿に焼き付けてやるわ！」

何の変哲もない、ただの木箱はおとなしく退散するだけだ。

* * *

潜入捜査終了。

俺は依頼人である寅丸のところへ向かう。と言つても、報告することなど何もない。強いてあげるなら、団子をまた作つてやれと言つたところか。

気持ちがこもつていればなんでもいいなんて、そんな月並みな回答なんて期待はずれもいいところである。まあ、あの白蓮のことだから、うすうすは予想していたところではあるが。

「気持ちがこもつていれば、ねえ……」

結局、寅丸がくれるものなら何でもいい気がする。寅丸からのプレゼントという点だけで、白蓮にしてみれば十分うれしいことなのだろう。そう、白蓮がほしいものは物ではなく、寅丸の気持ちなのであって……

「寅丸の……気持ち……？」

気持ちがこもついている。

ハートがこもつている。

ラブがこもっている。

寅丸 LOVEME-

「なるほどー、やうこいつとかー。」

合点がいったぜ。俺は寅丸のもとへ走る。今日の料理当番は寅丸のはず。俺は台所へ急いだ。

「はいへへ、おこしそうひすくへ、じゅるつ、くがおへ

「ヒーリーモーネー。」

「ひやへへー!? よ、葉裏さん、びひしたんですか?」

「びひしたもひひしたもねえよー、白蓮の欲しい物が判明したぜー!」

「本当ですかー!?

「ああ、白蓮が欲しい物、それは……」

「それは……?」

寅丸は固唾をのんで俺の言葉を待つ。俺は勢いよく、びしっと指を寅丸に突きつけた。

「それは、寅丸ツー、お前自身だー。」

「……へ？」

寅丸は、わけがわからないと言つた表情をしている。かまどがつてんじやねえ。この鈍感妖怪が！

「白蓮はお前のラヴァを欲しているのだ。つまり、お前が欲しいところだと。お前のすべてを手に入れたいといつことだ！」

つまり、解説するとこいつことになる！

聖『あら、星さん、タイが曲がっていまして』

星『ひ、聖おねえさま……ありがとうございます……』

聖『うふふ、私としたことが手が滑つて……失敗してしまいましたわ』

星『あっ、だ、だめです！　おねえさまああ……』

こうして美しき一輪の白百合のつぼみが花開いたのであった。

「は、へ……いや、そんな、馬鹿な……」

寅丸は少しづつ状況を飲みこんでいったのか、顔がトマトのようになくなつていぐ。そして、完熟度が最高潮に達し、ついに爆発した。

「うそですー！　ありえませんそんなこと絶対にありえません！　聖が私のことをそんなふうに思つているなんて……いやああああ！」

「！」

「ひよ、落ちつけ！　暴れるなー！」

「葉裏は嘘つきですー。私のことをからかっているんですねー？　そつなんでしょうー！　確かに聖はいつも私に優しくしてくれます

「さあ、それは他のみなさんにも言える」とですし、それにやつこつ
おおおお、女の子どもらしてそんなそんなGAOOOOO！」

俺は寅丸に首根っこをつかまれ、ぶんぶん振り回される。首がも
げるって。皿が回って吐き気がしてきた。

「た、大切なことはそんなことじゃない！　お前の気持ちだろ！
お前は白蓮のことをどう思つてるんだよ！？」

寅丸の動きがぴたりと止まつた。ようやく揉もぶつから解放され
る。しんどい。

「私が、聖をどう思つているか、ですか……？」

「そうだ。白蓮はお前のことを求めている。お前はその気持ちに
応えられるか？」

「わ、わたし、は……聖は、私の大事な人です。私はいつも、聖
に助けられてきました。とても、尊敬しています。聖のことが大好
きです。でも、それは純粋な好意であつて、そういう邪な感情では
ない……はずです……ない……はず、なのにつー！」

どうして私の胸はこんなに苦しいの？
それが、恋つてやつなのさ

ぽりぽりと涙をこぼす寅丸の肩に手を置く。よーし、あと少しだ。
あと少しだ俺の計画は完成する！

「ぐすつ……葉裏、私はどうすればいいのやしょつ？」

「安心しろ。俺がお前らの恋を、完全バックアップしてやるぜー。
だから、もう泣くんじゃねえ」

「葉裏……はいっ！ 私、頑張ります！」

俺たちは夕焼け空に輝く一番星を見上げる。寅丸、お前はあの星
を目指して突っ走れ。空に手が届くほどの真っ直ぐな想い。必ず、
白蓮にも届くはずだぜ。

くはー、白蓮の焦る顔が田に浮かぶ。げひひひひ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878z/>

東方 龜兎忍

2012年1月5日18時53分発行